

四馬孝画

倒錯美絵画集

大中判印画紙極鮮明焼付秘蔵版画集

今まで発表しました四馬孝描く分譲画集の好評に刺戟されて、ここに三度、口絵として掲載できない各傾向マニヤ待望の秘蔵版を追加発表いたします。

「花と蛇」画集

大中判五枚一組 一〇〇〇円
略号(えに)

京子に芸を仕込む鬼源

椅子の上に立縛りにされた京子は、坐りもならず歩きもならず中腰のまま鬼源に美しい鼻を摘ままれて可愛い口を開けた。静子令夫人の汚辱

豊かに脂づいた輝く裸身を床の上にじかに投げた静子の顔に驚ての使用人であった川田の汚れた足がべったりと掩い、氣高い鼻を足の指で弄ぶのだった。擦り責めにあう美津子

両手を揃えて吊られた美津子は腋の下を男の目の前にさらけ出して、ハケでそろりそろりと擦られる全身燃え上るような擦ったさ。片足挙げ縛りにされる桂子

鉄平石を敷いた冷ややかな土間に身動きもできぬ厳しい後手の高縛りで片足を挙げさせられた桂子は、さつきからたまらない激しい尿意と必死に戦っていた。粗相を強要される京子

恥しいオシメカパーをはかせられた京子は、その中へ粗相をせよといたぶられる。限界まできた排泄を耐えている京子の苦悶。

女体吊責め特集

大中判五枚一組 一〇〇〇円
略号(えは)

弓吊りローソク責め

両手と両足をそれぞれ左右に振り分けて弓なりに反るように吊られた女体の背中には、数本の火のついた蠟燭が立てられていている。エビ縛りの吊り

揃えて括られた両足首が顎にくくほど折り曲ったエビ縛りのままだ背中和鼻の先とで宙高く吊り下げられた女体の嗜虐的な美しさ。股間縛り吊り

一本の棒のように頭から足首までガンジガラメに縛られた女体のタテに掛った股間縛りの細で高々と吊り上げた素晴らしい吊責め。舌の先吊り

炭火がカンカンにおこった石油缶の上に両手を吊られた美女の舌の先を挟んでじりじりと吊り上げてゆく。上と下が同時に責められて、尚美しさを失わぬ女性。鼻孔吊り

太いシュロ縄で後手首股間縛り吊られた美女の鼻孔に通した銀を吊って、女の顔を上へ向かせる素晴らしいシーン。

浣腸と排泄画集

大中判五枚一組 一〇〇〇円
略号(えい)

恐怖の浣腸台

身動きもできぬように四肢を固定することのできる浣腸台に据えられた美女は恐怖の眼を大きく見ひらいて、目の前に釣ってあるイリガートルをにらんだ。

浣腸のあとの楽しみ

たっぷり浣腸液の御馳走を与えた上で、両足をいっぱいひろげて吊られた美女。男はそのあとの楽しみでわくわくとしていた。

百CCの浣腸

ガラスのシリンダーでグリセリンを注入した男は、床の上に敷いたビニール布の上に美女をかかまてて時の経つのを待った。

塩水をヤカンで飲ます

後手に縛られた美女は、只男たちのなすがままだった。鼻をつままれ、開けた口には塩水がヤカンから無理矢理注ぎこまれた。

排便を耐える美女

両手を万才の恰好で吊られているので、もうどうすることも出来ない。煮えくりかえるような便秘が彼女の全身をふるえさせる。

美貌汚辱と鼻責

大中判五枚一組 一〇〇〇円
略号(えは)

鼻をなぶる

自由のきかない美女の顔を左手で抱え込んで、右手の指で女の鼻を粘土細工のように弄ぶ。鼻毛を抜く

美しい女の鼻の穴を上向けさせて一本一本楽しみなが、ゆっくり鼻毛を抜いてゆく。これで五本だ、なあ、あと何本抜けるか。口中をほじくる

可愛い子だ、おとなしくして美女の口の中をさぐる。可愛い舌に真白い歯。咽喉の奥まで老人の触手は隅なく腔中をほじくる。泥絵具の顔

お前の美しい顔は、俺のキャンパスだ。白いすべすべした女の命である顔面に、男の手にしたチューブから赤の泥絵具がべったりとつけられる。鼻から口へかけて。ラーメンを食わす

仰向けに縛られた美女の顔の上を、男は箸にはさんだラーメンをのせる。口から溢れて鼻の穴へまで入りこんでゆく。

山原清子 对抗 女相撲

豊満な肉体を誇る山原清子と大塚啓子の絶妙のコンビによる取組みをここに発表しました。マニヤの方々の御一見をお待ちします。活潑で意欲的な二人を自由に戦かわせたもので、ライトによる陰翳とスピードシヤッターによる動感を狙いました。動きのある二女の女相撲、女斗美、女斗場面各シーン、このシリーズで十分にお楽しみ下さい。

女相撲連続写真

相撲揮着用、四つ相撲

十枚一組 一〇〇〇円

略号(めれ)

互いがぶりと四つに組み合った二女は、上手下手の両まわしを充分にとり合って、上手投げ、下手投げ、内掛け、外掛けと隙を見て術をかけるところを、刻々の変化を狙って、シヤッターを切ったもの。躍動する女体の筋肉がよくキヤッチされている逸品。

女相撲連続写真

相撲揮着用、投げ術

大手札印画紙焼付

十枚一組 一〇〇〇円

女斗美 女斗場面

いよいよ機熟して、投げ術の応酬は、サバ折りから高々と吊り上げに至るまで、激しい女相撲が展開されてゆく。投げのきまつた瞬間を狙ったシヤッターチャンスがマニヤの方々の眼を、どのように楽しませてくれるか。

女相撲連続写真

相撲揮着用、投げ合い

大手札印画紙焼付

十二枚一組 一〇〇〇円

略号(めわ)

首投げ、下手投げ、出し投げ、内掛け、外掛け、小股すくい、等々お互いに激しい投げの打ち合いを重ね、その術のきまつた瞬間に、優美な筋肉美の躍動する女相撲が、二人の肉体美女性によって、所狭ましとくりひろげられてゆく十二枚の組写真。

女斗美立業

黒フン白フン着用

大手札印画紙焼付

十枚一組 一〇〇〇円

略号(めた)

黒フン白フン着用、激しく締め込んだ二人の裸女が、激しく両手で組み合い、ヘッドロック

から、腕の逆とり、首絞め、片足どり、腕後手固めと、白い裸身をからめあつて縦横無尽に暴れまわする二人。躍動するメトマーズの美しさをとらして下さい。

女斗美寝業

黒フン白フン着用

大手札印画紙焼付

十枚一組 一〇〇〇円

略号(めな)

立業の激しい斗争から寝業に入つた二人のメトマーズは、しなやかな真白い四肢に渾身の力をこめて、相手を屈伏させようと必死になつて押さえ込む。手と足と、足と手とが、悩ましくも妖しく交錯するメトミのエロシズム。

女斗美固め業

黒フン白フン着用

大手札印画紙焼付

十二枚一組 一〇〇〇円

略号(めそ)

激しくも悩ましい寝業の激斗を経て、ここに優秀の位置がはつきりしてくると、相手のメトマーズに最後の止めを刺す固め業に入つてくる。しかし、押え込まれた方も、むざむざと敵の軍門に降る筈はない。苦痛に歯を喰ひしはりつえ、反撃のチャンスを狙って、悶え、もがきまわる。

女斗場面 (白、黒揮)

髪のかみ合い

大手札印画紙焼付

十枚一組 一〇〇〇円

略号(めか)

これはルールも何もない女と女の憎悪をむきだしにした斗争である。髪を掴み合い、馬乗りになり、操りあい、揮一本の裸身のあるかぎりの力を奮って、只相手を痛めつけようという争い。

女斗場面 (黒、白揮)

押さえ込み合い

大手札印画紙焼付

十枚一組 一〇〇〇円

略号(めね)

相手をお互い自分の膝下に組み敷いて降参させようと、二つの裸身があうごめきあう筋肉と筋肉の交りあう美しさ。

女子レスリング

首絞めの業

大手札印画紙焼付

十二枚一組 一〇〇〇円

略号(めつ)

肉づきのよい太股で、或はふくよかな腕で相手の首を絞めつけ、オイルしようとする女レス。

女子レスリング

押え込みの業

大手札印画紙焼付

十二枚一組 一〇〇〇円

略号(めお)

豊かで美しい裸身が、ねじれ合い、からみ合い、互いに押さえ込め、女体相搏つ女レス。

THE KITAN CLUB

Published Monthly By Tenseisya

Osaka Japan



4月号

¥ 300

定価 三〇〇円

新人モデル美木乃々子嬢の熱演

第一回作品発表

キヤビネ版印画紙焼付

各組三枚一組 五〇〇円
八組全部にて 三五〇〇円

美貌で清潔な感じの溢れる新人美木乃々子嬢の体当りの演技と読者の責役出演により、ここに日本女性拷問刑罰集スチールの第一回作品をここに発表することになりました。素晴らしいスチールを是非ご一見下さい。

日本女性拷問刑罰集

木馬責め

三枚一組 略号(もと)

後手高手小手にきびしく縛しめられた腰巻一枚の女囚が、三角木の馬のとがった背に跨がされて、その痛さに髪ふり乱して泣き叫びもだえる姿の全身を、刻明に鮮鋭なレンズによって捉えたスチール。若くて美しいモデルの足の爪先から髪の毛の末端に至るまで、女の哀れさと悲しさが、いきいきと描かれています。

海老責め

三枚一組 略号(もに)

若い女囚に対する海老責めは、まことにエロチシズムとサジズムの極致といっているであろう。交叉した足首を揃えて縛り、うつ伏せに二つ折りになるまで締めつけられ、美しい両足の拇指はくの字にそり反り、その激しい苦痛と羞恥に悶え耐える様を現している。二の腕に胸の膨らみに埋まるように喰い込んだ縄目の痛々しさを。

答打ち折檻

三枚一組二略号(もほ)

白洲の冷たく粗砂の上に引きすえられた高手小手縛りの女囚は、首縄を引きしぼられて白状を強いられるが、返答をしないために竹をささらに割った答で、後手に縛られているため盛り上るようにつき出た肩先をしたたかに打たれるのだ。血がにじめば白洲の砂を肌にすり込んで白状するまで、打ち続ける無惨なありさま。

土壇で胴斬り

三枚一組 略号(もり)

新刀の試し斬りに胴を真二つに斬られようとする哀れな死罪相当の若い女囚。今やもがき泣き喚いても逃れるすべもなく、臍を中心とした胴の部分をさらけだされて土壇の上に仰向けに寝かされ顔には白紙で目かくしをされて斬られようとする女囚。観念して静かに身を横たえる女の全身には、サジスチックな静寂がある。

石抱き算盤責め

三枚一組 略号(もへ)

下着のすそをはねのけて、女の素肌をじかに算盤板のギザギザが喰い込むのでさえ耐えられない痛さなのに、正座した膝の上へ更に伊豆石をのせるというのであるから、その苦痛たるや想像を絶するものがあるであろう。それでも白状しないので更に非人が、その膝の上の石を揺って悶絶するまで責め抜くのである。

竹棒責め

三枚一組 略号(もち)

腰巻一枚にひんめくられた若い女囚の両手は背後で首筋にとどくまで高々と括り上げられ、二の腕と胸には、どす黒い捕縄が情容赦もなく力まかせに、うす汚ない非人の手によって縛られている。そして白洲の砂の上で引きすえられた女囚には更に竹の棒を縄目の間にねじ込められて、白状するまで締めあげられるのである。

開股股恥責め

三枚一組 略号(もぬ)

女性というものは、若痛に對して案外しぶとい耐久力を持っているものである。身動きもできない高手小手縛りの女囚を白洲に引きすえ、腰巻の乱れを必死に防ごうとはかない努力を続ける真白い足を八の字に開かせ、その柔かい足首に非情の細引きを喰い込ませようというのである。女囚の哀願と悲鳴の尾をひくなかで。

白洲に悶える

三枚一組 略号(もは)

均整のとれた奇麗な肢体と肌、殊にすらりと伸びた胫と素足の可愛い美木モデル嬢が、白洲の上で厳しく縛られ、悲しさと恥しさに悶える美しい哀婉ポーズを展開しています。これこそ女囚の悲愴美の至極をきわめた好演技といえるでしょう。こうしてS派の皆さまの目に、いつまでもこのポーズを晒していただきたいでしょう。



奇譚クラブ 4月号 目次

◆奇クサロン……………編集部選……………(9)

○グラビヤ廃止其の後……………編集子(9) ○サロン楽我記……………辻村隆(10) ○KK
便りABC……………(10) ○縛り絵二題……………たけし(11) ○読者投稿写真「縛られた
若妻」……………小林宏(12) ○「M願望」の皆様へ……………魔子(13) ○編集室たより……………
……………(13) ○「妊婦通信」再び妊娠して……………安原さゆり(14) ○夫婦プレー雑感……………
……………新宮明夫(14) ○ボクの責め方……………宝塚二三夫(15) ○「青木順子だより」……………
……………辻村隆(15) ○「告白」男の輝女の輝……………松原勉(16) ○美女緊縛への憧憬……………
……………内海晴美(17) ○世相診断室……………木戸川健(18) ○試論と呼びかけ……………平野広
(19) ○テレビ「徳川家康」観賞の一場面……………兵頭庫一(20) ○サロン・モデル
通信「モデルになった私」……………志村善子(21) ○短信往来八三月号を読んで編集
者へ……………小川曉(22) ○短歌「病床日記」……………吉村英子(23) ○告白「其の後
の鼻責め変遷記」……………湯谷照夫(24)

……………本文……………

或る変身 ―外科病院にて―……………吉村 英子……………(25)

SM・カメラ・ハント(刑部典子の巻)

「耳責めに微笑む娘」……………辻村 隆……………(30)

新連載サディズム小説

パリ拘置所へ心傷たむ遍歴……………西条 操……………(40)

SMレター……………佐仲 晴哉……………(58)

第三の手紙―輪島実子さん―

第二のよそほい……………原 由貴子……………(70)

箱入娘の話……………柴 利好……………(74)

私は美食家である……………とやま・かずひこ……………(78)

(かずひこのノートから)

連載小説 花と蛇 (続篇第六回)……………団 鬼六……………(84)



憧れのモデル大塚啓子に捧げる

啓子散華

高野 原美 (96)

「SM」より見た世界史シリーズ

美姫ローザモンドの生涯

黒淵 嬰一 (104)

映画漫歩 昭和39年のSM映画展望

かわかみ・けい (118)

最近のわたし

羽鳥 水江 (122)

女斗美ファンタジック・シリーズ

恥場女相撲 (さち子対みえ子の決戦)

芦浦素舞夫 (124)

「奇ク」に期待するオーソドックス路線

久我 庄一 (134)

懸賞募集入選作品

花散る里

瀬川 泰子 (136)

ガン作・マニヤのノート

濡れにぞ濡れし

芳野 眉美 (158)

「告白」ゴムマニヤのたわごと

平川 靖雄 (164)

「読者原稿」生活体験報告

洋装下着を着て歩く

真山 淳 (168)

切腹研究夜話 戦国時代の切腹

中康 弘通 (170)

懸賞応募入選作品

「革の盛装」第一部 革の招く運命

山口 広 (172)

妖異女斗美八景

佐藤 健児 (194)

第七景 アマゾン女軍始末記

グラビア写真と口絵絵画の問題

夜乃 探郎 (206)

問題に関して奇クの将来を思う

読者通信

編集部選 (214)

限定版……………写真集

美しき縛しめ

第四集

頒価 一〇〇〇円 (送共)

略号 (美4)

華々しき女体緊縛の組写真集

最新撮影の新しいモデル、山原清子、木村洋子、玉田美佐子による美しい緊縛フォトに加えるに、ベテラン大塚啓子の極最近撮影のフォトなど、ここ数ヶ月に亘って、フォト・アルバム「美しき縛しめ」用として撮影し保存してきた写真を、極めて鮮明なるグラビヤ印刷の特ア・ト紙によつて、皆様にのぞんでお楽しみください。写真は、いづれも未発表のものとさせていただきます。

の傑作ばかりです。各モデル嬢の特徴をそれぞれに十二分に発揮した文藝的価値豊かなフォト揃いで、春の暖気に匂う花の如く全面から、いっさいの苦悶や苦痛も、皆様に微笑みかけています。緊縛による苦悶や苦痛も、皆様に微笑みかけています。さういふことだけで、彼女たちも嬉しいのです。どうか、この素晴らしい一冊をお求め下さるよう心からお待ちいたします。

一般書店売りは一切いたしません。直接発行所へお申込み下さい。

◎縛られた美女ばかりの美しいフォトアルバムです。この一冊により、新しいモデルの新しい緊縛ポーズを十二分にお楽しみ下さい。

登場モデル——山原清子——木村洋子——玉田美佐子——大塚啓子

待望久しきアルバム「美しき縛しめ」(第四集)ここに完成、予約下さいました皆様方へいち早く発送いたしましたところ、予想通り、素早い出来栄と、本誌に於けるグラビヤ写真の掲載が自粛せざるを得ない情勢です。写真集の充実が叫ばれる所似であります。

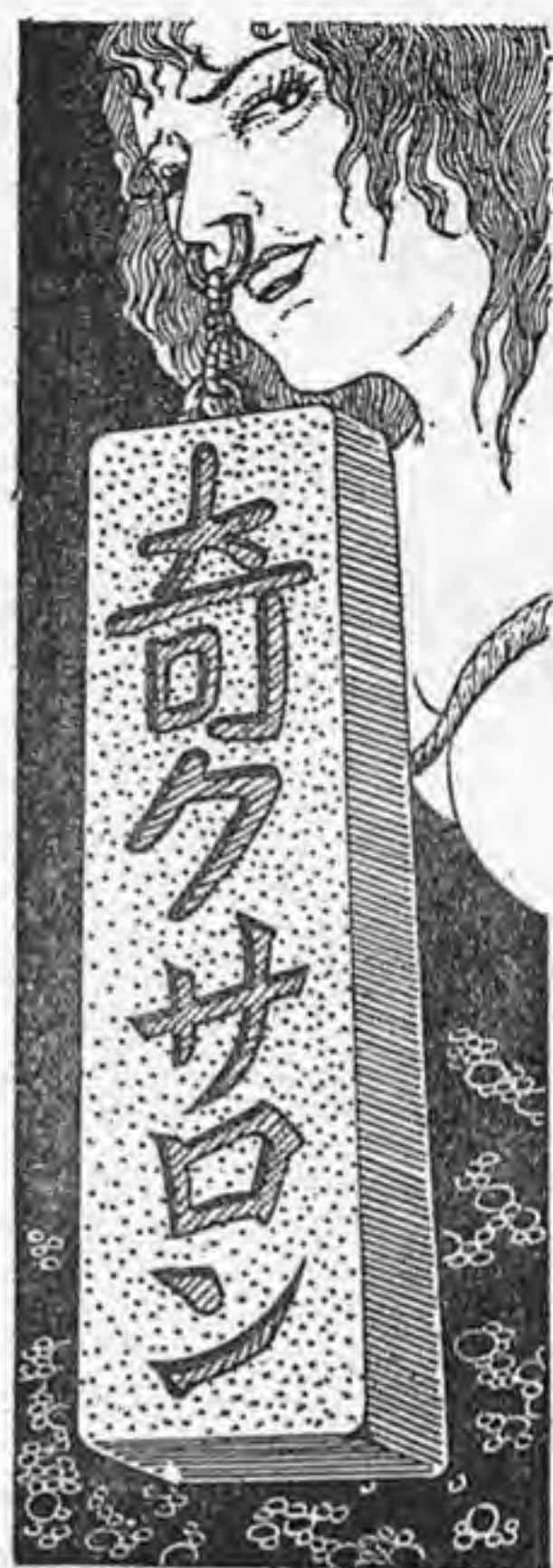
本誌内容の充実と相俟って、限定版の写真集によって、部数は極めて少くはありますが、秀なフォトを盛沢山に収容して同好の方々の御期待にそいたいと考えております。今後順次発売してゆきます写真集を全部お揃え下さいますと、本誌女体緊縛の主要なものが網羅されることとなり、文庫集としても極めて有意義なものとなるでしょう。

◆写真集 (アルバム) 内容◆

- 刺青女体の逆エビ責め (山原清子)
- 鉄扉に緊縛晒しあう女 (玉田美佐子)
- ブロック石抱き責め (木村洋子)
- 箆子と浣腸器の鼻責め (大塚啓子)
- 両足吊りにあう刺青女体 (山原清子)
- 古墳後手吊り組写真 (木村洋子)
- 両手吊りに悶える組写真 (山原清子)
- 逆さ吊り揺れる女体 (木村洋子)
- 猿ぐつわ百態組写真 (大塚啓子)
- 革拘束による組写真 (大塚啓子)
- 柱縛りの庭園晒し (玉田美佐子)
- セーラー服緊縛組写真 (大塚啓子)
- 野外に於ける晒責写真 (玉田、木村)
- 刺青女体の柱縛り責め (山原清子)
- 捕獲された女裸身の悶え (大塚啓子)
- 入墨に映える緊縛絵模様 (山原清子)
- 両足吊り表と裏 (山原清子)

△以上緊縛写真八十葉▽

以上の通り、本誌のグラビヤにして、何れ月分にも相当する豊富な女体緊縛写真を、特ア・ト紙に對する鮮明なるグラビヤ印刷によって、写真集を完成いたしました。必ずや皆様の御満足を得ることと信じます。限定版につき、一般書店には姿を現しません。数にお申し込みが、売切れになります。中、お申込み下さい。



三月号のこの欄で、今月号は一つの試みとしてグラビヤ写真をやめにしたが、今後もずっとこういう方針でやってゆくのではないと書いた。それ以来、いろいろ考え続けた結果、四月号ではグラビヤの写真ページを本文の真中へ入れることにきめた。そして写真の大きさもライカ判或はシックス判の原寸ぐらいで、沢山入れようと選別をはじめた。最近になって新しいモデルによって撮影したものの数百枚をもとにし、以前のストック数千枚も加えて、その中から約二百枚のネガを選びだした。

レイアウトも終り、いよいよ印刷所へ回す直前になって本誌の二月号が都条例で指定されたというニュースが入った。詳しいことはわからないが、とにかくグラビヤ写真が主だということなので、急に四月号の口絵を中止することに

なった。

その後、雑誌倫理協議会の会合に出席し、都の青少年対策本部の係官から詳しい情報も入手した結果、やはりグラビヤ写真は中止してよかったと思った。というのは四月号に予定していた写真では、どのようなトリミングしたところで、当局の意図する基準には該当しそうだからである。

例えば、二月号で見てみよう。「グラビヤ写真の大部分」という該当箇所の認定基準は、八男女の肉体の全部または一部を露骨に表現し卑わいな感じを与えるものVというのである。ここまでの文句は他の雑誌でも凡そ同じである。

グラビヤ廃止其の後

編集子

具体的に見てみると、第一頁は乳房が出ている。第二頁の上段右側は太股が見えている。第六頁に第七頁はお臍のアップ。第十一頁は乳房が見えている。第十二頁第三頁も同じく乳房が僅かに衣服の間からのぞいている。というわけで要約すると、乳房、お臍、臀部、太股などが露出しているといけないというわけである。

映画の『日本拷問刑罰史』にヒントを得て、先般来数度にわたって撮影した『女性拷問刑罰写真』なんかも、最初のうちは囚衣を着せていたのだが、熱が入ってからは腰巻一枚で算盤責めに石抱き、海老責、木馬責、と敢行したのだから口絵の掲載は無理である。

と、いうわけで今後新しく撮影すればだが、今までのものでは使用可能のものは極めて少いということを知るべきだ。例えば一月号のグラビヤ写真の第一頁第二頁第三頁のようなものと、合格しうである。この写真を喜んで便り

を呉れた読者もあったが、こういう着衣のものに激しい憤りをぶつけてきた人もあった。その便りを読んで微苦笑を禁じえなかったのだが、三月号のグラビヤ廃止には案外賛成の方々が多いのを通信で拝見して意を強くした。

中途半端なものでお茶を濁すよりは、むしろグラビヤを中止してそれだけ本文を充実した方が得策だという意見が圧倒的で、この点これからの編集も大変やり易く、気が楽になったような気持だ。

それにしても、真面目に本誌の文献誌としての永続を望まれる熱意のある読者の方々が、これほど多いとは知らなかった。やはりそういう根強い本誌の支持層が、今後の本誌のあり方を決定してくれらるだろう。勿論、本誌は趣味的な大人向の専門誌として編集されているものであるが、青少年に対して有害であるという編集はやりたくない。そのために大人である同好者の楽しみが幾分減ぜざるを得ないとしても、又やむを得ないと思ふ。これも次代を担う青少年のためには都条例に抵触しないという範囲内で発行を続けてゆくことをここに公表する。



辻村 隆

芳野眉美氏の紹介で、森山美歌さんと文通を始めた。彼女の美しさには流石に私もマイりました。奴隷の三吉氏が身も心も捧げ尽すも又むべなるかなである。元来がS傾向の私ではあるが、若し美歌女王が辻村隆とSMプレイ遊ばされるというなら、私は喜んで膝下にひれ伏し女王のM奴隷となってもいい気がする。女王の仰せで、フォトは発表してくれるなという呉々の仰せなので、此処にその八

頭身(古い言葉だがピッタリ)の麗姿を発表出来ないのが何より残念である。フォトだけで参った私だから、況してや、女王の御麗顔を拝した芳野氏に見れば、女王のイメージがジーンと脳裡に灼きついて、只管に贋作を綿々と書き続ける気持も、ひしひしと私には分って来た。でしよう、芳野さん？

書くつもりでいた『日本拷問刑罰史』が数多くの方の投稿で、私はすっかりお株をとられてしまった。大当りで氣をよくした新東宝は、引続き『続拷問刑罰史』を製作中とのニュースであるが、この稿発表の頃は、或いは封切られているかも知れない。

それに刺激されて、負けてならじと、箕田氏、塚本氏、それに私と、同好のT氏、T氏(どちらもT氏でややこしいが)とで計画したのが、『島原切支丹受難史』と『西欧魔女処刑史』のフォト特集である。

一人のT氏は『受難史』の女性を紹介し、もう一人のT氏は、専ら責具、拷問具の作成に没頭しておられる。そしてやっと数日前、その第一回を実施したが、フォト

は時世柄分譲になりましたよう、精しい顛末は、来月のカメラ・ハントで報告するつもりです。当日悪天候で雪に明け暮れたのですが、ぶっつけ本番で案外効果をあげました。本当は今月にも発表したいのですが耳責めの娘の方を先に撮りましたので、その方から報告しました。

「奇ク」に対する風当たりが追々に強くなってきている。僚紙「裏窓」も遂に廃刊したし、残るは受する「奇ク」と「風奇」の二冊になった。三隅氏が販売方法について、色々と発表しておられたが、私も同感である。先日箕田氏に逢った時、従来通りに発売して、太く短かく行くか、それともグラフィヤフォト、絵はすべて割愛し、簡単なカット程度にして、昔の「犯罪科学」誌の様なスタイルか、白表紙時代に帰って、細長く永続させて行くかどうかに迷っておられた。私も一投稿者から今日まで奇クと共に、十八年。思えば長々と拙文を書き綴ってきたものである。嘗っての大判時代を開いて見ると、当時書いていた人々は、殆んど、いやすっかり影をひそめて私一人になって来た。心細い様な

KK便りABC

○先ず本誌三月号の遅刊をお詫びいたします。製本所の隣接工場の火災という不測の事故によるものですが、直接購読者の方々には色々とお心配をおかけして申訳ありませんでした。

○督促を頂いた方へも、丁度入れ違いに発送したような有様なので一々お返事を差し上げませんで失礼しました。今後共定日発売をモットーに努力いたします。しす故御諒承願います。

○美しき縛しめ第四集(略号美4)は、発送以来、入手された方々から絶大な讃辞を賜っております。グラフィヤ写真が本誌から姿を消している昨今、何卒最近撮影の素晴らしいフォトを、アート印刷の極めて鮮明なグラフィヤ写真によって堪能して下さい。引続いて、「女性拷問刑罰特集」の企画をしております。どうか御期待願います。

○代理部の分譲品目録を請求される方が未だあとを断ちませんが、只今その準備がございませぬ故、最新号誌上に発表しました広告によって、お申込み下さるようお願いいたします。いずれ



気もする。

お色気時代、内容充実ハラハラ時代、羊頭狗肉時代と随分変遷を辿ったが、今ならさしずめ何時代だろう。奇クの在り方について、奇クを愛する私達は、箕田編集長一人にその全ウエイトをかけないで、俱にその将来を真剣に考えて見たいと思うのです。いい切抜け案あれば、どしどし御発表願えないものでしょうか。

× × ×
 妙な奇縁で（魔子）なる女性と知合った。その奇縁はブライバシに属するので省略させてもらうが、私が緊縛のモデルとして交渉したら、手ひどくはねられた。反対に虐めたり、縛るのならOK。フオトなんて絶体とらさないと云う。私がM男性の話をすると身を乗出し、そんな男性達、うんといじめて絞ってやりたいと仰有る。

“この顔でトカゲ喰うかやホトトギス”のたぐい。稀なる美人であるが、カメラ・ハントは不成功に終わった。奴隷願望の方ならうってつけであろう。とも角、彼女の連絡は引受けさせられたが、紹介はするが、どんなに虐められても責任をもたない事だけ附言します。彼女M男性に呼びかけるといっていたので私も一寸一言。

～～～
 目録が出来上りましたら、その旨誌上に明示いたします。○すでに分譲打ち切りになったり売切れになったりした分をお申込みになる方がよくございますが処理に困りますのでなるべく新しい誌上に掲載の広告によって御注文下さるようお願い致します。最近号に広告しました分は只今のところ、全部在庫しております。

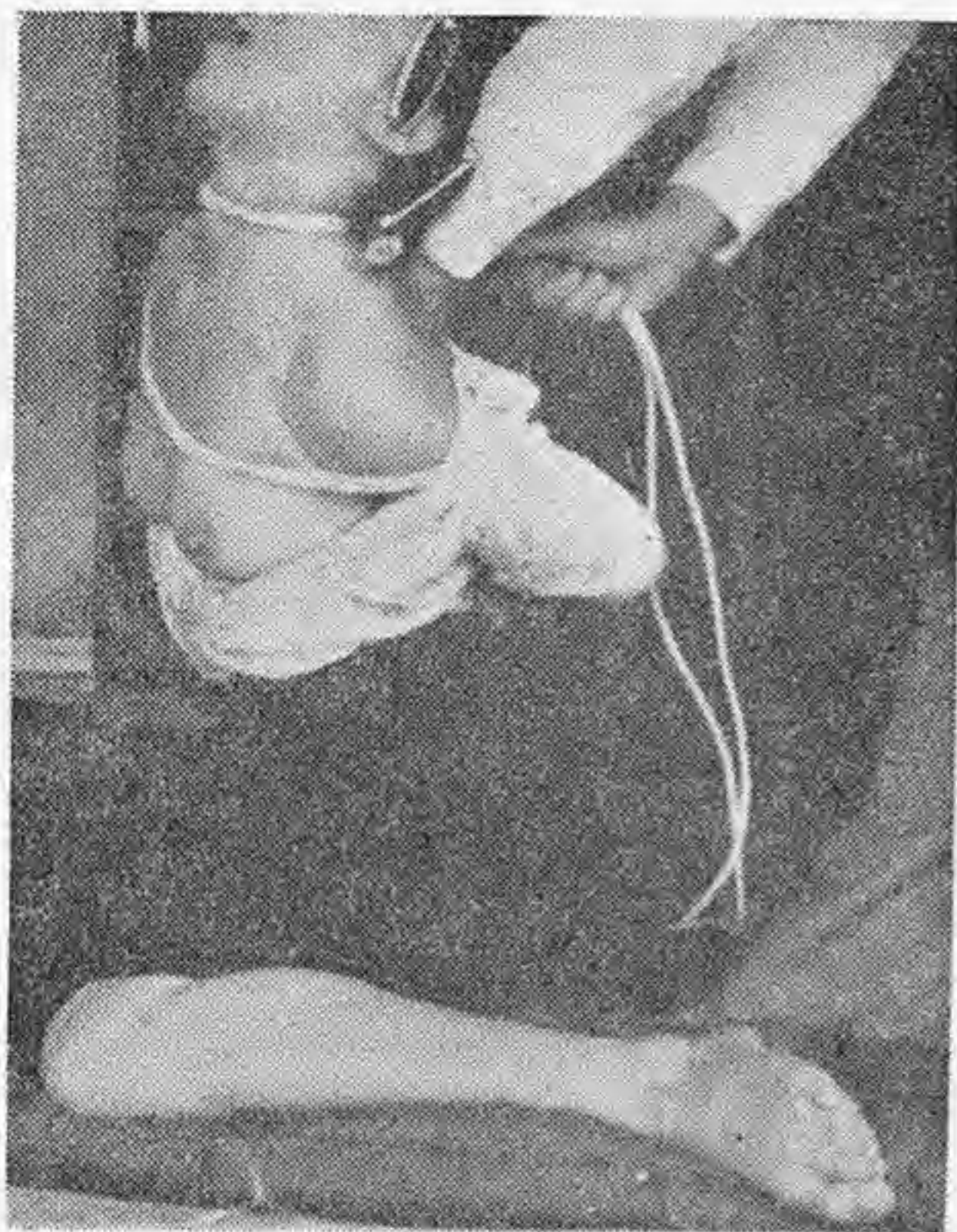
〔読者投稿写真〕

縛られた若妻

小林 宏

毎日配達される新聞の社会面を見ていると、「×月十日十二時頃勝手口から侵入した黒覆面の強盗が青木佳子（22）を縛り上げ、現金六千円を……云々……」という

ような記事をさらに見かけることが出来る。私は一時そういった記事に興味を持ち、目についた新聞から切り抜きを集め、スクラップブックに貼ったこともあった。ここにお送りする数葉の写真は、「強盗に縛



られる若妻」といった新聞記事からヒントを得て、私が自分自身の手で撮影したものである。

モデルには私の知り合い女性を頼んだのであるが、私が彼女に写真撮影の意図を話したところ、快く協力を約してくれポーズのつけ方、表情の出し方、手足の曲げぐあいや指の先に至るまでの力の入れぐあいなど私の指示する通り真剣に演じてくれた。

しまいには、まるで彼女自身が強盗に襲われる若妻になったような熱の入れ方で、手をどのようになさるか、足はこちらへ曲げて、顔はこのようなけぞらしたら、という風に積極的にやってきたの



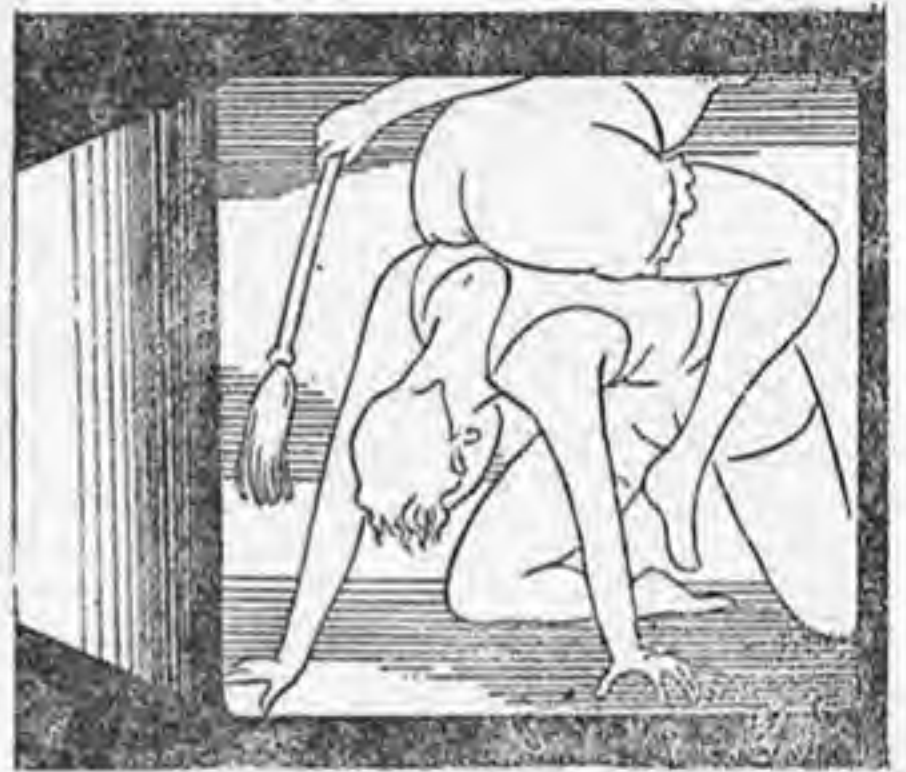
で、お蔭でまことに楽しいひとときを過ごすことが出来た。只、写真の技術が拙劣なのと、一人何役も演じたため、期待するようなものが出来なかったのは残念であるが同好の方々のお眼に触れ、御高評御批判をいただくことが出来れば幸いである。

（小林生）

「M願望」

の皆様へ――

魔子



先に申し上げますが、私は「奇ク」は一度も読んだことありません。フトした縁で辻村隆様と知合い、本誌の存在を知り、そして彼から、世の中にM願望（この言葉も辻村さんからきいて知りまし

た）の男性が多い事をきかされた。私は二十一才、自分でいうのも変ですが、容貌に自信あります。教育も高度のものを身につけていると自分では思っています。私は判っきり申上げて男性を虐め

るのが好きです。辻村さんの言葉をかりて云えば、神酒は差上げます。鞭打ちはして差上げます。その外希望通りどんなMの条件でもOKします。その代り、それに先立って、私の条件をきき入れていただくことです。女王的に振舞えば最高です。近畿一円の方がいいですが、遠い方でも航空便を利用するぐらいの馬力のある方なら虐めて差上げます。

フोटを撮られることは好みません。しかしプレイ中のフोटでなかつたら構いませんが必ず私に進呈してくれる事も条件のひとつです。

住所、電話番号は辻村さんに連絡してありますから、私とプレイしたい方は、辻村さん宛に御連絡

下さい。彼から必ず返事するはず

です。私を女王として扱い、私のオシ

りの下に敷かれるM男性、しかし惚れてもらっては困ります。どこまでもSMのプレイのみで交際したいと思うのです。M男、金と力はなかりけり”では困ります。美しくありたい為には、私は人並以上の努力をしておりますから。私のフोटは辻村さんにお預けしてありますから、彼に話していただければ私のフोटを見せてくれる筈です。

編集室だより

○本月号でも、その一部を誌上に掲載しましたが、本誌のあり方、ゆき方について、温か味のある御意見や御鞭撻を頂き、本当に感謝しております。お便りをお寄せ下さいました方々へ誌上を以て厚くお礼申し上げます。

○先月号に引続いて今月号も「奇クサロン」の原稿が豊富に投稿され、その選別に嬉しい悲鳴をあげております。この調子ですと、先月号にも書きました通り増頁しなければ収容できないでしょう。

○写真や絵を投稿される方も、だんだんと増えてきました。来月号では大幅に載せたいと思いますから、今月は載らなかつたからとい

って御遠慮なさらず、どしどしお寄稿下さるようお待ちします。

○グラビア写真の穴を埋めるため来月号からは、本文中にも、うんとフोटを掲載しようと企画しております。ここで塚本鉄三氏の「緊縛フोट撮影の実際」の再登場も願いたく考えています。

○五十万円懸賞の原稿募集を続けておりますが、往年のような傑作

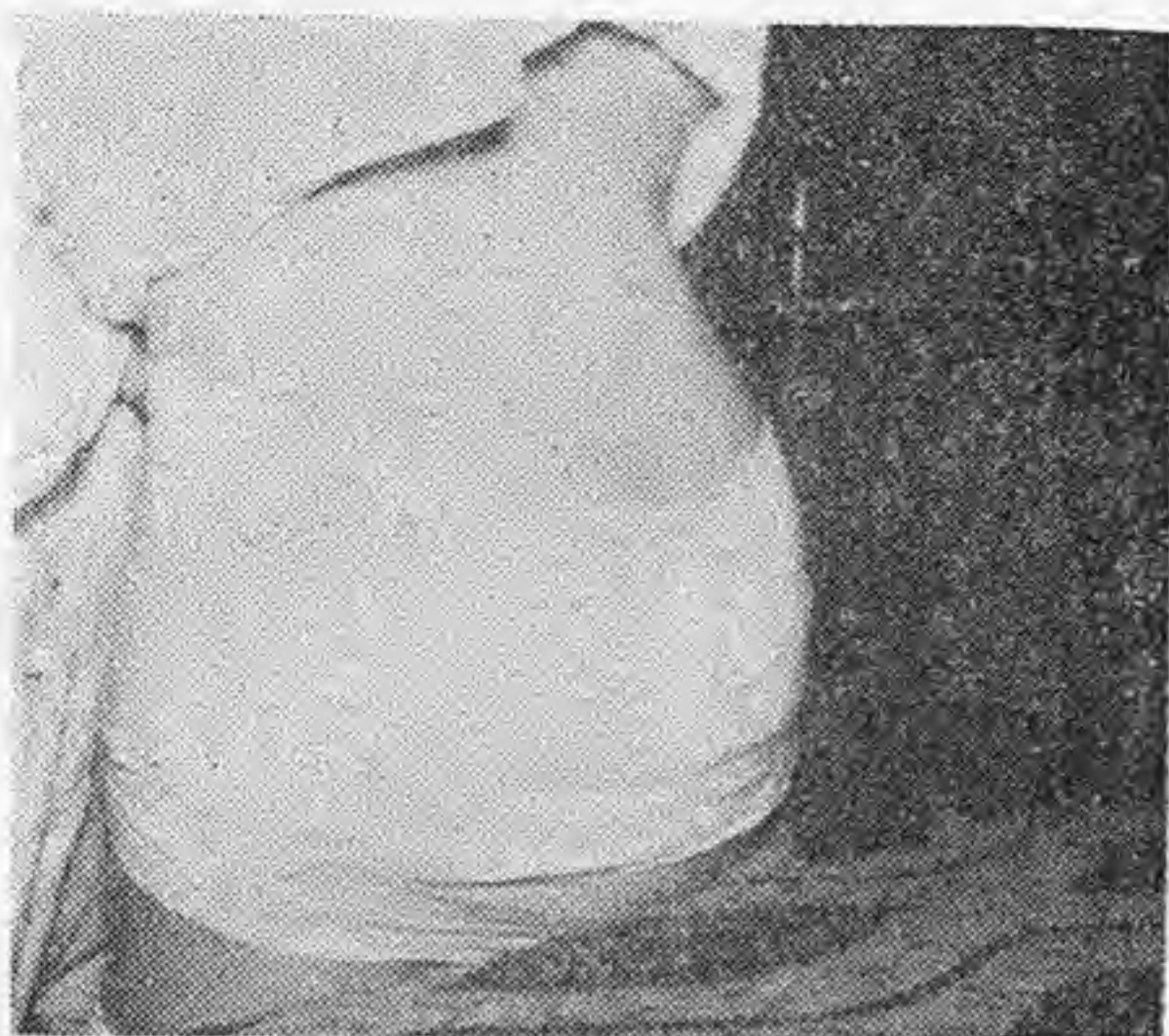
〔妊婦通信〕

再び妊娠して

安原さゆり

私は妊娠中のあられもない姿を分譲品として、皆さまの前にさらした安原さゆりでございます。

その後分娩しましてからも、私は夫にかしずく忠実な奴隷として楽しい日々を送ってまいりましたが、あのときの妊娠中のフォトが



一つの刺戟となつて、より楽しい毎日でした。夫も又同様だったと思います。

私、再び妊娠いたしました、只今丁度五カ月でございます。先日妊娠して初めての写真を夫にとつてもらいました。これから臨月まで毎月一度ずつ写真をとるのだと夫は申しております。そしてお前の腹がだんだん大きくなってゆく有様を記録してやるのだと申しております。夫は写真をとることにサド的な興味をもつらしく、

いろいろなポーズをとらされているうちにプレイに移行することもございます。

私も写真撮影は楽しいし又うまくれましたら、分譲写真として多くのマニヤの方々の目に触れることを望んでおります。今のところまだそれほどお腹も大きくはなっておりませんが、これから、どのように膨らんでゆくか自分でも興味を持っております。

夫婦プレイ雑感

新宮 明夫



○編集部の皆様長らく御無沙汰致しております。奇巧は毎号欠かさず拝見致しておりますが、なにやかやと雑用に追われお便りするのが遅くなりました。私が一昨年夏頃、勇を鼓して私達夫婦のつたないSMプレイ・フォト（確か打首の処刑であったかと思ひます）をグラビヤに掲載していただいた頃と異り、最近の奇巧サロンには数多くの御夫婦がプレイ・フォトを発表されており本当に嬉しく思っております。

○三月号からはグラビヤを廃止さ

れたようですが、現状勢では、これもまた止むを得ないことかと思ひます。気兼ねしながら掲載する最近のグラビヤには私達の期待に程遠い作品も見うけられ残念に思っております。また、むしろグラビヤを廃して分譲写真や臨時増刊号によって私達の目を十分に満足させて戴く方がより得策かと思ひます。

○臨時増刊号には、それぞれSM F等の特集号として、それぞれの読者の作品欄を設けて下さい。そして毎月の本誌としては奇巧サロ

ボクの責め方

宝塚二三夫

ボクのペット芳子のポーズ



「青木順子だより」

辻村 隆

青木順子ショウの向井一也氏より便りがあって、その後東京、松本、豊橋から名古屋へと巡業し、名古屋市内では、名古屋日劇ミュージックで十日間公演したそうです。

一月の予定として、
○一月十一日～十五日

東京都目黒区月光町 月光館

○一月十六日～二十日

東京都足立区本木町 本木セントラル

○一月二十一日～二十五日

東京都目黒区月光町 月光館

○一月二十六日より月末まで、

宇都宮市の国際劇場

本木セントラルで、最終日、私の連絡によって、芳野眉美氏が、青木、向井両氏に面会され、今後お二人の公演日程を出来るだけ迅速に、サロンへ速報されるそうです。

ンを増やし充実させることによつて従来のグラビヤを補うようにして載ければ奇クの使命も十分発揮しうると思います。

○久しぶりに私達夫婦のプレー・フォトも同封して同好者諸兄の御批評を得たいと思っておりますが、最近撮影した作品は総べて全裸のものばかりで発表には不向きだと思いますので本日のところは遠慮させて載けます。次の機会にはサロン用として撮影し、諸兄の御高覧に供したいと思っております。

○私達夫婦も過去二年の間に幾組かの同好御夫婦と交際願うように

なり、フォトやアイデアの交換、批評を行い大いには啓蒙され且つ夫婦生活をよりウルオイあるものにしております。お互いに未知の間柄でありながら十年來の友のように感じるのは、やはり同好者同志がかくし立てなくフォトを交換しあい意見を述べあう大人の交際である為かと思っています。

○高松志朗様、長谷好志男様、新田英雄様、益原駿夫様、今後ともサロン欄の夫婦SMグループの為にどしどし作品を発表して下さい。そして奇クを通じて夫婦生活をエンジョイ致しましょう。

〔二月一日〕

尚、生きており寧ろ疎外された現代では重要な意味をもつものと思ひ、サドの芝居を準備しているとの事です。

今迄に後援会の申込みをされた方のお名前は全部保有して、他日に期しております。

今後共御希望の方は、奇ク気付辻村隆宛でお申込み下さい。

彼等に逢って精しく設立の計画をとりきめた上、皆さんに御連絡出来る日も近いと確信しております。

〔告白〕

男の褌と女の褌

松原 勉

古来日本人の下着は、数百年の昔より男は褌、女は腰巻と相場がきまっていたが、最近、女性の下着としての腰巻は美しい日本女性のシンボルである和服と相まって盛んに着用されているにもかかわらず、男性の下着としてのフンドシは年々愛用者が減り、ほとんど見かけなくなった事は、我々愛用者にとつて至極残念な事である。

近年下着の進歩は目ざましく、男性用サルマタ、パンツ、ブリーフと、特にテトロンやナイロン製のブリーフが最も人気を集めている。なぜ此の様にふんどしの愛用者が減ったのだろうか。それは第一に、近代生活の必須条件としての合理性に反しているからである。事実、六尺褌の場合、パンツやブリーフの様に簡単にはく訳にはいかず、締め込むには数倍時間がかかる。第二には、六尺の場合露出面積が多く、ほとんど真裸に近いため、はずかしさもある。その他、種々ふんどしの短所が

あると思うが、私自身、数年来の愛用者であるが、感じた事を書いてみよう。私は第一の締める時間が長い程楽しいのである。きっちり締められる迄、何度でも締め直し締め終った後、三面鏡で前後左右を写してみるのが楽しみである。第二の露出面積の多いことが六尺ふんどしの特徴であり、又魅力でもある。それに何んといつても締め込んだあとの緊縛感は締めた者でないとは解らないだろう。

私自身、ふんどしに興味を持ったのは五年前の二十才の時、時代劇映画で見たふんどし姿が余り感じよかったので、一度締めてみたいと思ひ、機会を待っていたが、やはり家族の者に見られるのが恥しく中々其の機会がないまま夏を迎えた。そんな或る日、家族の者が皆で土曜から伊勢に一泊で海水浴に行くことになった。私は会社もあるので留守番をすることに

なった。遂にチャンス到来とばかり、土

曜日は早々に退社、夕食も何とかしく嚴重に戸締りをした後、前日買っておいたサラシを取り出し体に合せて切り力一杯締め込んだ。快い木綿の感触、盛上った前袋、尻に喰い込んだ一本の線、まさに天にも昇る気持であった。ふんどし姿を三面鏡に写し一晚中飽く事なく見入っていた。其の時以来、私の体内に眠っていたフェチズムが、むっくり頭をもち上げた様に片時もふんどしを締めずにはいられなくなった。

残りのサラシから、もう一本ふんどしを切り残りを胸に巻いて男らしさが溢れる様な気がした。其の夜は勿論、翌日曜も家族の留守を幸いに、ふんどしを締め胸にサラシを巻いた姿で庭を歩いたり入口から顔だけを出して見たりしていた。やがて居間で横になり扇風機にふかれていた中に、いつしかうとうとと眠ってしまった。誰かに揺られて目が覚めた。外はすでに薄暗く、深い睡りからさめた私の気分は爽快だったが、次の瞬間

家族の者の顔を見て自分のあられない姿に気づき、恥しさの余り体内の血液が一度に頭に集った様な気がした。此の日の想い出は生涯忘れる事が出来ない。其の後の

事は、現在私の褌姿が家族公認となつてゐる事で解つて頂けると思ふ。

其の時以来、私の下着にパンツやシャツがなくなり、肌着下着はサラシだけとなり、夜眠る時にも寝巻など着ず、ふんどしとサラシを巻いているだけである。それでも風邪などひいた事もない。最初は銭湯でも大変恥しく思ったが、他に下着がないので、ふんどしそのまま行つたが、現在では何んとも感じなくなった。最近勤務先の都合で一人アパート暮らしをしているがアパートの人も、最初はじろじろ見ていたが、今では何んとも思われない様である。

最後に、女性の方もふんどしを締めては如何。夏などスカートの下に褌を締めると非常に涼しくてアセも出ず清潔だと思ふ。但し六尺ふんどしは、少々かさ高く困る様だったら、男の水泳用の三角ふんどし様のものを考えてはどうだろうか。此れなら取りはずしも簡単だし洗濯も容易である。最近女性の方もふんどし愛用者が多い様だがまだまだ一般の人には考えもつかない事だと思ふ。恥かしがらずに愛用される事を願つてやまない。

美女緊縛への憧憬

内海晴美



○昭和十二、三年頃、「キング」に連載されていた小島政二郎作の「乳房祭」の単行本をお持ちの方又は御記憶の方はいないでしょうか。

○十数年前、私は故郷の家の物置から偶然それを見つけ、それ以来忘れられない思い出になっているのです。

○先年故郷に戻った時、探したのですが、どうやら家の者はクズ屋

にでも売り払ったらしく、永久に私の眼から去ってしまったようです。

○今でこそ、奇クの中でMSは心ゆくまで満足できますが、あの当時（もっとも私もまだ十代半ばだったけれど）の私は、目もくらむような熱っぽさで胸をどきどきさせて飽かず読み耽ったものです。

○ヒロインの雪江は、父いち翁の捕えられている牢獄の前で、いち

翁発明による火薬の秘法を知ろうとする黒覆面をまじえた悪人達の前で、全裸にされて囃られるのですが、「ああ乳房花に似たるかな雪江の体は、そのまま高手小手にされて傍の柱に縛りつけられたのである」といった文章は、今でも憶えています。

○その他、こうした雪江が捕われて責められる場面が、二、三カ所はあったと記憶します。

○忍者ブームまだ酣の今、かがね私の夢想している構想に、どなたか、脚色して下されば有難いと思います。

○多くの志願者の中から、あらゆる適性検査にパスした三人の美女（いずれも二十才前後）が日本を脱出某島に送らるべくトランク詰にされようとしている。ブラジャー、パンティだけの女達を荷造りする屈強の男達は、皆黒覆面の忍者スタイル。猿轡、逆海老型にされてトランクに入れられた女には麻酔薬が、その白い裸身に注射される。

○某島港外の船上、カルテと照合の上引渡される女達を調べる女忍者。女達はいずれも後手錠を両手首に喰込まされ、珠数つなぎにされてランチに移される。

○訓練所に強制入所させられた女達は、女忍者としての技術を仕込まれる。男忍者の逮捕術のけいこ台になる彼女達、力一ぱいの抵抗を命じられてマット上で男忍者と組合うが結局男達に高手小手に縛り上げられる。

○女忍者は肌馴れのため、あらゆるもので縛り上げられる訓練がある。女達は交互に被縛者となって糸のような細いものから、くさりに至るまで、その緊縛度を確かめ合う。

○耐久テストのため地下牢獄の中で、黒装束（覆面なし）のまままで高手小手にされて悶える女忍者。尿意のためふくらんだ腹部を、鉄格子の外から男忍者達が棒の先でつつき回している。

○敵の機密を探るため、わざと敵の手に捕えられる女忍者。覆面を剥がれた黒装束の身を嚴重に縛り上げられ、縄尻をとられて敵将の前に引き立てられるが、きつと顔を上げて悪びれぬ女忍者に腹を切って死ねと短刀を差し出す。

○以上のような私の願望を、奇クの諸先生によって、文章と画になれば、私の喜びこれに過ぐるものはありません。編集の諸先生方宜敷お願い致します。



木戸川 健

毎月二十日過ぎにK誌が送られてくるとまた翌月の分も書かねばならないか、と義務のようなものを感じてしまい、私の八世相診断室Vも遂に五回を数えてしまった。この調子では何回続くのか、ちょっと見当がつかない。

もとより、私の書いているものは、K誌の立場を世間に訴えるもので、いわゆるK誌の読者むきとはいいかねる。いってみれば、かつてでた弁護士のようなもので被告人たるK誌の冤罪を、告発人及び検事たる、いわゆる良識の世界に住む人々に対して、晴らさんとするものである。と、同時に、日ごろの私の鬱憤をも晴らさんとするものである。

今回は、後者、つまり私の鬱憤の捨て場として、この欄を使用する事をお許しありたい。私事に渡って恐縮、という意味である。さて、これから書く事は、神にかけて真実である。

昭和三十九年十二月三十一日の翌日は、私にとっては何でもない日である。お爺さんの命日でもないし、私の誕生日でもない。しかし、世間では、その日を元旦という。お寺の鐘が鳴る。日頃は見向きもしないくせに、着飾って神社や寺院に、おさい 金をあげに行く。そして、おたがい「おめでとう」という。

私などは、年がら年中おめでたいので、そう改まっていわれると

照れてしまう。しかし、とも角、正月とは「おめでたい」ものらしい。そこで、この原稿、年あらたまって書いていますので、読者の皆さんおめでとう、といいましよう。本年もよろしく。

年賀状——という、郵政省をもうけさせる制度が、明治以来日本にはある。年あらたまらないうちに、つまり旧年中に、「おめでとう」と書いておいて、元旦に配達させる妙な仕組みである。私はこんな矛盾した事はやりたくないもので、返って失礼に当たると思うので元旦か二日の日に年賀状を書く事にしている。それも、もらった人だけである。「おめでとう」ともいわれないのに「おめでとう」と返す必要はない。

つまり、日本中の人みんな私と同じような心がけているならば年賀状などという明治以来の悪風はアボイドされてしまうに違いない。そうすれば、郵便屋さんも、正月早々働かなくてもすむし、郵政大臣も、その事で全通とチョウチョウハッシやり合わなくてもすむのである。

ところで、今年は五十数通、その悪風を受けた。大部分は会社関係の人たちであったが、その中に

妙なのが一枚まじっていた。住所は書いてないし、元旦配達の分なので消印もない。金田一八郎という、どこまでが氏名でどこまでが姓名なのかわからない。そんな年賀状である。

しかも、その挨拶が癪だった。「今年は巳年、多分あなた年。当り年。車で当って死んじまえ」と、きたもんだ。昨今太平ムードで、アチコチに退屈男が横行している。他人の家の郵便受けに千円札を投げ込んだり、娘さんの晴着を硫酸で焼いたり、唾のまねをして警官をからかったり、いたずら電話は申すに及ばず、その根性たるや、実にさもない。

植木等なら、気にしない気にない、というところだろうが、正月早々縁起でもない。私は、大いに気になった。腹が立った。つまり、正月早々腹を立てたわけで、そこに犯人のひそやかな喜びがあったらしい。

新年に、志を立てずして腹を立てた私は、今年はろくな事はあるまいと思った。しかし私に「三等当選」というお年玉を送ってくれたのである。私は笑った。犯人に復讐した気持になった。世の中ってえてしてこうしたもんだ。そし

試論と呼びかけ

平野 広

て、しきりと神の存在を信じたものである。

が、それにつけても、うち続く太平に人々が何と退屈しきっている事か。平和にあくびをしている日本。九千万人の総あくびと共に一九六五年が明けたようなもので

ある。

申すまでもなく、平和の敵は退屈である私は件の年賀状をもさる事ながら、その背後の退屈精神に腹が立つ。千円札が投げ込まれると、中小企業の倒産よりも大事に、センセーショナルに報道す

るマスコミの野次馬精神に腹が立つ。退屈が極まった時、そこにあるものは平和の美神の怒りである。

われわれはもっと私生活を充実して、退屈に対抗すべきである。もろもろの退屈事件の根ざすところ

ろは、その生活の貧困である。そして、K誌が、われわれの私生活のバライティの一部に存在している事は、申し上げるまでもない。

(二月二十日、記)

奇クを良識ある特殊専門誌にしようという、二月号での佐仲晴成さんの御意見に大筋としては賛成ですが、電車の中で平気でカバンからとり出して膝の上でひらくことが出来るような奇クは、その特殊な持味をほとんど失っているように思われてなりません。奇クはやはり大人の雑誌として、私的な時間を充足させつつ、一方で公刊誌としての寸分のすきのない体裁をたもつという方向をたどるものと考えます。

その私的な時間を充足させるものの一つを、仮りに耽美的内容という言葉であらわしますと、現在の奇クは全部と云っていいほどこ

の種のもので、知的な関心を満足させる内容が少なすぎると思います。つまり、耽美的な事象を他方で社会的事象・歴史的事象としてつかまえないおし、その意義や位置を確認しようとするところみがつたとあっていいと思うのです。たとえば、精神分析学の方ではこれらの耽美的諸事象をどう分類整理してみせるか、また、江戸時代以後、これら耽美的諸事象の表現にとりくんだ絵師などの生活や思想や作品群が現在の耽美的諸事象とどんな異同をもつか……などの紹介です。

外国なみの凶悪な犯罪があらわれてきた昨今、その手口が映画からまねられたとして具体的にその題名があげられたりする情勢のとき、奇クは無理解な世間の大衆指弾を何らかのきっかけでもおこらないように、編集者・愛読者ともどもその防衛につとめる必要があると思います。前記のページをふやすことなどは、この時代のまがりかどをつきぬけていく好手段となるだけでなく、特殊分野への知的興味をいだくものにとってこの上ない贈物となるでしょう。

山原清子さんの出現に関連して刺青についての記事が多少あらわれましたが、もっと体系的に、刺青の図柄や道具の説明、刺青師の生活や刺青をほどこした男女の逸話など、随筆風でも書いてほしいと思う心、これが知的な興味というものでしょうが、それに応えるページが設けられている場合、将来仮りに耽美的内容への粗暴な干渉がつよまっても、奇クはこれらの知的な内容に重点をおきかえることで何とか事態をとりつくろうことが出来るでしょうし、そう切迫したことになるなくとも、これらのページの設定は奇クの文字どおりの風俗資料誌としての存在価値をたかめることでしよう。

購読開始以来、関係三誌のなかではもっとも手堅くするどい持味の奇クと私なりに思っているのですが、それなりに新分野をひらいてもらいたく、また読者諸兄との個人的な交わりのうえにたって更に奇クを楽しみたたく、この一文をものしました。高松志朗さん、長谷好男さん、どうかお便りください。また三隅良信さんなど伊藤晴雨について、お教えいただければ、加えて真言宗立川流について御説示ねがえるかた、ぜひ御連絡ください。

テレビ「徳川家康」 観賞の一場面

兵 頭 庫 一



去る一月九日夜十時放映されたテレビ「徳川家康」で我党感激の一場面が有ったので、それに関する所感を述べたいと思う。

戦国乱世の時代にあつては、このようなケースは実に枚挙に暇がないほど度々起つたに違いない。戦国ブームの昨今、このテレビを観賞しておられる方は数多いと思うので、その経緯は省略するが、この年老いた武士とその妻の潔い散り際をかくも克明に演出したテレビは、私の見た限りに於ては初めてだったので、その感激も一入

であつた。自刃という事に特別な関心を持たないであろうノルマルな方々の眼にはどう写つたかは分らぬが、そのノルマルな一人である私の妻は、「昔の人って偉いわね、あんなに簡単に死ねるのでしようか？ 私なんか、とてもそんな思いきつたことは出来そうもないわ」

と、只その行為のヘロイズムに感嘆するばかりであつたが、私にとっては胸の中に妖しいときめきを禁じ得なかつた寸時であつた。それから約一週間たった今も尚

睨に残るその模様を思い出してみよう。

白小袖を着た老武士が机に向つて遺書を認めているところへ、渡廊下の彼方から同じく白小袖を着たその妻が白紙の上に脇差しと懐剣を載せた三宝を恭々しく両手に捧持して静々と部屋に入つて来るところから始まる。妻が部屋へ入つてくる時分には武士も遺言も書き終り、夫妻はその三宝を中に対座する。最早やこの期に臨んで何の愚痴も未練もなく、淡々とした表情で二人は互いに顔を見合っている。

夫「そなたにも永らく厄介をかけたのう」

妻「なんの貴方、今更そんな……私ほどこまでも貴方のお伴をさせていただきます」

夫、思い入れあつて

夫「さらば、いこうか」

この簡単な訣別のやりとりの中に永年苦楽を共にして愛し信じ合つてきた夫婦の心の融合が切なく感じられた。

先ず妻の方から自害する女の嗜みとして白い細紐で両膝を一重固く括つて身仕度を整え、三宝の上の懐剣を取ると、続いて夫も脇差をとって鞘を払って刀身を見つめ

る。二人の視線が愛執をこめてからみ合ったのも瞬時、妻の方から一足先に懐剣の刀身に左の袂を巻きつけて、その切先を咽喉元に当てグイと突き刺す。続いて刀身を白紙で巻いた夫が切先を脇腹にグサツと突き刺す。咽喉を挟んだ妻が右横にどうと倒れるのに続いて、右へ引回した武士も同じく横に――すべてが終つた。

徳川時代の後期に、若い男女の悲恋の心中を相対死と称して極めて冷酷な扱いをしたと聞くがこの老夫妻の心中にも相対死という言葉がピタリのような気がする。武家の世に侍の死すべき時は実に多く、戦場に於ける討死に次いだことであろう。従つて武士の子として生れれば、男の子も女の子も死すべき時をわきまえる心の修業と自害の方法の修練とか、父母に依つてきびしく仕込まれたであろうことは想像に難くない。

女性が生を賜ふことは蓋し稀れで多くの場合は、このテレビの場面のように夫に殉死する立場が多かつたと思う。夫婦は二世を契るとされてゐるから、我が夫と共に死ぬことは、婦道を全うする所以でもあつたろう。人生僅か五十年最愛の夫死して尚生をむさぼるこ

とは不徳とされていた時代のことだから、このテレビの場面に於ける妻の殉死は極めて自然であり、何等とがむべき行為ではなかったのだろう。若しそこに強制的何物

もなく、むしろ喜んで行を共にする心境であったとすれば武士道残酷物語の一コマながら戦国乱世の世相を考えると、哀れにも亦美しい情景であったと思う。

女性切腹に於ける悲壮美を追求する筆者はこのテレビ場面でも咽喉突きでなく、切腹して見せてほしかった。衣服の上からであり、遠望であるからテレビだとて別に

気がねしなくても良いと思うが、世の識者の御意見は恐らく不可であらうから、せめて奇ク誌上に、それを求めるより外ない。

サロン・モデル通信

「モデルになった私」

神戸市長田区

志村善子

辻村隆様とお目にかかったあの日は、私にとっては生涯忘れることの出来ない日になりました。異性の前で一糸も纏わぬ姿になって、しかも次々とお縛りになられて、私はあの三時間ばかりが、まるで夢うつつのようです。学会会ではかなり人前で大胆に演技もした私ですのに。又当日は相当ドーラン化粧で顔をかえるつもりでしたのに、さつさと緊縛なされたので、素顔の私を撮られて、本当に困ってしまいましたわ。素顔なら、カメラ・ハントに発表しないで欲しいと、呉々も御約束致しましたがこのことだけは是非ともお守り下

さい。あの日からもう一月以上もなりますのに、辻村様は一向お見えになりませんが、どうなさったのでしよう。私の我ままをお怒りになったのでしようか。この次はメーカーキャップで顔を変えて、きつと辻村様に御協力すると申し上げたはずなのに。それとも、尼崎市の松岡寛様始め、若し私の様な者でもよかったら、どなたか御紹介下さいと申上げたのがお気に触ったのでしようか。私は心配で心配でたまりません。あの日、辻村様は何かお急ぎのようでしたわね。私がお気に入らなくてお急ぎになったのではない

でしようか。私も生れて始めての経験ですので、すっかりアガってしまつて、痛いとか、早く解いて欲しいとか、ついついお気にさわる事を申し上げましたが、本当に夢中だったのです。若しもう一度撮っていただいて縛って下さるのであれば、私もあらかじめ覚悟をきめまして、決して何も申しません。御存分に縛って戴きとう御座いますわ。

それから、いろいろの方を御紹介してくれとの我ままも申しません。逆吊りでも、駿河責めでも、貴方様のお気のすむようになさつても、善子はじつと我慢します。是非是非もう一度私に機会をお与え下さいませ。

(辻村隆より志村善子様へ)

善子様——貴女は非常に誤解しておられます。始めての緊縛プレイのモデルとしては、十分に私の意に叶って戴き、衷心より感謝しております。唯あの日、もう一人

の女性で、刑部さんとお目にかかる為、心ならずも気が急ぎ失礼しました。その事は前月のサロン楽我記で既に御存知と思います。その後、私のプライベートな仕事もあり、次々と新しいモデルの方もあつて、その方に手をとられていました。何卒不悪。決して忘れていた訳ではありません。いずれメーカーキャップをなさった貴女の御麗姿をカメラに納めたいと念願しております。尚、尼崎市の松岡様には、落合せ場所等、これも前月の「楽我記」で御紹介しましたし将来も、志村さんを望まれる方があれば、間違いない方と分れば御連絡致します。お約束通り当日撮ったフォトは発表致しません。何れ機会を見て、必ず第二回目の御約束を果しますが、或いは塚本氏同行するかも知れませんので、その点御含みおき下さい。それ迄に願わくば、おなかもう少し凹ませておいて下さいね(失礼)。



三月号を読んで編集者へ

小川 暁

前略

過日ハガキにて調査を御願ひいたしましたが一週間おくれで受取りました。どうかいつもと同じ様に二十五日に受取れる様御配慮下さい。

三月号を拝見して、グラビヤページが無くなり、さみしくなりました。貴誌存続のための非常手段とはいえ、かつての黄金時代を知る者にとっては、全く残念なことです。グラビヤページがなくなつた貴誌が今後、多くの読者をつなぎとめておくことが出来るかどうか、私は疑問に思うのです。

グラビヤページが一般書店の店頭において、多くの問題を生ずるであろうことは、よく理解できますが、店頭販売が大多数を占めて

いるのでしょうか。名古屋地方では数年前に比べ貴誌が書店にあるのをついぞ見かけません。(これは当地のみのことで関西地方では多いかもしれません)また、店頭に出ていないものを、店の者にたずねるのは、普通の人ではあまりやらないと思います。

そこで私は、もし出来ることならば、誌上に公示して郵送購読者をつのり、一切の書店での販売をやめにしてはと思うのです。切換えは急に出来ませんが、ある期日を置けば、可能ではないでしょうか。郵送購読システムにして、グラビヤページを増大し、夢のある貴誌になつてほしいと、望みます。もし現在の値段で減少する販売量、郵送費の問題は本文のペー

ジ数を減らすか常識程度の値上げによりカバー出来ると思います。

三月号中に、ある愛読者より、表紙を堅いスタイルのものにすること、グラビヤページを別冊にして袋に入れる等の意見がありました。表紙のスタイルの変更には賛成ですが、別冊にするのは、末端の販売網のことを考えると、一考を要すると思います。(市販されていると、投稿に写真を付ける場合、色々と考えますし、写真をそえることにより、より楽しいものが投稿できないのが現状です。これは私の様な小心な者の考えでしょうか)もし、郵送方式が採用されない時は、グラビヤページを購入後、切り開いて見る様な方法はいかがかと思ひます。(本文中でも問題を生じそうな箇所は、同様な取扱いをする)

せっかく今まで存続した貴誌が色々の制約のためとはいえ、形ガイのみを残して続刊されるのに対し、失礼ですが私見をのべさせていただきます。私は新聞社に勤務しておりますが、新聞と雑誌では経営上、種々違いがあり、宅配の様な形式はとれないかもしれませんが、現在の様な状態では、グラビヤページを付けたものを店頭

に並べることは不可能と思ひます。(我社でも各種キャンペーンの中で児童を悪書から守るキャンペーンを大々的にやっております、勤務先では反対の意見はのべれませんが……)編集者の御意見を、誌上において御聞かせ下さい。お待ちしております。

編集者殿

小川 暁

○ 先ず本誌三月号が約一週刊遅刊しましたことを、心からお詫びいたします。三月号は例月よりも早く印刷に着手し順調に進行しておりましたが、運の悪いことに折柄製本中に製本所の隣りの工場三軒が全半焼という事故があり、そのため予想しなかった遅刊という憂目を見てしまいました。

貴地にて本誌の姿を見ないとのことですが、これは全国的のことと読者からの通信では殆ど見ないということとです。大阪市内でも同様で以前毎月並べていた書店でも多くは扱わないようになっていくのか姿を見ません。発行部数が極度に細まっていることから考えても如何に悪書追放が徹底しているかということがわかります。

しかし、だからといって郵送に

頼むということが出来ない点に悩みがあります。一時的には無料で進呈する贈呈誌の方が、代金を払込んで予約する購読者の数より多かったことがあるということをし上げて、如何に直送数の少いかということが分って頂けるかと思ひます。現在に於ても、一月月の予約購入者の払込まれる代金は、たった一回のグラビヤ写真原稿の撮影に要する費用に該当する位しかない程なのです。

復刊第一号の白表紙の雑誌を印刷したときは、郵送一本でやる考へで全国の新聞に二十万円の費用で広告し約千名の方から申込みを受けました。定価二〇〇円でしたから千部で二十万円になりましたが、郵送費をはじめ雑誌の製作費

短歌

病床日記

吉村英子

おさな子のごとくに腰をつつみ臥しこころ素直になりゆかんとす。
浣腸を待つ刻永くしらじらと尻曝しおり夕日射す部屋
冬ごもりする蛇のこと想いおり直

用、用紙代、印刷代等すべて赤字となつてしまいました。復刊第三号までは、どうにか直送を続けましたが、すでに新聞広告する余力もなく、申込数は急激に減少し遂には百合になつてしまいました。この間の赤字の累積は数十万円を数えるに至つたため、やむなく第四号からは、見切本のルートにて流して貰うことにしたのです。

ここに至つて遂に直接購読者よりも贈呈誌の数の方が多いたという珍現象が続くに至つたのです。

従つて現在の取次委託雑誌の条件が余り芳しくないものであるとしても、出版元としては取次店から小売店へ、そして読者へというシステムに頼らざるを得ないのです。売れ残りの雑誌は無条件で

腸カテーテル深くさしこまれいてたえがたき限界にしてわが洩らすかなしき音を母も聴きしかあつきもの襦袢の中に洩らしおりゆうべの雲のしずかな乱れ秋深くなりしとおもう股ひらき濡れし襦袢を替えられていつ排泄のすべてを他人の手に任ねただ臥すのみの幾日過ぎし浣腸器の筒のぼりゆく液青しオムツカバーの前開けて待つ

全部引き取りその費用まで負担するという委託制度、四号精算という代金決算の方法（第一号、第二号、第三号、第四号まで納品して始めて第一号の代金を精算しても出来る。従つて第一号の売れた分の雑誌代金を貰うのには、少くとも第五号目まで作成していかなくてはならない。それでいて一回でも休刊すると翌月は支払いがストップされる）などを甘受してさえもひたすら、配本して貰うように平身低頭しなければならぬ理由もここにあるのです。丁度あれほど無冠の帝王などと大威張りしている新聞社が、一介の商人である新聞舗に頭の上らないのも、やはり配給のルートを、即ち死命を制せられてゐるからでしょう。

次にグラビヤ頁を袋トジにする方法は、すでに研究をして小売店の意見も徴してありますが、これも大きな難点が販売面から起つています。というのは、店頭でお客様が開けないから見えないという前提に立つてゐるのですが、実際には若い客は指で破つてしまうので売物にならぬというところで、書店では指で破られないために、最初から缺で切つておくというところもあるそうです。

御説のように、グラビヤのない雑誌は魅力半減でしょうし、又、制約にそつた写真を新しく作成したところで、往年の如き絢爛たるものが出来そうにありません。根本的に、青少年の健全なる育成に協力するという立前からゆけば、大人の楽しみも、幾分遠慮しなければならぬ、ということでは無いでしょうか。といつて、徒らにヒステリックに喚きたる必要はないので、許容される範囲内で適当に楽しんでハメをはずさないというのが良識というもののじやないかと思ひます。

真面目な御提案に対して、至極キマジメにお答えしました。僚誌「裏窓」が十一月号からグラビヤを廃止し、売行きが減少したということを洩れ聞き、それが同誌廃刊の誘因になつたのではないかと愚考（真偽は知らない）するとき本誌も安閑としてはおれない気持ちもしますが、貴意をはじめとして多くの読者の方々の御意見を参考として、許容される範囲内での充実を計ることに最大の努力を払いたいと考えます。

小川曉殿

箕田 京二

或る変身

——外科病院にて——

吉村英子

救急車の、あのヒステリックなサイレンとともに、この白い壁にかこまれた小さな個室に私が送りこまれてからもう一カ月以上になる。N病院第二病棟八号室が私の現住所の地番であり、(外)林登茂子殿というちいさな木札が私の門標である。

一カ月前の或る午後、横断歩道へ二、三步踏みだした私へのしかかってきた小型トラックの、黒い塊のような印象を境に、私の記憶は中断している。そしてその空白の時間の中で、私の二本の脚はその機能を失ない、下肢という由緒ある名称だけで私の肉体に隷属し

ているにすぎなくなっていた。この冷たく、するどい匂いの沈澱した小部落では、私は「左右脛骨骨折、膝蓋部損傷」という名で住民登録されているのだ。

白濁した海中から浮び上がるように、ながい昏睡から覚めたとき、私の両足はすでに固いギブスに固定され、機能的な部分ではなくただ痛覚の源としてのみ存在した。そして、その覚めた瞬間から私の日常は一変していたのであった。

案外だれもが気づいていないのだが、健康に生活しているとき、人間というものは、実

に様々な姿勢をするものだ。立ったり、坐ったり、踞んだり、跳んだり……おどろくべき多様な姿勢を繰り返す。そして、いまの私のように、仰臥だけを、唯一の姿勢とする生活というものは、単に外見だけの変化だけではなく、精神をも一変させるものであった。

昏睡から覚めた後、まず最初に私を襲った困惑は、尿意であった。私のベッドの周囲には、急をきいて駆けつけた母や姉のほかにみるからに愚鈍そうな加害者の青年がいた。青年はしきりに低頭しながら、事故の状況や原

因についてくどくどと不得要領な説明を繰り返していった。その青年の立ち去るまで、私は更に一時間ちかくも生理的な苦痛に耐えねばならなかった。それは全く不当な忍耐のうちに私には感じられた。

やっとその青年が去った後も、私はしばらくその要求を、どのような言葉で告げるべきかに迷っていた。その種類の言葉は、通常の生活の中ではまったく口にする必要のないものであったし、また、口にすれば当然あらわな姿態の連想を引きださずにおかぬものであった。しかし既に私の日常生活は遮断され、習慣は一変していたのである。ここでの生活のための新しい語彙が必要であった。

「お母さん、おしっこさせてー」

私の声はふるえていた。そして母の方にも一瞬のためらいがあった。母も、（或いは姉も）介助者としてこの個室に同居する以上、ここでの会話や習慣に従わねばならず、そしてその変質は、私同様に否応なしのものであった。

「はいはい。すぐに用意しますからね。」

掛け布団がはねられ、裾をひらいた私の腰の下につめたいビニール布が敷かれ、やがてぴったりとガラス器の口がおしあてられた。

「どうしたのよ？ もうしてもいいのよ。」

私はまったく動揺していた。生理の要求も意志も充分にあるのに出ないのだ。苦しい。しかしそれは、夢の中の出来事のように、中心ははっきりしているのに、その外縁がぼやけて映像を結ばないように、条件はそろっているのにいわばきっかけがないのだ。仰臥が生活の唯一の姿勢であるために、普通の生活の中ではトイレで跣むということが、ひとつのきっかけであり、サインであるような変化がないのだ。ながい苦悶の末結極看護婦さんの手でゴム管をさしこまれ、器械的に排出してもらわねばならなかった。

このことは、もうひとつの排泄の場合でも同じであった。お尻の下にさしこまれた便器の固い感触が、どうしても意志の集中をはばむのだった。力を入れても、その力が所要の一点に集中する直前に別の意識とまぎれ、かんじんのところで霧のように薄れてしまうのだった。その空しい努力が数回くり返えされた翌日、それは浣腸という忌わしい方法で、否応なしに解決されたのだった。

「馴れないうちはどうも出ないものですからね。いいですよ。後で浣腸しましょう。」

回診の医師は、こともなげにその惨酷な予

告を私に与えた。そしてこの小世界では、医師の言葉は、専制君主の宣言のごとく絶対に正確に実行されるのだ。そして数時間後「林さん、浣腸しますからね。すぐに楽になりますよ。」

私のお尻は、羽根をむしりとられた鶏のように醜くくふるえていたにちがいない。誰にもみせたことのない黒い蕾は看護婦さんの二本の指で無造作にひろげられ、挿しこまれる浣腸器の硬い嘴管、フーッと腸内へ流れこむ液体のつめたい感触……私は眼をとじてその羞恥に必死に耐えた。ぶ厚い脱脂綿がお尻にあてられ、

「さあお母さん、これを押えててあげて下さい。五分以上してから便器をあててあげて下さいね。」

それはまったく無秩序な、暴力的な便意であった。力の集中や、意志の統一などとは全く無関係に私の腸内を掻きまわした。

「あーもう出そうよ。便器をあてて……」

「だってまだ五分にならないのよ。もうすこしがまんできかないの？」

「だめよ、早くして……」

ためらいがちに便器がさしこまれるのとはほとんど同時に、私はどっと噴出させてしまっ

たのだが、無残にもその大半は便器を外れ、その周囲を汚してしまったのだ。

人生が経験の集積であるならば、私はなぜ二重の人生を経験しなければならぬのか？ 垂直の人生と、水平の人生の交叉の中で、私はしだいに非情なものを身につけはじめていたといえるであろう。その無残な失態の翌日から、私の股間は赤ちゃんのようにおむつで

つつまれ、淡いブルーのナイロン地にビニールを張ったおむつカバーさえあてられたのだ。浣腸のたび毎に看護婦さんの手でおむつカバーを開かれ、注入後再びつつまれるのだ。

「あら、これならいいわね。汚す心配がなくて——」

この何気ない言葉がいかにするどく、深く



私の心を刺したことか、それは誰にも判らない。私はそのたびに最初の失敗の惨胆たる情況を心の中に再現せざるを得なかった。おむつの中に、熱くはげしい、どろどろの肉体の残滓を排出するたびに、私の魂の或る部分もまた流出していたにちがいない。汚れたお尻を、老婆か、或いは幼児のように無造作に清拭されるたびに、私の心はすこしずつ乾いていった。おむつの生活に耐える方法は、一足とびに老婆になるか、でなければ幼年に回歸すること以外にはない。そうした乾いた神経の中で、私はしだいに導尿や、浣腸の羞恥に馴れ、尿器で尿を採ってもらうことにも熟練していった。

医師の診察中に、例の青年が来合わせたのは、ちょうど私がその神経の乾きに馴れはじめた頃の或る日だった。ノックもせずに入ってきた彼が、ベッドの上で寝衣の裾を大きくはだけられ、太腿まで露わにした私の肢態を一瞥したとき、ちらっと青年の表情をかすめた好色の影を、私は見逃さなかった。それが単なる憶測でない証拠に彼は非礼にもその場を外そうとしなかった。農村の人間らしい鈍重な、おどおどした、しかし充分狡猾さをもつその青年に、はげしい憎悪を抱いたのはそ

の時からであった。

治療が終って、医師と看護婦が出ていった後、青年は私の枕にちかい椅子に腰を下してもう何十回も聞き飽きた言い訳をまたはじめるのであった。

「どうも申し訳のないことをしました。僕に出来ることなら何でもしますから、どうぞ御遠慮なく言って下さい。」

私はそれまで、ただの一度もその空々しい言葉に耳を傾けたことはなかった。垂直な生活者が、仰臥だけを唯一の姿勢として生活する者に、いったい何がしてやれるというのか？ まして想像力をまったく持ち合せていないようなこの男に——。だが、その日は、私はその言葉を鋭どくとらえた。

「そう、ほんとうなのね？」

「は？ ええ、できることなら——ですが。」
「できるわよ。じやとにかく薬局へ行つて大人用のおむつカバーとイチジク浣腸を四つばかり、大急ぎで買って来て下さいな。」

「げんそんな顔をして出ていった彼が、命じたとおりの買物をして帰ってきたのは約三十分後であった。」

「ああ御苦労さま。そこに私のおむつがあるでしょ。それをおむつカバーに重ねて——。」

用意ができたなら、あなたのズボンとパンツを下げて、そのイチジクの浣腸を四つ、自分で浣腸するのよ。できないことじゃないでしょう？ しなさいよ。」

「でも、そんなむちゃな……」

「何が無茶なの？ 浣腸やおむつが恥かしいの？ それなら私がしてるのは何でしょう、私もいまおむつを当てられてるのよ。浣腸されて便をとってもらうのも、おむつですよ。誰のせいでこんなおもしろいをしてるとおもう？ 痛さや不自由なのはまだがまんできるけど、恥かしいことが恥しくなくなるってことは神経の秩序を変えること、もうひとつの別の人生を持つことなのよ。辛いなんてもんじゃないわ。さあ、私の目の前で、いますぐ浣腸しなさい。そしておむつカバーを着けるのよ。嫌なの？ どうしてもできないっていうのなら、それでもいいわ。あなたには到底耐えられないほどの精神的な苦痛を私が甘受していることを、あなたは自認したことになるのですものね。その苦痛に見あう額の補償には応じて下さるでしょうね。」

青年の表情に、困惑と打算が交錯したが、しかし彼は、私が予想したとおりのろろした手つきで四個のイチジク浣腸の尖端に孔を

あけ終ると、ズボンのベルトをゆるめはじめた。農民なんて、いつでもプライドよりは実利を選ぶものだ。

こころもち突きだすような形で私の目の前にさらされた彼の黄色い、ざらざらした皮膚につつまれた醜患な臀部、そのふかい壁の部分をおし分けるように挿しこまれるピンクの軽便浣腸——私は一瞬の眩暈と嘔吐を感じた。ちがう。わたしの精神を決定的に変質させたあの洗礼は、このように醜怪なものであるはずがない。しかし、眼前に緩慢に進行している浣腸という施術は、同じ動作と、同じ効果をもたらすことで同一であった。私は再びはげしい憤りを感じた。

「おさまなお尻ね。汚ないわ。はやくおむつしなさい！」

ふりむいた彼の目に陰湿な憎悪を読みとったとき、私はむしろ、いくらかでも救われるように感じた。

「済んだら看護婦さんの控室へ行って、私の支払費用の明細書をもらってきて下さい。」

「でも——僕、もう洩れそうなんです。」

「あら、大丈夫よ。そのためにおむつカバーしてるじゃないの。ここではね、排便だって自分の自由意志で全部律し得るとは限らない

のよ。」

しぶしぶ出てゆく彼の歩行は、まったくぶざまなものであった。控室まで三分、明細書の出来るまで五分——彼は必死に耐えるであろう。しかし、それは徒勞である。経験のな

い彼が、八〇ccの浣腸液を体内に入れたまま十分も耐え得るはずがないではないか。しかも浣腸というものは、耐えれば耐えるほど最後の爆発力は加重されるものだ。彼はきつと看護婦室で棒立ちのまま、そのアヌスを全開

してしまふであろう。そのときの彼の狼狽と看護婦さんたちのけげんそうな表情を想像しながら、私は声をたてて笑い、笑いながら涙を流していた。

春川ナミオ画 分譲用秘蔵版

女体下敷力作M画決定版

大判判印画紙鮮明焼付 七枚一組 三〇〇〇円 略号(ぬけ)

益々凄くなってきた春川ナミオの傑作M画

M派マニヤなら、先ずこの一組を!

豊麗きわまりない美女の逞ましくも美しい臀部に押し潰されたいという願望は、M派マニヤの最も

うか座右の宝典として、末永く御保存下さるようお願いします。

一、股間で圧死する

女上位のM画を描いて第一人者の春川ナミオ氏が、多くのファンの要望にこたえて、ここに純分譲用秘蔵版として、腕を十二分に揮ってまことに見事な傑作を完成して下さいました。

美しくも見事に生育したグラマ—I女性の股間に押しつぶされて、窒息寸前の男の恍惚境を精密なタッチで具さに描いている。これこそMマニヤの渴仰する憧れのサジスチンが、横暴きわまりない姿態で君臨した美しいシーンである。

二、行水の美女

まことに奔放にして大胆な構図と奇抜なアイデアにより、マニヤの肺腑を抉ぐるショッキングな筆致が画面一ぱいに展開しており、まさ。これこそMマニヤの垂涎おくあたわざるM画の決定版です。ど

タライ一杯に溢れそうになる大きなお尻をすえて、悠々と行水をつかう美女。そしてその見事なお尻の下に押し潰されているのは、

三、臀部の首絞め

哀れな男の顔ではないか。タライのふちに頸をはさまれて、男の顔は次第に苦痛に変わってゆく。女のお尻に押さえられて絶命寸前の男。

柱に縛りつけられた男の咽喉元には、美女の巨大な臀部がでんと押しつけられて男の顔も潰さんばかり。のしかかる尻の圧力に呼吸困難のため、すでに氣息えんえんたる有様である。しかし、美女のお尻の下敷になる喜びに、男はしびれるようなMの法悦境の中をさまよっているのである。

四、人間ハンモック

手と足をひろげて四方から吊られた男の腹の上には、六十キロは越す豊麗な美女の裸身が、どっかとのっかっている。クッションのよい、この人間ハンモックに女主人は至極御満悦なのだが、男のハンモックの方は果していつまで耐えられるだろうか。

五、人間椅子の喘ぎ

豊かで真白の色気あふれる美しいマダムが巨臀が、四つ這いになった男の背に、どっかきりと跨っている。喘しい女体の重さが、心秘かにマダムを慕う男にとつては、千金の重圧となつて、泉のような愉悦と共にのしかかってくる。

六、ローソク責め

逆エビに反らされた少年の背中の下には、火のついた蠟燭がチロチロと燃えている。逞ましいポリウムのある美女の奇麗な尻が、必死に反らした腹の上に、情容赦もなく、どすんとおろされる。全身脂汗を流して耐える少年。

七、股間に沈潜する

美しくも肉づきのよい女の太い股で顔をびったりと挟まれ、むちむちした女体の下に押さえられて完全に埋ってしまった男は、この下敷の境地の中で、絶命するのが最も幸福だと思つた。

「耳責めに微笑む娘」

読者通信を通じて呼び掛けて来た女性、志村善子に逢って、数時間を過した私は、その日、引続きカメラ・ハント志望の女性、刑部典子と逢うべく、慌だしく約束の場所へと駆けつけた。

神戸三の宮の「そごう」界限は、黄昏近くでかなり混雑していた。昼間の、志村善子とのひとときで、私は相当に疲労を覚えていたが、日を改めて再び神戸へ来るのも、些さか憶劫で、かくは一日に二人の女性かけもちと相成った次第である。

刑部典子の勤める、神戸でも一流の元町の

中華飯店からは、此処まで歩いてても十五分とはかからない。午後からなら、休日をとるのだが、夕方なので早退すると連絡があつたから、店からじかに「そごう」の正面入口へ現われるのだろう。彼女の眼じるしは、ヒスイの耳輪に黒メガネだと云う。

私の服装は、カメラとストロボと数条の縄、それに耳責めのアクセサリーを納めた、黒の提げ鞆にオーバ姿で到って平凡、特徴がない。彼女が来れば私の方から呼び掛けることになっている。

約束の時間が近づいた頃、青の信号と共に

辻村隆

人浪に混って小柄な黒メガネの女性が、こちらへ亘ってくるのを、私は逸早く認めた。

彼女は舗道を亘りきると「そごう」百貨店の正面入口で、自然に立止った。じろじろと左顧右眄しない。如何にも確信ありげな姿勢である。私は近づく。

「刑部さんですね——」

彼女ははっという面持で私をふり仰ぐ

「辻村さん？」

私はうなづいた。彼女は太急ぎで黒メガネを外した。冬の黄昏、季節外れの黒メガネは彼女自身幾分気がさしていたのだろう。



あどけない顔がはにかむ様に、私に微笑んでうつむいた。さりげなく振舞っていても、今日の夜の、これから始まる未知の世界に、心臓は激しく躍っているに違いない。

「余り時間の余裕もないので、簡単な夕食をとり乍ら、少しお伺いしましょう」

私達は並んで彼女の今渡って来た舗道を、再び渡り、すぐ側の喫茶食堂へ入った。

時刻なので中は満員だったが、やっと空席を見つけて、小さい腰掛へ窮屈に体を押しこむ。

余りたべたくないという彼女に紅茶とサンドイッチ、私は洋風のものをとった。行儀悪いが、たべものを口に運び乍らの慌ただしい会話を続ける。

「ずっと奇クを読んでおられるようですね」「ええ、でも三年許り前からですわ。買に行けませんので、発行所から毎月送っていただいています」

「私も過去十五年間、随分沢山のモデルをとってきましたが、耳を責めるのは始めてですよ。うまれて始めてだね。鼻に穴を穿った人は男性で去年撮りましたがこれはカメラ・ハントで御存知の通りです。貴女が、鼻責めの『M七〇生』とS Mプレイしてもいいと書かれたものだから、彼、早速申込んできましたよ」

「……………」

刑部典子は無言ではにかんでいた。サロンに『カメラ・ハント』志望した女性とは、どうしても思えないういういしさである。

私は話題をかえる。

「店ではピンギョ（碧玉）で名で呼ばれているんですか——」

「お店につとめる女の人は、一応すべて中国風の名前をつけて貰います。主人の事をチャングイ（掌櫃）とよびますが、掌櫃は最初ピンギョ、ピンギョとよんでいました。遠くから聞くと金魚、金魚ときこえるのでいやになります。私達仲間は私の名前の典子（のりこ）をもじって、ノンコって呼ぶんです。掌櫃も太々（タイタイ・奥さんのこと）も近頃ではノンコと呼んでいます。」

「ノンコ——いいですね。勤めて何年？」

「三年少しです。故郷の徳島の高校を出て、すぐ神戸へ来て先輩のつてでここへ住込みました。みんな親切です。去年の春から、レジを任せ、会計もしております。」

私はあらかた料理を平らげ終った。最後にもう一言きいておきたい事があった。

「中国の奥さんが、穴をあけておられ、ヒスイの耳輪をしておられるのに刺激され、そのチャングイなる人のすすめで、耳に穴をあけられたそうですが、穴をあけられた時、どんな気持でした？」

「わたし、もともと被虐願望の強い女なんです。虐められて見たいなんて考えたり、空想

したのは、既に女学生時代からなんです。私の父は、実は二度目なのです。耳に穴をあけた動機以前のお話を少しいてほしいですが私の二つ上の兄が、義父になじまず、わざと義父の怒る様な事ばかりするので。義父は決して悪い人ではないのですが、いいえ、むしろ私達にとって、本当によくしてくれるいい人なんです。母が義父側につくので、兄は殊更に、そんな事をしたのだらうと思えます。腹に据えかねると、義父は兄を裏山の柿の木へ縛りつけて、見せしめに放っておきました。そんな時も母は、義父の気を兼ねて、おろおろし乍らも、兄をその俚にしておくものですから、尚更ひがんでいったでしょう。

私は兄が叱られ縛られるのを、オズオズと見ていました。非道いわと思いつつも、一度私も、義父の怒るようなことをして、縛られて、村の人の眼につく裏山の柿の木に曝されたら、どんな気持ちだろうと思ひ、ひとりでドキドキし、赤くなつた事があります。

私は、ついに思い切つて、義父の逆りんに触れるようなことをしてしまいました。兄と同様に、叩かれ、手荒く後手に縛られて、裏山まで引曳って行くかと思つたのですが、義父はいかにも悲しそうな顔をして

——典子、お前までが僕を憎むのか——と、拳を震わせ、眼にうっすら涙すら浮べていました。そして、内心期待した様なことは義父はしませんでした。

高校一年の時、義父と母の間に私の弟が誕生しました。父母は孫の様な子だけに、眼に入れても痛くない可愛がりようでした。兄は高校を出ると東京へ出ました。そして私も、私が神戸へ来たのも、こんなわけです。父母は必死にひき止めたのですが……。三月に一度ぐらい父母が交替で会いに来ます。父も本当の父以上に親身に気をつかつてくれています。私の被虐願望は失敗に終わりましたが、胚胎したこの気持は、毎日に強まって行くのです。(長い話になりそうで、私は腕時計を見ました。本番の時間が一分と少なくなつて行くので、焦りを感じるが、身上話も聞いてやらねばならない。さあそれから……)仕事の終つたある夜のことでした。チャングイの一家と、西瓜の種を嚙つてお茶を呑んでいた時、ふと私は太々にこんな質問をしたのです。

——太々、耳輪の穴をあけるのは、随分痛かつたでしょうね。イヤリングなら、耳のうしろで、ネジ止めでもいいですのに——

太々は笑つて申しました。



——ノンコちゃん、中国ではネ、耳輪と纏足これ、風習です。今の中国の若い人あまりしません。私の娘時代、皆これしました。足の小さいこと、耳輪これは誰でもします。耳に穴あけること、余り痛くないですよ。私のティッシュ上手ですよ。ノンコちゃんやりますか——



チャングイもすすめました。

——イヤリングする。高い宝石や金ですると外れて落すと困るでしょ。耳輪通すゼットイ落ちない。若し困った時金に換えられる。だから、中国の人は最も高価なもの耳につける。アクセサリーと万一の場合を考えてネ。指輪ぬける。これ盗られるでしょ。金歯、いざという時外して使えない。宝石沢山持つ、

これも盗られる心配あるでしょ。耳輪千切ってもってゆかれない。ソコですよ。ノソコ、是非耳輪はめなさい。私、いい石をプレセントする——

穴を穿つ気になったのはこんな動機です。勿論被虐的な感覚もあった事は否めません。

耳を局部麻酔し、消毒した鋭い尖端の錐のもので貫通させて、リバーノールカーゼを、その穴に通し、上からガーゼをあててテープでとめました。ガーゼが入っている以上、穴は塞がりません。刺し跡の傷が治り、ガーゼを抜いた時、絹針が通る程の穴が残りました。

はためには全然分らないものです。

——時々、何か通す、段々に少しずつ大きくなるよ——

私は夜、折を見ては、いろいろのものを通して見ました。木綿針の先をまるくしたものでビニール紐や、細い丸環などです。先生の『三十九夜物語』最終回の『穴に憑かれた男』を読みました時、私も一度こうして責められたらと思いました。あのお話の様な身体を損傷し、悲惨なことは到底叶いませんが、私の様な実際に耳に穴をあけた女がいる事を知ってもらいたくて、とうとう思い切って通信を出しました。読者通信欄の片隅へでもの

せていただくつもりでしたのに、思いもかけず、サロン欄のモデル通信にのりまして、自分でもびっくりしています。きっと辻村様から御連絡あると、毎日毎日心待ちにしていた次第で御座います。一人で自分の事許り喋って御免なさいね」

「いや、私もまさか、私宛のカメラ・ハント志望なんて、考えてもいませんでした。光栄の到りですよ。じゃあ、そろそろ行きましようか。あの通信では、気楽にプレイの出来るホテルを御存じとか書いてありましたが、そこへ行きましよう」

「済みません。本当はアレ嘘なんです。チョクチョコ店へ来られる方が、ホテル経営なさっておられるので、そう思ったのですが、プレイするのに、まさか行けもしませんし……。どこでもいいですわ。唯、三の宮、元町界隈より、少し離れた処の方がいいのですけど」

「なあんだ、じゃあ車を拾おう」

私は二年許り前一度使った、湊川神社近くの花隈界隈の、あるホテルを思い浮べて、車を走らせた。わりかし広いし殆んどが和室なので、あそこなら、フォトにも都合いい。

刑部典子は二十三才といったが、見掛けはまるであどけなく少女めいて、どう見ても、

はたち前後にしか見えなかった。レジだけに言葉もハキハキしているし、それに絶えず微笑みをたやさないのに好感がもてた。

暑氣分で遊客の漫步する花隈で車を捨て狭い露路に入っていく。この辺りは、一流の料亭やお座敷の多い土地なのだが、裏通りには、妖しいネオンがアベックを誘い込むように紫にブルーにピンクに輝やいていて、私達二人連れとすれ違ふ酔客も、ひやかしもしない。もはや、そのうちの、どの一軒でもいいのだが、まるで渡り鳥の帰巢本能のように、私はうろろ歩き廻って、やっとかつて使ったそのホテルを見つけたのである

× × ×

ちっぽけなバスから上って、ホテルのごわついた借着を素肌に纏った刑部典子は、打って変って神妙に二の間の片隅でチジこまっていた。カメラ・ハント志望したとはいえ、いざこれから、生れて始めて縛られるとなると緊張と不安と期待とで身がすくんでしまったのかもしれない。

刑部典子の形よい耳朵には金環に細工した滑らかなヒスイが揺れていた。

「その耳輪外せるの？」

「ええ金環をスゴクちっぽけなネジでしめて



あります。ハンドバッグに捻じ廻しいれて来ましたから、外していただいて結構です」

ノンコはバッグから、化粧ケースをとり出し、更にケースの中のセルロイド製の容器から、針のようなものを摘み出した。近寄って見れば、時計屋の使う捻じ廻しの、最小のもので真鍮製であった。

部屋が薄暗いので、その捻じがどの辺りにあるか、全然分らない。私は次の間に麗々しく敷かれた、ダブルマットレスの寝具を後ろに二折りにし、枕元のスタンドのスイッチを入れた。

「スタンドのそばへ近寄って御覧——」

ノンコは素直に立上り、紐はしめず、借着の前を片手で押えて、私のそばに黒髪もふれん許りに近寄った。フト、男の本心が、突発的に抱きしめたい衝動を起す。私の鼻腔に、ノンコの髪の毛から発する、ヘヤースプレーの芳香が忍び込んだ。

「ドレドレ見せて御覧。あッ、なる程あった。これだネ。こりや全然分らないや」私はぎこちない手付で、小さなドライバーの剃刀のような尖端を、あるかなきかの溝にやっといれる。そっと廻して行くと、

「あおう、手で受けていて下さい。若しネジが転がり落ちると分らなくなりますから」

ノンコは私の膝に頭をのせた俤下からいった。成程ノンコの案ずるのも無理はない。あるかなきかの、まるで「奇応丸」の粒にもみたぬ金のねじが、私の掌の生命線にはさまった。若し落せば、虫眼鏡で探さないと、絶対見つかりっこないシロモノである。

この大切な宝物を、塵紙に移し、二の間の机上において、再び、左の耳に対して私は同様の細心の作業を繰り返した。ノンコは両手で耳をまさぐりつつ、器用に抜いた。

「随分高価なんだろうね」

「御想像に任せますわ。まあ私の給料の半年分以上はとびますわ」

耳飾りをねじと一緒にして、しっかり塵紙をひねった。この塵紙一つまみ十万円は下るまい。

ノンコの耳朶に、ぼつちりと凹みが残った。私は鞆を開き、大型封筒に入れた、耳責め材料をぞろぞろ引ずり出す。

六、七センチに切断した針金、ゼムクリップを伸ばして輪にした環、くさり、ビニール紐、カーテン環、犬のくさり、それに、輪をしめるペンチ等々――。

ノンコは、それらの品々を、興深げに見やっていた。

「さあ、始めようか。余り時間もないし、大急ぎでやらねば、帰れなくなるからね。じゃあ、それを脱いでくれる？」

私は否応なく、縄をもって立上った。

彼女の顔から、一瞬サッと笑みが消える。

浴衣を肩からずらして、それでも乙女の羞恥

は、流石に胸を蔽った。私は蔽っているその手を捻じ上げる。浴衣は腰まで落ちて、臍下を蔽っている。いきなり激しい緊縛も出来ない。小手始めのつもりで、首縄をかけて胸で二つに分け後手に縛って、その縄を更に胸に廻し、娘らしさを、そこはかとなく漂よわせた、ちんまりした乳房の上をギュッと強くしめ上げた。今夜の焦点は耳にあるのだから下半身を殊更に縛る必要もなかった。

「縛るのはこれくらいにしておこうね。余り最初から本格的なプレーすると、ノンコ怖がるだろうからね」

彼女はほっとした視線を私に投げて、にこやかに微笑んだ。スマイルが彼女の顔に戻ったのだった。

「さあ、ぼつぼつ耳責めとゆくかな――。そうそう、うっかりしていたが寒くない？」

「大丈夫ですわ」

「縄、きついかい？」

ううんとノンコは首を振った。ほどほどの緊縛感に、彼女は夢にまで見た被虐のプレイの喜びに、陶醉しているのかも知れない。

最初に、試しに耳穴へ針金を通して見た。

おくれ毛にかくれて、細い針金の貫通が、カメラのファインダーからでは判つきりしない。

い。セルフタイマーにして、私はノンコの耳を引張る。真中の針金が耳穴を貫通しているのが、はっきりした位置にした時、じじと音を立てていた一眼レフは、派手な音を立ててバシヤリとシャッターが落ちる。二、三枚これを撮って、続いてゼムクリップを丸環にした輪を通す。弾力性がないので、ペンチで丸くする。この程度の太さなら、スルスルとわけもなく貫通――。更に環を二重に合せた個所へ犬鎖の茄子環をはめ、鎖を引張ってみる。耳朶は引張られて、ノンコの顔がその方向へついてくる。

「痛い？」

「ウウン、痛くない。だけど引張られたら、耳穴でも干切れない限り、体が一緒に引っ張る方向について行きますわ。」

そこで、ノンコは笑った。よく笑う娘である。天性明朗なのかも知れない。こんな責めをやっている時に笑われると、どうも場違いで勝手が悪い。苦痛に顔を歪め、深刻な表情になるといいのだが。

兎も角、私は鎖を彼女の肩に垂れ下らせ、いろいろの角度からシャッターを切った。どのポーズからも、軽い笑みが消えない。これはこれでいいだろう。

さらば次の段階へと進むことにする。

カーテンの環を耳穴の左右へ通し、脱けない様ペンチでしっかりしめて、鎖を環に通してしまふので、鎖の先端をペンチできって、左の耳環にはめて締め、右耳の環へ鎖を通した。胸許で鎖は、まるでネックレスの様にゆれていた。ノンコは相も変らず笑いを表情に残している。被虐の愉悦が表情に現われているのだろうか。耳責めといっても、この程度なら、ノンコにとっては耳責めにも当たらないのだろう。イヤリングより幾分重いものが耳穴にぶら下っているに過ぎないのではなからうか。耳責めのカメラ・ハントが主であるので、私は更にビニール紐やら、錐やら、持参したもの総凌いに使って、三六枚撮り一本をこれに費してしまった。何を使っても、ノンコは一向に痛くない表情で笑みが消ない。

時計を見ると、八時を過ぎていた。余りグズグズもしていられない。このあどけない娘を痛めつけるのが本心ではないが、一応カメラ・ハントのフォトは撮ったので、この娘を本縛りにして、被虐の真の味を知らせてやりたい慾望にかられ出した。私はひとまず縄をとくと、耳責めのアクセサリを封筒にしまい込んだ。



「少し一服しよう。疲れたでしょう。」
「全然疲れませんわ。じっとしているんですもの——」

と、これはまた、判っきりとはね返ってきた。疲れたのはむしろ貴方の方でしょう、といわん許りの挑戦にもとれる。

「じゃあ、SMプレイという。今度は手加減しないよ、いいかね」

「怖いみたい……。でも辻村先生を信用してますから……」

あどけない表情が崩れず、ぱっちりした黒い瞳が、何ものかを求める様に、私にこぼれて流れてきた。ともすれば、その眼に惹きこまれそうだ。ぐっと抱きしめて、唇を奪って、ノンコはきつと私の胸に倒れ込んでくるに違いない。まるでそうなる事を待ち望んでいるような流し目である。私はその圧迫に堪えかねて口を切った。

「ノンコちゃん、恋人いるの？」

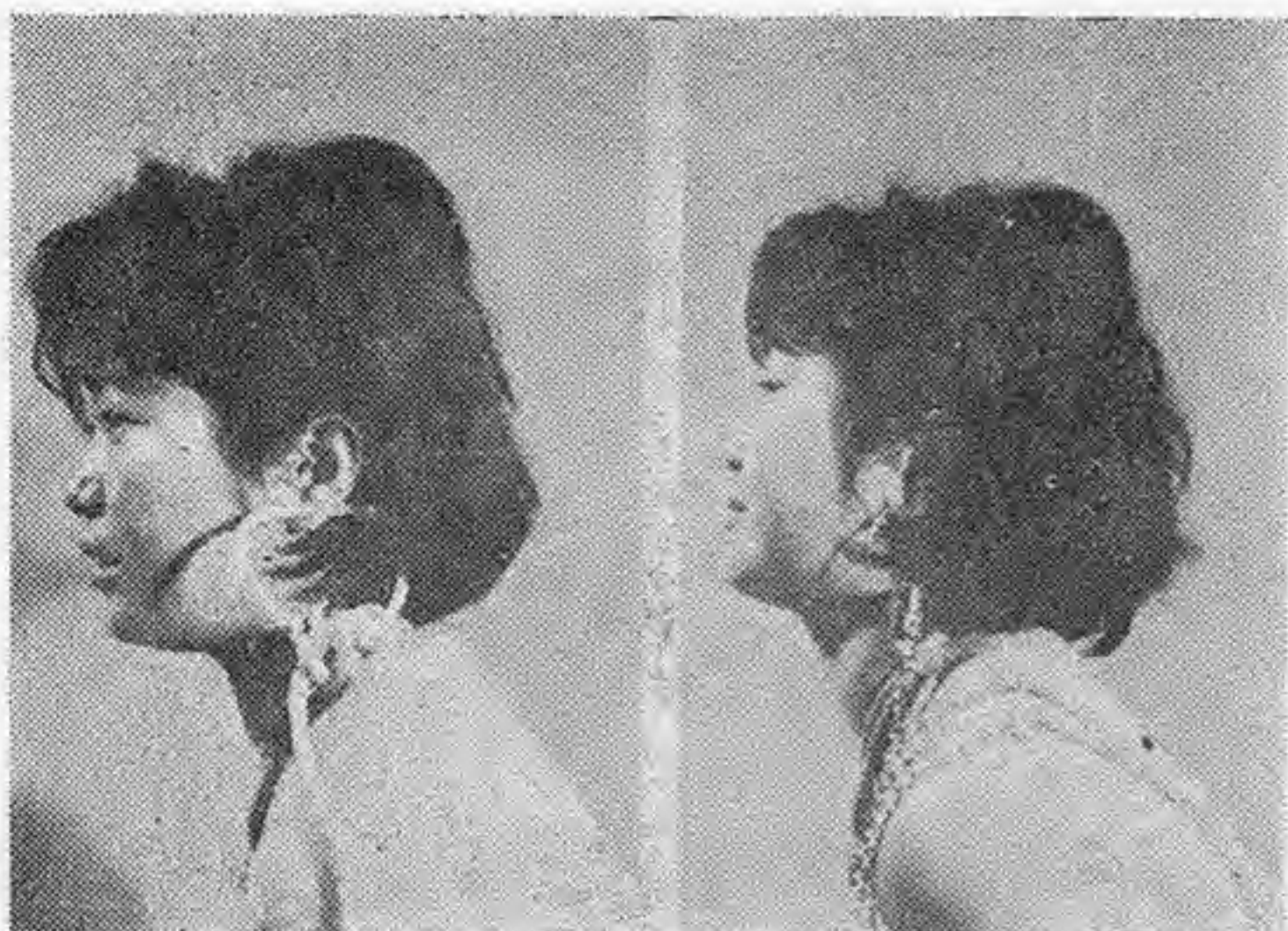
「恋人？ さあ、あるといえはあるし、ないもいえないし……。仲々好きな人が見つからないの。例えば辻村さんの様な人——」

それ来た。そして今、ノンコは声を立てて笑っている。真白な綺麗な歯並びがキラキラ光る。

「キスぐらいなら、とっくに経験済みなんだろう？」

「さあネ……。経験あるかないか、先生ためして見る？」

からかう様にノンコは唇を突き出した。いいしか紐をしめない浴衣の前ははだけ、可愛い蕾のふくらみがチョツピリ覗き、よく凹んだ臍窩が、あられもなく私の視線に入る。天真ランマンなのか、カマトトなのか、案外くわせ者か、兎も角、この娘に、私は軽くあ



しらわれ、振り廻されている感じである。

「あんたにはタジタジだね。じゃあ、もう時間も余らないし、ここでひとつ本格的な縛りで行くか。いいだろ？」

「……………」

ノンコは黙ってうなづいた。

私はバッグから、ありつたけの縄をとり出

すと、急に気分がハッスルして来た。この笑いき娘を泣かせて見たい、苦痛に呻き、のたうち廻らせて見たい慾望にかられた。

容赦なく縄を引絞り、しめ上げて、高手小手に犂々と縛り上げると、流石に笑いが消えノンコの眉間にシワがよった。私は荒々しく浴衣を剥ぎとると、あっと彼女は前のめりにうつ伏した。両足首を縛り、カーテンの環を両耳に通すと、一本の縄で足首から耳輪に通し再び足に戻して、ここで一旦結び、その縄で右耳の環に通して、縄を足首で結んだ。

彼女の頭は足首に二十センチの距離にあった。頭を上げようとしても耳環と足首を繋ぐ縄で、ピンと張って上らなかった。頭を上から押えつければ、連結した縄は中間でたるんだ。彼女がぐっと深く体を二つ折りにしている限り、耳穴に負担はかからない。腹部が圧迫されるのか、間歇的に大きい溜息が洩れた。その姿勢を見下していた私は、いきなり足蹴にして、ノンコの体を横倒しにした。

「痛いッ——」

瞬間、彼女は叫んで、両足を海老のように縮めた。そして蠕動して、痛くない位置に体をおくと静止した。表情は私の視野から消えて、高手小手の拳にした両手と、円まっちい

ふつくらした双丘が、私の眼下にあった。

投げすてられた、残りの縄をとり上げ、縄尻を振って、その柔かそうなお臀に、軽くムチをくると、ノンコはピクリとし、声は立てなかった。徐々に私の縄のムチは強さをまして行く。真白な羽二重餅のようなお臀の肌に数条の桃色の線が、レリーフの如く浮き上ってくる。ククククッと忍び泣く、吸り音に私はハツとさめた様に縄を捨てる。

双丘の桃色の縞は、クッキリと私の眼にプレイの跡を灼きつけてくれた。

私は静かに元の姿に抱き起し、ペンチで取敢えず、カーテン環を開いて外した。ノンコの足はすっと伸びたが、依然として顔は伏せた儘で、垂れ下った髪が、ノンコの表情をかくしている。縄をすっかり解き終っても、凝然と、彼女は元の姿勢を崩さず、顔を伏せたまま、忍び哭くような、クククという声だけが、私の嗜虐の良心をゆすぶりつづける。

「痛かったの？ 悪かったね」

いたわるように私は近づいて、彼女の黒髪を撫で、静かに顔を起そうとした。イヤイヤする様に拒んでノンコは顔をあげない。それをぐっと力をこめて持ち上げると、両手で顔を挟んだ。彼女は笑っていた。眼尻に数滴の

涙の痕を残して――。

「ひどいわ、ひどいわ。あんなにきつくぶったりして」

彼女は駄々っ児のように首を振った。

「あれがプレイと云うものさ。希んでいたんだろ君――」

「だって……」

「さあそろそろ支度しよう。先ずノンコの大切な宝物を耳にとりつけなくちゃ」

私はノンコの手をとると、机上のひねり紙の包みを恭々しく掌にのせ、再びスタンドの傍近くに胡坐を組んだ。

私の膝にノンコは必要以上に顔を強く押しつけていた。微細な作業は仲々思う様に捗らない。気がせくと尚更、このちっぽけなネジは元の鞘に納まってくれない。耳朶をいじられるのを、ノンコはうっとり眼をつぶって、私のなすが俚に任しきっていた。

絹川文代が、耳をいじられると、ジーンとくるといったのを私はフト想い出した。とすれば、彼女も亦、耳にそれを覚えているのかも知れない。

× × ×

阪急三宮駅の喫茶室で、私達はさよなら寸前の短い会話を交していた。

SMプレイのほろ苦い悔恨が、甘い懐かしい記憶に変わろうとしていた。

「本当は痛かったの。生れて始めてですもの……。今でもこうして座っていると尻がズキズキしますわ。でもあれがプレイなのネ。いつまでも、お尻にぶたれた跡がついていてくれたらなあって、私、矢張り耐えられたのね。」

「悪かったね」

「いやよ、そんないい方。あのぶたれている時、非道い人、非道い人と腹立てていたの。私、減多に泣かないでしよ。だから、私を泣かすなんて憎い人と思ったけど、今は違うの。辻村さん好きよ。とっても。何故だか分らないけど」

「私も君が好きになったよ。ノンコのスマイルはいい。いつも笑っている人生なんて素晴らしいよ」

私は財布から、今夜のフォトとプレイの報酬を数えた。

「これ渡しておくよ――」

「何なの？」

「痛い目をさせた、私のお詫びのシルシ」

「いりませんわ、そんなもの。私の方からわざわざ辻村さんに頼んで神戸まできてもらっ

たのだから。時間があれば私のお店へ来て貰って、お料理御馳走したいくらいですわ。私のお願いは一つ。これから愛想をつかさずいいお友達になってほしいの。それだけ……」

「SMプレイの好きな連中は、ワンサというよ。ノンコの今の言葉きいたら、毎日入れ換り立ち換り押しかけてくるよ。」

「辻村さん一人で結構よ。偶に連絡するだけでネ。これからは、辻村さんにジカにお手紙差上げますわ。下手な字だけ……」

「塚本氏にだけは紹介したいんだけどね。今日の成果を、奴さん首を長くして待ち兼ねているんでね。協力的だったら是非、非協力的な彼女ならどちらでもいいっていったがね。あんたは協力してくれたよ。協力という言葉がおかしければ、SMプレイは実にたのしかったよ。しかもノンコは若くて美人だ。いやお世辞じゃないよ、本当のところ。」

「じゃあ、塚本さんだけネ。もともと奇クを通じて知ったんだから、仕方ないわけネ。でも、それ以上いやよ。恋人は一人でいいんだから」

そう云って、刑部典子は艶然と微笑んだ。

恋人か？ これは中々乙な殺し文句だなあ。

「M七〇生」の紹介はどうだといと訊ねると、

彼女はもう沢山といわん許りに首を振った。
名古屋と神戸——。少し遠すぎるわい、こ
れは、「M七〇生」には気の毒でも、この八
卦彼に凶と出た。悪しからず。

梅田行最終特急にあと二分。私の握った伝

票を引ったくる様にして、彼女はついでに私
のあいた方の片手を力強く握った。改札口に
かけ出した私に、伝票を握った伝、ノンコは
喫茶室の入口で、大きく手を振っていた。

彼女を象徴するヒスイの耳輪が青く揺れて

いるのがいかにも印象的だった。

〔新版〕 女体悦虐フオト七十選

Z組七十集 大手札印画紙 (9×13種) 焼付各組一枚一組(送料共)

一組 一枚	一〇〇〇円
五組 五枚	四〇〇〇円
十組 十枚	七五〇〇円
二十組 二十枚	一四〇〇〇円
三十組 三十枚	二〇〇〇〇円
四十組 四十枚	二五〇〇〇円
五十組 五十枚	三〇〇〇〇円
六十組 六十枚	三五〇〇〇円
七十組 七十枚	四〇〇〇〇円

Z 1 ゴムの猿ぐつわ	(梨花)
Z 2 囚女第六十三号	(柳)
Z 3 猪型手足吊り	(梨花)
Z 4 逆エビ強烈縛り	(大塚)
Z 5 ローソク責め	(四浦)
Z 6 豊賢への珍責め	(絹川)
Z 7 淫らな変型縛り	(愛川)
Z 8 ザリガニしばり	(梨花)

Z 9 引き回しシーン	(東浦)
Z 10 全裸後手高小手	(加茂)
Z 11 豊満な肌の被虐	(大井)
Z 12 黒髪いたぶり	(大塚)
Z 13 足吊り媚態責め	(絹川)
Z 14 黒縄高小手縛り	(四方)
Z 15 強烈荒縄しばり	(梨花)
Z 16 肌に喰込む白い縄	(東浦)
Z 17 くの字の足指苦悶	(桜井)
Z 18 裸身にいどむ縄	(前本)
Z 19 無茶な猿ぐつわ	(竹野)
Z 20 ハリツケの女体	(梨花)
Z 21 おへソなぶり	(大塚)
Z 22 逆手足吊り	(竹野)
Z 23 美肌のいたぶり	(絹川)
Z 24 仰向きの鼻いじめ	(加茂)
Z 25 恐怖の表情一瞬間	(若原)
Z 26 火箸で責める乳房	(梨花)

Z 27 全裸の海老責め	(熱海)
Z 28 ベッド上の痴態	(絹川)
Z 29 足の裏の櫛り責め	(大塚)
Z 30 闇の女体飾り縛り	(竹野)
Z 31 首絞め晒しもの	(大塚)
Z 32 鼻孔に加虐	(若原)
Z 33 悦虐責放心状態	(梨花)
Z 34 手枷足くさり	(四方)
Z 35 寝室でのプレイ	(花本)
Z 36 猿ぐつわの妙味	(梨花)
Z 37 首縄、柱しばり	(絹川)
Z 38 巻煙草責め	(大塚)
Z 39 尻立て縛りポーズ	(桜川)
Z 40 厳しきエビ責め	(東浦)
Z 41 ゴムのカバー縛り	(竹野)
Z 42 ワンピースの縛り	(花本)
Z 43 荒縄縛り竹棒責め	(梨花)
Z 44 尻を突っ立てて	(大塚)
Z 45 鏡に映す縛り裸像	(山路)
Z 46 苦悶に喘ぐ柔肌	(大塚)
Z 47 酔後の淫らしばり	(絹川)
Z 48 逆十字エビ縛り	(大塚)

Z 49 全裸縛り猿ぐつわ	(東浦)
Z 50 欄間に宙吊り	(梨花)
Z 51 全裸逆エビ縛り	(絹川)
Z 52 荒縄のお仕置室	(梨花)
Z 53 庭園の惨酷風景	(館)
Z 54 被虐の果て	(大塚)
Z 55 痛められた裸身	(大塚)
Z 56 鏡の中の全裸像	(愛川)
Z 57 セーラー服縛り	(梨花)
Z 58 檻の中の緊縛裸身	(愛川)
Z 59 全裸の股間縛り	(絹川)
Z 60 オムツ逆エビ責め	(田中)
Z 61 胴縄に膨らむ腹部	(桜井)
Z 62 ゴム人形の女	(竹野)
Z 63 荒縄のトゲ責め	(梨花)
Z 64 女子大生恥態責め	(田中)
Z 65 白肌露出の全裸縛	(絹川)
Z 66 強要する開股縛り	(絹川)
Z 67 強烈縛り全裸の晒	(愛川)
Z 68 亀甲縛り乳房責め	(梨花)
Z 69 ベッド上のもだえ	(愛川)
Z 70 恥しさに耐えて	(館)

パリ拘置所

西 条 操

拘置所の食事も留置場と同じで、朝昼は黒パンと水だけだ。朝の点呼の時、トイレトペーパーが五十センチ与えられ、それが一日分だ。

日毎に組合わせを変え、又相被告同士が一緒にならない様に十名位宛に分けられて、雨の降らない限り獄庭で、天気が悪るければ中央通路で、毎日午前中十五分間の運動をさせて貰える。それ以外は、呼び出しのない限り独房から一歩たりとも出してはくれない。洗面は運動の時に僅かばかりの水でやらせて貰える。シャワーと下着洗いは、冬季には三週

間に一度、夏季には一週間に一度。差し入れは食物に限られ、それも所長の特別許可が要る。面会や文通は支障なき限り無制限が建前なのだが、その実なかなか難かしい。被拘置者に面会するには面倒な書類や手続が必要だし、「支障なき限り」と云うのが曲者で、一方的に禁止されても、泣き寝入りしかない仕組みだ。文通にしても、検閲未了と云われれば、いつまで経っても読めもしないし発信も出来ない。弁護士との接見だけが唯一の頼りと云うのが実情なのだ。

法の執行者の側から見れば、被拘置者がそ

う易々と社会に接触を持つては、拘置隔離しておく意味が半減すると云う訳だ。当局側は否定して居るが、面会や文通の回数は拘置中の成績と共に判事へ回されて、未決通算の日数算定の参考にされてしまうこともある。囚人同士の交話は如何なる場合でも絶対の御法度、その懲罰は反抗並みだ。囚人が話を出来るのは刑務官とだけ、それも囚人の方から口を利くには緊急時以外は許可が要る。許しを乞うにはキチンと跪まずき、手を縛しめられて居ない限り片手を挙げるのだ。尤も規則はそうなって居ても、実行し難い場合が多いの

で、大抵は「あの……」で済んでしまう。

立って居る時、歩いて居る時は、戒具なき場合には両手を後ろ手に組んで居らねばならない。右手首を左手で握るのが規則で、これはきびしく強制される。絶対の服従と従順さを示す訳で、相手の顔を見てさえも、時には生意気だと罵られ、ビンタの二つ三つを喰いかねない。どこであろうと、いつであろうと、時と場所を問わず番号で呼ばれ、こちらからは必ず「様」づけで呼ばねばならない。朝晩の挨拶をおそろおそろしても、先ず絶対に答えてはくれないし、対等な言葉使い等をしたら大変だ。どんなことを云われても絶対の服従があるのみ、若し口答えなどしようものなら『看守抗弁』と云って反抗同等の処罰を受けることになる。戒具を施される場合には、自ら進んで縛に就くと云う態度を示さねばいけない。何しろ戒具と云うものは、ほんの僅かの匙加減で苦痛がずい分と違ふのだ。意地の悪い支配者にかかる、撲られ蹴られた末に其のお礼まで云わされる。支配者達にとっては相手は罪人一步手前の連中達、最劣等の者を基準として扱っておけば間違ひあるまい、と考へて居るのだ。ともかく、社会と完全に隔離して心身共に打ちのめし、法の処

断までを生かしておけばそれでいい、と云う訳なのだ。

それが人間の暮しかと思える程のみじめな規則と日常の処遇は、如何なる罪状経歴の囚人と云えども、先ずは平等に仮借なく課されるのだった。

ミシュリーヌは拘置所の初夜を震え続けて朝を迎えた。起床のベルは年がら年中、六時半。ベルと同時に独房の窓が一杯に開かれ、防ぐ術もない夜明前の冷気が吹き込む。すり切れた毛布をたたみ、素足に革サンダルを履き、革バンドを足首に締めるか締めない中に点呼のベルが鳴り響き、暗くしてあった電灯が明るくなる。ミシュリーヌは所定の位置に震え乍ら立ち、凍えた手を息で僅かに暖めた。その位置に立つと、監視窓から全身が見える。かじかむ指で漸く束ねた髪にゴム紐を結び終えた時、監視窓がガタンと開いた。よく手入れた前後のウェーブと二つの鋭い眼とが覗き込む。あわてて両手を背に組みながら、ミシュリーヌは叫んだ。

「七十八号囚ッ」

ここでは、囚人が自分の番号を唱えさせられるのだ。

「声が小さいよ。もう一度」

「はい。七十八号囚」

ミシュリーヌはヤケ気味で喚いた。

「ふん。ところで、今あわてて手を組んだわね。昨夜、よく云ってきかせて貰ったんだろ？」

「すみません。つい身じまいがおくれで。」

「口答えするの？ 云い訳なんか通りはしないのよ。うしろ向いて。おや、その手は何？ 右手首を握るんだよッ。薄野呂!!」

「す、すみません。」

女囚は手を握り替へつつ唇を噛んだ。

「あら、その髪は何よ。夜の女の起き抜けだって、もう少しキチンとしたザマをしてるものよ。馬鹿ッ。誰が結び直していいと云った？ こっち向いて。」

意地悪げな灰色の眼が女囚の全身を上から下まで調べ上げ、ついで其の視線は房内を見渡す。

「その毛布は何？ それでたたんだつもり？ そんなふしだらだから、こんな所へ来る様になるのよ。どこの馬小屋で育ったんだい。」

自分ではキチンとたたんだつもり毛布を横眼で見て、ミシュリーヌは罵倒に胸熱くした。

「おや、其の眼つきは何？ 身仕舞いも碌々

出来ない上に横着な女だこと。」

「そ、そんな……す、すみません。これから氣をつけます。」

「ふん。じゃ、まあ初めてなんだから軽く撫でといてあげる。手をここからお出し。」

婦人看守は靴先で鉄扉の下方を探って差し入れ穴を開いた。何をされるのか分らないが命令には服従あるのみだ。鉄扉の内側に跪いたミシュリーヌは体を折って、横長の差し入れ穴から両手を外へ出した。其の手がいきなり靴底で踏みつけられる。呻いた女囚は引き込めかけた手を精一杯に耐え、指の痛みに掌を床につけた。かじかんだ指や手の甲を、低い踵の靴底で代る代る意地悪く踏まれるのだ。分厚く冷たい鉄扉に額を押し当てたままじっと耐え忍ぶのは、泣きたくなる程に忌々しい苦痛だった。監視窓からは、意地悪い灰色の眼が、鉄扉の内側下方にうずくまって悶える女囚の背を見下ろして居るらしく、冷酷な含み笑いが降って来る。

「少し揉んであげたわ。ちっとはキチンと出来る様になったかしら。どう？」

ミシュリーヌは此の婦人看守の足首を掴んで引き摺り倒してやりたい、とさえ思ったことだった。

「よし、赦したげる。今朝は殊のほか冷えるわね。フフフ。」

一日分の紙が投げ込まれ、白い手袋がちらと見えて監視窓がガタンと閉じた。床を舞う紙を痺れた指先に拾いつつ、ミシュリーヌは喚きたい程だった。頬を伝う涙も、吹き込む寒風に凍りつきそうだ。ミシュリーヌは口惜しさに胸一杯だったが、新入り女囚は大なり小なり受けねばならぬ苦痛と辱かしめなのだった。

朝食の黒パンと水は八時。窓は換気のためと称してそれまでは開け放し、ベルで合図される用便時間の五分間のほかは、何を反省しろと云うのか、反省のためと称して後ろ手で立たされる。ダニエルの話によればツーロン婦人刑務所では、此の時間は床に膝折って坐る苦行を課されるのだ。

八時半からは順々に運動だ。セーヌの川風がどんなに冷たかろうと、又夏の炎天がどんなにじりじり照りつけようと、かなりの雨か雪でない限り、一列に並び両手を規則通り背に組んで、獄庭の鉄網の内側を十五分間、囚衣の裾に膝せかれつつ回わり歩くのだ。
(まるで獣ね。ああ、あの塀の向うには自由があるのねえ、けどもう……)

ミシュリーヌは凍てついた地面を見詰めて悲しく歩むのだった。ふと気がつくと、先頭あたりにジェゼルが懸命に合図して居た。こちちを見て片眼をつぶり、監視の眼を盗んで手を振る。

「これッ。三十四号、何してるのッ。」

中央に立つ婦人看守が白い息を吹いて叱りつけ、厚い手袋の手でジェゼルの列から引き摺り出した。

「腕の運動は許してないわよ。その手をお出しッ。ほかの者は止まらないで。」

しなやかな木の笞が、ジェゼルの手の甲に鳴り、ジェゼルは身をよじって呻いた。凍えかじかんだ素手の甲を笞打たれるのは堪らない。ミシュリーヌは自分の手を打たれた様な気がした。木や藤の笞は正規の装備品ではないが婦人看守達は何本となくそれを準備して居る。鞭や笞が、囚人を屈伏せしめるのに最も便利で効果ある道具だと云うことは、昔からよく知られて居ることだ。

「まじめにしたらどうなの？ 面倒だけど縛つといてやるわ。膝を抱いて。」

二十は年下の若い婦人看守に叱られ笞打たれて、ジェゼルは顔をクシャクシャにしながら腰を屈めた。両膝を後ろから抱いた両手に手

錠をかけられたジゼルは情けなさそうに頭を振り、突き戻された列に混ってよちよち歩き初めた。はじめにも滑稽な恰好だった。

コップ二杯程の冷水で口をすすぎ顔を洗うと、忽ち独房に叩き込まれる。

（今日も又、こうして一日を暮らすのね。どうなるか分らないで待たされるって、本当に辛らく堪らないものだわ。今日で未だ四日目なのね。けど、今日の運動の担当さんはやさしく思いやりがありそうな方だったわ。そんなひととも矢張りいらっしやるのね。嬉しいこと。何ておっしゃる方なのかしら）

ミシュリーヌが溜息をついて居ると監視窓が開いた。体がびくりと硬くなる。

「七十八号、出房。弁護士の接見よ。」

待ちに待った味方にやっと逢えるのだ。飛び立つ思いで房を出たミシュリーヌは、婦人看守が手に握る手錠を見てシュンとした。

「冷たくて嫌かい？ でも、仕方ないわね。」

婦人看守は嘲笑って、女囚の両手に冷たい鋼鉄環を嵌めた。慣れた手つきだった。ついている革ロープを捌いて束ね直し

「おいでッ。」

荒々しく引張る。暖かな詰所でとぐろを巻いて居たいのに余計な仕事をさせて、と面倒

げだ。弁護士との接見を拒む訳には行かないし、弁護士と打合わせするのは被告人の権利である。しかし、検察側とすれば囚人が其の権利を行使するのが忌々しいことでもあるのだ。ミシュリーヌは狭い通路をぐるぐる歩いて、面会室へ連れて行かれた。弁護士との接見室は一般の面会室とは別で、隔てる鉄網もないし、そう寒くもない。机の前の床に造りつけの固い椅子、ミシュリーヌはそれに腰をかけ、肌懐かしい温かみに全身をゆるませた。机はバカでかくて上には何一つなく、椅子の背は垂直で頭より遥かに高い。椅子の背の下方には錠前付きの革ベルトが取り付けられてあった。

「手を机の上におくよ。縛りつけるのは赦したげるから、絶対に椅子から立ったり離れたりしないで。」

「はい。あの、これ外して頂けませんの？」

「駄目よ。」

婦人看守は束ねた革ロープを机上におき、少し離れて斜め後ろに坐った。ミシュリーヌは机上においた自分の両手を眺め、真向いの空椅子を見やって悲しかった。こんな服を着せられて薄汚れた顔のまま、その上にこんな物を両手に嵌められて、初めての殿方に会う

のだ。

（どんな方かしら？ ジヤンのお友達なんだから、きっと御立派な方よ。恥かしいわ。でも、お会いしてお願いしなければ……）

やがて鉄格子の音がして、背広をリュウと着こなした男が現われた。婦人看守が塗り終えたルーージュを納い、女囚は身を硬くして眼を伏せる。思わず引込めかける手錠が机に摺れて音を立て、浮かせかけた腰が辛くも押し止められた。

「やあ、ミシュリーヌ・ダリニーさんですな。初めまして。私、アンドレ・マイヨール。御指名下さった弁護士です。」

書類挟みを投げ出しながら彼は気さくにそう云い、普通の椅子を動かして真向いに坐った。

「は、はい……初めまして。あの、差し入れ、有難うございました。」

ミシュリーヌは蚊の鳴く様な声で云った。

「いや、なに。あれは、ね……」

と弁護士は片眼をつぶりノートを開く。思い切ってまぶしく見上げた彼の顔は引き締って精悍そうで、如何にもやり手らしく見受けられた。

「あの、私、お手紙拝見して、ついお願い申

し上げてしまいましたけど、お礼を差し上げ
ることは出来ませんのよ。」

そう云って涙ぐむミシュリーヌの長いまつ
げを其の白い額越しに見やりつつ、弁護士は
いたわる様に制した。

「いや、その点は御心配いりません。ほんと
ですよ。御安心なさい。では、と……」

弁護士はテキパキと訊ね初めた。その丁寧
な口調が、ミシュリーヌには涙のこぼれる程
に嬉しかった。久し振りに、人間として応待
して貰えたのだ。

「泣かないで。ね、泣かないで下さいよ。辛
らいでしょうけど、暫くの御辛抱ですから。」
「いえ、私、嬉しいんですの。こんな風にや
さしく云って頂けるのは、ほんとにもう久し
振りなものですから、つい……。すみません。」

そこへ洪いスーツの女がハイヒールを忙し
く鳴らせてやって来た。大きな眼の賢こそう
によく動く若い娘で、マイヨール弁護士の助
手を勤める才媛だ。恥かしさにミシュリーヌ
の唇がわななき顔が真赤になって、机上の両
手がぶるぶる震えた。もうどうなってもいい
から此の場を逃げ出してしまいたい程の心地
だった。娘は女囚の方を見ない様にして身を
屈め、マイヨール氏に何か耳打ちした。ミシ

ュリーヌはいつの間にか我知らず手前に引寄
せた両手の甲に顔を埋めて居た。マイヨール
氏は額を叩いて唸った。

「うーん。ま、もう少し時間を稼いで居てく
れ給え。」

「大丈夫？ 此のひと、私が代りますから、
早くお行きになった方がよくはありません
？」

（かんにんして。恥かしくて死んでしまいそ
うだわ）

とミシュリーヌはもだえた。

「うーむ。ま、とにかく適当に捌いて居てく
れ給え。君はしっかり者だよ。頼むよ、ビビ
アンヌ。」

ビビアンヌ嬢は、笑って忙しく去って行っ
た。

「そんなに恥かしがることはないんですよ。

僕達はあなたの味方だし、彼女は馴れてます
から何とも思っただけですよ。規則なんで
すからね。」

「はい。それで、あの……御用がおりじゃ
ありませんの？」

「いや、いいんです。あなたの件は僕が自分
で全部やりますよ。彼に頼まれたことですか
ら。」

弁護士は片眼をつぶって見せた。

「えーと、どこまで行ってましたっけ？」

ミシュリーヌはマイヨール弁護士を全面的
に信頼した。ジェラルルのこともラグランジ
ユ氏とのことも、すべて打ち明けた。そして
、それを隠したい気持ちをも涙ながらに訴えた
のだった。弁護士は思い入れよろしく大きく
頷いた。表情に満足げな色が微かに走った。

「よく分かりましたよ。御立派ですな。流石は
伯爵夫人だ。その線で行きましょう。しかし
それだと執行猶予は益々難かしくなりますが
ねえ。」

「いいんですの。私、覚悟していますの。けど
検事さんに十年とか十五年とか云われますと
……。」

「ア、ハハハ。飛んでもない。ま、いくら悪
くても、そう、先ず二年か二年半。うまく行
けば未決通算ですぐ出られますよ。」

「未決通算で？」

「ああ、あなた今、拘置されてるでしょう。

その期間を刑期から引いて貰えるんですよ。」

「まあ、そうなんですの!!嬉しい。じゃ、無
駄ではありせんかね、今こうして……。」

「そうですね。知らなかったんですか。そ
りゃ、全部差引いて貰えるとは限りませんが

ね。しかし、決して、無駄に苦しんでる訳じゃありませんよ。ところで、何かして欲しいことはありませんかな？」

ミシュリーヌは真情をこめて訴えた。

「あの、ラグランジュ様におっしゃって下さいまし。ほんとに申し訳ないことをしてしまつて。私が心からお詫びしてたとお伝えになつて。そして、いつか必ずお返し申し上げるつもりだと……。」

「ハハハ。彼はとつくに赦してますよ。けど伝えます。」

「お願いしますわ。それから、あの……ひょっとしてアンドリユー・メルシェと云う方が、其の娘さんのジュ・ジュヌビエールと云う人から連絡があるかも知れませんの。そして、何かの間違ひだと断わって下さる様にアパートの管理人へおっしゃっておいて頂きたいんですけど……。」

「確かに。えーと、アンドリユー・メルシェさんと……ジュヌビエール嬢ですな。」

弁護士はメモを取り、ミシュリーヌの睨は熱くなつて涙が溢れた。

（さよなら、ジュヌビエール。ずい分と手を打って探したのよ。でも、もう……倅わせにね）

「もう、ほかに？」

しゃくり上げるミシュリーヌを弁護士が促がした。涙を押えた女囚は更に縋りつく。

「は、はい。それから、あの……私のアパートから持って来て欲しいものがありますの。」

「何です？ でも、差し入れは無理ですよ。所長の許可が要りますから。」

「いえ、ただジェラルドの手から離しておきたいだけなんですの。けど、もう捨ててるかも知れませんわ。」

ミシュリーヌが持ち出しを依頼したもの、それは彼女の手箱奥深く蔵った二つの品、亡きシャルルの遺影とあの思い出の手帳とであつた。

励まして立ち去る弁護士を見送ると、安らぎの思いと心細さとが胸に満ちた。

（とうとう、ジュヌビエールとの糸も切れたのね。私、自分で切つたのよ。でも、その方がいいの。後悔しないわ。けど、着たい物も着ないで探す費用に当てたのに……。神様の意地悪。一目、一目だけ逢いたかったわ。ああ、未練たらしいこと……）

ミシュリーヌは頭を振って想いを断ち切つた。

（でも、若し万が一、ジュヌビエールが本当

のことを知って、そして私に逢いにここへ来てくれたら!! ああ、その時には私、どうしようかしら）

自ら掻き立てる想いの切なさ、胸ふるわせて喘ぐ女囚ミシュリーヌの腕を、婦人看守が無慈悲に掴んだ。

「さ、お立ち。お部屋へ帰るのよ。ホホホ。何をそんなにウットリしてるの？ あの先生相当なものね、声も凄くさびが利いてるしさ。」

曳かれて帰る独房への通路は寒気が肌を刺し、締めつける手錠は冷たく硬かったが、革サンダルを引き摺るミシュリーヌの足取りは久し振りに軽かった。

翌朝、ミシュリーヌは全身がだるく熱っぽくて、起き上がるのもやっとだった。弁護士に会って気がゆるみ、風邪をひいたらしい。立って居るのも漸くのこと、点呼を受け終えた彼女は跪いて訴えた。婦人看守が入って来て注意深く調べ臥せることを許してくれた。ちよつとやさつとのことでは、医者診察はおろか薬さえもくれないのだ。ミシュリーヌは手足を縮めてガタガタ震えながら狭い寝棚で時々夢を見た。美しいコモ湖、やさしかったシャルルの面影、忘れじのあの最

初の舞踏会。うつつに眼覚めた彼女は独房の壁の灰色に涙して寝返りを打ち、少し咳込んで再び眠りに落ちた。おお、ジュヌビエー。夢に見るいとしい児は未だあどけない幼児。名を呼んで追うミシュリーヌの手からキヤアキヤア笑って逃げ回わり、春の陽のコモ湖畔の館、庭の芝生の緑をよちよちと樹陰に消える。若芽吹く榆の樹陰から現われたのはジェラル・トリフォー。激しく云い寄って抱き締め、あらがうミシュリーヌに唇が燃えて迫まる……。吾が声に驚ろいて女囚ミシュリーヌは眼覚めた。

三たびまどろめば、今度は、あだし女と戯むれるジェラルの姿。脈絡もなしに浮ぶ豪華な広間の舞踏会。ミシュリーヌのローブの裾の純白を誤り踏んだフランソワがおどおどと詫び、つと寄っていんぎんに申し込む男はおおジャン・ラグランジュ……。

「どう？ うわ言を云ってたわね。汗がひどいこと。」

入って来た婦人看守に額を押えられて、ミシュリーヌは眼覚めた。腰のバンドにむき出して挟み吊った手錠がキラリと光り、其の制服を見た女囚は反射的に手足をもちいた。

「起きなくてもいいわ。熱がひどくなった様

ね。」

「すみません。あの、何時頃でしょうか？」
「もう、かれこれ夕方よ。よく眠ったので、おひるにも起きなかったの。」

女囚は絶え間なく襲う悪寒に身震いを続けた。

「仮病じゃないことは分ってるけど、医者に見せた方がよさそうね。待っていで。」

（まあ、仮病だなんて!!）

鉄扉は僅かの間でも必ずピッシリ閉じられて施錠される。其の錠を聞きながら婦人看守の言葉の意味をボンヤリと悟って、ミシュリーヌは口惜しい思いに唇を噛んだ。戻って来た婦人看守は女囚を見下ろして云った。

「来なさい。起きれるでしょ？」

「はい。」

手が震えて、革サンダルの尾錠を締めるのに手間取ったが、勿論手を貸してくれはしない。立ち上がると体がふらついてよろめいた。

「気が確かな中は規則だからね。可哀想だけど。」

婦人看守は、それでもいくらかは気の毒そうにミシュリーヌに手錠をかけ、階段では腕を扶け抱いてくれた。囚人用の医務室は本

館事務室の近くにあつて遠い。喘ぎながら曳かれて行くミシュリーヌは悲しかった。診察を受けられるのは嬉しいが、見知らぬ人々に此の姿を晒さねばならないのだ。

「風邪だね。けど病監に移す必要はないね。ま、少し暖かくさせてやり給え。」

帰りを急ぐ医者は短い診察を終え、注射を一本射ちペンを取り上げながらそう云った。

「えーと、何号だったっけ？」

「七十八号ですわ。」

これもそわそわと時間を気にして居る若い看護婦が錠剤を数えつつそう答え、監視されながら囚衣をまとうミシュリーヌを横眼で眺めた。

「もう、いいですね？」

「ああ。」

婦人看守は手錠を取り直す。

「もし何だったら、明日もう一度連れて来給え。所で、ダントン君はおそいじゃないか。」

「又、昼酒呑んで酔払ってるのよ。奥さんと喧嘩してるのかもね。あのマダム、凄いいびり級。敵いっこないわよ。」

と看護婦は白衣を脱ぎかける。再び嵌められた手錠の両手で胸押えながら、ミシュリーヌはハッとして思わず声を洩らした。

「ダントン医師!!」

「おや、君、知ってるの? ジョルジュ・ダントンだよ。」

カルテを書き終えた医者が振り向いた。ジョルジュ、酔払い、ヘビー級の妻。やはり間違はなく彼だ。マルセイユの裏街でくすぶって居たジョルジュが、今はここに勤めて居るのか。

「い、いえ。存じませんわ。人違いでした。」
ミシュリーヌは声震わせて頭を振り、婦人看守がきびしい眼で女囚を見た。

(あそうだったわ。訊ねられもしないのに口を利いちゃったのね。摸られるわ、きつと) ミシュリーヌはうるんだ眼に哀願を浮べて支配者を仰いだ。平手打は飛んで来なかった。

「今夜から明日中は彼の当直だよ。」

医者も白衣を脱ぎながら、そう教えてくれたが、ミシュリーヌは黙って両手の手錠を見詰めて居た。懐かしくて逢って縋りつきたい様な、そして又、死ぬ程に恥かしくて会いたくない様な、複雑な気持だった。ジョルジュはもうすでに知って居ることだろう。

(でも、あの人は呑んだくれだから新聞なんか読んでないかも知れないわ。知ってるのな

ら、せめて手紙位くれていると思うわ)

手錠の革ロープがぐいと引かれた。

「さ、帰るのよ、おいで。」

「はい。」

ミシュリーヌは、それでも医者と看護婦に對して丁寧に頭を下げた。

「ありがとうございます。」

「ああ。」

と医者が答え、温かい声でつけ加えてくれる。

「頑張るんだよ、きみ。」

ロッカーからハンドバッグを取り出して化粧の準備に余念もない看護婦が

「あら、あのひと、わりと……。」

と驚いた様に呟き、曳かれて去るミシュリーヌの背に、初めて同情の視線を注いだ。ミシュリーヌは与えられた薬包紙を手に、うなだれて時々よろめきながら、一步毎に寒気がきびしくなる通路を曳かれて戻った。

(暖かい室で柔かなベッドに寝れたら、すぐ治るんだけど。看守さん達の室は暖かそうなこと)

暖房の利いた看守詰所の前を通る時には、ミシュリーヌは泌々とみじめだった。暖気に曇る硝子の向うでは、数名の婦人看守達が明

るく笑い興じて居た。其の夜、ミシュリーヌは毛布を一枚余計に与えて貰えた。

「ありがとうございます。」

すり切れた毛布の一枚を跪まずいて受け取ったミシュリーヌは、我が境涯の悲しさを胸にこたえて味わった。しかし、お慈悲として与えられた其のカビ臭い毛布の一枚が、どんなに暖かく有難いものであるか、ミシュリーヌは生れて初めて、痛切に教えられたのだった。

「どう? もう一度診て貰う?」

翌日の午後、婦人看守はミシュリーヌに訊ねた。

「いいえ。もう大分よくなりました。はい。」

「そう。あら、だって未だ三十八度あるわ。」

もう一度注射して貰いなさい。」

婦人看守は体温計を見て云ったが、ミシュリーヌは頑くなにかぶりを振った。

(ジョルジュに会うのは嫌よ。でも手錠かけられて引張って行かれたら仕方ないわね)

「そう。そんなに快くなつたのなら、もう起きなさい。」

「はい。」

ミシュリーヌは齒を喰いしばって身を起した。

「ホホホ。起きなくていいのよ。」

婦人看守は笑って、鉄扉に施錠して立ち去った。

たとえ横臥を許されては居ても、朝晩の点呼は必ず規則通りに受けねばならない。其の翌朝、ミシュリーヌは少しは楽に起き上がった。熱も平熱近くに下って居た。

「お前はそう見えても割と丈夫なのね。」

「はい。いろいろとお手数かけました。」

「では、午後から平常通りにしなさい。」

「はい。あの、お薬が少し残ってるんですけど。」

「あら、そう。お前、物持ちのいい女ねえ。いいから全部お飲み。」

気心が分つて来ると婦人看守と云えども人間だから、氣立ての可愛い女囚には当りも柔らかくなる。勿論、中には頓着なしに冷酷なものもかなり居るが、それは仕方がない。此の婦人看守は眼に憫れみを浮べて、ミシュリーヌをいじらしそうに眺めたのだった。

其の頃、拘置所本館の執務室では所長補佐官のジョセフィーヌ・フルネ刑務官が電話器を取り上げて居た。彼女は女監区の責任を担当して居る三十才の独身の切れ者、法務省の課長にはなるだろうと云われて居る。かか

つて来た電話は北第一署の主任警部からで、面通しの員数用の女を都合してくれと云うのだ。面通しにも二種類あって、手当り次第に捕えて来た連中の中からホシを見付け出させると云う、いわば乱暴な行き当りバツタリ式の捜査方法が一つ。もう一つは、確認と目撃者の信憑性を固めるために行われる場合で、ホシと目される者を多勢の中に混ぜておいて選び出させる訳だ。後者の場合には、ホシと思われる者に似た人間が望ましいことが屢々である。電話の要求はそれらしかった。

「何ですって？ ちょっと待って。えーと、年令は一見二十五、六才から卅位なのね。小柄の美人で髪は金髪系統ね。それじゃ、看護婦さん達を狩り集めても無理ねえ、ホホホ。私じゃどう？ え？ 背が高過ぎるだけが不合格だって？ ほかは合格なのね、ありがとう。さあて、うちにストックがあるかしら？ 多い方がいいのね、在庫調べて返事するわ」

面通しには原則として留置中の者は使わない。余程のことがない限り、未だ容疑者の段階である彼等の人權を尊重すると云う訳だ。サクラには警官がなり、それで間に合わねば少くとも起訴された被告人を使う。考え様によつては妙な話だ。

「え？ そんなに重大な事件なの？ うるさ方がカンでるのね。コンピエーヌにも口かけといった方がいいわよ」

ジョセフィーヌ補佐官は電話を切り、別の電話で女監の看守長を呼んだ。

「あ、これはちょっとまずいわ。これはどうかしらね」

ジョセフィーヌは、部下の選り出したリストの中から二人ばかりをハネた。経歴や身分を覗んで、うるさいのを落したのだ。榮進を望む身は、法の範圍とは云え種々の要因を考慮しなければならぬ。汚職やら風俗関係で、お偉方の令夫人や愛人が数名拘置中なのだった。

（あんな人達は早いこと保釈になって貰わないと気が疲れるわ。訳の分らない看守達と来たら、分別も見境いもなしなんだもの。はつきり云ってやる訳にも行かないし）

ジョセフィーヌは紫煙をくゆらせながら六名の女囚を選んで指圖書に署名した。ミシュリーヌは知る由もなかったが、其の発送品目リストには彼女も無論記載されて居た。

翌日の朝、六名の女囚は身検室に集められた。何れも小柄な金髪女、しかし病み上がりとは云えミシュリーヌが一番美しい。囚衣を

脱がされ身検が済むとシャワーを浴びせられた。髪を櫛けずることも許されて自分の衣服を着せられる。不安ながらもミシユリーヌは嬉しかったが、訳が分らなかった。素足に窄いたハイヒールによろけ乍ら横一列に並ばされ、片端から後手錠をかけられる。

(やはり、釈放されるんじゃないかね。)
当り前だよな)

万一の僥倖を希って居たミシユリーヌは、両手を背に回わして順番を待ちながら、少し上げた。

(どこへ連れて行かれるのか、教えて欲しいわ。訊ねて見ようかしら。摸られるだけね。まさか、こうして街なかを歩かされるんじゃない……)

其の屈辱を想って眼を閉じたミシユリーヌの右手首が強く握られた。急所を掴まれて、飛び上がる程に痛い。

「手を背から離してるものよ。これから気をおつけ。」

ガッチリとかけられた後手錠に、ミシユリーヌは心細くなって泣きたくなった。どうもがいても、手は完全に使えない。顔を掩うことも出来ないし、転んでも支えることも出来ないのだ。ロープが手錠に通されて、六名の

女囚は一列に繋ぎ合わされた。革ロープなら未だしもだが、灰色に汚れたロープで繋がれると、みじめさが一しおこたえる。女囚達は小雨降る獄庭で護送車に追い込まれた。北第一署の地下通路、留置場に隣る鉄格子仕切りの中のベンチに、女囚達はそのまま腰掛けて待たされた。小男の警部がそそくさとやって来て女囚達を眺め

「いやあ、結構結構。助かったよ。コンピエーヌは勿体つけて忌々しいからな。お嬢さんどうも済まんすな、面倒かけて。今、コーヒーでも運ばせますからね。」

護送して来た二人の婦人看守は所在なげに雑誌を眺め、やがて運ばれて来たコーヒーを啜る。

「いい匂いさせるわねえ。ちくしょう、とうとうこのままなのね。ああ、切ないこと。」

ミシユリーヌの隣の女が呟いて腕をもたえた。婦人看守達は雑誌を引張り合って笑い興じて居た。二人とも未だ若いし、多分俳優の写真でも載って居るのだろう。

「あたしジャネットよ。あんた何て云うの？ あら、大丈夫よ、気がつきやしないわよ。」

隣のジャネットは婦人看守の方を忌々しげに睨んでミシユリーヌに囁いた。どこから

聞えるのか、雨音がかなり強い。
「こんな後手カマされるのは、あのモイラが居るせいよ。あのひと、殺人なの。可愛想に未だ若いのに終身刑ね。」

とジャネットが顎で示した女は見た所二十三、四才、色白だが男まさりの顔をして睨を閉じて居た。

「あたし、母親どころかお祖母さんの代からの世襲業に精出してただけなのよ。それでもいけないんだって。ああ、鼻が痒いわ。後手錠てほんとに嫌いよ。」

ジャネットは顔をしかめて口をとがらせ、堪らなくなったのか上体を折って、チエックのスカートに鼻先をこすりつけた。婦人看守が眼を光らせ、ジャネットは暫く黙って居た。署の婦警が現われ、顔見知りらしく駄弁り初める。

「ちえッ、詰まらないことばかり話してるものねえ。全然センスはゼロ。あれじゃ殿方は捕まえられないわ。」

ジャネットが肩をそびやかして囁いた。

「あたしねえ、うちのひとが働くって云ったのに働かせてあげなかったの。だって、男に働かせるなんて最低だもん。けど、云う通りにさせときゃよかったのよ。男が遊んで暮し

てると言い抜け出来ないの。仕事してりゃ、亭主持ちの浮気になるんだって。ほんと、馬鹿にしてるわ。」

「ママは教えてくれなかったの？」

と隣りの女がからかう。

「あら、ママはね、とっても昔気質でお固いのよ。男に働かせる位なら舌を噛む方なの。勾留刑で済めばいいんだけど。罰金払う位ならムシヨへ行きたいわ。」

「御亭主大丈夫なの？」

「そ、そうなのよ。それが心配で身も細さるの。何しろエセル姐さんをさえウツトリさせちまう男前だもん。ああ、こんなこととしてられないわ。出たいわね、ほんとに。」

ジャネットは腰をよじって切ながり、婦人看守の一人が立ち上った。そして、いきなり女囚達の頬を撲りつけて回る。

「見てないと思って居眠りしたり交話したりして。ちゃんと分ってるのよッ。」

規則を守って居たミシュリーヌも撲られて口惜しかった。

(ひどいわ、口惜しい。ちゃんと規則を守ってるのに。でも、分って来たわ。首実験とか面通しとか云うのに使われるのね。けど、ずい分待たせること。腕がだるいわ)

ひるには用便だけは許されたが、食事は与えられずじまいだった。その時だけ外された片手は、顔をこする暇もなしにねじられて又も後手錠、女囚達が肩の苦しさに喘いで待ちくたびれた頃、目撃者の男女四名が漸く揃った。小柄な金髪女が後手錠姿で留置場の方から連れて来られ、ロープの端から二人目に繋がれた。

「さあ、お前達の出る幕が開いたよ。お待ち遠だったわね。」

「分ってるだろうけど、口を利いたり妙な素振りをする、革鞭一ダースに暗室二週間よ。さ、おいで。」

鉄格子の仕切りを抜けると、そのまま壇上へのスロープ、壇の後ろの壁には身長用のラインが何本も引かれ、一米下の前方の床には長椅子等がおかれてある。警視庁の面通し室は遙かに大きくて設備も届いて居るが、このステージは女囚七名が並ぶともう一杯、小学校の教室より狭い位だ。追い込まれて来た数珠繋ぎの女達を見て、三名の婦人がベンチで眉をひそめあった。一人は若く、二人は年配、独りだけの男は老人でステッキを膝に挟んで居る。

ミシュリーヌは首の折れるばかりに深々と

うなだれて並び立った。四名の男女は何れも富裕な階層の人達、女詐欺師にしてやられた連中だった。其の詐欺もその女の犯行に相違ないと当局では考えて追求するのだが、小柄な金髪の美人がドロを吐かないので此の仕儀と相成った次第だ。屈辱にかすむミシュリーヌの眼に、婦人達の大きな帽子が華やかに揺れる。

「さあ、よく御覧になって下さいよ。」

警部の言葉を待つまでもなく、四名の男女は好奇の眼で女囚達を眺め回した。

「これッ。顔をお上げ。まっすぐ立つのッ。」

婦人警官の叱責が主としてミシュリーヌに飛び、ミシュリーヌは必死に顔をあげた。集中する視線を浴びて忽ち首が垂れる。

「ちょっと、その女の顔をよく見せて下さいな。」

一きわ豪勢なミンクコートの女が若やいだ声で云い、駆け昇った婦人看守がミシュリーヌの金髪をグイと掴んで引き起した。

「何故眼をつぶるの？ あけてなさいッ。」

婦人看守はミシュリーヌの後手錠を乱暴に揺すぶって嗚りつける。拘置されて居る女囚が比の位の恥かしめを受けるのは当然だと云わんばかりの無慈悲さだ。

「此の女達の気持など、お考えになる必要はありませんからな。」

警部までが冷たくそう云い、被害者達はヒソヒソ囁き合つて互いに頷ぎいた。

「此奴等は皆、したたかなあばずればかりですよ。こらッ、後ろを向け。トットと向くんだッ。」

被害者達が首を捻ねるので、今度は横を向かされる。

「どうですかな。」

「いやあ、何分にも一年以上も前のことですからな、どうも……(化粧させなきや分るものか)」

ステッキの男は、犯人探しなどはどうでもいいと云う顔で眼を細め、女囚達の素足の鑑賞に余念がない。若い女性が薄暗い見物席から声をあげた。

「私は其の女だと思つて、右から三番目。涙流してる人よ。」

「これですね。」

ステージだけ明るい照明の上に、更に正面からのスポットライトが、ミシュリーヌの全身を照らした。

「髪を少しアップ気味にして見て下さいませんか？」

「そうですね。」

背後に寄つた婦人看守が、ミシュリーヌの金髪を持ち上げる。

「あッ、そ、そんな……私じゃありません。私はただ……。」

ミシュリーヌは身悶えて叫んだ。

「静かにおしッ。お前はおとなしく調べて頂いてりゃ、それでいいの。騒ぐと承知しないよッ。」

ミシュリーヌの頬に鳴つたビンタの音に、眉をひそめたのはステッキの老人だけだった。

「やっぱり少し違う様ねえ。」

若い女性が笑いながら云い、安堵の余りミシュリーヌは片膝をついてしまった。

(よかった。でも、われながら情けなくなるわ。調べて貰えばすぐ分ることなのに)

そうは思うものの、法の冷厳さに身を日夜曝らしておののいて居れば、卑屈になつてしまふのも無理はない。冷静に観察して居た二人の年配の女性は、やがて左から二番目と断定した。凶星だった。若い女性もステッキの男も同意して、警部は手をすり合わせ、詐欺女は肩をすくめて片眉をあげた。少しでもヤマを少くしようと思つたことだろうに、これ

で此の金髪女も一年は刑がふえることだろう。詐欺女は留置場へ曳かれ、用済みの女囚六名は追い立てられた。

(こんな目にも逢わされるのね。まるで品物同然だわ。囚人て本当に情けないものだこと。けど、此の人達、案外平気なのね)

やる方ない悲しみを噛みしめて、ミシュリーヌは肩で頬を押し拭いた。玄関の所でそれ違つた婦人警官が若々しい眉を微かにひそめ数珠繋ぎの女囚達を見やった。パトロールから戻つて来たのだろう、其の制服の外套が濡れて居た。

「あ、ちょっと待ってよ。」

声をかけた其の婦警はミシュリーヌの傍へ寄るとハンカチを取り出して、涙で汚れた顔を拭い、乱れた前髪を掻き撫でてくれた。最初はびっくりとたじろいだミシュリーヌも、すぐに其の暖かい思いやりを受け入れて涙ぐんだ。おののき打ちのめされて、みじめな日夜を過ごして来た女囚にとっては、ほんの僅かな慈悲が嬉しくて泣けて来る。

「あ、ありがとうございます。」

「ほら、又泣くのね。もう泣いちゃ駄目よ。」動き出すロープに横腹をこすられつつ又もしゃくり上げるミシュリーヌの眼前で、婦警

の外套が顔えって裏が見え、花文字のネームが眼に灼きついた。其の名はシュザンヌ…。姓は遂に読み取れなかった。囚衣に着替えて拘留所の独房へ戻されたミシュリーヌは、其の名と面影とを胸に刻みつつ手首を撫でるのだった。

マイヨール弁護士は一週間後に再びやって来た。頼んだ遺影と手帳も持って来て見せてくれた。眺めるミシュリーヌの眼に見る見る涙が溢れる。手にとってしみじみ見たかったが、それは許されることではない。

「これはあなたの領置品の中へ入れておきます。夏の衣類も許されるだけ持って来ておきました。ビビアンヌ嬢が選んでくれましたよ。」

（そう、夏の衣類も要るのね。夏になっても未だ自分の服なんかを着ることがあるのかしら。選んで下すったなんて。選ぶ程にありはしないのに）

「所で、来週の火曜に第一回の予審です。」

弁護士はそう告げて、ともすれば物思いに沈むミシュリーヌに、いろいろと心得を教えるのだった。ミシュリーヌはハツと思ひ当って訊ねた。

「判事さんのお名前を、もう一度おっしゃっ

て。」

「ヴォードレです。ロベルト・ヴォードレ。」
ミシュリーヌはホツとし、そして微かな失望をも感じた。

「クープドミル判事じゃないのね。」

「クープドミル？ ああ、彼なら去年転任しましたよ。ルーアンだったか、首席予審判事になって。知ってるんですな。」

ミシュリーヌは顔を伏せて微かにうなずいたのだった。

一月末の火曜の午後、ミシュリーヌは初めて予審庭へ曳かれた。

「予審判事の、第一印象と云うものは大切だよ。氣をつけた方がいいね。」

ともすれば遅れ勝ちのミシュリーヌを曳きながら、婦人看守は薄暗い地下通路で突慥貪に云った。或いは精一杯の親切なのかも知れない。

「はい。ありがとうございます。」

裁きの庭へ初めて臨むミシュリーヌは、お札を云いつつも緊張で胸が締めつけられる様だ。ミシュリーヌは両手を持ち上げて云った。緊張を紛らわせたかったのだ。

「これ、今までのよりもずい分と重いんですのね。鎖も短くて窮屈ですし。」

「そうよ。出廷の時には、それを使うことになってるの。」

手錠の革ロープを握る婦人看守はそう云って、髪にのせたトーク帽を斜めにかしげ直してピンで留め、肩に吊った黒革バッグを叩いた。

「嵌口具も足錠もあるのよ。おとなしくしなさい。あすこの鉄格子を出れば、お前の身柄は私の全責任なんだから。云うことときかないとひどいわよ。」

「は、はい。それは、もう……。」

鉄格子を何枚か潜って階段を昇ると法院の廊下だ。囚人の身には恨めしい娑婆の人々が多勢居る。絶え間なく行き来する男女は、公判庭の傍聴者や民事訴訟の人々だ。予審庭は特別の理由のない限り非公開だと云うことを弁護士から聞いて居たミシュリーヌは、早くそこへ行きたくて堪まらなかった。

「手をおろすのよッ。ちゃんと歩きなさい。」

荒々しく引きおろされる革ロープに手錠がガツと鳴り、ミシュリーヌの両手が顔から引き離された。

「でも……恥かしくって……お願い、隠させて下さいまし。」

「駄目。規則知ってるだろ？ 乳より上に手

を上げちゃいけないよ。そりゃ恥かしいだろうよ。けど、仕方ないじゃないの。身柄を拘束されてる被告人だもの。そんな甘いこと考えてると……。これッ、又手を持って行く。腰に縛りつけてしまふよ。」

規則を楯に、婦人看守は冷たく非情だ。通路の遠さが恨めしくて泣きたい程だった。

「七十八号ッ。いい加減におしッ。」

遠慮会釈なく大声で囚人番号を呶鳴られ、遠くの方の人々までが一斉に眼を注ぐ。深々と面を伏せたミシュリーヌは、腰までが次第に屈んで行った。肘までの囚衣は手錠を隠す術もなく、突き出した両手が胸のあたりで切なく震える。罪を犯して裁きを受ける身とは云え、どうしてこうも恥かしめられねばならないのだろうか。ミシュリーヌは死んで仕舞いたいとさえ思った。

（こんな恥かしい思いをすれば、もう罪を受けて償いを済ましたのも同じだわ。思い切り暴れて、此の看守さんに傷でも負わせたら殺してくれるかも……）

曲り角の所で、突き当りの大法廷の巨大な扉が開き、多勢の男女が溢れ出て来た。今終った公判に興奮した話し声が忽ち真正面から群れ迫る。息を呑み一瞬棒立ちになったミシ

ュリーヌは夢中で顔を掩った。

「あら、あれ女囚よ。未だ若いんじゃないかって？ 可愛想にねえ。」

眺めてそう云う女性は厚いコートの襟を掻き合わせ、連れの男を振り返った。ミシュリーヌの指の間から、羽根飾りのついた大きな帽子がちらと見える。

「このひと、これから公判？ 何をしたのかしらねえ。ついでに傍聴して行かない？」

「これは未だ予審廷行きだよ。囚衣を着せられてるものね。七十八号か。」

男は教えながら、女囚の体つきや素足のあたりを振り返ってまで眺めた。今度は身近かに中年夫婦連れの声。

「あんなに顔を隠して。恥かしいのね。むごいわ。」

「お前、そんなにじろじろ見るもんじゃないよ。」

恥かしさに頭は熱く燃えて息も出来ない心地ではあったが、人々の視線は囚衣を透して肌に針の如く突き刺さり、話し声は鋭く耳朶を貫ぬく。口では何だかだと云い乍ら、女囚を眺める人々の眼は恰かも捕えられた獣を見るその様、眉ひそめ合いつつも好奇心と優越感とを満足させて居るのだ。

「寒いね。震えてるわ。あれじゃ寒いわよねえ。」

ミシュリーヌの肩が腕が胸が、震えて居るのは寒いせいではなく、余りの屈辱のためなのだ。こみ上げる屈辱とみじめさは、やがて人々に対する怒りに変わり、全身の血も逆流するばかりの無念さに、寒さ等は感じないミシュリーヌだった。

（どうしてそんなに私のこと見るの？ 見世物じゃないの、見ないで頂戴ッ）

そう喚きかけたミシュリーヌは、革ロープをしたたかに引張られた。

「又、手を上げるッ。こっちへ曲るのよッ。」
なおも流れる人波の中で、ミシュリーヌは呻いてよろめいた。

「七十八号ッ。どうしても、云うことをきけないのね。」

曲った所で立ち止まった婦人看守は、バッグから革ベルトを取り出した。又も意地悪く大声張り上げて囚人番号を呼び、人々の流れの方に向けて女囚を立たせ、其の腰をくびつて後ろで締め上げる。

「あら、どうしたのかしら？ 腰を縛られてるわ。」

人々は、中には立ち止まってまで眺める。

「か、かんにんして……かんにんして下さいまし。」

「駄目。法廷規律を乱す被告人にはこうするしか仕方ないの。」

革ベルトの後ろ腰で錠がかかり、容赦なく顔から引きはがされた両手の手錠は、腰ベルトの前で錠金具にガチッと結合された。

「あ、あッ。」

身を折って悶えたミシュリーヌは、既に顔には指先すらも届かないのを知った。力任せに締めつけられたベルトが苦しい。

「お前みたい、恥かしがるのも珍らしいわね。少し頭がおかしいんじゃない？ さ、来るの。」

革ロープが強く引かれ、急所を掴まれた肘の痛みにミシュリーヌは呻いた。

（なにも、なにも……多勢の人の前で、こんなにしなくても。此のひとのこと、一生恨んでやるから）

やっと辿り着いた予審廷では、未だ誰かが調べられて居た。舌打ちした婦人看守が扉を開いて何か云い、隣りの執務室の扉で押問答を二言三言、そしてミシュリーヌは室の前のベンチで待たされることになった。

「裁判所の時刻ほどチャランポランなのは

ないよ。う、寒い。」

ぶつくさ云いつつ並んで腰掛けした婦人看守は革ロープを束ねて短く握り、時々横眼で自分の女囚を見やった。そう多くはないが、それでも絶えず通り、又もミシュリーヌは廊下で晒し者だ。身を固くしてうなだれて居た彼女は、少し人通りが途絶えて、ホッと体をゆるめた。腰ベルトに囚衣がたくれて気持悪く、ままならぬ手を精一杯にもがいて裾を引張る。

「ふん。何をおしゃれしてるの？ 寒いのかい。」

ミシュリーヌは唇を噛み、そして思い出した。

（あら、ここはジュリアンの室だったんじゃないかしら？ そうよ）

眼の前の重々しい二枚の扉、それは嘗て彼女がジュリアン・クープドミル判事を友人として訪れた室だった。あれから数年、囚衣はより恥しいものとなり、廊下の照明は一層明るくなって居る。

「口惜しそうな顔してるわね。私のこと恨めしいんだろ。恨んだっていいのよ。私は規則通りの仕事をしてるだけだからね。」

隣りの婦人看守は三つ四つ年上か、冷たく

そう云って襟のバッジをいじり、女囚は坐れば辛うじて届く指先で眼を押えた。扉が開いて、囚衣に手錠の男が連れ出されて来た。悪党面をした中年の男、ミシュリーヌを眺めてニヤリと笑った。連れ添った看守が婦人看守を見てホッとした色を浮べた。

「あ、君。ちょっとこれ頼むよ。急に腹が痛み出して。」

「あら、私だって連れてるのよ。それに、そんなのは荷が重いわ。」

「ほんの五、六分だけだよ。我慢できないんだ。なあに、お嬢さんなら大丈夫さ、頼むよ。」

「お下劣な理由ね。仕方ないわ。」

未亡人だかオールド・ミスだか、まあその辺の婦人看守は笑い乍ら男囚の革ロープを受け取った。若い男の看守はそそくさと消える。

「旦那。早いこと頼みますぜ。あんまりいいザマじゃねえですからな。」

男囚は看守を見送って情けなさそうに云った。

「スカートの旦那。腰掛けさせて下さいよ。」

そう云いながら照れ臭そうに顎を撫で、其の革ロープが揺れ動く。

「駄目ッ。立つといで。なんなら、そうね、床に坐ってもいいわ。」

きめつけられた男囚は肩をすくめ、前裾の上から腿を搔いた。未決囚は男も女も同じ囚衣だ。

「あんた、どこを見てるのッ。」

と婦人看守が忌々しげに叱りつける。男囚の視線は、婦人看守をそっちのけにして、薄い囚衣のミシュリーヌの体に吸い着いて居るのだ。

「じっとしてられないのね。」

いきなり立ち上った婦人看守は男囚の手錠を引き寄せるが早いか、手首の骨の上で両方一度に環を押えつけた。男は飛び上った。

「う、うッ。い、いてえ。」

「まだまだよ。」

今度は片方宛更にもう一穴、カチッと力任せに縮める。男囚は両手を突き出したまま苦痛に呻いた。

「そうしといたげればさ、余計なこと考えないで済むわ。ホホホ。」

笑った婦人看守は革ロープを握り直して腰をおろした。そして、意地悪く革ロープを振り動かし引きしゃくって男囚を痛める。

「うッ。こ、こりゃ……ひどいですぜ。あ、あ

んまりだ……」

男囚の額には脂汗が浮び、両手首から先の色が変わって来た。手首の骨の上に、金輪際弛まない鋼鉄環を締めつけられる苦痛がどんなものか、ミシュリーヌにもよく分って居た。

ひどいことをするものだ。

「旦那、旦那。スカートの旦那。か、かんべんしておくんない。何がお気に障ったのか知らねえけど……うッ……あッ……何も……。う、うッ、ゆ、ゆるめて下せえよ。も、もう骨が……」

「うるさいわね。」

又も革ロープが強く引かれ、男囚は悲鳴をあげて膝を落した。人々が笑い乍ら眺めて行く。

「せいぜい十分か十五分の辛抱よ。黙っといで。口利くと振り回すわよ。」

婦人看守は坐ったまま手を上げて男囚の頬を打ちつけた。此の男が手間取らせるものだから、寒い廊下で待たされてしまったのだ、と云う腹いせだ。男囚は遂には眼に涙さえ溢えて呻き、跪まずいたまま恨めしげに婦人看守を見て居た。

「やあ、どうもどうも。」

戻って来た看守は、苦笑いしながら革ロー

プを受け取り、鍵を取り出した。

「チョイ、痛められたな。ハハハ。」

「う、ふーッ。スカートの旦那は意地が悪くて敵いませんや。張り倒された方がよっぽどスカッとしませう。」

手錠をゆるめて貰った男囚は、婦人看守を横眼で睨んだ。

「当分、靴磨きは勘弁して下さいよ。綺麗にして差し上げられそうありませんや。こたえましたぜ、ほんとに。」

こぼし乍ら男囚は、又もミシュリーヌの体を眼で撫で回す。

婦人看守がミシュリーヌの革ロープを握り直して立ち上がり、年下の男性同僚の背へ媚びる様な声で云った。

「そうかい。ありがとう。そいつでコーヒーの熱いのを二、三杯行きや、治まるだろ。お嬢さんにつけてくよ。」

「あら、ホホホ。私の名も御存知ない癖に、さ、お立ち。」

ミシュリーヌは促がされて立ち上がり、重々しい扉を入った。マホガニーでこれも重々しく装われた室内は予審廷とは云えいかめしく、初めて裁きを受ける身として踏み入れる彼女の足は思わずすくむ。一段低くなった床

のベンチに腰掛けさせられ、其の腰ベルトを解いてやった婦人看守も並んで坐った。真正面の一段高い床に大きなデスク、横手にもデスクが並んで、応接間位の広さだ。若い女性が隣室から出て来て書記席に坐り、女囚を眺め乍ら書類をガサガサ云わせる。やがてヴォードレ判事も現われて正面に腰をおろし、女囚の手錠は漸く外された。婦人看守の方へ体をねじ向けて居たミシュリーヌが手首を撫でつつ向き直った時、ブランシェ検事も現われた。予審廷には検事は立ち会わなくてもいいのだが彼はやって来て冷笑を浮かべて居た。「被告人、立ちなさい。」

ヴォードレ判事が口を切り、人定訊問が始まった。判事は未だ若くて独身だった。富裕な令嬢との恋も、ここ二、三週間がヤマだった。学校の先輩であるブランシェ検事を意識しつつ、判事の思いはともすれば令嬢フロレンスとライバルの上に飛ぶのだった。

(独りだけの考えで、そんなことの出来る女には見えないがなあ。まあ、いいや。当人がそう主張してるんだからな)

判事の審問はともすれば、おざなりに流れた。今夕、フロレンス嬢と観劇の約束があるのだ。そして、ミシュリーヌは化粧もなくや

つれて居た。其の女囚姿の底から彼女の心身の美しさを見出すことは、若い判事には少し無理だった。

「本日はこれまで。次回は、えーと、二月十五日。変更するかも知れないがね。」

判事と検事は姿を消し、婦人書記は机上を片付け、そして女囚ミシュリーヌは冷たい手錠を両手に受けた。

(今日一日で済ませてくれたらいいのに。又こんな姿で連れられて来るのね)

婦人書記はファイルを抱えて立ち上がり、腰を革ベルトでくびられる女囚を無表情に眺めて去って行った。

「もう、それは勘忍して下さいませんか？ 決してもう、手を上げませんから、お願い。」

「お黙りッ。信用できないよ。」

婦人看守は容赦なく革ベルトの尾錠を強く締めつけ、女囚の肩を手荒く押して向き直らせ、手錠をそれに短かく繋ぎ、縛しめ終えた自分の女囚の全身を上から下まで鋭く見てから革ロープを引張った。退出時刻が近い法院の廊下は一きわ人通りが多く、ミシュリーヌは一刻も早く人々の眼襖から迷れようと足を早めた。

「何を又、そんなに急いで歩くの？ 歩き難

いだろうに無理しなくていいわよ。独房へ帰って坐るだけじゃないのさ」

婦人看守は革ロープを女囚の背後で握って引き留める様にし、嘲けりをこめて云うのだった。ミシュリーヌには、彼女がわざとゆっくり歩いて居るのだと思えなかった。「お前の弁護士さん、どうしたの？ 来てなかったわね。」

最初の鉄格子を潜ってホッとした女囚に、婦人看守がからかう様に云った。

(あら、そう云えばそうね。何故かしら。何だか、検事局の時と同じみたいだったわ)

「予審廷には出る必要はなくてよ。けど、大抵なら来るわね。どうせ、官選なんだから」「あら、官選なんじやありませんことよ。マヨール様ですの。でも、お忙がいんでしょ、きつと。」

ミシュリーヌは肩を上げて云った。(でも、いらして下さったらいいのに。けれど、私お礼だって差し上げられないんですものね。ぜいたくは云えないわ)

淋しくそう思って諦めたミシュリーヌだったが、ジュエールのために失い果ててしまった財産が、今初めて痛切に心の底から惜しまれて来るのだった。

(未完)

【新版】 女体緊縛コレクト・フォト集

E組百花選

大手札印画紙(9×13寸) 焼付

各組一枚一組(送料共)

一組一枚	一五〇円
五組五枚	五〇〇円
十組十枚	九〇〇円
二十組二十枚	一七〇〇円
三十組三十枚	二五〇〇円
四十組四十枚	三二〇〇円
五十組五十枚	四〇〇〇円
六十組六十枚	四七〇〇円
七十組七十枚	五四〇〇円
八十組八十枚	六〇〇〇円
九十組九十枚	六五〇〇円
百組百枚	七〇〇〇円

E 1	全裸の悦虐プレイ(愛川)
E 2	仕置を受ける裸身(大塚)
E 3	荒縄に苦悶する肌(愛川)
E 4	ムチに耐える美肌(関谷)
E 5	豊臀と豊胸しほり(愛川)
E 6	捨身の後手観念像(大塚)
E 7	足から眺めた裸身(水本)
E 8	全裸エビ責尻強調(関谷)
E 9	ハリツケられた娘(大塚)
E 10	強烈後手高小手(愛川)
E 11	責め抜かれた疲労(梨花)
E 12	逆エビにもだえる(大塚)

E 13	拘禁された美囚女(大塚)
E 14	浴室に覗く股間縛(愛川)
E 15	海老責に泣く足首(大塚)
E 16	乳房強烈締めつけ(愛川)
E 17	牢獄で泣く縛り娘(大塚)
E 18	美しき全裸股間縛(大塚)
E 19	全身に溢れるマゾ(関谷)
E 20	ベッドにもだえる(関谷)
E 21	身体中に強烈な縄(愛川)
E 22	放置された海老責(東浦)
E 23	ゴム衣で縛られる(東浦)
E 24	ローソクで責める(大塚)
E 25	寝台の排便ポーズ(絹川)
E 26	足指先に漂う媚態(関谷)
E 27	後手吊り正面裸像(関谷)
E 28	嚴重な高小手縛(東浦)
E 29	女体の全部を晒す(愛川)
E 30	激しいムチ打の果(関谷)
E 31	若肌も縄にくびれ(東浦)
E 32	投げ出した脚線美(絹川)
E 33	臍中心の腹部緊縛(梨花)
E 34	セーラー服の哀歓(梨花)
E 35	赤いムチ痕の臀部(関谷)
E 36	仰向けの囚衣の女(梨花)
E 37	制服の女学生縛り(梨花)
E 38	悦虐にむせぶ若妻(関谷)

E 39	痛打にくねる裸身(関谷)
E 40	乳房に加える金具(大塚)
E 41	鼻責めにあえぐ顔(大塚)
E 42	あぐら縛りを拒む(大塚)
E 43	浣腸ポーズの裸身(梨花)
E 44	激烈なエビ責苦悶(大塚)
E 45	敷布の上のびて(絹川)
E 46	鼻いじめのアップ(梨花)
E 47	柔肌に喰込む麻縄(東浦)
E 48	縄にくびれる裸身(東浦)
E 49	椅子に晒された女(大塚)
E 50	臍そうじをされる(大塚)
E 51	荒縄のトゲに狂う(絹川)
E 52	火のついた煙草責(四方)
E 53	踏みつけられた胸(梨花)
E 54	裸身をゆだねた娘(大塚)
E 55	手足猪吊りの美態(絹川)
E 56	囚女の美しき緊縛(絹川)
E 57	諦めた観念全裸像(水本)
E 58	縄にもだえぬく姿(絹川)
E 59	黒髪を吊られた女(大塚)
E 60	女奴隷美しく悶ゆ(絹川)
E 61	袋の中の緊縛裸身(竹本)
E 62	ビニール袋に蒸す(竹本)
E 63	亀甲型の雁字搦目(大塚)
E 64	緊縛裸像の舞踏会(絹川)
E 65	野外の後手宙吊り(梨花)
E 66	足首に鎖錠実施中(四方)
E 67	室内の後手宙吊り(梨花)
E 68	雨装束の悦虐姿態(梨花)
E 69	乳房いじめ踏つけ(大塚)

E 70	足の裏ハネ操り責(梨花)
E 71	乳首プライヤ挟み(竹本)
E 72	野外の逆さ吊り責(梨花)
E 73	梯子責にあう美女(梨花)
E 74	逆さ吊りに揺れる(梨花)
E 75	娘十六しほり加減(花坂)
E 76	踏みにじられた顔(大塚)
E 77	逆エビニ反る足先(大塚)
E 78	両手吊りのお仕置(絹川)
E 79	責折檻に呻く若妻(梨花)
E 80	豊麗を誇る正面像(大塚)
E 81	食卓上の縛り人形(大塚)
E 82	むしられる下着(大塚)
E 83	月経帯の羞恥縛り(梨花)
E 84	寝台上的の若妻狂態(関谷)
E 85	強烈全裸エビ縛り(東浦)
E 86	禪姿後手縛り吊り(東浦)
E 87	後手縛豊満臀部晒(関谷)
E 88	黒髪いじめ凌辱図(大塚)
E 89	令嬢後手高小手(絹川)
E 90	臍部乳房強調緊縛(東浦)
E 91	責衣にくるまれて(東浦)
E 92	全裸逆エビ責め(水本)
E 93	ローソク乳首ゼメ(梨花)
E 94	全裸後手縛り閨晒(関谷)
E 95	強打全裸のあえぎ(関谷)
E 96	肉体美の責衣ゼメ(東浦)
E 97	バンド二ツ折縛り(梨花)
E 98	全裸正坐縛り猿轡(関谷)
E 99	豆しほりの猿轡(絹川)
E 100	強烈縛り臍いじめ(東浦)

第三の手紙

(輪島実子さん)

S
M
レ
タ
ー

佐 仲 晴 成

S M レ タ ー

私が現在住んでいるこのマンモス団地は、約三千世帯、一万人弱を容るといわれる。刑務所の独房を連想させる単身者住宅、人生のママゴト用の新婚向住宅、ヒトデの怪物を思わせるような星型住宅、それらのコンクリートの巨大な塊の中にひしめく人間の群、その中には、対象を得られずモンモンと毎日を悩み暮すマゾの女性だっているであろうし、マンネリを打破するため外部からのアブノーマルな刺激の協力者を求めている夫婦だっているだろう。

私に、これらの人々を探知出来る触角があ

れば丹念に一軒一軒を探し歩き、御交情のきっかけを得たいと思っているが残念ながら、そのように便利な武器の持ち合わせがない。だから私は、相手が男であると女であると、又は、独身であると既婚者であるとを問わず、友人が出来るたびに、それとなく会話の中に工夫を凝らし、相手を探知することをおこたらない。

例えば、相手が独身の女性であると、自分がサディストであることを会話の一部分ではめかして、相手の反応を見てみるし、又、夫婦二人と話す場合は、その夫婦の傾向を言

葉の端に探り出し、私が、危険でなく、しかも彼等の都合のよい時に、望む方法で利用出来る便利な刺戟の協力者であることを、それとなく暗示する。その夫婦に露出癖があるなと思えば、

「夫婦生活のオブザーバーなんていうのも面白いでしょうね。」

と水に向けてみる。このようにして、私は所々方々に信号を送って、その反応を毎日毎日期待に胸をふくらせて待っている。自然科学を専門とする一部の学者が、色々なテストを無作為にくり返し、そのうちのどれかが当

るだろうと期待する、あの心理に似ている。下手な鉄砲も数打てば当たる式である。毎日、役所からアパートに帰ってくると、まず郵便受を開けてみる。送った信号の反応があったかも知れないという期待が、そうさせるのである。

お互いの会話の時には、たしかな反応を私の触角に伝えたかのように思われる人は何人か、或いは何組かあったが、いっこうに連絡は来ない。相手にとっても、私が本気でいつているのか、冗談をいつているのか、はつきりしない不安もあるだろうし、それに、何といても、やはり

(そういうことは異常なのだ)

という心の躊躇があるのだろう。

どうも、ノーマルとは、自分の心の中で、こうしたい、或いは、こうあるべきだという感情をおさえて、誰もが、こうするのだからそうするのが正しいのだといういつの間にか自分が知らないどこかで定められたルールに従うことを指すらしい。

これは、私に言わせると、人間が共同生活のうえでは附和雷同的な本質を持つためそうなるのであって、たまさか革新的な意見を述べたり、個性的な行動をとったりすると、

「あいつは、異常だ。」

ときめつけ、自分が他の人から、同じように(異常)と思われなかったために、心では不満をもっている、多くの人が集まっている群の中に逃げ込もうとする。

私は、こう考えている。いわゆる正常という観念は一つの流行みたいなもので、それは吾々個人がその個性にマッチするように割り出したものではなく、国の方針とか、地域の慣習とか、マスコミの影響とかによって割り出されてゆく。もっと直接的に言えば、それらを己れの都合に利するための一部の人々の手によって創り出されて行くのである。流行について一つの例をあげると、私は昼休みの時間などは外に出てラケットを素振っている関係上、細いズボンではすぐに股のところから破れてしまうから望ましくないのだが、太いズボンはどこを探しても街では売っていないし、又仕立屋にたのんでも心持ち太目にしてくるだけで、私の望む太さには絶対にしてくれない。ズボンは私がかくのかかわらず私の生活に合わないものを強制されている。私が今、十年前に流行したようなダブダブのズボンが私の生活に適應しているからといって、それをはいていたら、恐らく街中の

人がふり返ってみるだろうし、私の肉親からも、上役や同僚からも、恋人からも、皆が、よってたかつてそのズボンをぬがしてしまうに違いない。だから、私は、やむを得ず、この不便な細いズボンを心ならずもはき、いつも股の所から、ピリッと破れないかを心配しながら昼休みの運動をやっている。又、街を歩く女性の靴は、急に先がとがっているため、よく満員電車の中で脛をけとばされ、苦痛に顔をゆがめている可弱き男性を見かける。あれが満員電車の痴漢ゆけにデザインされたのなら傑作であるが、どうもそうではないらしい。女性の大きな足を、あの細く窮屈な牛皮の中に無理に押し込めているのだから足にとっては迷惑この上ないだろう。本人だって内心痛いだろうし、歩きにくいだろうに、やはり皆がそのような靴をはいているからやむを得ず、あの魔法使いの靴で満足せざるを得ないのだろう。では、一体誰が本当に満足しているのだろうか。それは、ズボンや靴のメーカーであり、デザイナーであり、その他、その流行によって利益を得ている人々である。大衆は、それらの人々の利益のために、あやつられ、躍らされているガラタ人形なのである。私達の生活の中には、ある一

部の人々が自分の利益のために作りだした流行の枠がはめられ、強制されている。

正常か異常かの考え方も同じことで、その国、その時代、その民族を支配する一部の人達の手によってその利益の上にたって判断の基準が作られる。だから、Aという国で正常とされていることがBという国では異常とされる場合があるし、同じAという国においてさえ、昨日まではそうあるべきとされていたことが、何かの都合で今日からは、そうあってはならないと書き改められることがしばしばである。現代史の中での日本を例にとっても、戦前、戦中、戦後、そして現在と、その都度道德の基準が塗りかえられたことにあらためてびっくりする位である。かくも、世の道德とか正義とか正常とかという熟語の解釈は頼りなく軽薄なものである。これにこだわって自分の心を偽って生きることがいかに馬鹿らしいことか。

人生六十年、何をくよくよとつまらぬ世間の目に気をつかい、気がねして生きる必要があるうか。

私は、周囲が何と言おうと、どのようにさげすもうと、それが法律で許される範囲であれば、自分の心に忠実に生きたいと思ってい

る。生きて二度と帰れぬ人生だけに、私は、私の日々の生活の充実をどのように作っていくべきかを真剣に考え、その実現に積極的に行動したい。とは言っても、相手がなければSMの楽しみは得れないし、その人々に対してまで私の厚かましい人生観を望むことは無理というものであろう。

だから、私は、自分の方から積極的に「私はサディストです。私はSMプレイの相手を求めています。」

と広告して歩き、相手が出易いような状態を作ることには心をくだしている。そして、その努力が昨年の暮に結実したのである。師走もなかば近いある日、私の郵便受の中で、切手を貼付していない女性名の封筒が私の帰りを待っていたのである。

――・――・――

佐仲 様

実は私、貴方のお名前は二年ほど前から存じ上げておりました。古い奇譚クラブの読者通信欄で貴方が同じ団地にお住いのかたと知って、よほどお便りをさし上げようかと何度かペンをとりましたけど、貴方がどのようなかたか解らないし、マソ傾向の女性をというお求めからしましても、縛られることが必ず

あるのでしようし、そうならもう身動きが出来ませんのですから、どんなことをされるか解りませんし、本当に信頼出来るかたかどうかを知りたかったのです。でも、貴方は単身者住宅にお住いの方ですし、おたずねする勇気もなく躊躇しておりました。もう、長い間、男の人にふれたことがないので、臆病になっているのです。

この前の日曜日に、近所の奥さんと市場からの帰りの道で話している時、その奥さんが貴方のことを噂されたのです。初めは貴方のこととは思いませんでしたけど、お名前をおうかがいしたら佐仲さんだというでしょう。私びっくりしました。何でも、御主人が貴方とお友達とかでよく貴方のことを御存知でした。その奥さんの話によりますと、

「決して悪い人やないし、信頼出来るそうやし遊びの方法かて、わてら夫婦の立場や希望を主体にする言うてはるし、興味深々やけど、やっぱり、いざとなると恐いよってな、うっとは面白いから一度やってみよういうて、えらい乗り気やけどね。」

と笑っておいでになりました。それから、二人で貴方の顔を見に行こうということになり、わざわざ単身者住宅の中のテニスコート

まで見に行きましたのよ。

奥さんが貴方の方に向って一寸手を上げられて合図をなさると、コートの中で貴方はペコリと頭を下げましたね。その時奥さんと一緒に居たのが私です。といっても覚えては居られないでしょうけど。まだ、お話もしていないのに、こんなことを言ったらおこられるかも知れませんが、私、あの時貴方のこと、子供みたいに無邪気な人だなあと考えたのよ。貴方がサディストだなんて、今でも信じられないくらいです。貴方となら、ぜひ御交際してみたいの。

お返事、心からお待ちしております。

それから、悪いけど封筒の差出人は女性名にして出してね。何なら、梨花啓子とでもしていただけないかしら、梨花さん、大塚さんには無断で悪いけど……。

御無理なお願いで申し訳ありません。

輪島 実子

――・――・――

お手紙拝見しました。

同じ十三団地にお住いのようで、びっくりしております。お手紙によりますと、テニスコートまでお出になられたとのことですが、何分、私記憶力が悪く、恐縮ですがお顔を思

い出せません。

世の中は、広いようで狭いものですね。この同じ団地の中に同じ奇譚クラブの愛読者が居られようなんて、なんと素晴らしいことでしょう。もし、お許しただけですなら、長い期間を通じて（貴女が私を嫌悪されない限り生涯を通じてでも）御交際をお願い出来ますなら、これからの長い人生を、どんなに楽しく夢多いものとする事が出来ることでしょう。

私の呼びかけを奇譚クラブの読者通信欄に御掲載いただいたから、もう四年を過ぎました。まったく早いものだと思えます。

「お互いの人格と意志を尊重し、お互いの社会生活と私生活を侵さないという前提での御交際……」

今こうして読み返してみますと、表現がくどいしキザな感じがしますが、その考えは現在でも変わっておりません。要するに、お互いに迷惑をかけあわないようにプレイはあくまでも遊びに過ぎないと割り切って、普通の生活とは切り離して行こうという考え方なのです。

私は、いわゆるサディストなのですが、サ

ディストであると同時にフェミニストでもあると自負しております。サディストとフェミニストとは一見矛盾するかのようにはみえますが、それはサディストに対する一般のかたがたの理解が浅く狭いため、そのように感じるものであって、私のように一つの心の中にサディストとフェミニストとが同居することのほうが、むしろ自然ではないだろうかとは考えております。

自分のサディズムを受け入れ満足を与えてくれる数少ないマソの女性の中から、その一人を得られたことを思うと、その心と肉体を宝石の如く大切に扱いたいと思うのが人情でしょう。ですから私は御交際いただく場合には、お許しの範囲と御要望をあらかじめお聞きして、それを尊重してプレイを行いたいと思っております。

幸いにして、御交際いただけるという嬉しいお手紙をいただいておりますので、どの程度までお許しただけですかを、お教え下さいますようお願い申し上げます。

なお、封書の裏書きは御指示どおり梨花啓子とさせていただきます。

御返事をお待ちしております。

佐仲 晴成

輪島実子 様

昨日の雨もからりと晴れて、今日の日曜日は大変よいお天気となりました。

お便りはしたものの御返事いただけるかどうかと不安でした。それが、昨日手にいたしました嬉しく拝見させていただきました。

この手紙の返事を、貴方の郵便受に入れに行くときは、なるべく今日の午後からにします。なぜって、そうすれば、郵便受に入れるとき貴方の元気な姿を、きっとコートで見ることが出来るだろうと思うからです。

とっても世の中が楽しいものに思われてきました。でもね、私びっくりしましたのよ。

貴方って、ずいぶん、はっきりと物事をお考えになるかたなのね。それに、どこまで許すかという恥しいことを女の私の口から言わせるつもりなの？。

いずれ、お逢いしてから、色々お話ししてみても、始めて、どこまでお互いに許し合えるか解るのではないのかしら、貴方だって私の顔を知らないのでしょうか。誰でもという訳にはいかないのじゃないのかしら。それともマソの女だったら、誰でもいいというのかしら。そうだったら、私交際はお断りしてよ。

そんな不潔なのいやよ。

でもね、私のようなおばあちゃんでも宜敷ければ、私は貴方に好感を持っていますのでよろこんで御交際をお受けします。一度お逢いして色々お話ししたいのですけど、同じ団地では何かと近所の口もうるさいので、出来れば梅田あたりでお逢いしたいのです。御迷惑かしら。

それからね、もし、私が貴方に好意以上のものをもつようになった場合、貴方から離れられなくなるかも知れなくてよ。その時になって、私の肉体だけをもて遊んでおいて、ハイさようならなんてことをしたらただではおかしいわよ。

貴方には、親兄弟はありますか。何故單身者住宅に一人で住んで居られますの？。お仕事はどんなことでしょうか。教えて下さいね。

甘い夢を再びもって、人生を楽しめるものに出れば、こんな嬉しいことはありません。何日頃お逢いするのがいいかは貴方におまかせします。

晴成 様

実子

御返事が遅れ恐縮です。

先週は東京へ出張していたものですから。帰ってお手紙をいただいていることを知り、あわててペンをとった次第です。

私、一人で生活しているせいでしょ。木枯し吹く今日などは、むしろ人に恋しい気持ちにかられます。貴女と御交際いただけるようになったら、プレイの時はマソの女性として加虐の対象に、又、プレイを離れた時は優しいお姉さんとして甘えられる楽しみを夢みております。——自分勝手なことばかりで恐縮ですけど——。

何故、單身者住宅に一人で住んでいるのかという御質問でした。

私の初めの手紙で、説明が足りず、すみませんでした。私は郷里は九州ですが、大阪に就職したため、しばらくは姉の家に居候していました。でも余り長い期間居候しているのは姉夫婦への御迷惑もありますし、私自身も本意ではありませんでしたので、五年程前にこの府営單身者住宅に入れてもらったのです。職業は地方公務員です。ですから安月給取りでヤボな男です。

日曜日であれば、御存知のように朝早くからコートに出て、一日中テニスをしているく

らい閑をもて余しています。

貴女の御都合のよい日時と場所を御指定下されば、御指示に従がいお待ち申しております。その時、私にも解るよう目じるしをおつけ下さるか、あるいは、私をよく御存知のようですので恐縮ですが貴女からお声をおかけ下さるか、いずれかの方法をお取りいただけますよう。

御返事が遅れましたこと、重ねてお詫び申し上げます。

晴 成

実子 様

――・――・――

今日この頃の寒さは本格的な冬の訪れも間近に思われる程ですね。

今日か明日かと大変お待ちいたしました。

ともすればただけじゃないかとも思っています。私の齢が齢ですのね。何故早く下さらなかったの……意地悪ね。

でも、東京へ御出張中なら仕方ないわね。

今度の土曜日には丁度子供が二人とも山に登りに行くと言っていますので都合がいいのです。その日は出来ればどこかホテルにでも御一緒にしたいのですが、私のような、おばあちゃんと梅田のにぎやかな所を歩くの御迷惑

するのじゃないの。遊びに行くの止めようかとも思いましたが、やっぱり逢いたくて、お逢いする事にきめたわ。貴方ならよく存じ上げておりますし、安心だから……。

でも、余りひどいことをしないでね。私って、とても臆病なのよ。痛がりの恐わがりなの。そのくせ、男の人に縛られ、鞭打たれ、体のすみずみまで無茶苦茶にいじりまわされたりされたいという欲望が体をかけめぐって自分でもおさえきれないような狂おしい気持ちになることがあります。私って変態なのかなあと心配になることがあります。この前も貴方が半パンツでテニスをしている時の足を見ているうちに、あの毛がもじゃもじゃとえている足で私の首をはさんでしめつけてもらったかと思っているうちに何だか家に帰りたくないような体の状態になり、本当に困りました。

土曜日は私も半日ですので、二時に大阪駅の東改札口に行きます。

恥しいのですが、お逢いしたらすぐばれまので、私の生年月日、お知らせしておきます。おばあちゃんなので、びっくりなさらないようにね。大正十一年三月八日生れ、四十才ですよ、びっくりなさったでしょう。

こんなおばあちゃんでごめんさいね。実を申せば、私は二十才の時結婚し、二十五才で、ある事情から夫と別れました。それから十五年というものは、二人の子供をかかえて女手一つで大きくしてきました。今はもう二人ともいい若い衆になり、よく働いてくれますし、それにとっても親思いで、(もう充分働いたから遊んで余生を楽しみなさい)と言ってくれます。でも、遊んでいても退屈だし急に心の張りをなくしたら体のためにもよくないと思い、近くの織物工場に小使いかせぎに行っていますのよ。

何んの楽しみもない今日、貴方とのことが私の唯一の生きる楽しみにつながるような気がいたします。

土曜日、二時に、きつとね、スッポ抜かすとしようちしないから。

実子

晴 成 様

――・――・――

約束の時間は二時であったが、一時半には大阪駅で待っているようにと朝起きた時は一応の予定は樹てたのであるが、ツイテナイ時というものは仕方のないもので、役所に出てみると、係長が「待っていた」と言わんばかりに

「佐仲君」

とにこやかな顔をして名前を呼んだ。その時私はとても嫌な予感がした。長年サラリーマンをやっているため自然に訓練された直感である。

「まあ、一服してからでいいのやけどなあ。」
と一丁度一言言葉を切る、どうもイヤな感じである。

「この仕事な、実はぜひとも今日中に仕上げなならんや、今日の五時からの課長会議の資料や、急にいうて悪いけど、僕も今朝課長から言われたのや、なあ頼むわ、この係で仕事を頼み易いのは君だけや、僕の面子を立てると思ってやってんか、勿論僕も一緒にやるよって、手伝ってもらえたら有難いんや。」

とおだてられているのか、なめられているのか、はつきりしないけど、多分その両方の含みがあるような頼み方をされ、内心はいささかムツとしたが、根が『馬鹿』という頭文字がつくほどお人好しな私は、係長の下げている頭の禿が見えた時、ふと自分の親父を思い出したのがどうもまずかった。

（彼も、きつと上役に急に命令されて困っているのだろう。この齡をして、やっと係長になって、その上自分の部下に頭を下げる気持

てどんなだろう。ほかの若い連中は、皆この定年を目前にひかえた万年係長を軽視しているし、心の中ではきつとたまらないほどつらいのに違いない。）

と思ってしまうたのだから、ますますずい。

「喜んで、やらさせていただきます。」

と、引き受けなくてもいい余分の仕事を、エエカッコして引き受けてしまった。

係長の指示に従って、二人で資料の原案作成にとりかかったが、それがまた予想していたよりも難儀な仕事で、量こそ少なかったが内容が複雑でなかなかまとまらない。やっとまがりなりにも内容をまとめたのが十二時近くである。その原案を係長が課長の所に持って行き課長が手を加え、再び私の所にもどってきたのが十二時過ぎである。

「佐仲君、おおきに、おおきに、ここまで来たら、もうあとはガリ版で印刷するだけや、一緒に食事でもして、それからどうや。」

と係長は、自分のとほしい懷をさいて、せい一杯の好意をこのお人好の部下に示したかったらしいが、こっちはそうはいかない。ここから梅田まで、どう値切ってみても一時間は充分かかる。約束の二時までには、何が何

でも大阪駅にかけ込まなければならない。

（まあ、一時までやれるところまでやって、残った分は気の毒だけど係長に押しつけて帰ってやれ、その時は、その時や。）

と決心した私は、

「いいえ、今丁度エンジンがうまくわいにかかっていますし、ついでもありませんのでこのまま続けます。係長はどうぞ御遠慮なさらないで食事に行つて来て下さい。」

と一丁度ガリ版と取りくみ出した。気の弱いこの係長にしてみれば、部下に仕事を押しつけて自分だけが『めし』を食うに行く気になれないのだろう。ガリ版用の修正液をどこからか探して来て私の机の上においたり、膳写板インクのカンの蓋をナイフでこじあけたら、更紙の枚数を数えたりしている。そうなることこちも一時を過ぎたら押しつけて逃げようという気持がぐらつき出す。やけくそも半分手伝って、無茶苦茶に馬力を上げた。人間、やる気になったら、大抵のことはやれるものだということを、この時ほど痛感したことはなかった。二時間はたっぷりかかると予想していたガリ版での原紙切りが約五十分ほどですんでしまったのである。勿論字はお世辞にもきれいとはいいいがたかったけど、十分

読めるように楷書に近い書体で書き上げたのである。ただ原紙の罫目に一つ一つがきちん

と入れていないのは、押しつけたために恋人と仲たがひしたら本当にすまんよってな、無理言うたな、本当にす

まなんだなあ、後は印刷するだけやさかい簡単に、とおおきに、とおおきに。」

なぐり書きの結果であるから、いたしかたない。おかげで人差し指が熱っぽく一寸痛みを感じるほどであった。

「係長、すみませんけど、実は恋人を大阪駅に待たしていますので印刷まではお手伝い出来ませんけど、これでもかんにんしていただけないでしょうか。」

と言うと、

「おおきに、おおきに無理言うてすまなんだなあ、約束の時間で何時や、そうか二時か、恋人によろしう言うてや、何なら僕の名刺に遅れた理由を書いて君にわたそうか、こんなつまらない仕事を君に



と言って彼は私の方に手

をさしのべた。そのカサカサした骨っぽい手を私が強く握ったとき、彼の眼に涙がたまっていた。恋人とのデートに遅れるだろうことを知りながら、嫌な顔もせず自分の仕事をやってくれた部下の心が嬉しかったのだろう。私はこれでよかったと思った。もしも、そのために時間に遅れ彼女の信頼を得れず、彼女との交情を持てなかったとしても、

例えそのために彼女から軽蔑されたとしても私には悔いはないと思った。男と男の心に通い合う相互信頼の純粹さは、虐めたい、或いは虐められたいという自己中心的なSMの不純さを基礎とした相互信頼なんか比較にならないほどの価値が

ある。それでも、私は、地下鉄の駅まで一生懸命に走った。地下鉄の電車の中でさえ走りたい位の気持だった。

大阪駅に着いたのは、二時十分過ぎであった。

土曜の午後の大阪駅はラッシュの最中で、人又人の混雑ぶりである。

心ではイライラしていても、それらの人波を突きつけて走るわけにはいかない。結局東改札口に着いたのは二時を十五分も過ぎていた。指定された時計の下に立ってみたけど誰も声をかけない。しかし、一応二時半まで待ってみようと思い、ポーと口を開けて人の波を見ていたところ、ポンと後から肩をたたかれた。

びっくりしてふり向いたら、そこに質素な和服の女性がにこやかに笑っている。美人ではないが好感のもてる顔である。手紙には、四十一才とあったが見たところ四十三か四に見える。きっと、子供二人を育てる苦勞が老けさせたのであろう。この寒いのに鼻の頭に汗をためている。よほど急いで走ってきたのに違いない。

「待った？」

少し低く、かすれかげんの声である。急い

できたせいで息が切れているのかも知れないが、もしこれで年が若ければ、ハスキーボイスとでもいえば、ぴったりする。

「いいえ。」

「ごめんなさいね、会社から一度家に帰って着がえてきたのよ、それで遅くなっちゃって……」

「いいえ、僕だって、ついさっき着いたところです。どこか喫茶店で一寸休んでいきませんか。」

「ええ、いいわ、喫茶店に男の人と入るなんて初めてやわ。」

と彼女は子供っぽく笑った。私はその時ふと(可愛いなあ)と思った。

大阪駅東口のS喫茶に入って、彼女の希望であるコーヒーと私のためのミックスジュースをウェイトレスに告げて、一番奥まった席に座った。ウェイトレスが品物を持って来る間手持ぶさたの私は、何気なく彼女の顔を見ていた。

「いややわ、恥しいわ、そんなに見んといえずいぶんなしわでしょう。」

「いいえ、とってもチャーミングな鼻をしていますね。」

事実、彼女の鼻はとても可愛いかった。余

り高くない、というよりもむしろ、いわゆるダンゴ鼻に近い。心持ち鼻翼が横にはって、先が円い鼻なのである。伊吹真佐子嬢によく似た顔立ちである。そのことが私の心にこよなく満足を与えた。

伊吹嬢といえば奇クのオールドファンならよく御存知のように、奇クに一時代を画した人である。奇クが今日の繁栄を築き得たのは、勿論のこと編集部のかたや写真担当のかた、販売にたずさわっているかた、そして財政面からの努力をされたかた、それら多くの人達の努力のたまものであることは言を待たない。しかし、現在の奇クを築く過程での伊吹さんの役割が大きく影響したといった言い過ぎであろうか。伊吹さんの写真が掲載されているから買うのだという人が案外多かったのではないだろうか。私もその一人である。

たしか、昭和二十九年頃から三十三年位までは彼女の独舞台であったように記憶している。私も当時は熱烈な伊吹ファンで、一度でもいいから実物にふれたいと思いつめていたものである。もし、魔法使いが現れて、「山本富士子と伊吹真佐子のうちどちらかを前前の自由にさせる。」

と言ったとしたら、私は躊躇なく伊吹さんを選んだであろう。当時伊吹さんに熱くなっていた私にとって、山本富士子なんかと比較になろうはずがなかった。その伊吹さんも年齢には勝てなかったであろう。若く美しい絹川さんや大塚さんが段々とグラビヤをにぎわすようになってから、いつとはなしに姿を消してしまった。当時の私にとっては、セミ失恋にも似た淋しさが心を支配し、友達から失恋でもしたのかといふかられるほどであった。

その伊吹さんによく似ているのだから、私の満足がいかに大きかったか御想像いただけるだろう。

「いやあ、佐仲さんて、見かけによらないお世辞がうまいわあ。」

「いいえ、私は心にないことを言えるほど器用ではありません。」

「その口で女をくどいてはるのやろ」

というような軽い冗談の交換があつてから三十分後に喫茶店を出た私達は、どちらからともなく太融寺の裏のホテル街に向って歩いた。さすがにホテルに入るときは、一寸躊躇した彼女も入ってしまうと度胸をきめたのだろう。自分から、サッサと裸になると風呂場

に行つた。私も、あわてて服をぬぎ後を追つて一緒に入つた。

私は、恥しがる彼女に無理にお願いして、タオルにたっぷり石鹸の泡をつけ髪から足の爪先に至るまでせせとこすつた。

少し日焼けした中年女性の肉体は、若い女性にない楽しみを手に伝える。フニャフニャとしたやわらかい感触が指先から頭の神経までゆさぶってくる。

今度は彼女の首の頸動脈に両手の親指を軽くあて、少しづつ力を入れていった。首を絞める場合、一般に喉笛といわれている呼吸器管に手をふれるのは危険である。

首の両横に走っている頸動脈に圧力を加え、軽い貧血状態に導くのが上手なやり方である。空手や柔道の練習のときには、しつこいほどこのことを注意される。

私の指に力が加わるのに比例して、彼女の顔からだんだんと血の気が引いていき、顔色がどす黒く変つていく。それでも私を信頼してくれている彼女は、むしろ心地よげに眼を軽くとじ、その感触を楽しんでいるかのようである。空手や柔道に経験のある人ならよく御存知のように落される（首を絞められ意識がもうろうとなつてくる状態を空手や柔道の

用語で落されるといっている）その時は何か夢見るようないい気持ちになるものである。試合中落されて後から気がついたら柔道衣を汚していたという話をよく聞く。一度梨花さんが大塚さんの首を絞め、落ちる寸前の写真を撮ったら、きつと素晴らしいものが出来るだろうと思つてはいるのだが、何分相手は奇巧のモデルというわれわれ読者には手のとどかない雲の上の存在だから、せいせい布団の中の夢に過ぎないのが残念である。

やがて彼女の鼻の穴が

「ピクッ」

と痙攣し、

「スウー」

とその穴から長い息がもれはじめた。頸動脈をとめているだけであるから、実際の呼吸には何らの支障もないわけなのだが、その穴は、少しでも多くの空気を吸おうとするかのように最大限にひらかれ、黒々とした洞窟のような穴をみせ、激しく開閉し出した。これ以上開げられないと思われる位、一杯にふくらんだ黒い穴、その奥にある薄桃色の壁……。私は、自分の小指をその鼻孔に入れ、ぐいぐいとこねまわした。このチャージングな鼻を、無茶苦茶にさいなみたいという欲望が私

の体の中をかけめぐってくるのを感じた。

体の中のサドが表出してきたのである。

白い石鹼のあぶくの中で、ぐしゃぐしゃになりながら、風呂場の蛍光灯の光をキラキラと反射している鼻頭、ピクピクと激しく息づいている鼻翼。

ああ、その鼻の素晴しさ。

その素晴らしい光景は、その素晴しさの故に私の心をいやが上にもあふりたててくる。

私は、ふと、かつて心の恋人であった伊吹嬢の鼻を、この手で、この指で、自由にしているような幸福感を錯覚した。

もっと、もっと色々な方法で彼女を虐めたいと思った。そのくせ、その方法が頭に浮んでこない。もどかしさにイライラしていたのも事実である。

とにかく、このようにして、彼女との交際が初まったわけであるが、彼女とのプレイは非常に幸いなことに、今でも、月に平均二回位の割合で、つつがなく続いている。

私は彼女を心から愛している。彼女から絶交の意志表示がない限り、彼女とのプレイは私の人生の重要な一部分となって継続されるだろう。

ただ最近、彼女との交際の上で、一寸した

困惑に悩まされることがある。それは、彼女が案外ゼラシイがきついことである。それでも、彼女を知ることができた幸せに比べれば一寸した困惑に悩まされるなんて贅沢に過ぎるであろう。

とにかく、私は現在とても幸せである。

――――

先日はいろいろと大変ありがとうございました。

二十年来のことで、はじめはとっても恐ろしかったのよ、でも、自分でも恥しい位夢中になってしまつて、今度お逢いするとき、かっこ悪いわ。

又、すぐお逢いする約束ですので、お便りはしないと申しましたが、又筆を取りました。

その後、五時以後はいかがお過しですの、あちこちで浮気の虫が出ているのじゃないの。

多分にね。私のような、おばあちゃん相手じゃ仕方ありませんものね。

でも、一寸気になっちゃうのよ。

そうそう、この前、私の腕時計、ベッドの中で貴方の腕にはめて遊んでいたでしょう。帰りにあんまりあわてていたものだから、そ

のままになっているでしょう。出来るだけ早く家に帰って時計に御飯を与えて下さい。いつも気になっているのよ、お守りは大丈夫かなとね。

私も、十二月の月は何かと忙しいので、貴方の顔を見に行きたくても、コートの外からくらいしか機会が出来そうにありません。時計のお守りよろしく願いますね。

時計は、もし迷惑でなかったら、いつも貴方の腕にはめていてほしいのだけど、悪い？迷惑でしたら無理にとは申しません。

浮気することは忘れても、時計のことだけは忘れないでね。

ああ、そうそう写真はまだ？ 今度お逢いするときは焼付けておいてね。早く見たいわ、自分が責められている写真で、きつとすごい刺戟があると思うわ。人に見せたりしたら嫌よ、団地の人で、万一私を知っている人がそんなもの見たらしたら、私恥しくてこの団地に住めなくなってしまうもの。

私が貴方の顔を足でふんでいる写真も確か一枚だけ私が撮したと覚えているけど、その写真は二、三枚余分に焼き付けておいてね、私、貴方の浮気封じのお守りに持っておきたいの、浮気したらしたら、その写真を団地の

道にばらまいてやるから。

それからね、貴方にとっても、わざわざ東京から財布（あまり良い品ではありません）を取り寄せましたけど受け取って下さらないでしょうか。

ほかの彼女とデートする時は必要じゃないかしら、小銭をポケットに入れると破れるといつも心配していたでしょう。受け取って下さるようお願いすわ。

あまり遅くまで夜ふかしなさらずに早く帰ってお休みなさいね。

女の子を縛ったり、バンドでたたいたり、鼻をいじったりしたくなったら、一寸の間辛抱しててね、今月の二十四日か五日頃に子供達がハイキングに友達と行くようなので、その時、今度は貴方の部屋に行くわ、私にだったらどんなことでも、好きなことをしてもいいのよ、少し位なら鼻血が出てもかまわないから貴方の好きなようにお鼻を自由にさせてあげる。首だって、もっと強く絞めてくれない気持なのね、本当はね初めはとっても恐しかったのよ、でも、少しも苦しくないし、頭の中がジーンとしびれてきて、何か夢でも見るようないい気持だったわ。貴方って、す

ごく慎重なのね。貴方がすぐやめたから、物足りなかったほどよ。

貴方のすることだったら、どんなことでも許してあげる。だから、浮気したら嫌、ね、お願いよ。

二十四日まで、ほかの女の人にふれないで待っていてね。

晴成 様

実子

これをもって、私の『S M レター』は、一応終る。

これ以上、くどくどと書いていくことは、読者諸氏のアクビの種を綴る結果になることを恐れるからである。

まだ、ほかにS M 御夫妻からのものや、色々な事情でプレイにまで結実しなかったマソ女性等からのレターの数々が、机の抽出の中に一杯つまっている。その中でも残念なのは、せっかく返信用の切手まで封入しておられるのに、封書にも、手紙の中にも宛名がなかったため返事の出しようがなく、抽出の中で寝たままになっている手紙である。きっと急いでおられたため、自分の住所をお忘れになったのだろうが、きれいな女文字で、文章

もしっかりしていただけに非常に残念である。また、中には文通の結果知りあったマソ女性のうち不要になった分を自分のところにまわせという厚かましい、しかもまるで女性を品物かなんかのように思い込んでいる、けしからん内容の手紙や、交際を強要してくる強迫型の手紙などが投函されてきた。さらに明らかに男性が女性名を使って投函したと思われる手紙も相当数来ている。これなどは、内容が興味本位に書かれているため、むしろ読む方にとっては面白く、とても楽しませてくれた。わざわざ十円切手を貼って、文案を練って投函するところを見ると、よほど暇をもてあましていたかたか、郵政省に寄附しなければならぬ義理のある人かのいずれかであろう。これらの手紙の山も、閑をみて整理して、いずれ機会があれば、何らかの形で発表したいと思っている。

尚、三回にわたって誌面をけがした『S M レター』につき、読者の方々のご意見と批判があれば、誌上にて発表頂ければ幸甚。次回投稿の際、お返事したいと思う。では、これで一先ず左様奈良。

（完）

第二のよそおい

原 由 貴 子

(一)

両親に早くわかれ、遠縁の叔母の家にひきとられて暮らすことになった由見夫は、美しかった母親に似て、小さな時から「可愛い子だ」「まるでお嬢ちゃんみたいだ」といわれていたが、段々に成長するにつれ、顔だちにますます母親のおもかけをうつすようになり叔母の好みで普段長めにしている髪のせいもあって女の子と見ちがえるほどだった。

その頃近所のお医者さんの家に美奈子という三つ年上の女の子がいた。由見夫はいつも彼女を『美奈子姉さん』と呼んでいたが彼女が美奈子に特に可愛いがられるようになったのは、彼が美奈子と似た境遇にあるばかりでな

く、小さい時から男の子とは少しも遊ばず、近所の女の子たちと、お人形ごっこやままと遊びばかりして、仲の悪い町内の餓鬼大将などから目の敵のように憎まれていたせいかも知れない。彼等は、道で行きあったりすると腕白の仲間入りをせずいつも女の子とばかり遊ぶ由見夫に向って犬をけしかけたり石をなげつけたりするのだったが、いつもそのたびに加勢し、かばってくれるのが美奈子姉さんだった。

「由見夫ちゃん、一緒に遊びましょう」

優しい美奈子姉さんと一緒にすごす時間は、毎日进行したずらっ子達の目をさけてくらす由見夫にとって誰一の楽しみだった。

「美奈子姉さん、どうして僕と一緒に遊んでくれるの？」

「え、だって姉さん、由見夫ちゃんが好きだからよ。姉さんは男の子って乱暴で大嫌い。でも由見夫ちゃんは別なのよ。由見夫ちゃんは、男の子じゃないから」

「違うよ。美奈子姉さん、僕、男の子だよ。」

「ううん、違うのよ。由見夫ちゃん、本当はあなた女の子なのよ。いいわね。学校へ行っているときや外では男の子だけど、姉さんと一緒にいるときだけは女の子にもどのよ」

「うん」

そして、遊ぶのはいつもお人形やお手玉とか、美しい王女さまと悪い魔法使いの出てく



るお話だった。また時には美奈子姉さんのきれいな洋服を着せられ、鏡の前で櫛で髪をといってもらったりするのだった。

そんな由美夫が、奈美子姉さんの前で『女の子』としての生活をはっきり始めるようになったのは、中学へ行くようになってからの

ことである。その頃美奈子は私立女子校の上級生として隣の市まで通っていた。

日頃好人物の伯父夫婦は、子供がいないので両親のないう美奈子をわが子同様に可愛いがって日当りのよい二階の一室をあたえ、ベッドや勉強机、小型の整理筆筒などからカーテンまで女の子の好みそうな飾りつけなどし、又由美夫が遊びに行っても、いつも温く迎えてくれるのだった。旅行好きの伯父たちは、耳の遠い婆やを留守番に、夫妻でよくでかけることがあった。そんな時、いつも由美夫に、その間用心のため来て泊る日、いつものように美奈子姉さんの家に遊びに行つて、二人でいっしょにお菓子を食べ終つてしばらくした時だった、丁度伯父さん達は旅行中で、家には誰もいなかった。

美奈子姉さんは、

「今日は由見夫ちゃんにいいものを買ってきてあげたのよ。何だかあててごらんなさい」といって、筆筒の抽出からデパートの包装紙で包まれた小型の紙包みを取り出した。

「何だろう。チョコレート?」

「ううん違う」

「じゃ、本」

「いいえ」

「なんだか、わからないや」

美奈子姉さんは、とうとう紙包みを開け、箱の中から取り出したものを由見夫の前に両手でひろげて見せた。

「由美夫ちゃん、これ、何だか知ってる?」

（何だろう……）

それは由見夫が初めて見るもので、ふんわりやわらかなピンクのひだが美しい洋品だった。可愛いレースでふちとられた前ホックが美奈子姉さんの手ではずされ、真中の部分がおしげもなくひろげられると、そこには薄くて半ば透けて見えそうな飴色のゴムが丁度赤ちゃんのおしめカバーのように幅一ぱいに縫い込まれていた。

「ううん」

かぶりをふった由美夫は、直感的に、何かそれが女の子の体につける物だと知って、思

わずつばをのみ座布団の上にすわり直すと、頬が赤らむのだった。箱のふたに下着だけしかつけていない若い女性の絵があることから彼の直感はいよいよよかった。

「フフ、びっくりした？ 知らないのも無理ないわ。教えてあげましょうか。これ、生理バンドっていうもの。どう、きれいでしょ。

女の子って、年頃になると、時々、そうね月に一度ぐらい、体の具合が悪くなることがあるものなのよ。そんな時これつけるの。女の子とは違うんだって、伯父さまから聞いたんだけど由見夫ちゃん、もうそろそろ十四でしょ。体の調子が重苦しくって、思わず下着汚しちやったりすることない？ 小遣いで、これ買ってきてあげたのよ。今日から、姉さんがこれ穿かせてあげましょうね」

「嫌だよ、だって……」

「あら恥かしがらなくてもいいのよ。だって由見夫ちゃん、女の子になるんだし、下着汚しちやったら困るでしょ。だったら、これしなくちゃ。どう？ まだ少し早いのかしら。でも、いい子だから、お姉さんのいうこと聞いて、今夜はこれつけて寝るのよ。さ、パンツ取って」

「嫌だよ、嫌だよ。僕、いやだ」

初めのうちは由見夫も必死にこばんだが、優しく説得され、眼の前にふんわりひろげられた美しい女性用品の持つ神秘へのあやしいいざないを感じて体中の血が熱くなり不思議な興奮にかられて、とうとうこばみ切れなくなってしまう。そしておずおず仕度をする。と丁度母親からパンツを穿かされる小さな子供のよう、美奈子姉さんの両肩に手をかけ、彼女の両手でひろげられているピンクの生理バンドに両足を通すとおとなしく穿かされるのだった。足首から膝、膝から腿へと裾ゴムの快い緊縛感がのぼるにつれ、じんとわいてくる甘美なよろこびに浸ってゆくのだった。

カサコソとセロファンで包まれた小さな紙箱の封を切る音がして、美奈子姉さんのしなやかな指でわきのホックが止められた。由見夫は、わき起るよろこびをぐっとこらえた。女性用品を腰にまとったその姿は、美奈子にもあやしいよろこびをあたえたのだろうか。「まだよ。由見夫ちゃん寝る前に、これ穿くのよ」

彼女も又われ知らずわななく手で更に筆筒から体操の時に穿く黒い女学生用ブルマースを取り出し、ピンクの生理バンドの上から穿

かせ始めた。もうこうなってはおとなしく由見夫は美奈子姉さんのなすがままになるのだった。ブルマースを穿き終った瞬間、さっきから腰にピッタリあたる生理バンドのやわらかな薄ゴムの肌ざわりで呼びおこされた甘美なよろこびが最高潮に達した。

こうしてとうとうその晩は、由見夫は、まるで本当の女の子のように生れて始めて腰にあてがわれた生理バンドのゴムの不思議な肌ざわりを意識しながら寝床につき、楽しい夢を見たのだった。

(二)

「おはよう。もう十時すぎよ。やっとお眼ざめ？ すいぶんおねぼうさんね。ゆうべの具合どうだった？」

いつもと変らぬ美奈子姉さんの朗らかな笑顔といたずらっぽい問いに由見夫は恥しくて顔もあげられなかったが、やっと小さな声で「とって、いい？」

と許しをこうのだった。

「しょうがないわね。一晩くらいで。本当はもっとずっとつけてなくちゃ、女の子じゃないのよ」

由美夫は、こうして美奈子姉さんの手で神秘なよろこびに眼ざまされ、それ以後も姉さ

んの買ってくるブラジャーから、ストッキング、スリッパをつけ、裾にゴムのピッチリ入ったパンティを穿かされ、次第に第二のよそおいが自然に身について行くのだった。そして時には上から白いリボンのセーラー服、ス

カートの代りにブルマースを穿かされるのだった。しかし何といっても月に一度の、例の生理用品のゴムを腰にあてがい、ブルマースを穿かされて寝る夜は、肌にあたるゴムで美奈子姉さんの白いやわらかな太腿が自分の体

にピッタリ密着しているようなあやしい気持ちにかりたてられてしまふのだった。そしてその度に、自分と美奈子姉さんの間に、気持ちが深く通じあっているのを確信するのであった。

本誌既刊号在庫一覧表

注文殺到！ お申込みはお早く
(定価一五〇円分在庫若干あり、売切れ近し)

本誌既刊号在庫案内

在庫雑誌及び定価

○本誌の既刊号は、非常な人気で毎日注文が殺到しておりますので在庫が非常に少なくなっており、売切れの号も続出しております。
○左記一覧表のうち、定価の記しがあります分は、只今でしたら在庫しておりますから、御送金次第急送申し上げます。
○昭和35年5月号以前の号は、全部売切れとなりました。限定版特別号第一弾から第四弾まで、サデイズム特集号第一集から第四集まで、「美しき縛しめ」第一集、第二集。いずれも在庫ありません。
○送料は当社にて負担いたします故、誌代のみお送り下さい。

昭和35年6月号	(定価三〇〇円)
昭和35年7月号	(定価三〇〇円)
昭和35年8月号	(売切)
昭和35年9月号	(定価三〇〇円)
昭和35年10月号	(売切)
昭和35年11月号	(売切)
昭和35年12月号	(売切)
昭和36年1月号	(売切)
昭和36年2月号	(売切)
昭和36年3月号	(定価一五〇円)
昭和36年4月号	(定価一五〇円)
昭和36年5月号	(定価一五〇円)
昭和36年6月号	(定価一五〇円)
昭和36年7月号	(定価一五〇円)
昭和36年8月号	(売切)
昭和36年9月号	(売切)

昭和36年10月号	(定価二〇〇円)
昭和36年11月号	(定価二〇〇円)
昭和36年12月号	(売切)
昭和37年新年号	(売切)
昭和37年2月号	(定価二〇〇円)
昭和37年3月号	(定価二〇〇円)
昭和37年4月号	(売切)
昭和37年5月号	(売切)
昭和37年6月号	(売切)
昭和37年7月号	(定価二〇〇円)
昭和37年8月号	(売切)
昭和37年9月号	(売切)
昭和37年10月号	(定価二〇〇円)
昭和37年11月号	(売切)
昭和37年12月号	(売切)
昭和38年新年号	(売切)
昭和38年2月号	(売切)
昭和38年3月号	(売切)
昭和38年4月号	(売切)
昭和38年5月号	(売切)
昭和38年6月号	(売切)
昭和38年7月号	(売切)
昭和38年8月号	(売切)
昭和38年9月号	(定価二〇〇円)
昭和38年10月号	(定価二〇〇円)

昭和38年11月号	(定価二五〇円)
昭和38年12月号	(定価二五〇円)
昭和39年1月号	(定価二五〇円)
昭和39年2月号	(定価二五〇円)
昭和39年3月号	(定価二五〇円)
昭和39年4月号	(定価二五〇円)
昭和39年5月号	(定価二五〇円)
昭和39年6月号	(定価二五〇円)
昭和39年7月号	(定価三〇〇円)
昭和39年8月号	(定価三〇〇円)
昭和39年9月号	(定価三〇〇円)
昭和39年10月号	(定価三〇〇円)
昭和39年11月号	(定価三〇〇円)
昭和39年12月号	(定価三〇〇円)
昭和40年1月号	(定価三〇〇円)
昭和40年2月号	(定価三〇〇円)
昭和40年3月号	(定価三〇〇円)
悦特第一集	(売切)
悦特第二集	(定価三〇〇円)
悦特第三集	(定価三〇〇円)
悦特第四集	(定価三〇〇円)
悦特第五集	(売切)

○極めて在庫の僅少な分がございますので、第二希望品がございましたら、お書き添え願います。

箱入娘の話

柴
利
好

十数年も仄暗い地下室に、鉄鎖で繋がれていた女の話が本誌に出ていたが、現代社会としては、とても信じられない事柄が、今もお現実になりに得るということは、空恐ろしい話である。世界画報（国際情報社、一九三三年五月刊）の報ずる『箱入娘の哀話』も、その例に洩れない。

同誌八八頁から原文のまま――

あわれ花のいのちを

パンチャも出ばなの十八才になるまで、ハコ入りで育つたと云えば、きこえはよいが、トンデモナイ。フランス嬢は十八年間も真正銘の箱にとじこめられていたのである。

いま病院で治療をうけているが、オハイオ州の世にも稀なるザンコク物語である。

（原文は横書き八行）

この一文はフランススという娘のベッドに横たわる瘦せおとろえた写真に対する説明文で、その写真では眼が落ち窪んで頬の三角にこけた哀れな顔しかでていない。手足や胴体の部分は白いシートに包まれたままで横たわった姿しか見えない。しかし恐らくはアウシユビッツの收容所における被害者同然の有様を想像すれば大差はなからう。

彼女が入れられていた箱が、何んな物であ

るかは遺憾ながら判らない。箱とあるからには、檻状のものではないだろう。多分木製のリング箱位の大きさの箱ではなからうか。

いずれにせよ、州警察か何処其処の病理学研究所か、然るべき機関に保護され、後世にまでこの世にも稀な虐待事件を伝える資料として残るであらう。

何故、この虐待が行われたか、真相はわれわれには報じられていないが、明らかに常軌を逸した異常さが認められる。少くとも本人の意志に基いていないという点に、この事件の無惨さがあり、やりきれない気持を起させる。フランス嬢が一日も早く回復して、幸福な余世を送られんことを念じてやまない。

事實は小説よりも奇なりとはいえ、世界画報の記事の通り、世にも稀なる女性に対する残酷物語である。

扱て、『箱入娘』といえは、テレビの埋草番組（野球中継が早く終わったため）で面白い外国ショー映画を見た。サーカスの道化風の男が一個の鎖製トランクを舞台に運び出す。大きさは大体の目分量で長さ七〇センチ足らず、巾五センチ位、高さ三五センチ程。嚴重な錠前を外して蓋を開けると、中から黒一色（白黒テレビだから黒く写るので実物の色彩

は不明)の人形を無難作に引きずり出す。人形だから、骨なしのように関節はグラグラして、まるっきりシャンとしない。

顔面も手先も布や手袋でおおわれて中身が見えない。その人形を男が色々な仕草に合せて折ったりたたんだり、社交ダンスまがいの踊りまでしてみせる。人形は操り操作によって時にはフリフリと、時にはガクンガクンと折れ曲りながら、飄忽な身振りで動く様子がユーモラスで面白い。こうした仕草が一段落して、トランクに人形を納めるのだが、人形はドサリと中に投げ込まれるが、胴体だけがトランクに入るが、首や手足がはみ出して入らない。それを腹の部分に男が乗って踏んだり、手足や首を折り曲げて無茶苦茶に中に押し込もうとする。

曲げられた人形は、無理な折り曲げのためバネ仕掛けのようにトランクから跳ね出してなかなか思うように納らない。それを男が飛び乗っては押さえつけ押さえつけ、二度三度同様の仕草よろしく、ようやくのことで人形を元通り、トランクに入れて蓋をすることが出来た。

以上でこのショーは一応終るのである。何んと簡単な見世物に過ぎないと思われるが、

次の瞬間が素晴らしい。おもむろに蓋を開けられた。そのトランクの中から再び人形が取り出され客に向って、立直させられるやいなや人形の手足が動いて手袋を脱ぎ、覆面を取り着衣を上から下までスルスルと脱ぎすてる。何んと今が今まで、人形だとばかり思い込んでいたものが、レッキとした金髪の美女だったのである。そのスタイルはサーカス女のようにする海水着のような服装で、背丈は男より高く一メートル七〇センチはあろうか。

サーカスの曲芸には色々あるが、その全てが普通一般人のなし得ない超人的伎倆に価値づけられており、それがためには肉体的にもそれ相応の苦痛を伴うことは間違いない。とはいえ、この箱入娘(実際は娘か何うかは知らないが)を演ずる女が、その肉体に受ける苦痛の激しさは大変なものと思像される。

ショーをしている最中は観客に全く人形と思わせる身振りで終始し、その間踏まれたり蹴られたり、折られたり曲げられたり、振り回されたり、相手の暴力に身を任せ切りにされ続けている訳であり、その上小さい箱に詰め込まなければならないのだから、余程の肉体的訓練を耐えぬかなければ動まらない。殊に箱詰めされる時の邪怪な扱い方などは

たとえ芝居とはいえ、これが人間だったと分かって、はじめて観衆の肝に銘ずる見事さであった。

このショーでは舞台に出るためには、必ずこの女はトランクに詰められなければならないのだから、幕明き前にトランク詰めにされて待機している訳で、この興行が行われる回数だけ詰め回数が増え、箱詰めにされている時間も度重なる。この箱入娘は、自分のショーがはやればはやる程、われとわが身を苦しめぬかなければならないとは、何んと因果な女性なのだろう。

明治時代の見世物で一日中、柱に後手に縛られ通して、身動きもならず晒され続けた女の哀れさと相通ずるものがある。彼女自身にこうした加虐に十分耐え得る肉体的特質があることは勿論だけれども、それより以上に、この加虐に耐え忍ぶこと或はその苦痛を受けることに喜びを感じるマゾ的性質があるのである。そうでなければ永年に亘ってこうした出し物を演じ続けて行かれる筈はないと思う。相手の男としてからが、加虐の楽しみを存分に味っているのかもしれないし、この出し物を案出した契機も女を折檻している中に思いついたものだったかもしれない。或

はこの男女は実生活に於ては、全くその立場を逆になっているかも知れないと思うと、面白い。何にしても、この箱入娘は本人の意志によっているという所は、先に述べたオハイオの娘と違って救いがあるし、これによって想像される世界にも面白さがあるといえよう。

テレビ・シートの話について印象的だったサーカス場面を一、二挙げてみよう。旧幕時代の拷問や折檻として伝えられているものの一つに『髪吊り』がある。これは私刑としてもキリシタンに対する公刑としても行われた模様だが、頭髮を束ねて縛り吊す責め方で、被害者は大方女だったようだ。普通には手足も縛って吊すのだけれど、実際には吊し上げる場合、手足を縛った縄は吊す用には使われないので、全身の重味が毛髪にだけかかるから、その部分の痛さ苦しさは格別と思われる。伊藤晴雨氏の話によると、姦婦を髪吊りにして責め上げ長時間そのまま放置しておいたが、頭皮が剥けて身体が下に落ち、女は死んでいたとか、まことに無惨な実話である。

この髪吊りを職業とするサーカス女が、外国にあるのだから驚く外はない。テレビ・シートは海外トピックスの一コマだったが、二

十四、五才の女が髪を丁寧に梳かせている処から始まる。丁寧に梳かなければならないのは、勿論体重を毛髪の本一本に平均に掛ける必要があるからだ。慎重に束ねられた髪の先端にロープがつけられ、吊り上げられる。ゆっくりロープが吊り上げられるに従って身体は、その全体重を髪一つに托して空中高く吊り上げられてゆく。地上数メートルの高さに、普通に縛って吊り下げられただけでも苦しいのに、彼女は正しく毛髪だけで吊り下げられている。その上にもっと酷い曲芸を加えられるのだから凄い。

助手から直径三〇センチ余りのリングが六個、宙吊りの彼女に投げ渡される。女はリングを受けとると両脚を左右に開け、膝を直角に曲げてふくらはぎを上にして膝から下の脚部を水平に保つ。両膝で立った恰好と思えばよい。その左右の足首とリングを一つ一つ入れる。次いで両腕を左右に水平に横に伸べてその手首と二の腕にリングを同様一つ宛入れる。準備が終るや否や、手足を動かして夫々のリングをグルグル回転させるのである。

このリング回しは、空中ブランコとか、逆立ちなどで併用される演技だから、さして珍らしくはない。しかし、何分女は髪一つで吊

されているのである。手足に入れたリングそのものは、恐らく木製か何か軽い物質に違ひなからうけれど、これらを調子をとってリズムカルに回すためには、両手足に力を入れなければならぬ。それがためには、手足のみならず、肩から腰から背筋から、いうなれば全身を使わなければならないのである。その力の加わる反動で身体が振動する。その振動の全てが、頸部から頭部に伝わり、毛髪の生え際に集中されるのだから、なんとも早や、息づまる一瞬ともいふべきであろう。

近來わが国にも外人ショーが盛んに行われるようになったが、次の事例はテレビ・スタジオで実演された『駿河問』類似のスピンの話。

肉体美を誇る男女（夫婦と思われる）によってアクロバチックな踊りが行われ、女は男の力に任せて様々な姿に曲げられたり伸ばされたりする。股が裂け腿が抜けるかと思われ、ストレイトから、背骨が折れんばかりに身体を逆に反らすペンディングとか、所謂アクロの基本を十二分に取り入れたデュエットは女一人で演ずるアクロバットとは、また格別の面白さがあることは御承知だろう。

扱て、この演技の最後を飾るのが胴吊りの

見せ場なのである。ブラジャーとタイトなパンティだけのビキニ姿の女は、一〇センチ巾のウエスト・バンドを素肌の胸に巻いて、細腰もくびれよとばかりキック締め上げる。

このバンドの後ろ（腰椎骨の当る部分）には丁度犬の頸輪にあるような輪が取り付けられている。その輪に『くわえ綱』を取りつけ、男がその綱を口にくわえて、鉄棒から吊り下がる。この男の頸力の強さが、このショーの一つの売り物ともなっている。背部を上腹部を下にした胴吊りの姿勢で、女は吊り下ると

ベルトについた背筋の吊り輪を中必として、グルグル自分の身体を回転しはじめる。

回転数は三十回足らずであったが、その間中、女は両脚をかがめて膝を胸の辺りに両腕で抱き、首を真直ぐに上げて歯を喰いしづっていた。バンド一つに自重が掛って、それが回転するのだから、バンドは深々とウエストに喰い込んで吊り下げられる。前には相当嚴重に締めつけられていたにも拘らず、吊り輪でぶら下ったバンドの上の部分と胴中との間に大きく隙間ができて、ウエストのくびれが

如何にきびしいかを物語っている。

本当の駿河問ではないから、罪人のように手足を縛られたり、重石を背中に背負ってはいたとはいえず、胴体一カ所に受ける内臓圧迫の苦痛は、たとえバンドが巾広であっても随分と切ないものに違いない。まして、グルグル回しになっていることは、偽りのない事実なのだから、これら二重の苦痛を耐える女の演技は、力士たる男の比較にはならないと思う。

(完)

「最新版」女体責写真五十粒選

A組五十集 大手札判印画紙(9×13) 焼付

一組一枚	一五〇円
五組五枚	五〇〇円
十組十枚	九〇〇円
二十組二十枚	七〇〇円
三十組三十枚	五〇〇円
四十組四十枚	三〇〇円
五十組五十枚	四〇〇円

A 1	フミツケ汚辱縛り (新井)
A 2	手吊り乳房責め (五月)
A 3	ハリツケ猿ぐつわ (新井)
A 4	全裸正面柱しばり (遠藤)
A 5	亀甲強烈乳房縛り (遠藤)
A 6	全裸手吊りムチ打 (遠藤)
A 7	豊満乳房いじめ (遠藤)
A 8	乳房責め股間縛り (遠藤)
A 9	鼻責鼻梁いたぶり (遠藤)
A 10	全裸後手高小手 (遠藤)
A 11	膨隆臀部さらし (長野)
A 12	全裸正面強烈縛り (長野)
A 13	うねる緊縛裸身 (長野)
A 14	色禪の開股しばり (長野)
A 15	正面縛蛙股ひらき (長野)
A 16	裸自慢縛りヌード (長野)

A 17	正面アグラしばり (長野)
A 18	正面大の字開股縛 (長野)
A 19	遅ましき裸しばり (長野)
A 20	荒縄縛豆絞り猿轡 (大塚)
A 21	両手前縛り髪首絞 (大塚)
A 22	両手吊り股間吊り (桜井)
A 23	両手膝下しばり (関谷)
A 24	疼れんする裸身像 (関谷)
A 25	両股縄掛け開股縛 (大塚)
A 26	正面裸身強烈本縄 (梨花)
A 27	乳房晒し肉体自慢 (長野)
A 28	責衣にはみ出る肌 (東浦)
A 29	投げ出し全裸縛 (長野)
A 30	捕わいの全裸縛 (梨花)
A 31	羞られの全裸縛 (大塚)
A 32	猿轡の全裸縛 (大塚)
A 33	荒縄全身縛り豆絞 (大塚)

A 34	盛り上る乳房縄目 (長野)
A 35	亀甲本縄鼻いじめ (大塚)
A 36	ムチ打悶えポーズ (関谷)
A 37	椅子またぎ汚辱責 (東浦)
A 38	縦縄股間縛り正面 (関谷)
A 39	ゴム猿ぐつわ全身 (大塚)
A 40	くさり乳房責め (長野)
A 41	強制片足挙げ責め (大塚)
A 42	正面乳房くびり縛 (関谷)
A 43	鴨居正面ハリツケ (梨花)
A 44	手吊りパンティ落 (東浦)
A 45	白パン高小手呻 (絹川)
A 46	豆絞り鼻いじめ (梨花)
A 47	裸縛り鼻いじめ (絹川)
A 48	ガンジラメ立縛 (愛川)
A 49	亀甲本縄股間縛 (絹川)
A 50	立木縛竹棒責め (桜井)

私は美食家である

(かずひこのノートから)

とやま・かずひこ



映像

オフィスの名花エイ子―新人ながら、すばらしく美しい二十才のコ。スタイルはやや劣るが、そのお顔は、映画界のニューフェースとしてもりっぱに通用しそうだ。

そして、私は、偶然のことから、彼女の、毎月の訪れの日まで知っている―私だけが知っているヒミツ。

前おきはこのくらいにして、ある寒い日、

トイレへ立った私の目のまえのドアから、いま、ご用を終ったばかりの彼女が、すました表情ででていった。

ちようど、その日は、彼女の訪れの日だった―私はそれを知っている。

残り香を慕って、ご用済みのあとを見当つけてはいったのは云うまでもない話。

白い便器の底へヒトミをこらせば、あったあった!

ここはビルの六階、水圧の低いのが幸いし

て、便器の底には少量ながら、きいり筋が三つ四つ。

おまけに、右側のところに、親ゆび大の血のあとが二つ三つ。

こうなれば、こちらは、ご用などソツチのけである。

身をかがめ、その底に指をよせて、きいり筋を右の手の人さしゆびの先へ。

それを、鼻のところへもってくる。

深い息を吸う。美女の、人間としての最高

のにおい。

おもいきって、味をみる。少量だけに貴重で貴重で、呑みくだせるものではない！

こんなことをくり返すうちに、きいろい筋はきれいに消えた。私が、奉仕して便器を掃除させて頂いたワケだ。

つづいて、胸のハンカチを抜いて、赤いもののうえに当て、その、彼女のいろを写し取る――。

鼻と、舌さきにくる、その味、そのにおい。

ハンカチーフには、あざやかなくれないあと。

――ものの二十分ばかり、人に邪魔されないプライベートルームで、私は文字通り陶醉した。

そしらぬ顔して、デスクにもどる。

彼女も、そしらぬ顔で熱心に帖簿にペンを走らせている――。

(ぼくは、キミのからだのなかを食べたんだぜ、その色は、ボクのハンカチを美しくいどっているのだぜ――)

美しい横顔をぬすみ、みながら、たまらないうい、あのよいかおりを反すうして舌の端にかみしめる。

悪趣味――と人は云うであろう。

しかし、ノーマルな人は、こんな方法でひそかにたのしむ方法を知ってない。

私から云わせるなら、むしろ、そうした人々こそあわれだ。私は、彼女を独占的に愛せたのだもの。

――私は美食家。

美しい彼女を、たべたのだから、私は美食家。おいしいおいしいその味、この世だけで、私だけが口にし得た、彼女のそのままの味。なんと、おいしかったことか！

栄養

『週刊現代』十二月十日号。

アンネの美人社長と評論家の高橋義孝さんの対談にすばらしい一節があったので引用しておこう。

坂井 メンズの血液は、昔の方は不浄だといふ風に考えられていたんですが、本当は非常に滋養に富んだ、清潔なきれいな血でございまして、ですから妊娠のときには、あの血液が赤ちゃんの栄養物になるくらいでございまして。

高橋 あれは卵が腐って出て来るんじゃないですか。

坂井 いえいえ、とんでもございません。非常に、清潔な栄養に富んだものでございまして。

高橋 そうですかねえ。

坂井 それだけに、夏、牛乳とかリンゴ汁を日向に放置しておきますとそれが分離して嫌な匂いになりますね、あれと同じで、ですから体内から出た処置いかんによっては嫌な匂いになったりするわけです。

滋養に富んだ、清潔なもの――とは、なんとすばらしい観察だろう。

さすがの私も、いままでは、ナマのそれを口にするには、いささかのティコウがあつて、仲々実行しかねたけれど、こうなったらいっぺん、その栄養をたしかめてみようと思ひました。

スポンジ

同じく週刊現代誌から。号数は失念。同誌のテクリ、パチーンという気の利いた欄の一節から採取。

◆トイレットへ入って、水を流しながら目的を果すのを、女性はエチケットだと思ひ、実行なさっておられる。しかし、たとえばオナ

ラの音色を、水洗の騒音にかくすのなら話はわかるが、同じような水の流れなんだから、ジャーシュルシュルではむしろ拡大された感じであり、「ナルホド、頑張ってますね」という印象がつよい。そしてあわれなのは、水洗の水がつき果ても、まだ一方はつきぬ時ジャーシュルシュルが弱まり、やがて消え、今度はあきらかに一条の水のほとばしるジョロジョロの音色さえわたるなど、いかにも色消しだ。なにかスポンジのようなものを用意して、それに放出すれば、なんの音響ももれないのに、少しは工夫したらどうだろう。

私も、いささか音のフェチは自認する。

しかし、その処理を、スポンジに向って放出するとは、すばらしいアイデアだ。

かつて、私は、プレイに、脱脂綿を丸めたのに、放射してもらい、それを噛んだのと、クリスマスケーキに、同様してもらったことはある（ケーキのことは、本誌に発表、相当の反響をよんだ）

こうなればスポンジにたいして、食指が大いにうごく。あそこがれの水をたっぷり含んで、ズシリと掌に重いそれを頂き、うましの水をすすりだす―そのすばらしさ。

考えただけでも、どくどくと、のどが鳴る

おもいだ。

邪道

◆心頭滅却して「ノゾキ」公衆便所はうす暗くて、きみが悪いものだが、神奈川県横須賀市内のトイレも例外ではない。つい先日、若い娘さんが入ったところ、下でなにやら大きなものが動いている。「キャア―ッ」と悲鳴をあげて逃げ出し、お巡りさんと呼んできて調べると、胸のあたりまで黄金につかりながら一人の男が上を見ているではないか。応援のお巡りさんと二人がかりでつまかえ、ホースで水をかけ、着がえさせて取り調べると、この男は女性が用をたす姿を目のあたりに見るのが大好き。それには自分が中に入らないとダメ―とさとり、心頭滅却してザンプ。「アレを見れるんですから気になりません。シャバにもどったら、もう一度やります」とシャアシャア。

私と似たような性へきとみえるが、こうした、法にふれる行動をとる男を、私は憎みケイベツする。

私は、かりに、共同便所のフシ穴が、あっても、容易にそこはのぞかないだろう。

風呂をのぞいたり、団地の窓を狙ったり

も、私はしない。

みたい気はある。

しかし、私はキチガイにはなりたくない。紳士でありたい。金を取ってみせるのは、みせるほうに、ゆるす精神がありプライベートルームにおける両者の諒解のうえでの行動には、法の規制はないものと私は信ずる。

ベッドのそばで、バスルームで、便器をまたがらせ、でたものを美酒として考えるのは、むしろノーマルな行動といえようし、手がうしろに廻ることはありえない。他人に迷惑をかけること。これが、私の信条である。はじめに掲げた記事は『週刊文春』誌から採った、けしからぬ、バカなヤツの見本としてとってみたしだいだ。

一メートル

ある中堅どころの証券会社。

トイレの一角に貼り紙して曰く。

『トイレトペーパーは、一回一メートル

以内にとどめましょう』

きけば、このハリ紙、婦人用にも貼ってあるとか。

男は、比較的ペーパーの使用は少いはずだ。

問題は女性の大きいほうのばあいだ。前、うしろ両方使ったら、どう考えても一メートルでは足りっこない。

この掲示を忠実に守った女性は、身体の清潔を、一〇〇パーセント守ることはむづかしい。

いかに美しく着飾って歩いても、その秘部が、完全に美しくないことは、お気の毒なはなしだ。

一メートルのペーパー制限とは、不況にあえぐ証券業界の一端を物語る悲しき残酷物語だ。

ムチの味

電車は混んでいた。

有楽町——押し合いへし合い、私は下車せねばならない。

小づかれ、けられながら、出入口へ近づいた私のメガネが、そのとき、

ピシリ！

するどい音をたてた。目が不自由になる。

(ヤラレター！)

私は、ショックをうけながら、やっと電車をおりる。

「すみません」

どこかのオフィス・レディであろう、小柄な女性が、私にあやまる。

瞬間に諒解、

彼女が握っていた吊皮を不用意に離したとたん反動でプラスチックの輪がいきおいよく私の右のメガネの玉にぶつかり、ガラスが割れたのだ。

(困ったな)

とは思うが、悪意ではないのだから致方ない。

(イヤ、イヤご心配なく)

彼女の美しさに負けて、私は軽く手を振って、改札口をでた。

午休みにデパートで、入れさせた玉は二千八百円也。いささか痛い、美しい女性の手で、痛めつけられたのだと思うと、苦痛がなくなる。

Mの人が、ムチで打たれて歓喜する心境が、私にはよく判る。美しいひとのハイヒールだったら、手ひどく踏まれても、痛くない私なのだもの。

試験台

しばらく、艶麗な姿をみせなかったM夫人が一〇日ぶりに来られた。

いつみてもパツと咲いた花のような美しさである。大柄な、ゆたかな体格と、朗かな笑声があたりを賑かにする。

M夫人は、家内の舞踊の仲間の一人。日本趣味ゆたかなひと、結婚十年にして、子供はない。

「病氣しちゃったのよ、イロケのないヤツをネエ」

と笑う。

はじめ、からだのあるところが、ムヤミにネバつき、かゆくて困った。わるい病氣だと大いへんだ——というので、大学病院で診察を乞うたら、

「トーニョービョーだというのよ」

からだだが、ネバっこいのは糖分のせいだそうで、

「夜中に、夢中で掻いたら、指先までネバつきのよ、まるで、水アメでもくつつけたみたい」

かなり、ひどいものだったらしい。

おそろく、その指先は、甘く、おいしかったにちがいない。

美しい横顔をぬすみながら、妄想にふけてしまう。

それはそうだ。

からだじゅうの糖分がドンドンぬけてゆくのだもの。からだの奥から、トロリとしみでる糖分は、人体で醸された美酒。神秘的な味。これこそほんとのネクターだ!

しかも、美しい、豊満なM夫人のものなら、私は与えられたら、むさぼり吸うことだろう!

ネバついて、ネバついて、指先に糖分がたまり、糸を引くというから、ますますもって嬉しくなる。

『主人たらねえ、フフ、冗談にいうのよ、砂糖の代りに、レモンテイに入れて、のんでもようか……ですって……』

つまり、糖尿そのものをだから、冗談とい

えど聞きのがせない。

『ネコは、それが、とても好きなんですってね。お医者さんが云ってたわ』

素人診断の一法として、これを器にとり、ネコに与えてみる、舌をならして、喜んでなめたら、それはりっぱな糖尿、あるいは、夏だったら庭先に置いて、アリがたかるようだったら、これも、りっぱな糖尿だと思うべきだ――。

お医者さんが、そう云ったという。

『コップへ取ってみると、スゴイのよ。甘いにおいで、きいろくて、ドロリとしてて』

M夫人は、病中、オシッコに、よほど興味をおぼえたらしく、わがものの、くわしい説

明をしてくれるから嬉しくなる。

――モノ云わぬネコの舌をつかうより、いっそ、ボクの舌を使ったらいかですか、喜んで、試験台になりますよ……私は甘そうなM夫人の指先を、じっとみつめつつ、熱心にハナシをきいていた。

美しい豊満な女体のなかで製造された神秘的糖分。これこそ、われわれマニヤにとって夢にまでえがいた、渴仰の飲物である。

私の幻想の翼は、M夫人の話から、果てしなく楽しい夢をひろげてゆくのであった。

世の中に、こんな飲物もあっていいのではないだろうか。

四人の美女の縛られポーズの代表的作品集

女体緊縛写真のアルバム 限定版グラビヤ印刷写真集

豊満と清楚

一般書店には一切市販しません。是非直接発行所へお申込を!

限定版頒価一部一〇〇〇円(送共) 略号「限二」
「モデル」 長野 良子——大塚 啓子——五月亜紀子——新井マリ子

限定版第一号として、グラビヤ写真集の「美しき縛しめ」第三集、略号(美3)を本年二月に刊行しましたところ、多数のマニヤの方々のお求めを頂き有難うございま

した。嘗て十数年前コロタイプ印刷の女体緊縛写真アルバムとして刊行いたしました「美しき縛しめ」第一集、第二集は忽ちのうちに売切れとなり、今では見ることさえ

かなわぬ稀少な文献となっています。

皆様のご熱心な要望によりまして、ここに限定版グラビヤ写真集刊行に踏み切りました。本誌グラビヤ口絵では種々な制約のため、思いきった企画編集を遂行できませんので、直接販売の限定版写真集によってファンの方々のご期待に応えたいと思います。

今度、限定版第二号として、前集とは、いささか趣を変えた緊縛女体アルバムを作製いたしました。若々しい豊満な肉体を誇る長野良子、大塚啓子の二人の女性の美しさを最高度に発揮した縛られポーズの大胆

奔放のかずかずを、画面いっぱい、所狭ましと活躍させました。特に迫力を増すためとグラビヤ印刷の効果をフルに運用するために、写真面を大きくしました。加うるに清楚にして純情なフェイスと初々しい肢体の持主である五月亜紀子と新井マリ子両嬢の痛々しいばかりの可憐な緊縛裸身を以て誌面を飾りました。

緊縛フोट・アルバム

限定版第二号 豊満と清楚 内容

△美しき縛しめ (第四集) V

- (一)、豊満をくびる……………大塚 啓子
- (二)、胸と胴をくびった縄にもだえる女体……………長野 良子
- (三)、グラマーの縄目……………長野 良子
- (四)、むくむくと肥った肌に縄目も埋もれて……………長野 良子
- (五)、豊満裸身の陶醉……………長野 良子
- (六)、うっとりとした表情は、縄にか紐にか……………長野 良子
- (七)、鼻をいためつける……………長野 良子
- (八)、指にて鼻を弄ばれて恍惚とした表情……………長野 良子
- (九)、荒縄の緊縛感……………大塚 啓子
- (十)、とげとげとした荒縄が柔肌を痛める……………大塚 啓子
- (十一)、黒と白の対照……………大塚 啓子
- (十二)、白い晒と荒縄のケバとのコントラスト……………大塚 啓子
- (十三)、責めに疲れて……………大塚 啓子
- (十四)、責め抜かれてぐったりとなった女体……………大塚 啓子
- (十五)、戯れの縄プレイ……………新井マリ子
- (十六)、アパートの一室での緊縛プレイの一コマ……………新井マリ子
- (十七)、丸、襲いくる魔手……………新井マリ子
- (十八)、恐怖のまざなし、黒い触手が迫ってくる……………新井マリ子

- (一)、首締め縛り……………新井マリ子
- (二)、のびやかな肢体が痊れんする首絞め姿……………新井マリ子
- (三)、猿ぐつわ非情……………新井マリ子
- (四)、開股しぼりの上に非情の猿ぐつわ……………新井マリ子
- (五)、開股棒しぼり……………新井マリ子
- (六)、革の口枷が頬もくびれよと締めつける……………大塚 啓子
- (七)、絶叫のワンカット……………大塚 啓子
- (八)、縄目が埋もれるような凄惨な緊縛感の味……………大塚 啓子
- (九)、痛さに喘ぐ……………大塚 啓子
- (十)、責められて急所の痛さに思わず呻め……………大塚 啓子
- (十一)、首縄と足縄……………大塚 啓子
- (十二)、首に掛った縄と足の縄が女体を変える……………大塚 啓子
- (十三)、悶、縄に狂う……………大塚 啓子
- (十四)、悶えても拘束された麗身は逸脱しない……………大塚 啓子
- (十五)、足首の縄目……………大塚 啓子
- (十六)、反りかえった足の指が縄目に可愛い……………大塚 啓子
- (十七)、二筋の縄がかくも美しい姿を現す……………大塚 啓子
- (十八)、誇らかな成熟の匂を十分に撒きちらす……………長野 良子
- (十九)、投げ出された肉づきのよい肢、足、脚……………長野 良子
- (二十)、はにかんで見せた美しい全身のポーズ……………長野 良子
- (二十一)、両手吊りと足首……………五月亜紀子
- (二十二)、両手両足を縛られて一本棒に晒される……………五月亜紀子
- (二十三)、清純な美しさが、この全身に漂っている……………五月亜紀子
- (二十四)、晒の白布が鼻も口も一緒に掩って締め……………大塚 啓子
- (二十五)、荒縄への誘致……………大塚 啓子
- (二十六)、荒縄をさばいて次第に捉らわれる蝶々……………大塚 啓子
- (二十七)、珍しく完全に噛まれた猿轡……………大塚 啓子
- (二十八)、鋭い縄目と息づまる猿ぐつわの烈しさ……………大塚 啓子

- (一)、緊縛女体操縦法……………大塚 啓子
- (二)、縛りに変化をつけられた女体はどこへ……………大塚 啓子
- (三)、瑞々しくて柔らかな女体が縄にくねった……………大塚 啓子
- (四)、棒責めの序曲……………新井マリ子
- (五)、両足首の両端に縛られて、さて……………新井マリ子
- (六)、さあ、打って、とながし目の艶なこと……………新井マリ子
- (七)、輝くような美しい裸身もあらわに……………長野 良子
- (八)、縄をはねかえす素晴らしい女体の重量感……………長野 良子
- (九)、情容赦のない縄は巨大な乳房をへしゃぐ……………長野 良子
- (十)、開股しぼりの表情……………大塚 啓子
- (十一)、開股しぼりになった女の顔のアップ……………大塚 啓子
- (十二)、両肢を開けて縛り上げられたポーズ……………大塚 啓子
- (十三)、ぴんと一直線に伸ばして縛られた脚……………大塚 啓子
- (十四)、放置されて全身の痛さに耐えるシーン……………大塚 啓子
- (十五)、押し入った強盗は女を縛って転した……………新井マリ子
- (十六)、家宅侵入した賊の目的は美体の鑑賞……………新井マリ子
- (十七)、台所で縛られていたぶられるシーン……………新井マリ子
- (十八)、胸、腕、ウエストが縄によって捕……………大塚 啓子
- (十九)、くねらせた見事な臀部を捉えたレンズ……………大塚 啓子
- (二十)、後手高小手の美しさは素晴らしい……………大塚 啓子
- (二十一)、柔肌を喰いちぎるようにくびるコード……………大塚 啓子

連載小説

はなとへび

花

と

蛇

続篇（第六回）

団 鬼 六

正氣づいた小夜子

田代と森田は、昏睡している小夜子の寝顔を、うっとりとした表情で見つめている。

夜毎に下る白露に育まれた白い花のような小夜子の美貌に、田代も森田も圧倒された気分になっていた。

「美人だな。さすがは村瀬宝石店の箱入り娘だ。宝石の感じさえするじゃねえか。ねえ、社長」

森田が田代の顔を、うかがうようにしている。

「うん。それに、身体つきもすばらしく均整がとれているよ。しかし、いくら何でも、この令嬢を森田組の手で仕込みあげ、ヌードスターにするわけにゃいかんだろう。それだけに村瀬に対しては一千万円ぐらい大きく吹っかけてみるか。どう思うかね。親分」

「これだけの別嬪の身代金としちゃ、それでも安い位ですよ。もし、何だかんだと先方が出し惜しみすりゃ、へっへ、このお嬢さんに稼いで頂きゃいいわけじゃありませんか」森田は舌なめずりをするようにして田代にいう。

「どうです、脱がしましうか。社長」

何かに憑かれたように、小夜子の美しい寝顔に見とれている田代を見て、森田は、口に薄笑いを浮かべていった。

「うむ、しかし、ちよっと気がとがめるな。たんまり金を頂く上に、眼の保養までさせてもらおうというのは——」

最初、川田が、あの天性の美貌と気品とを兼ね備えた静子夫人を前にして、ふと、たじろぎ、いきなり暴虐の手を振るえなかった時と同様に、田代もまた、深窓に育った気品あふれる美貌の令嬢を眼の前には、おいそ

れと森田のいうようには手が出なかった。

「なんです、社長、おしげづかれたのですかい。ハッハハ。何も丸裸にむきあげるというのじゃございやせん。上着ぐらい脱がしたって、罰は当たるめえと思うんですよ。」

森田はそういうや牢舎の土間に敷かれたせんべい布団の上に横たわっている小夜子の傍に身をかがめる。

薄暗く、かびくさい牢舎の中央に寝かされている小夜子の豪華な衣服と、きらめくような色の白さだけが、くっきり、そこだけスポットを当てられたような感じで浮かび上っている。

森田は、横臥している小夜子の肩に手をかけて、回転させるようにして、仰臥させる。美しい小夜子の顔が、がっくりと仰向いた。かすかに小夜子は呼吸はしているが、意識は失っている。

森田は、チャイナドレスのホックを外し、田代の方へ、手伝いませんか、というように眼くばせをした。田代は、ごくりと生唾をのみこみ、森田に協力すべく、彼の傍にしゃがみこむ。

森田と田代が、まるで皮でもむくように、純白のチャイナドレスを剥ぎとると、甘い香

料の匂いに包まれたスリッパ姿の小夜子の肢

態が二人の眼の前にあらわになった。如何にも金持の令嬢らしい、しゃれた刺しゅうのほどこしてある眼にしみるばかりに白いスリッパ。しかし、田代と森田の眼は異様な光を帯びて、小夜子の胸の深い谷間に向けられている。乳房の見事さを想像させる、そのあたりに眼をやった二人は、氣を失ったまま発散させる小夜子の魔性の魅力に官能を高ぶらせたのか、モソモソと動き出し、ストッキングを脱がせ始めた。白い芙蓉の花を思わせる乳白色の艶やかな小夜子の内腿が田代の眼に痛く突きささるように映じた時、小夜子はふと正氣づき、おぼろげな視線を自分へのしかかるようにしている田代と森田に向けたのである。

「あっ」

小夜子は、電氣に打たれたように上体を起し、美しい顔を恐怖にひきつらせた。

「あ、あなた達は——」

一体、何者か、も恐怖に声がつまって出てこない。はっきりと正氣にもどった小夜子は柳眉をあげて、田代と森田を睨みつつ、よろよろと立上る。

二人の手を逃がれて、走ったものの、わず

か四五坪のせまい牢舎の中、小夜子は、突き当りの壁を背にして、じわじわ迫ってくる田代と森田に必死な眼を向けるのであった。

「あっ」

小夜子は、再び、恐怖の叫びをあげた。今まで、突然の事で氣持が顛倒し、氣がつかなかったが、何時の間にか、スリッパ一枚の姿にされてしまった事を知ったのだ。

かっと思中が羞恥のために熱くなり、思わず両手を胸の上で交錯させた小夜子は、今にもベソをかきそうな表情で、その場に小さく身をかがめる。

そんな小夜子に眼を向けながら、森田は、顔中しわだらけにしていた。

「へっへ、わっし達は、何も、お嬢さんを取って食おうというのじゃありませんよ。苦心して、お嬢さんを誘拐したというのは、お嬢さんのパパさんから、たんまりとお金を頂きたいからなんですよ」

それに、つけ加えて、田代が、おとなしくいわれた通りに父親に電話して、一千万の金を今夜中に作って、こっちへ渡すようにしてくれば、あんたも、あんたの弟さんも無事ここから家へ帰してやる、という。

「嫌なら嫌でもいいんだぜ。お嬢さんのその

美しい身体を元手にして、俺達は、それぐ
らいの金、稼ごうと思えば稼げねえ事はない
んだからね」

と森田は更に浴びせるのだった。そして、
その稼ぐ方法について、小夜子に話し出す。
身の毛もよだつような、彼等の計画を聞か
されて、小夜子は気が遠くなりかけた。

「文、文夫は何処にいるのです。逢わせて、
逢わせて下さい」

小夜子は、弟の文夫が、この悪魔のような
連中の手で、何かひどい目に合わされている
のではないかと直感的に感じたのである。

「文夫は、どうも聞きわけがないので、俺の
乾分達に痛めつけられているようなんだよ。
お嬢さんが俺達のいいつけ通り、電話をパパ
にかけて、金を作るようにしてくれりゃ、文
夫を痛めつけている乾分達をなだめる事が出
来るんだがな」

森田が口元を歪めながらそういった。

小夜子は、せっぱつまった顔つきをして、
うなづく。とにかく家へ電話して、この恐し
い場所から解放されたい。小夜子は血走った
気持であった。

「じゃ、こちらへどうぞ、お嬢さん」

森田と田代は、牢の扉を内から押し開き小

夜子を招く。

小夜子は、小刻みに震えながら立上り、両
手を胸のたりに交錯させながら、腰をかめ
て歩き出したが、土間の隅に押しやられてい
るチャイナドレスに眼をやると、素早く、そ
れを身につけようとして手をのばす。

「おっと、待った」

森田は、電光のような早さで、突進するや
小夜子のドレスをひったくり、

「一応、これはこっちへ預からせておいても
らうぜ。この屋敷から逃げ出されたら、元も
子もなくなっちゃうからな。まさか、大家の
お嬢さんが、スリッパ一枚のまま、外へ逃げ
出すてな事は出来ねえだろう」

さあ、行くんだ、と小夜子は森田にうしろ
から白い艶やかな肩をつかれ、よろよろとつ
んのめるように前へ歩き出した。

眼の保養

廊下の中頃に、そなえつけてある電話の前
へ小夜子を押しやるようにして、森田は小夜
子に自宅へ電話させた。

スリッパ姿の小夜子は、その場へちぢかむ
ようにして受話器を耳に当てる。

「——お願い、パパを呼んで頂戴」

電話に出た女中に小夜子は、震え声でいっ
た。驚いた女中がすぐに小夜子の父親に連絡
をとり走る。

「どうしたんだ、小夜子。一体、ゆうべは、
どこに泊ったのだ。文夫も帰って来ないのだ
ぞ」

小夜子の父親、村瀬善吉のカン高い声が、
受話器の中にひびいてくる。

「パパ、お願い、一千万円のお金を小夜子と
文夫のために作って頂戴。今夜の八時に、新
宿のコマ劇場の前へ、それだけのお金を持っ
て来て下さらないと、私達、どんな目に会う
かわからないのです。ね、パパ、お願い——」

そこで、森田がいきなり横手から受話器を
もぎとって、ドスのきいた声で小夜子の父に
対して浴びせかけるようにいう。

「いいか、小夜子のいった通りにしねえと、
小夜子は血の気の多いやくざ達の鬨りものに
なるんだぜ。あんた一人が一千万円入りのカ
バン一つを持ってやって来ればいいんだ。わ
かったな」

そういう捨ててるや、ガチャリと森田は電話
を切ってしまった。

「ごくろうだったね。じゃ、お嬢さん、ここ
らへどうぞ」

森田は、ニヤニヤしながら、虚脱したような顔つきになっている小夜子の肩へ手をかけるのだった。

「ま、とりあえず、この部屋にでも入っていただくか」

田代は、すぐ近くの部屋を開けた。

そこは、青葉の庭に面した明るい部屋で、床には青い絨氈が敷かれてあった。絹の小布団がとりつけてある肘椅子が三脚ばかりテーブルのまわりに配置されている。

「ここは来客用の寝室で、上等な部屋さ。大家の令嬢を地下室や物置に監禁するのは残酷だからな。お嬢さんにはこの特別室をお貸しするよ」

田代はそういういながら、部屋の入口あたりで震えつつづけている小夜子の背をつき、壁に添って並んでいる木製の椅子の一つを指さしそこへ坐って頂きましょうか、と小夜子をうながすのだった。

「さ、早くいわれた通りにするんだよ。お嬢さん」

モタモタしている小夜子をせかせて、椅子に坐らせた森田は、

「社長、そのテーブルの下に麻縄が一本あります。とって下せえ」

という。

田代は、うなづいてテーブルの下の縄をひっぱり出した。

「な、なにをなさるのですっ」

田代から受取った麻縄をしごきながら、森田は小夜子の胸のあたりに当てている両手を払いのけるようにして、椅子の背へねじまげようとしたので、小夜子は、反射的に身体を硬化させ、悲鳴をあげた。

「何も、そんなに大げさに驚かなくてもいいだろう。ズラかられないよう念のため、椅子に固定しておくんだよ」

森田のしようとする事に田代も手伝い、必死に暴れる小夜子を椅子に押さえつけるようにして、遂にそのうで卵の白味のように艶のある小夜子の両腕を椅子の背へ強引にねじ曲げ、左右の手首に巻きつけた縄をたぐり、つなぎ合わせてしまうのだった。小夜子は、後手錠をかけられた恰好になり、

「嫌よ、嫌です。解いて、解いて下さい！」

声をはりあげて、両足をばたつかせる。そのために、スリッパの裾がはね上り、乳白色のむっちりした太腿、内腿が大きく露出してしまうのだった。

「おや、こいつは、たまらねえ眺めだな」

森田が眼をギラギラさせて、あられもない肢態を演ずる小夜子の、そんな状態を凝視し始める。

小夜子は、無意識のうちにとった自分の肢態に気づき、あっと顔を赤らめ、びったりと両腿を閉ざしたが、森田はあまった麻縄をたぐりつつ、身をかがめて、小夜子の両肢を左右の椅子の脚へ、別々に縛り止めようとするのだ。

「な、なにをなさるの！」

小夜子は、羞しさと怒りとで、再び、かっとな頭に血がのぼり、逆上したように両肢をばたつかせた。眼にしみるばかりの純白のパンティまでが、まくれ上がったスリッパの裾からとうとう露出してしまふ。その上、必死な小夜子のあがきも徒労に終わる。森田は田代と手分けして、遂に小夜子の両足首を、がちりと椅子の二つの脚に縛りつけてしまったのだ。

「助けて、誰か、助けて下さい！」

小夜子は、それでも身をよじるようにして悲鳴をあげつつづけるのだった。

「丸裸にされたわけじゃないし、何もそうがなりたてる事はないじゃないか」

田代は、額の汗をぬぐいながらいった。

「もし、このお嬢さんを仕込みあげる事になったら、全く手こずりますぜ。いい所のお嬢さんでありやあるほど苦勞が多いってわけさあ」

森田はそういういながら、ズボンのバンドにはさみこんでいた手拭を引きぬくと、驚が小鳥に飛びかかるような素早さで、小夜子に迫り固く猿轡をはめてしまう。

口を手拭で固く覆われた小夜子は、もうどうしようもないようがつくり首を垂れて、身動きしなくなってしまった。

「へっへへ、あんまり世話をやかすものじゃないぜ、お嬢さん」

森田は、顔を横に伏せ、とめどなく涙を流しつつづけている深窓の美女をしげしげと見つめ、含み笑いをする。

「だが、村瀬宝石店の御令嬢も、ずいぶんとすさまじい恰好になったものだ。何だか、こちとらも少し、変な気分になってきたぜ」

小夜子の大きく乱れたスリッパの裾、そして、その間から、あらわに露出した白い艶のあるむっちりとした肉のしまった太腿、そして、その元を包んでいる艶めかしい、緑に刺しゅうのほどこしてある純白のパンティなどを見ているうち、森田も田代も、官能の高ぶりを



どうしようもないようになってしまっていた。

「せっかく、そこまで色っぽくなったんだ。」

もう少し、ひき立つよう細工してみようじゃありませんか。ねえ、社長」

森田は田代の同意をうながして、小夜子に

再び近づくと、いきなり、スリッパの一方の紐をずり下げて、ブラジャーに覆われた一方の乳房をあらわにしてしまった。

うっと小夜子は、猿轡の中でうめき声をあげ、椅子に固く固定されたまま、のたうち廻る。

「どうせそうするなら、親分、スリッパだけ全部とってしまおうじやありませんか。その方が、もっと美しく見えますぜ」

田代もつい引きこまれたように森田にいい今度は自分が乗り出して、ポケットからナイフを取り出し、小夜子のスリッパのたすきをぶつつり切ってしまった。

恐怖と屈辱と羞恥にのたうちまわる小夜子をアブナ絵的になぶりつづけ、寸時ののちに、田代と森田は、ズタズタにひきさかれたスリッパを手にして立上り、ブラジャーとパソティのみを許された小夜子を血走った眼で見下ろしていた。

「ずいぶん、お楽しみですわね」

突然、うしろの方で声がし、田代と森田は驚いて振りかえった。銀子がニヤニヤ立っている。

「なんだ、銀子か。今までどこにいたんだ」「隣の部屋ですよ。社長や親分の声がしたの

で、一体、何をしてるのかと、ちよいとのぞきに来たんですよ。——へえ、そのお嬢さんが文夫の姉なんですね。なるほど、聞きしにまさる美人ですわね」

うむ、田代は薄笑いをうかべながら、「このお嬢さんはな。まだ森田組の商品ときまったわけじゃないんだ。いいか。勝手に手を出して、妙な事を仕込むんじゃないぞ」

田代は、誘拐して来たばかりの令嬢を早速森田と二人で、このようにいたぶっているのを銀子に目撃された照れくさくもあり、きびしい口調でそんな事をいった。

森田も銀子に顔を向けて、

「隣の部屋で、そういやさっきからガタゴト音がしているが、一体、何をしてるんだ」「ふふ／＼ちよっと、この御令嬢の前ではいいない事よ。じゃ、失礼。社長、すみませんがここにあるウイスキー下さいね」

銀子は、棚の上にある来客用のウイスキーびんをとり、ニコリと笑って外へ出て行く。「あきれた奴だ。昼間から、酒を飲む気でいやる。だから、ズベ公ってわけだが」

森田は苦笑して、田代を見た。

田代も、銀子の急の闖入で、燃え立って来た火に水をかけられたような苦々しい気分にな

なり、ふと、時計を見て、

「じゃ、親分、一千万円の大勝負についての細かい打合わせを、しておこうじやありませんか」

そして、中年の悪党は、扉を開け、作戦をねるために、戻って行く。部屋を出る時、森田は椅子の上で、屈辱の涙にむせんでいる小夜子に対し、こういい残した。

「じゃ、お嬢さん。今夜、大金が転がりこんで来たら、ゆっくりとまたお相手をしてあげるからね。おとなしく待ってるんだよ」

ボタンとドアがしまり、田代と森田が高笑いしながら足音が遠ざかっていく。

小夜子は、悪魔二人が眼の前から、消えた事に安堵したが、何時また彼等はここへ引き返して来るかわからないと考えると、小夜子は、我が身の羞しさも忘れて、何とか縄目から脱しようと思死に身をくねらせ、椅子の足に固く縛り止められている両肢を、悶えさせるのだった。

突然、隣の部屋で、そんな小夜子の努力を嘲笑するかのような笑いがどっと起った。

はっとして、小夜子は静止する。今まで恐怖の連続で、気がつかなかったが、隣の部屋には、やくざやズベ公達が詰めかけていたら

しい。小夜子は、ぞっとした気分になり、身動きする事をやめて、耳をすませた。

「若いだけあって、すごく元気がいいわ。ふふふ、どう、お坊っちゃん、すっとしたでしょう」

ゲラゲラ笑いながらいつてるのは、悦子の声だ。銀子、朱美の哄笑が、それにつづいてる。

「海千山千の悦子にかかっちゃ、どうしようもないわね。だけど、すごい勢いだったじゃない」

キャツキャツと笑う銀子と朱美である。

「どう、吉沢、川田両親分、先程からずいぶんとごせいが出るけど、美津子の方はどんな具合なのよ」

「へっへ、どうもこうも、ちよっと、これを見てみな。文夫のあとを追うのも時間の問題ってところさ」

「まあ、こっちもすごいわ。ホホホ、嫌だ嫌だと口ではいっても、やっぱり、美津子、あんた、こういう事が好きなのね。」

という銀子につづいて、朱美の妙に甘ったるい声が流れて来た。

「ねえ、美津子、そんなに鼻ばかり鳴らして、いず、嬉しいわ、とか幸せだわ、とか何と

かおっしやいよ」

——隣の部屋から洩れてくるズベ公達の言葉を聞く小夜子、どのような光景が隣で展開しているか、もとより想像もつかなかったが、文夫と美津子が何かやくざとズベ公達の間で悪どい責めかけられている事はわかった。恐しさと怒りに、椅子の脚につながれている小夜子の雪のように白い内腿の筋肉がピクピクとけいれんする。

突然、美津子の肺腑をえぐるような声が、隣の部屋で起った。

「文、文夫さんっ、許して、許して頂戴」

それは、断末魔を告げるようなうめきに似た声であった。

再び、どっと、ズベ公達の哄声がまきおこった。

嵐のあと

テーブルの上へ並べられたコップになみなみと注がれる琥珀色のウイキー。

銀子は、その一つ一つを「お疲さま」などといいながら、吉沢や川田、鬼源達にくぼって廻り、自分もまた、朱美達と乾杯し合って縛りつけられたうしろの柱にくったりともたれかかるようようにして、失神状態にある美

少年と美少女を愉快そうに眺めるのだった。

「へっへ。やい、美津子。グの音も出ねえようだな。ざまあ見やがれ」

吉沢は、銀子から受けとったウイスキーを一息に飲むと、ハンケチで手をふきふき勝ち誇ったようにいう。

川田は、骨のない白い生物のように、ぐったりと深く首を落としている美津子のあごに指をかけて、がっくりと仰向させる。

尾をひく陶醉のためか、美津子は眼を固く閉ざしたまま、雪のように白いなめらかな肩と量感を増してきた絹餅のような乳房をかすかに動かしながら、小さく唇を開いて吐息している。

「どうやら、おめえも、一人前の女に成長してきたようだな。俺達や葉桜団に大いに感謝すべきだぜ。だがよ。十八の生娘にしちや今の感謝のしかたはずいぶんと派手だったぜ」

川田は、煙草を吸いながら、腰をおろし、じっと眺めて含み笑う。

銀子と朱美も川田をはさむようにして笑いながら、唇の間から、ちよっぴりのぞかせている唾液のにじんだ赤い舌を指でつつき、「嫌ね。この子ったら、こんなものをのぞかせて。文夫さんに笑われるわよ」

美津子は、現実と夢の間をまださまよいつづけていたが、ズベ公達の言葉に、再び、身体中がゆさぶられるような屈辱を覚えて、うめき声をあげ、身悶えする。

「ああ——」

美津子は、激しく首を振り、よみがえったように、涙に濡れた瞳を開いたが、一瞬、美津子の視界に入ったものは、悦子の傍で放心状態のめじめな文夫の姿であった。美津子は、はっとして電気に当てられたように顔を伏せ、首筋も顔も、燃え上るように真っ赤に染めるのだった。

「何もそうひがむ事はねえやな。おめえの方は俺が引受けてやるぜ」

美津子は、いきなり、脳天をたたかれたような衝撃をおぼえ、ひどく狼狽して、再び、全身を火柱のように赤くし身をよじったが、もうどうしようもないようがつくり力を抜いてしまった。

悦びとも悲しみともつかぬ嗚咽をつづけながら、されるがままになってしまった美津子を見守る川田やズベ公達。そのように吉沢の前に身も心も投げ出してしまった美少女の、なめらかな雪白の美肌からは、それが十八の乙女とは思われぬ艶めかしい色気がほのほ

と立ちこめるよう感じられ、眺める悪鬼共はごくりと唾をのみこんだ。

また、吉沢に一切をまかせてしまった美津子自身、今までの自分を切替えた新しい不思議な心の斜面が、じわじわと身内の中に現れ始めた事を知悉したのである。

ようやく、立上った吉沢は、文夫と美津子の涙をふきとったハンケチを床に捨てて、「へっへへ、さっぱりしたろう。大分、成長して来てくれた事に免じて、剃るのは、明日までのばしてやるぜ」

銀子が、ふと気づいたように顔をあげ、「そうそう、隣の部屋にすばらしい美人がいたわよ。どう、みんな。ちよっと敬意を示しに行ってみないかい」

吉沢も川田も、何杯か飲んだウイスキーで眼元が真っ赤になっていた。

「面白いじゃないか。早速、御挨拶をかわしに行こう」

川田は浮き浮きした調子でいった。

「お坊っちゃんとお嬢ちゃんは、このままにしておくのかい」

と朱美がいうと、銀子が、

「そうだね。もうこれで二人とも逢えなくなるかも知れないのだから、しばらく、寄り添

わせておいてやろうよ」

なるほど、と銀子の指示を受けた川田と吉沢は、天井の梁へ太い縄をひっかけるべく椅子を重ねて、その上へのぼった。

バラリと二本の縄がからみ合うようにして天井から垂れ下がったのを見たズベ公達は、それぞれ二手に別れて、文夫と美津子の足枷を外し、その一本一本に縄尻をつなぎ止めるべく、押し立てて行こうとする。

精も根も尽き果てたような美少年と美少女は、反抗する気力もなく、ぐったりしたままやくざとズベ公達のさわるがままになっている。文夫と美津子の両腕を固く後手に縛っている縄尻は、天井から垂れ下がっている二本の縄にそれぞれつなぎ止められた。

完全に放心してしまっているような二人であったが、若々しい皮膚が接触すると、文夫も美津子も、はっとして、互いに顔を伏せ合い背を向け合ってしまう。

「遠慮する事はねえぜ。もっと、ぴったり身体を寄せ合ったらいいじゃないか」

川田は、身体を硬くしてしまった二人を面白そうに見て揶揄した。

「そうよ。お尻を向け合っていたって、つまらないじゃない。まっすぐ向き合いなよ」



と銀子もからかう。

身動きすれば、肩とか尻とかが接触し、それを恥じて、再び、身もよじる美少年と美少女は、何ともいじらしい風趣に、見つめている悪鬼達の眼に映ずるのであった。

今の感激をお互いに語り合うがいいわ、と銀子が笑い、さあ行こうよ、と一同を見廻すと朱美がいった。

「だって、姐さん。この二人、このままにしてほっておくと、変な気持ちになってしまうん

じやない。ここで美津子に浮気されちや吉沢兄さん、たまったもんじやないわ」

そりやそうだ、と吉沢はうなづき、背中合わせにして、二人を縛りつけておくべく、柱の下あたりに散らばっている麻縄をとりあげたが、川田がそれを止めて、

「ちよっと待ちなよ。腰のあたりが自由だからといっても、二人ともがっちり後手に縛られているんだ。そんな器用な真似が出来る筈はねえよ」

だがよ、と吉沢は口を歪めた。

「一心通れば、岩に矢のたつためしあり、というぜ。若いんだから、何をしでかすかわからねえ。この若造に初物を食われちや、たまらねえからな。」

それならよ、と川田はニヤリと笑った。

「背中合わせに縛っておくなんて芸のない事をするより、川田式縦縄をかけておきな。そうしておきや立派な貞操帯だ」

そいつは名案だ、と吉沢もズベ公達も北叟笑む。その縄のかけ方の説明を川田から聞いたズベ公達は、歓声をあげて、手に手に長い麻縄を持ち、屈辱の極に打ちのめされてしまったような状態の文夫と美津子の周囲を埋めた。

文夫に縦縄をキリキリかけているのは、悦子と朱美、臍を中心に菱形に縄をかけた二人のズベ公は、あまった縄尻をたぐりながら結び輪を一つ作りあげた。

「——な、なにをするんだ」

文夫は、ズベ公達のしようという事にさからって腰を振ったが、それは、最初のように激しい抵抗ではなく、如何にも敗残者めいた哀れなあがきであった。

「駄目よ」

朱美と悦子は、キャツキャツ笑いながら、遂に仕上げると、うしろに廻って、力一杯、縄をしめ上げ出した。

「ホホホ、うまくいったわ」

縄止めを終えた朱美と悦子は、改めて前へ廻り、しげしげ見つめて、吹き出すのだ。

美津子の方も、白い弾力のある腹部に黒ずんだ麻縄をキリキリかけられている。可愛い臍を中心に菱形に縄がけをしている銀子に川田も手伝って、余った縄尻をしごき、小さな結び玉を作り、銀子に渡すのだった。

涙も涸れ果てた美津子は、一切を断念した心で固く眼を閉じ、かすかに息づいている。暴虐の嵐で、遂に心を揺すぶられ、共を憎悪する心とはうらはらに、あのような、みじ

めな敗北の姿を赤裸々にさらけ出してしまった美津子に、今更抵抗する気力のあるう筈はない。

「文夫さんも、おとなしく縄をかけさせたのよ。さあ、美津子」

銀子は、ぴったりと閉ざしている美津子の太腿あたりを指でつついていった。

ぐずぐずするんじゃないよ、と銀子は邪慳にいつて、ピシヤリと今度は美津子のふくらと丸味を持った白い尻を平手打ちした。

美津子は、ふっと美しい瞳を開き、哀願するような、ペソをかくような、またたきをして銀子を見た。

「今更恥しがる事はないだろう。あんな風になった身体を皆んなにはっきり見せちゃったくせに、もじもじするんじゃないよ」

朱美や悦子も、美津子の側へ廻ってきて、はじき出すようにいうのだった。

美津子は、再び、観念の眼を閉じ、白い頬を充血させて、開き始めた。待ってましたとばかり三人のズベ公は寄ってたかって縄をかけ出す。美津子は、縦に縛るという意味がはっきりとわかり、その恐い悪魔達の着想と身体の内から吹きあげてくるたまらない屈辱感に、思わず、

「——ああ、そ、そんな事——嫌、嫌よっ」

と消極的な抵抗を見せて身をよじったが、もうおそかった。キリキリと尻の方へ縄をたぐりあげた銀子が腰縄につなぎ始める。

と、吉沢や鬼源達と並んで、ニヤニヤしながら眺めていた川田が、

「それじや的外れだよ。俺が作ってやった縄をうまく使わなきゃ、駄目じゃないか。下手クソ奴」

と笑いながらいふ。

「おっと、これはいけない。やり直しだ」

朱美が眺めて声をあげ、銀子は腰につないだ縄を解き出した。そして、再び、腰縄に縄をつないだが、川田は、首を振って、駄目だ駄目だ、と笑うのだった。

二度も三度も、そんな事をくりかえされる美津子は、毛穴から血が吹き出るばかりの屈辱感——と同時に奇妙なじれったさのようなものを感じ出したのである。

そんな美津子のうしろへまわり、ひきしほった縄を腰縄に固くつないだ川田は、前へ来て、美しい美津子の身体を唾を呑みこんで凝視する。美津子は、絶体服従の意志を表示するの如く、端然として白磁のきらめく肌を縄にゆだねて立っているのだ。

やくざもズベ公も吐息をつくようにして、美津子のすさまじい全身像に見とれている。

だが、朱美や悦子は、美津子の容貌が、それだけ美しく、肉体がそのようにきれいであればあるだけ、倒錯的な嫉妬にかられるらしい。二人のズベ公は、そんな美津子の左右に立って、縄に上下をしめあげられている形のいい乳房をねたましげに指でつつきだすのだった。

「貴女、最初、ここへ来た時はずいぶんと固いおっぱいだったようだけど、今じゃ、こんなに柔らかく、ふっくらとしちゃってさ。全く、魅力的になったじゃない」

と朱美がいうと、悦子は、おっぱいだけじゃないわよ、お姐さん、といって笑うのだった。

「どう、川田兄さんの作ってくれた縦縄の味は？」

朱美は更はそんな事をいって、無抵抗の美津子をからかうのだったが、美津子は、それに答えるかわりのように、背後にある文夫の背へ、自分の背をぴたりと押しつけたのである。

美津子の急に示した大胆な仕草に、文夫の方がうろたえた位であった。美津子は、美し

い眼を開いて、朱美や悦子をさげすむように見、文夫の背へ寄りかかるようにしたのだから、今までの美津子になかったそんな妖艶なポーズを眼にしたやくざやズベ公は眼をパチパチさせた。美津子にしてみれば、それは、この悪魔共に対する無言の抵抗だったのである。

——私の肉体は、あんた達の思っている通りのものに作り変えられるかも知れないわ、でも、美津子の心の中には何時も文夫さんが入っているのよ。それだけは覚えておいて頂戴——

美津子は、そんな事を心の中でいったのであろう。そして、凄惨な感じさえする鋭い光のこもった、いいかえれば、妖艶なばかりに色っぽい眼つきに敵意を含ませて、ズベ公達を睨んだのである。

野に育った新鮮な果実が、温室へ入れられ特殊な注射などによる方法で、次第に水々しく成熟の度を加えたように、美津子の熟し始めた肉体が、そのように妖艶なポーズをとらせてしまったともいえる。

美津子に背を押しつけられ、こすりつけられる文夫は、それにあふられたよう、いきなり、後手に縛られている手首を動かして、

美津子の、背に同じく縛り合わされている手首をまさぐり始めた。

「美、美津子！」

「——文夫さん！」

可憐といおうか、いじらしいといおうか、美少年と美少女はこらえにこらえたものか爆発したよう激しく鳴咽しながら、背といわず尻といわず、すりつけ合い、後手に縛られた手首をつかみ合うという哀れな抱擁をつづけるのであった。

啞然として、そんな二人を眺めていた川田と吉沢は、顔を見合す。

「へっへへ。こいつは、とんだ濡れ場だな。」

どうでい。やり切れねえ気分だろ。お互いに後手に縛られている身体がよ。」

川田は、声をたてて笑い出した。

さて、と銀子と朱美は床に落ちているピンクのパンティとサポータを取上げた。この二人の魔女は、周囲の哄笑に対する反発かのように必死になって肌を触れ合わせ始めた美少年と美少女に嫉妬したのだ。自分達がこの部屋を去った後、二人が言葉を勝手にかわし合う事が腹立たしくなったのだろう。そんなもので二人の口を封じようとする。

サポータをわざわざ裏返しにして、折り曲

げた銀子は、美津子の前に立ち、

「さ、お嬢さん、猿轡をするのよ。アーンとお口をお開け」

「お坊っちゃん。はい、お口を開けて」

朱美も、銀子にならって、美津子のパンテイを裏返しにして折りたたみ、文夫に対している。

そんなものを鼻先へ銀子につきつけられた美津子、一瞬、美しい黒い瞳を憤怒にキラリ

と光らせたが、すぐに悲しげに唇を噛みしめ固く眼を閉じて、小さく口を開くのだった。

文夫も、怒りと恐怖の色を瞳に浮かべて、

朱美を睨んだものの、美津子が自分のサポートできびしく猿轡を銀子にさしてしまった事に気づくと、自分の運命を察知したかのように気弱に眼を伏せ、口を開く。

白と赤の奇妙な猿轡をはめられ、残忍な縦縄をかけられている美津子と文夫の周囲を、

ズベ公達はグルグル回って、キャツキャツと笑う。

「恋人の匂いと身体のぬくもりを充分味あうがいいわ」

と、朱美がいい、つづいて銀子が「じゃ、あたい達は、隣のお嬢さんを慰めに行くからね。あんた達、退屈だったら、お尻を押しっくらでもして遊んでいるがいいわ」と大声をあげて笑うのだった。

臨時増刊号……愈々残部僅少……

悦虐小説と悦虐写真特集号

本誌全盛時代の昭和二十七年から昭和二十九年にかけての「悦虐小説」の傑作をすべて網羅して、本特集号の第一集から第五集（但し第一集、第五集は残念ながら売切れしました）までの五冊に収録いたしました。従って、「悦特」の五集によって、当時の代表的なS小説をごらんになることが出来ます。更にグラビヤ口絵としては、華麗な緊縛女体を、ふんだんに掲載しました。未入手の方は是非この際お求め下さるようお待ちいたします。

- 第一集「女体緊縛特集」（売切）
- 第二集「悶悦姿態特集」定価三〇〇円 略号「悦二」
- 第三集「嵐を慕う蝶」定価三〇〇円 略号「悦三」
- 第四集「拘束美態特集」定価三〇〇円 略号「悦四」
- 第五集「緊縛風景一二〇態」（売切）

昭和三十五年度特集雑誌案内

只今本誌旧号在庫の中で、一番古い号は昭和三十五年発行の三冊です。若干在庫しておりますから、未見の方はお申込み下さい。

昭和35年6月号 哀憫美形特集号 定価三〇〇円

昭和35年7月号 白線地帯の飼育室 定価三〇〇円

昭和35年9月号 不安と羞恥と嘆願 定価三〇〇円

最近刊行本誌特集号限定版案内

○臨時増刊「写真と絵画」文献特集号 定価 五〇〇円 略号（文献）

○限定版「美しき縛しめ」第三集 頒価一〇〇〇円 略号「美3」

○限定版「豊満と清楚」写真集 頒価一〇〇〇円 略号「限二」

○限定版「美しき縛しめ」第四集 頒価一〇〇〇円 略号「美4」

啓子散華（けいこさんげ）

高野原美

◆◆◆◆◆憧れのモデル大塚啓子に捧げる◆◆◆◆◆

私は奇クの巻頭フォートを飾っているモデル嬢の中で大塚啓子をもっとも好きである。

豊満な、しかも張り切った弾力性のある肌を持ち主である。啓子嬢のフォートが、最近では、多く掲載されるようになり喜びに耐えない。特に私は彼女の豊かに盛り上った腹部と大きく窪んだ丸い臍を見ると陶然とした気持ちになるのを感じる。それらを計算済みなのかどうか。啓子嬢の腹部の大写し、丸く深く大きい恰好の良いお臍の責め等のフォートが巻頭を飾り、ますます、私を楽しませてくれた。

私は、この大塚啓子という女性を、私のサ

ディズムの良き対象として常にそのヌード・フォートを前にして如何なる処刑に処すべきか等と白昼夢に耽り、楽しみ、いろいろな場面をスケッチしたり、文章にまとめたりしている。

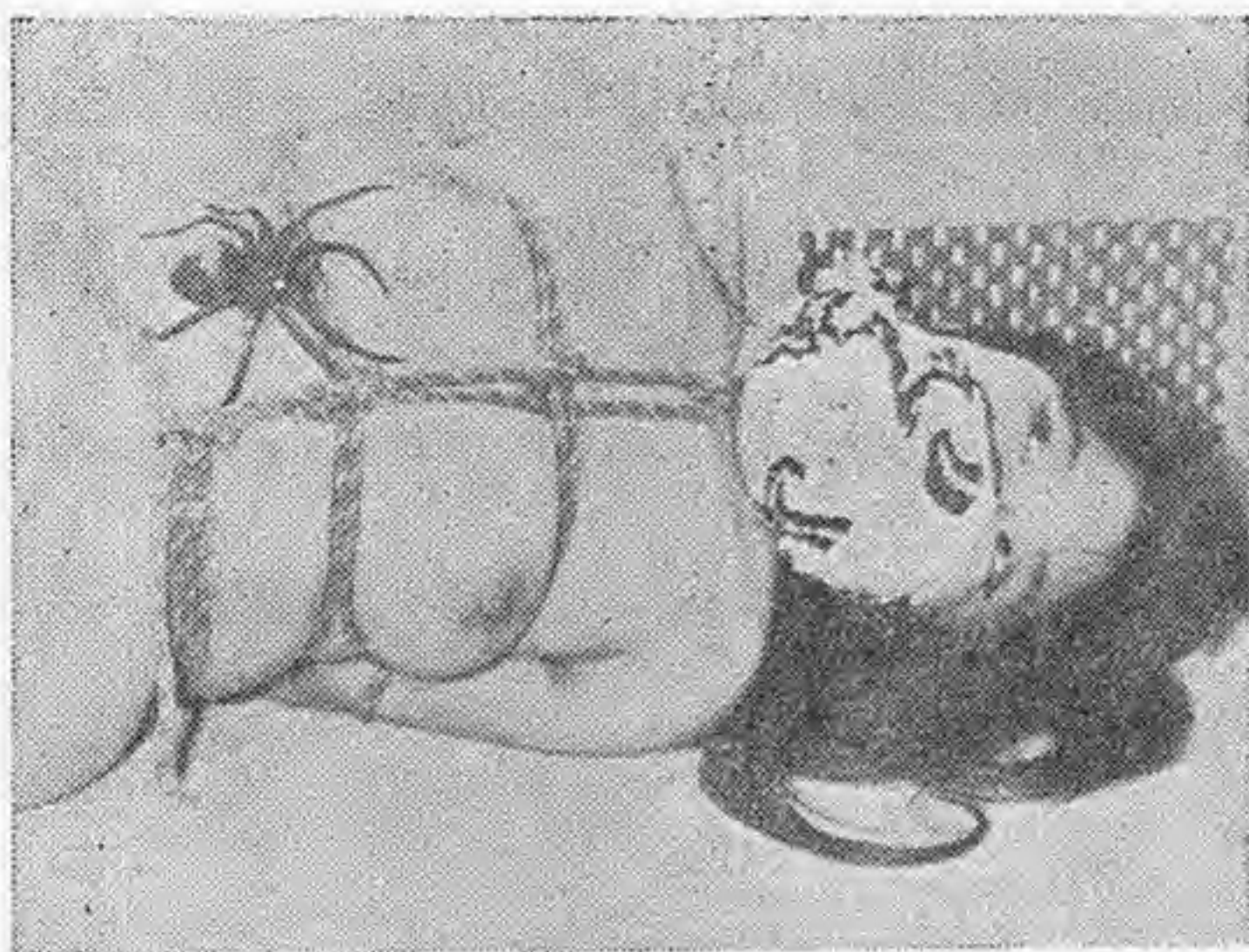
さきに啓子嬢を、蛙腹し仮想妊娠で生体解剖した私は、また異った責めを行ない読者とともに楽しみたいと思う。

―独白―

（二）

編集子の求めに応じて、今日も大塚啓子は奇クの巻頭フォートを撮影するために、大阪の南の別荘街に出かけた。最近の啓子の読者

評は新作を発表するたびに好評であり、演技も堂に入ってマゾ女性のNO1の名声をほしいままにしている。それだけに、彼女は撮影の数時間と云うものは、完全にその雰囲気にとけこみ、自分自身に加えられる責めを楽しみながら悦惚とした気持ちで自然に演じられるようになっていた。切腹なども演技としてではなく、自らが氷の刃をふくよかな腹中深く突き刺して苦痛に呻く錯覚におそわれ、刀を握って脇腹に当てると、身をねじり肩で息をする程の疼痛が下腹部を刺すように鋭く走るのであった。啓子の演技は、そのために真迫感が強く感じられ、本当に腹を掻き切って



しまったのではないかとカメラのレンズをのぞいている眼が一瞬どきんとするほどの物凄さがあつた。

何時だったか、強制空気浣腸を施したときである。

「一度臨月のお腹位、私のお腹を膨らして見たいわ」

と云う彼女自身の希望で、空気をどんどん

腹中におくり込んだ時があつた。その時等は「もうこれ以上は生命に危険ですから」との注意にも反対して、「私が、お腹が張り裂ける一步手前には合図をするから、そんな時はさっと中止して下さい。それまで、どんどん空気を送りこんで下さい。」と云つたものである。

實際、編集子も大丈夫だろうかと怖れる位、大きく膨れ上つて来た啓子のお腹と腹の皮が引き伸される痛みで齒をくいしばっている啓子の顔を交互に見ながら、強制空気浣腸を続け、臨月腹にしてしまったということもある位であつた。

読者のためには、マゾ女性として最高の真迫プレイを見せたい。また、見せるのが私たちの勤めであると割り切っているのである。それにしても徹底したマゾ・フォートのモデルである。この啓子が正午からフォート撮影に入り五時間ばかり責められたのであるから、もう休はくたくたで宙を浮いている様な感じになっていた。

弾力を秘めた自慢の若々しい肉体は縄目が残し、浣腸のためにお腹の隅々までが空っぽになり、空腹すら覚える肉体を浴槽に浸して疲れを休めた。怪しいマッサージで啓子の皮膚

についていた縄の縛り跡は、きれいにとれたが、何度も行なわれた浣腸は、腹の中に一物も残さぬほど、さっぱりと排泄を行なっていた。その上便意の波の様におそい来る強烈なやるせない刺戟を長時間こらえて便意苦悶の表情撮影のため、頭の心まで疲れたようになり、その疲労が一度にどっとおそつて来た。

強い浣腸液を注入し、「花と蛇」の静子夫人同様、長い時間排便を許されず、耐久させられたあの苦痛はさすがの啓子も今から思い出してもゾツとする程の苦しみであつた、しかし、どんな素晴らしいフォートが撮られたであろうと、自分の表情を空想すると、もう啓子は悪魔的な、——私たちは天女の笑みと思われる微笑が浮んでくるのだった。

「今日は疲れただろうからハイヤーで送ろうどこか北の食堂で食事でもして帰らないか」と云われたが、啓子は「私は、電車で帰ります。食事はおつき合いたいのので先に行つて待つていて下さい」と一人だけ別れて電車にのつた。

満足な責めの演技をした日には、啓子は必ず電車に乗り、人通りの多い雑踏の中を歩くのであつた。街の人は、単に豊かなからだの美人として見るであらう。しかし、私の心の

うちまで見とおす人は居ないのだ。今迄、私はどんなことを行つて来たか、皆に教えてやれば、スマシ顔のこの人々はどれ程驚き、私の犠牲的な行為に崇拜することであろう。

啓子は何も出来ず、平々凡々と暮している様な、つまらない人々の間に自分をおいて、自分を誇り、この人々を輕蔑し、見下したかったのである。人間の偽善性を憎んでいた。啓子は、つまらぬ人間にもまれながら、自分を誇り、もう一度真迫の演技を振り返り考えるのであった。

啓子は、とに角、くたくたに疲れていた。いたづらっぽい眼で真面目そうな男を見る何時もの彼女ではなかった。考えることも、まとまりがなく、いつの間にか電車の中で隣りの紳士の肩を枕にして眠ってしまった。紳士も、もたれかかったのが、魅力的な若い女性でもあり、その豊かな弾力感を楽しみながら、しかし、うわべはさも迷惑気にして枕としての勤めを忠実に果していた。

(二)

ふと何か妖し気な雰囲気があり、啓子は眠りより覚めた。

おやおやどうも様子は変である。あたりからは快適な香水の匂いが漂い、柔かな温かい

琴の音が聞えて来る。眼だけあけて恐る恐るあたりを見廻してみると何と豪華な宮殿のような建物で、窓外には四季とりどりの花が植わり、蝶や小鳥がとびまわり、囀りも聞えてくる。一体私はどうしたのだろう。それよりもここは一体どこかしら。

こう云う時は頬をつめて見るのが第一だわ。夢かも知らない。

啓子は、手を動かそうとしたが意外にも動かない。あれ！一瞬啓子の頭脳の働きは正常に戻ったようであった。啓子は、大理石の台上に寝かされて、しっかりと紐で縛りつけられていた。啓子は、さっぱり事情の判らぬままに

「どうしたのだろう。おかしいわ、さては奇クの編集子が新しいアイデアでもあって……

いや、それにしてもどうも様子が変だわ。確か私は今日浣腸場面の排便に耐え、身体を震わせ苦悶している姿を……そうだった。腎部を大寫しにして『排便に痙攣する豊満な啓子の白い豊かな双丘』と題して発表するのだと云っていたわ。……ああ恥しい、大丈夫だ、などと云って強烈な浣腸液を使用していただき、頭まで疲れるような便意に身悶えし、苦悶の表情を撮らし、そのあとの悦惚として排

便する、あのあられもない西洋便器にまたがった姿を数十枚も撮らしたのだったわ。頭がジーンとして……ファンの方々には、きつと喜ばれると思うわ。……でもこれは一体どうしたことだろう。あのあと、確か電車に乗って……」

と考えていた。

その時、入口の方から啓子も西洋の歴史小説の挿絵で見たことのあるフランス十六世紀頃の乳房も丸く押しあげ胸もとにこぼれるように膨れ上った服装をした宮廷の貴婦人があらわれた。

婦人は、啓子の大理石台の傍に来ると

「やっとお眼覚めになりましたか。女王様がかねてから、お待ちかねですよ」

と玉を転ばすような声で話しかけて来た。

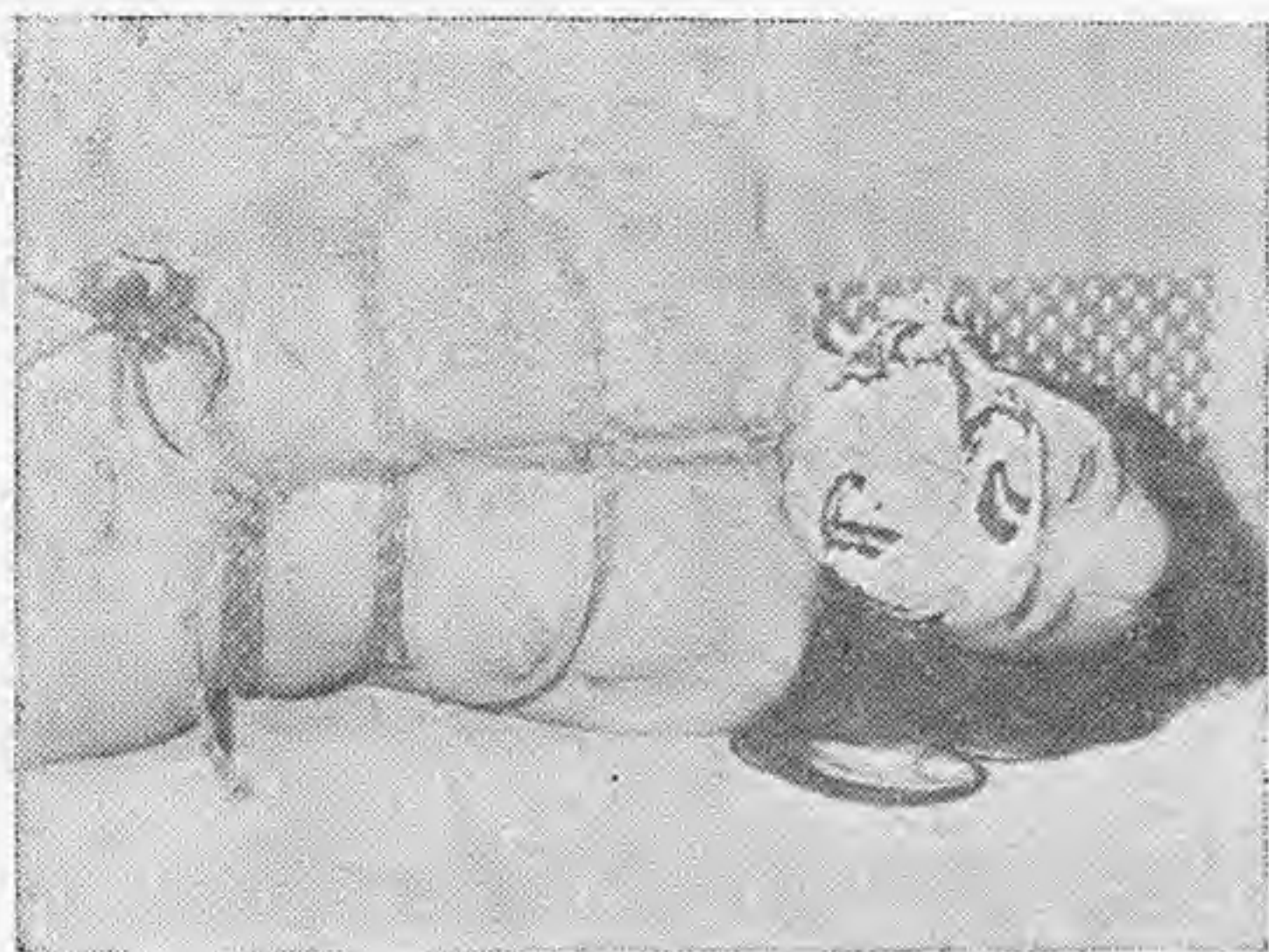
「ええ女王様ですって……」

「ええ私の女王、マリー・アントアネット様ですよ」

「マリー・アントアネットが……で私は一体どうしてここに……」

啓子は一瞬驚いて見開いた黒目をぱちぱちとさせ、夢ではと、又疑った。

「貴女は、その肉体で日本の男性たちを悩殺し、その上、残酷ブームとかの中心的存在で



ある奇クとか云う雑誌で、悲惨美だとか、苦痛の快楽を写真に撮らせて堂々と誇らし気に発表し、そのうえに、手記まで発表して生贄になりたい等と不遜なことを云っているのを女王が知られたのです。天帝の天魔鏡を通じて下界の様子は、私達には手を取るように判るのです。それで女王は、考えるところがあり大塚啓子という女を天界に連れて来いとお

命じになったので、早速呼び寄せたと云う訳なのです」

「それでは、私の行動が、天の神々にまで知れて……それで、どうしようと云うのでしよう」

啓子は、気持ちの悪さ半分と好奇心半分で尋ねた。

「私は存じません。女王様の命令に従っているだけです。では暫く、そのままでご辛抱願います。貴女にとっては、縛られたままの方がお氣にめすでしょうがね……」

「と、意味あり気な笑いを残して去っていった。

何と云うことであろう、吾々のアイドル啓子さんが天界にまで知れ渡り、そこで啓子は、どう云う待遇を受けると云うのであろう。緊縛されたままの彼女は、やはり不安の心が起ってくるのを押えることは出来なかった。

暫くすると、色々の服装、色々の時代、色々の人種の高貴な宮廷貴婦人が数十名も啓子の縛られている台のまわりを取り囲むようにして入って来た。その豪華な服装、匂い高い香水の香り、それ以上に美しい肉体と容貌の貴婦人たちであった。

啓子は縛られて自由のきかない身体で首だ

け廻して周囲に集まった貴婦人を見廻した。驚いたことに絵で見たことのあるクレオパトラや楊貴妃等々、歴史に残る東西の美妃が揃っているではないか。

一段高いところに立った気高い鋭い顔をした貴妃が、どうやらマリー・アントアネットの様である。啓子は、映画で見た「マリー・アントアネット」を思い出した。

大群衆を集めた革命広場につくられたギロチン台に引き立てられ、三角形に光る重たい鋼鉄の刃の下に、白く細い頸をさしのぼして処刑を待つ悲愴な女王の姿、その姿は今ここにはない。残酷なショウを見るように楽しんで集って来た群衆の間で哀れにもいとも簡単にストンと落された刃の下で、首と胴は切り離され籠にバサツと音をたてて転がった首、首のない死体は朱の血汐を流しギロチン台を朱に染めて……、その悲劇の女王の顔を今眼前に見ようとは……。

昔の死刑執行は、大観衆を集めて行なわれた。貴婦人たちも高尚な習慣として見物のために少々の遠距離も苦にせず集まって来て、死刑が最もよく見える場所を大金を出して確保したと云うことである。彼らに取っては、死刑を見ると云うことは、心の奥底に秘めて

いるサディスチックな感情を公にするということであり、この観賞は洗練された刺戟剤としての作用をし、官能を高めたと云うことである。

この死刑囚の苦痛の光景は、貴婦人たちをはじめとして、観衆の快楽の最大のものとして心に中に受け入れられていたのであった。首がとび鮮血が噴出し悲惨な光景が演じられることで彼らの肉欲はかき立てられた。だから、この処刑の観覧に参加できなかった多くの大衆のために、当時の新聞は、死刑囚の手足の痙攣までも、身の毛のよだつほどの精密さで詳細に報道し、絞首刑の場合等は死刑囚の苦悶の表情から全身の痙攣と筋肉の弛緩による排泄まで細かに情容しゃなく報道したと云うことです。

× × ×

不幸なことに啓子は映画を観てマリー・アントワネットの最後を知っただけであった。もし彼女が悲劇の女王の素い白い頸に三角の鋼鉄の刃が落下し、貴高い顔が恐怖にゆがんで血を噴いて転がり首のない亡骸が痙攣して物体と化する新聞報道を読んでいたとしたらより満足して女王の顔を拝し、責めを楽しんだであろうと思う。

啓子のために私は、もう少し女王の最後の模様を記しておきたいと思う。

いよいよ断頭台の露と消える朝、小さな田舎娘ロザリーのたったの進めで、女王は今生での最後の食事として肉汁を二匙三匙口にした。それからロザリーの手伝いで黒の喪服を脱いで軽い白いガウンに着換えた。その時下着が汚れていたので美しい下着をつけて死んで行きたいと望み、新しい肌着を着用するため見張りの憲兵に少し席をはずしてくれるように頼んだ。それは許されず、屈辱感と羞恥心に燃えながらも女中のかげで、こそそこと下着を着かえねばならなかった。着かえた肌着が処刑後、物珍しそうに後始末に来た兵たちの眼にとまって死後もなお恥ずかしめを受けるのを恐れ、汚れた下着はストロブの壁の後の板の割れ目に押し込んだ。朝十時に髪の毛を短く切るために刑吏がやってきた。ギロチンで首を切る場合、髪の毛を予め切っておくのである。女王は、もうこの時には、はっきり覚悟を決め毅然たる態度で何の反抗もせず平然と両手を背後に結ばせた。

十一時頃に、女王は荷馬車の固い板に席をとらされ、死刑執行人サンソンに両手を背後に縛られた縄尻をとられて革命広場に護送さ

れた。物好きな大群衆の中に女王の生命を断つための二本の柱と、この日のために用意されたぴかぴか光る新に磨き澄ました刃が十月の陽の光に輝いていた。荷馬車が断頭台の前で止まると、平然と誰の手もかりないで木の階段を登っていった。女王は高い台の上から大群衆を眼下に見下して何を考えたであろうか。最後の一瞬の貴重な生命である。果して自分の無惨な胴と首の離れた姿を想い悲しんだであろうか。私は、そうは考えたくない。女王として汚れた下着まで着かえ美しく死にたいと願った彼女のことである。女王は断頭台の上に処刑が、最も美しくすがに貴高いマリー・アントワネットの処刑だけあったと後世まで賞せられるような悲愴美が展開されることを望み、私ならきっとそれが出来ると自信と誇りを持って首をさしのべたことと思う。当時の社交界で、もっとも美しい貴婦人としてもはやされていた女体である。その女体が血を流して……。

刑吏たちは何の感慨もなく、女王を後ろぎまにひき摺んで、首を刃の下に、身体を板の上にさっと投げつける。縄を引く。はっと群衆が息をのむまもなく早々と女王の首は、美しい肉体よりはなれて下の籠の中にドサリと



鈍い音を立てて落下した。刑吏は血の滴る女王の首の髪の毛をつかんで高くさし上げ群衆に処刑の無事終ったことを告げた。

斬り口から溢れた鮮血はドクドクと板の上にあふれ、音を立てて地面に伝わり流れている。十二時十五分過ぎであった。

後ろ手に縛られたまま首のない美しい肉体は、血の気も失せて、小さな押車にのせられ

た。血の滴る首は無造作に品物のように、その足もとに放りなげられて運び去られていった。彼女は完全にやっかいな物体として棺におさめられ、同様に断頭台の露と消えた多くの人と一緒に大きな墓穴の中に放り込まれる運命にあった。

× × ×

こんな悲劇の女王の断頭台上の最後の模様等を空想して楽しんでいた啓子は、女王の口が開いて何か話しかけている様子を見て再び我れにかえった。

「大塚啓子さん、貴女の下界におけるマゾ女性としての活躍は、とくと、この天界より拝見して来て頼母しく思い感服していたところです。人間達は残酷ブームとかで妖しいマゾの世界に耽溺して快楽を満喫しているようですが、天上界においても私達悲劇的な最期をとげたマゾ女性達でマゾ研究会をつくって退くつをまぎらわせています。東西の刑罰の苛酷さの体験から享樂としての鞭打ちや浣腸遊びまで、いろいろな話題に花を咲かせています。ところで、私達はマゾ女性としての貴女の勇気と献身に感心し、一度啓子さんの肉体に責めを課して、眼の前で豊満な裸身を苦痛に身をくねらし、悶える姿を見たいと意見が

一致したのです。貴女は、私達の責めをその豊満な若々しい肉体で美事に受けとめ、私達の期待に応えて下さらないでしょうか。」

言葉つきこそ鄭重であったが、さすが女王として断頭台に上るときにも誰の助けもかりずに階段を登ったほどの女丈夫さが言葉の節々にあらわれ、嫌とは云えぬ押しがあった。

啓子は、それに対して負けぬ気を出して「光栄の至りです。私は喜んでお受け致します。奇クの名誉のためにも……」

と胸を張り誇らし気に答えた。

「ありがとうございます」

女王は眼を輝かせて感謝の意を表明した。周囲をとり巻いていた貴婦人の間に、ざわめきが起った。と云うのは無理矢理に意志に反して責めを加えるのではなく、自ら求めて責めを肉体に受け悦楽の表情で満足の苦悶の表情と云うもの、マゾ女性の真髓の反応を見たかったからであった。

「では用意を……」

女王の命令により侍女たちは夫々準備にかかったのである。

(三)

宮殿の一方に大きなスクリーンが用意された。啓子は縄を解かれスクリーンに向って寝

かされていた台上に座ることを許された。

「啓子さん、今から貴女に対して又とないお土産を差し上げたいと思います。ゆっくりと観賞して下さい。私達はこれこそ貴女に対する最上の贈物と信じているものです」

女王はやや静かな悲しみを帯びた声で、しかし満足気に云った。

「喜んでお受けいたしますわ。」

緊縛より解放され疲れた腕をさすりながら啓子は云った。

「では、初めて下さい」

真昼の明るい宮殿内であるが映写機から投影された画像は天然色で、しかもシネラマの様に立体的に浮き出して等身大の迫力を見せて映写された。

若い女性が薄暗い石牢の中で責めら苦悶にゆがんだ表情が見られた。

「私は魔女ではありません。ただ神のお告げを聞いただけです……」

苦痛に充ちた悲鳴に似た声が耳に鋭く聞えてくる。

ジャンヌ・ダルクであった。苛酷な魔女裁判の結果、火培りの刑を処せられることになった彼女は白い獄衣のまま縄をうたれて広場に引立てられる。

刑場の真ん中に特設された火刑台の柱に縛りつけられたジャンヌ・ダルクは

「魔女が焼かれるぞ、魔女の最後の様子は後世の語り草をするためにも、しっかり見なけりゃ……」

「魔女だから火位では死なないぞ、あの縄から脱け出して天国に行ってしまうのではなからうか」

等と魔女扱いにされて、若い救世主とあがめられた彼女も昔の栄光は今やなく好奇の眼に見守られて生きながら焼き殺されようとしている。

天国に逃げるというのを疑った為でもなからうが柴は膝の辺りまでしか積み重ねられず刑吏が一せいに柴に火を点ずると、その焔のために獄衣は、ぱつと燃え、パチパチと音をたてて燃え上る焔の中でジャンヌのむっちりした双の固い乳房が見えた。

腹部から豊かな腰、胸へと焔は燃え上り、焦熱地獄の中でジャンヌは何か叫び、激しく身悶えしていたが、苦痛の表情も酷しいまま豊かな皮下脂肪を焼きつくし、若々しい張り切った肉体を焦してあわれな最期をとげた。

処刑場面が終ると、一瞬静かな何んとも云えぬ空気がただよい、吐息が聞える。若い、

むせる様な裸身が焔のため曝け出され、白い肌が焦されて行くのであるから悲惨この上もなく残酷以上のものがあつた。

啓子は、途中で吐き気すら催した位で、余りにも刺戟の強い女体残酷に感動し、肩で大きく呼吸していた。

話に聞いていた八百屋お七も同じ苦しみを味わつたであらうと思うと、お七が愛おしく哀われに思われてくるのだった。

次は楊貴妃が中国古代の美しい衣裳に身を飾り、顔を蒼白にして現われた。高力士にともなわれて仏堂にあらわれた。

高力士の「貴妃様、お覚悟を」と云う声に楊貴妃は力なくうなづく仏堂の前の梨の木のかたわらにフラフラと歩み寄つた。

高力士は、その木の枝に七彩の練りぎぬを結びつけると「眸を廻らして一たび笑えば百の媚かしさ生まれ、六宮の粉黛も顔色無し」とまでうたわれた花の顔を支えた白い豊かな滑らかな頸に巻きつけた。

玄宗皇帝の後宮三千の美女すらも忘れさせ、寵愛をほしいままにした真白な玉子のむき身のような肌の色っぽい肉体が宙に浮かんだと思うと花なす顔は血の気を失い苦悶の表情を一瞬漂わせて三十八の生命を絶つた。

貴妃の亡骸は、宮殿に運ばれたが、叛乱軍は死を確認するために亡骸を中庭に運ばせ、司令官陳玄礼は掛けぶとんをまくって死に顔を改め、満足した。

世紀の美女の哀れな首吊りの大写しの顔の表情は、男の心をゆさぶって止まぬ位の美しさであつたために、より一層悲痛なものであつた。

続いてクレオパトラが薄い肌が透けて見えるような軽い衣服で登場、その豊かな肉体の曲線をなまめかしく見せて豪華な寝台に座つた。箱から毒蛇を取り出すと丸い伸びやかな柔肌にガツと噛ませた。白い肌は見る見るうちに紫色に腫れ上り胸をかきむしる苦しみ。双の乳房も身悶えのため白い隆起を見せ、神も宿ると云われた太腿を衣服の裾からちらつかせて苦しみシーツを握りしめて悶絶する。

次々と高貴な宮廷の貴婦人たちの悲痛な処刑や自害が息もつかせずに映し出され啓子は頭がつかれ、ジーンと側頭部に痛みを覚えるほどであつたが、じつと最後まで見続けた。

夢見るような心地であつた。こんな刑罰が行なわれ、また生贄として女体が提供されて来たのかと思うと、奇クの責めは単なるアソビで、この貴婦人たちを喜ばす等と云うこと

は思いもよらぬことだと思つたのであつた。

みな興奮が一応さめて室内に落ち付いた空気が流れると、女王は侍女に用意の巻書を持ってこさせた。

女王は啓子の前でそれを開けると静かに、ゆっくりと読みはじめた。

「古代の社会は無数のいけにえを必要とし、それを祭壇に捧げました。私は、自分のことを今の社会が祭壇に捧げるべくしてえらんだ必要は生贄の一人だということを知っています。……」

女王は淡々と読んで行く。

「あれ、これは私が奇ク誌上に投稿した『いけにえの幸福』と云う手記じゃないの。こんなものを読みあげて、一体どうしようと云うのだろう……」

啓子は、いぶかりながらマゾ女性としての誇りを感じながら聞いていた。

「私の肉体は、それに反して数万の射すような視線につきさされ男性や時には同性の方々の眼にもとまり、そこでそれぞれの人の思いのまま空想のままに、あらゆる生贄に供せられるでしょう……大塚啓子は、世にも残酷なみなさまの所望される通りの死刑にかかってさし上げたいと思ひ、もう娼婦の段階すら通

りこした牛馬以下の白い肉塊で。……」

女王は、啓子の手記を読み終るとくるくると巻いて手にもったままで云つた。

「実に立派な手記で私達は、貴女の徹底した心に感心しました。これは貴女の実際の本心であろうと思っています。私達は生贄にされて驚くとともに憧れが現実となり誇らかに喜んで死んで行く女性の心理を空想の世界だけでなく、現実に貴女にも体験していただくと思っています。貴女は、いかなる残酷な処刑にも耐える決心ができましたか」

啓子は、映画を観せられた時から、もうすでに覚悟は決めていた。

この貴婦人たちに負けるものか、こうなれば例え生体解剖されようと八ツ裂きにされようと少しも怖れはしない。啓子の根生のほどを見せねばと。

「いいですとも、啓子は立派に覚悟は出来ています。いかような責めでも処刑でも思いのままに、この肉体に加えて下さい。」

と立派に云い切った。

啓子とすれば、これは単なる強がりではなく自分自らの肉体でマゾ女性としての本質を確かめてもみたかったのであろう。

(未完)

【SM】より見た世界史シリーズ

美姫ローザモンドの生涯

黒淵 嬰一



五六七 years ago, Singara (after the Butapest) of the Longobard Kingdom with the wedding ceremony was held in a grand manner.

The bridegroom was the young prince of the Longobard Kingdom, and the bride was the daughter of the King of Gepids. The wedding was held in a grand manner.

For a hundred years, the resources of the Roman Empire were used for trade and accumulation. The kingdom of Gepids, rich in gold, silver, and precious stones, used these for their own purposes. The kingdom of Gepids, rich in gold, silver, and precious stones, used these for their own purposes.

The bridegroom was the young prince of the Longobard Kingdom, and the bride was the daughter of the King of Gepids. The wedding was held in a grand manner.

The bridegroom was the young prince of the Longobard Kingdom, and the bride was the daughter of the King of Gepids. The wedding was held in a grand manner.

The bridegroom was the young prince of the Longobard Kingdom, and the bride was the daughter of the King of Gepids. The wedding was held in a grand manner.

する壮挙を計画していた。これは実現されて千四百年後の今日迄ロンバルディ平原にその名を留める成功を見た。ロンゴバルドの若き英雄は径八寸の金盃と長さ一呎の骨角盃とを交互に傾け、酒に酔い、夢に酔い、歡喜に酔った。その歡喜は多年の宿望を漸く達し得た満悦であり、多年の宿望とはローザモンドを妻に迎える事だった。アルボインはロンゴバルドの王冠を脱ぎ、紫のガウンを棄て、遂に上着も抛り出して褐色に陽焼けした腕も肩も露わし、自らそれを叩いて蛮歌を高吟し、且つ咆哮した。

然るに、傍の新婦は大理石像の如く、微動もせず、表情すら変えず、黙然と坐った儘だった。

ゲピドの王女はゲルマンの野性美と、ギリシャ的な教養を伴った優雅とを一身に兼備していた。ローザモンドというその名自体が女性美の特称だった。背丈は女性としては高い方だが、アルボインの隣に坐っているの小さく見えた。瘦形ではない。体に密着する紅のドレスは外からでも弾力的な腕や丸い肩を察知することが出来るのだが、アルボインの傍では矢張り繊細な感じがした。血色の良い頬は丸い感じだったが顔全体が小さいので、

眼や鼻や唇は實際以上に大きく見えた。胸や肩の一部、膝の上に揃えた十指と手の甲、要するに露れている限りの皮膚は、頸の周囲に飾られた一連の真珠よりも白く、透き通る如くだった。先刻戴いたばかりの金冠が頭を締めていたが、肩に溢れた金髪はその冠よりも輝き、宝石で縁取りしてあるガウンの背に流れ、波打っていた。幾分前屈みの姿勢ではあるが、盛上った胸の双丘は十七才とは思われない程に発達し、豊かさを暗示していた。大きく見開かれた瞳は神秘的な深淵の色を湛えながら、床の一隅に視線を固定させていた。碧眼の内側に涙の玉が一つ宛宿っていたが、溢れて落ちる程には成長しなかった。今日の式典に涙を見せてはならないという自制の爲だろうか。或は既に涙の源泉が涸れ果てていたのかもしれない。

夜半過ぎててもなお宴は果てなかったが、国王夫妻は秘かに退出した。アルボインは酔眼朦朧、行步蹣跚、数人の侍女に支えられて漸く寝室に到った。ローザモンドは悄然と後に続いた。初夜。併し何度目の初夜か。

アルボインは酒宴の席以来既に裸同然で、室の中央に置かれた、豪華な寝台に腰を下した。ローザモンドは着替えのため、侍女と共に

に隣室に入った。

アルボインがこの寝室を使用するのは始めてである。シンガラシンガラの宮殿はローマ化された東ゴート王によって建てられ、野蛮なロンゴバルド人には適していなかった。そこには北欧の剛健と南欧の豪華が同居していた。寝室の四壁は色大理石の斑岩で天然の模様を織成し、壁厚く、窓小さく、それすら紅のカーテンを以て凡ゆる音と光を遮っていた。天井は精巧な彫刻を施した穹梁が交差し、床は虎、熊、豹、獅子の皮を以て部分的に掩われ、寝台は金の孔雀四羽に支えられた形を成し、左右には金の水差を置いた象牙の小卓と銀の燭台が並んでいた。

東面の壁には、ロンゴバルドの若き英雄が自ら使用する十六種の武器が巧妙な組合わせで飾ってあった。両刃の大剣、南方式の楯附刀、東洋風の半月刀、投擲用の短剣、ゲルマン古来の長槍フラメアエ、投槍に使える広刃ラシケエの短槍、三叉の大鉾、鳶口の附いた短戈ハレバルド、弓箭矢筒の一式、投矢、片刃の戦斧、鉄鉾を打った棍棒、革の長鞭と鋼製鞭の一組、鈎附攀城綱、投縄、分銅附の鎖、アルボインはこれ等の武器を同等の熟練で駆使する事が出来た。

西面の壁にはアルボインの甲冑を中心に、

ロンゴバルド王位を表わす鉄冠や権標、王章類。王後の金冠や装飾類が置かれ、且つ化粧室に通じる扉があった。南面は窓と戸棚、北面は暖爐が造りつけられ、近侍を呼ぶに用いる大銅羅があった。

半透明の黒い寛衣を纏ったローザモンドは隣室から音も無く現れた。侍女達は遠い室へ退いて行った。

アルボインが何と言ってローザモンドに呼掛けたか歴史には記録が無い。慄える声で歓喜を叫んだか。どこにでも有る恋愛小説の文切口上を述べたか。何れにしても話しかけたのがアルボインであり、終始黙って従ったのがローザモンドである事は確信出来る。

アルボインは姿に似ずフェミニストであるらしく、酔っているが、自分で掛布を捲る為に広い背をローザモンドの方に向けた。

その瞬間、武勇の誉高いロンゴバルド王は背後に起った殺気と、風を切る鋭い切尖を意識した。泥酔して麻痺に近い神経が、鋼鉄にだけは磁気の如くに反応した。反射的に右へ開いたアルボインの左脇を白いものが擦った。アルボインは早くもその白いもの、短刀を握ったローザモンドの腕を掴んでいた。

アルボインの左手がローザモンドの手首を

握り、力を加えただけで短刀は床に落ちた。併しローザモンドは真珠のような高貴な歯でアルボインの腕に噛みついた。腕から滲み出た血がローザモンドの唇を染めた。だが、鋼鉄の如き腕に歯は幾らも喰い込まなかった。アルボインの酔が醒めた。噛まれながら微笑した。ローザモンドが必死に噛みつくのに対し、寧ろ満足する迄噛めとでも言う如く、左腕を差し伸べた。併しアルボインの顔には失望の色が浮んでいた。

ローザモンドの顎が先に屈伏した。アルボインが左腕を一揺りすると、真赤な唇を一杯に開いたローザモンドは忽ち振り離されて後に倒れかかった。アルボインの右手が軽く半旋し、手の甲がローザモンドの頬で激しく鳴った。それだけで充分だった。美しいローザモンドは鼻血を噴いて床に横転した。

幼時から武將の間で教育されたアルボインは誠に純真な男だった。戦場では蛮勇を振うが、女に乱暴したのはこれが始めてだった。女とは斯くも脆いものと始めて知ったのか、ロンゴバルドの王は左腕から一筋の血を流しながら呆然と立っていた。

ゲピドの王女は起上る気力も体力も失い、倒れた姿勢で顔を抑え、微かに何か言った。

それは「殺して」と聞えた。アルボインの頭に、次第に血が上って来た。アルボインはローザモンドを軽々と抱き上げ、頭越しに寝台に叩きつけた。頸の周囲から真珠が飛び、驟雨の如き響を立てて床に散乱した。

アルボインは右手でローザモンドの飾帯を引き抜いた。左手は金髪の束と共に白い首を握っていた。ここでアルボインは少し躊躇した。ローザモンドの頸から、体温と感触が直にアルボインの掌に伝った時、飾帯を首に巻いて締め上げる決心が揺らいだ。ローザモンドは余りにも美しかった。

やがて、アルボインはローザモンドを引き寄せた。絹の裂ける音が寝室に反響した。これはローザモンドの絶叫に対する形容ではない。王女は唇を噛んで屈辱に耐えていた。夜着と膚着が宙を舞った。アルボインはローザモンドの白い手首を背に重ね合わせ、その上に、既に握っていた飾帯を幾重にも巻きつけて固く結んだ。

ローザモンドは髪を乱して顔を埋め、寝台の上に俯向きに臥った。儼然、身動きもしなかった。女を責めた経験の無いアルボインはローザモンドを次に何うすべきか暫し迷った。事が彼の新妻に関する事だけに、近侍を呼ぶ事

も出来ない。自身で処置しなければならぬが、如何に責めれば女が屈伏するのか。

アルボインは壁の馬鞭を把った。寝台の周囲を歩き廻って漸く位置を定め、ローザモンドの腿に打下した。一瞬、女体は反り返り、元に戻った。唇を噛んだ咽喉の奥から低い呻き声が洩れた。激しい悲鳴を期待していたアルボインは、案に相違して次の鞭を振上げたが、鞭跡が見る間に赤く腫れ上って来るのを見た途端に鞭を投出した。アルボインは案外気の小さい男らしい。

併し戦場の蛮勇と、閨房の小心は両立するし、異常ではない。筆者の先輩にも解剖の大家でありながら猫の轢死体を見て二日間食事が出来なかった医学の教授がいる。

寝台に坐って天井を見凝めていたアルボインは、丈夫な梁に氣附いた。吊ってみよう、という思い付きは彼にとって上出来だった。壁に掛けてあった投縄や、綱や、鎖を一束にして取寄せた。ローザモンドの純白な胸と腕に、投縄用の綱が長さの続く限り厳しく、併し拙劣に巻き附けられた。透き通るような皮膚が白濁し、又は桜色に染まり或は盛上り、綱の下になった部分は陥没し、美事な双丘は不規則に歪んだ。ローザモンドは無抵抗で身

を任せていたが、最後に一締めされると堪まらず一声呻いた。

アルボインは今迄経験した事のない歓喜を覚えた。それが何であるか解らなかったが、無性に美しい虜囚を責めてみたくなった。背中で綱を握り、宙に吊って揺すった。ローザモンドの呻き声が次第に高くなった。併し遙か離れた近侍の室に聞える程ではなく、ローザモンドは悲鳴も絶叫もあげなかったし、哀願もしなかった。

アルボインは、吊った位では女体が壊れるものでない事を確めてから分銅の附いた鎖をローザモンドの背に通し、天井の梁に投げて反対側へ引いた。鎖の端には攀城用の太綱を結んで寝台の脚に固定した。美しいローザモンドはアルボインの眼の高さで揺れていた。その状態の俛で脂汗を流して耐えていた。アルボインは効いた、と思った。果してあと、何の位で女が屈伏するか。

脚は縛ってなかった。故意ではない。縄が足らなかったに過ぎないのだが、これが却って屈辱を倍加した。吊られた女体というものは自力で膝を閉じる事が出来ないらしい。

猿轡のような高等技術はアルボインの知る処でなかった。且つ屈伏の哀願を直接の声で

聞きたい期待から、口を封じる事はしなかった。但しローザモンドは自ら固く口を閉じ、無意識に洩らす苦悶の他は、発声を自制していたから、外部操作で抑止する必要も無かった。そしてアルボインは吊られた女体の苦痛が何の位大きいか理解していなかった。

読者の中には飛込んで行って(ローザモンドを助けるのでなく)アルボインに手伝ってやりたくなる者が居るかもしれない。読者の期待に反して申訳ないが、凡ゆる歴史文献に徴してもアルボインの加虐趣味は否定される。酔った時と戦場に在る時を除けば小心な男であり、女を扱う事と縄を持つ事に関して は初心者だった。一方のローザモンドは高貴な生れであり、最近迄縛られた経験など無かった。K・K的高等技術者同志のプレイには較べるべくもないのだが、かかる炊き損いの三階飯も時には良いだろう。如何なる上手も恐らくはロンゴバルド王夫妻同様の段階から出発したに違いないのだから。

ローザモンドの豊満優美な体は綺麗な曲線を見せて空中にあり、鎖を中心として緩慢な回転運動を繰返していた。それで寝台に坐ったアルボインはローザモンドを凡ゆる角度から眺める事が出来た。アルボインの眼は恍惚

としていた。それは自ら創作せる造形美に陶酔している芸術家の眼だった。

ローザモンドは、腕から始めて急速に全身へ拡って行く激痛に対し、頑強に抵抗していた。頸の骨は未だ麻痺していなかったから、体が回転するのと反対の方向に顔を向ける事が出来た。大きな瞳は一杯に見開かれ、アルボインを睨んでいた。二人の視線が空中で交差し、火花を散らせた。先に外らしたのはアルボインの方だった。

腕は変色し、全身脂汗に光り、明らかに屈伏寸前と見えるのに、この剛情な事。若しかしたら死ぬ迄耐え抜くかもしれない。

アルボインは秘かに思った。

これがゲピド族の伝統なのだ。

上のローザモンド、下のアルボイン、二人は期せずして同じ事を回想していた。

ゲピド王国の絢爛たる過去を。

× × ×

紀元四四一年から十三年間に亘って西アジアから全ヨーロッパを吹き捲った蒙古の嵐はゲルマン民族を追立て、東西両ローマ帝国を震動させた。これがフン族のアッティラ大王である。ゲピド王アルダリックと東ゴート王ワラミルは、フン王の左右の手となって働いた。

アッティラは全欧州からの掠奪品と東西両ローマ帝国からの貢納金をダキヤのトレドに構えた本営に積上げた。アッティラが病歿すると、遊牧帝国の常として彼の大国家は分裂した。最有力のゲピド王アルダリックはアッティラの王宮とダキヤ地方を入手した。フン王が集積した金銀珠玉絹布類の莫大な財宝と、軍の主戦力を構成した東洋騎兵の大部分もアルダリックの所有に帰した。ダキヤは現今のルーマニアに当る。ゲピド王朝は以後百年間この地に君臨した。

ダキヤは金鉱を産し、ドナウ河口は農産豊かにして小麦は輸出する程穫れ、北方は牧畜に適して馬と羊も多く、トランシルバニア山地は古代世界に貴重な塩を供給する岩塩鉱が有った。又東ローマ帝国に対しては高価に同盟を売りつけ、軍事補助金という名目の貢納を受入れ、更に東ローマ帝国と諸蛮族王国間の中継貿易を独占していた。ローザモンドが成長した時代のゲピド王国は、人口二十万、その中戦士五万、他に農奴多数を有する半文明国に成長していた。ローザモンドはギリシヤ的物質文化とゲルマン的剛健な気風の中に生れ、且つ育てられ、この調和が彼女の容姿と性格を形成した。

ゲピド王国の西隣、パンノニア地方に定着した東ゴート族はゲピド族程に恵まれていなかった。テオドリック大王の時代に全族挙げてイタリヤに移住し、短期間ではあったが輝かしい王朝を地中海の中央に建設した。ゴート族が遺棄したハンガリー平原とシンガラのはらはゲピド族が即時接收した。本来パンノニアはローマ帝国に属する筈だったが、ゲピド王トリスンドは一片の挨拶で既成事実を押し通した。

「皇帝陛下、ローマ帝国は、余りに広大であり、陛下は常に和戦何れかの手段を以て領土の引取者を求めて居られます。陛下の忠実なる同盟者ゲピド族は、陛下の御信頼に応えてパンノニアを領収致しました故、事後承認を申請します。」

東ローマ皇帝ユスティニアヌスは憤慨したが、彼の武力はイタリヤ、アフリカ、ペルシヤ国境に分散していたし、ダキヤ、パンノニア地方は帝国に編入するよりは荒廃させた方がよいと思われた。そしてローマ皇帝は鋼鉄の使用に於て甚だ臆病だが、黄金は惜しまず振廻す実力を持っていた。北辺の寒地から驍悍兇猛なロンゴバルド族が呼寄せられ、パンノニアを侵した。ゲピド王トリスンドとロ

ンゴバルド王アドウインは、各々その民族を率いて三十年に亘る死闘を展開した。東ローマ皇帝は黄金を武器として弱い方を援助し、抗争を永引かせた。これは帝国にとって最も望ましい状態だった。

両王国の玉座は殆んど同時にその子に移った。ゲピド王はクニムンドとなり、ロンゴバルド王はアルボインとなった。クニムンドは一粒種の娘ローザモンドを持っていたが、ゲピドの王権は、彼女の夫に相続されると見られ、彼女は幼時から絶世の美貌と聡明な才智で知られていた。王子の時からローザモンドに恋していたアルボインは正式に結婚を申し込んだ。これには三十年に亘る両国の交戦を終らせ、ゲルマン民族共通の敵ローマ帝国に対し同盟しようという政策的意図も含まれていた。併し求婚は一蹴された。クニムンドの兄は第一王子として戦場でアルボインと会し、討たれていた。

五六五年、ヨーロッパの政局に重大な変化が起った。東ローマ帝国ではユスティニアヌス皇帝が死に、後を継いだユスティヌス二世は、ゲルマン民族に対する経済援助を打切った。東方からはフン族と同系のアヴァール族が移住し来り、ガリヤを掠奪した後ドナウ河

に沿って下った。アヴァール族は優秀な騎兵を中核とする四万の兵を持っていた。ロンゴバルド王アルボインはアヴァール族に同盟を申し込んだ。ロンゴバルドとアヴァールの兵力を合したならゲピド王国に対する絶対優勢の地位が得られる筈だった。

アヴァール側は同盟の価格を極限迄引き上げた。ゲピドの住民と財産は均等に二分する事。但しゲピド王国の土地はアヴァール族の独占的支配に帰する事。戦備の為ロンゴバルド族が所有する家畜の一角を即時アヴァール族に贈与する事等。そしてアルボインは、只一箇条の条件と引換えに、この苛酷な条約を悉く承認した。アルボインが提出した条件は「ローザモンドの身柄はロンゴバルド王の所有とする事」だった。一民族を絶滅する戦はローザモンドの魅力の為に起された。

ローザモンドの回想はここで中断された。胸を締めていた縄が突然緩んだ。アルボインの拙劣な技術は乳房の上に縄を掛けるといふ失策を犯していたので、体重と汗により縄は次第に上方へ移動し、遂に脱けた。宙吊りの位置から体だけ落下し、縄は忽ち首に絡んで締めつけた。ローザモンドは意識を失った。

あとは夢の中だった。

美しいローザモンドを得る為に動員された彼我の戦士は十二万、その内半分が一日で死ぬか又は永久の不具者となった。

ゲピド王クニムンドは部分的にギリシャ化された正規軍五万と女軍二万を指揮した。

ロンゴバルド王アルボインは連合軍の戦士七万と女兵三万を伴って戦場に赴いた。

ゲルマン人は壮丁の悉くを戦士として使用するから機能的補助兵力即ち輜重兵、工兵、衛生兵、整備兵、主計兵に相当する組織がなかった。そして放縦な戦士は手元に有る食糧や物資を無計画に消費する習慣が有った。一方ゲルマンの女は剛力な上勇敢だった。ゲルマン民族の出征は多少とも民族移動の形で行われたから、戦士の娘や未だ子供の無い妻達は補助兵として役に立った。戦士は個人の武器をもつ以外の労働から解放され、その他一切の仕事は女軍に負わされた。食糧、馬糧、矢、投槍、工具資材類の一切は車載され、挽曳する牛は女が扱った。宿泊する営舎の建設、陣地の構築、武器の修理、道路の整備、材木を伐ったり石を積んだり、要するに凡ゆる後方勤務は女軍の任務だった。傷病者の看護も女軍に専属した。但しその中には恢復不

可能な傷者に与える安楽死が含まれた。その義務は当の傷者に最も近い親族に負わされ、且つ平然と履行された。以上の他、戦場に遺棄された兵器、物資の拾集や、掠奪品の集積管理、運搬、捕虜の監視も女軍の受持とされた。そして直接の任務ではないが、より大きな作用として、督戦隊の効果が有ったが、これは実例を示して後述しよう。

女軍の構成は前述の如くだが、その年齢層は当然な事として『適齡者』に相当した。愛する者を背後に置く事は戦士に全能力を発揮させる上に力があつたが、同時にそれは勝者に対し獲得に依る最大の歓喜を約束し、敗者には喪失に依る最大の苦痛を与えるものでもあつた。

ローザモンドは十七才。ゲルマンの標準では立派に成年女子だった。そしてクニムンド王は他に子供が無ったから王女は当然に従軍の義務を負った。但しローザモンドは武技、馬術に練達し、力量も男並で、勇敢な精神と不屈の忍耐力を備えていた。彼女の親臨自体に戦士を奮起させる魅力があつた。ローザモンドは宮廷女官の一隊を組織して怪武装の上戦列に加つたが、彼女は卓越せる偵察能力を持っていたから、時に王女の身で危険を冒し

た。その優れた視力は遙かな森林中の哨兵を見分けたし、地面に耳を当てて窺えば、襲来する敵軍歩騎の別とその兵力を正確に判定した。軽騎前駆して敵軍の行動を偵知する能力はゲルマンの蛮軍中には珍しいものだった。

戦闘は早朝に始つた。ゲルマン蛮族は勇猛だが持久力が無い。只一回の突撃に全体力と精神力を消耗するし、それ迄に勝敗が決るのが通例だった。この意味に於て今次の決戦は例外に属した。

ローザモンドの属する右翼は設堡陣地を構え、アヴァール族の騎兵を阻止した。クニムンド王の率いる中軍と左翼はゲルマン古来の複合楔形陣を作り、ロンゴバルド軍の同じ戦術と正面から激突した。

ゲルマンの戦術はタキッスの名著でも窺える。一楔形陣は一血族より成り、族長を先頭とする鋭角凸陣を作る。この楔形陣が多数集つて一軍を成す。故に楔形陣内部の団結は強固だが、楔形陣相互の連繋は不充分である。強大なものもあれば弱小なものも有る。一寸日本の『魚鱗の備』に似ている。先頭の族長が相手方の旗幟に挑戦し、一陣毎の対戦となり、それが全戦線に波及するのだが、要するに一騎討の延長であり、その集積だった。巧妙な

戦術や高等な動作が有るわけでもない。故に戦況の詳細な描写は省略しよう。

両軍共に弱い部族は消滅した。勝残つた方は再糾合されて新しく楔形陣を組み直した。ゲピド族が先ず押されて崩れ立ち、左翼端から敗走が始つた。併し一旦逃げ出した者の足は途中で止つた。戦線後方には女軍が展開し敗退者の逃走を遮っていた。卑却、臆病、叛逆者、凡ゆる悪罵が浴びせられた。それを冒して女軍の中に転げ込んだ疲兵は味方の女共に叩き殺されるか又は絞殺された。何人かの女は着衣を抛り出して全裸体を露出し、輜重車上に突立ち、これを敵に渡すのかと大呼した。退却軍が足を止め、反撃に転ずると、二万の女軍が声援の大合唱を送った。女軍の一部は興奮の極戦列の中に駆け加つた。

長駆追撃に息を切らしたロンゴバルド族の方が押されだした。同盟軍のアヴァール族が余り奮戦せず、戦場北翼で阻止されている為南翼のロンゴバルド族は、ゲピド族の殆んど全圧力を蒙った。ロンゴバルド族が後退し始めると今度は此方の女軍が怒った。輜重車を横一線に並べて退路を遮り、車の陰から予備の投槍を隙間なく突並べ、寄らば刺さんとの擬態を示した。

戦士の多くは既に倒れ、傷つき、然らざる者も疲弊し、第三次の激突は両軍共少数になった強者のみに依って行われた。かくて両軍旗本同志の融合が可能となった。アルボインとクニムンドは互に槍を把って馬上に相対した。数万の軍を率いる国王と国王が戦場で個人的武技を以て対するのは、古代に於ても珍重すべき実例だった。ローマ二千年の歴史でも執政官や皇帝が自ら敵の主将を討取った例は四回しかないし、日本でも僅か数分間の出会を八幡原直戦^{じきいくさ}と称して特種例扱いしている。

両国王の周囲では長槍^{フラメア}を失った兵士等が素手で撲り合っていた。

この日のローザモンドは真紅の軍服に黒革の胴着を重ね、赤紫色の戦袍を靡かせ、太い革ベルトに短剣を帯びていた。紅の上着は袖口を真珠で飾り、無袖の胴着は金糸で一面の刺繍を施してあった。足は金の半長靴と拍車をうい、腿は掩ってないが胴着の長さがハーフコート程あったので馬上では側面を掩う事が出来た。ローザモンド自身は武技を振わなかったが、彼女の指揮下にある精撰された宮廷女軍騎馬隊はゲピドの名を高揚した。ローザモンドが属した北翼方面は、アヴァール騎

兵の突撃をよく阻止し、戦況をやや有利に保った。

戦場の南翼が危険になった時、敏感なローザモンドは迅速に状況を察知した。麾下の女軍を転回させて中軍に急行したが僅かな差で父王の最期に間に合わなかった。アルボインは遂にクニムンドを槍先から突落した。ローザモンドは声の届く距離でアヴァール騎兵に遮断され、その位置からアルボインが大剣を振って父の首を打落すのを見た。アヴァール騎兵は半狂乱の王女と、その侍女達を悉く捕獲した。ローザモンドの猛烈な抵抗に対しては代償として嚴重な細目が与えられた。

ローザモンドの高貴な相貌と華麗な服飾は当然敵手の注目を集めて然るべきだった。併しアヴァールの蛮兵は金の拍車や絹の上着の方に先ず価値を求め、それ等は手から手へ転々した。ローザモンドは父を呼び続けたが、アヴァール人には、ゲルマン語が解らなかった。ゲピドの王女は下着だけに剥かれ、汗と埃で顔容も見分けがつかない俛手を後に縛られ、クニムンドの首が運ばれて行ったのとは反対の方向へ引立てられ、一般捕虜の群中へ混入された。

この一戦でゲピド王国は永久に消滅した。

戦士の半分は死滅し残部は殆んど負傷した。生残った者は他種族に吸収される運命にあった。戦場に臥るゲピド戦士の死屍二万五千。ロンゴバルド兵も一万が戦死し、アヴァール兵も五千が死んだ。負傷や疲労で動けないゲピドの敗残兵は多くが殺戮された。プロコピウスは、これを虐殺と記しているが、ゲルマンの思想に依れば慈悲の行為である。衛生施設を伴わない蛮族社会に於て、歩行能力を失って戦場に残る事は当の傷者自身にとっても苦痛だった。二万の女軍も輜重車の全部と共に勝利者の有となった。

勝ったロンゴバルド族も戦士の大部分は傷つき、アヴァール族は疲労した。戦場に遺棄された収獲を刈取ったのは、主としてロンゴバルドの女軍だった。

ゲピド王国を構成した女性中最も有用な年齢層の大部分が連合軍最高価値の獲物となった。純ゲルマン種の白色金髪女性二万人が悉く手を背で縛られ、一箇所に纏められた。

タキッスの著にも見えるが、ゲルマンの戦士は一旦捕虜になると捕虜としての信義を守る習慣があった。妙な表現だが自らの意志で脱走はしない。奴隷に売られる事もあるが一定年限の労働で自身を買戻せた。女はこの信

義拘束を受けなかったし、一種の物と見做され、捕獲されたら解放されなかった。最も貴重な捕獲物は脱走の能力を持つのみならず、自余の物件を持って行く可能性すら有った。且つ戦場附近には二万の女を監視する施設も無かった。女達を縛ったのは、それが貴重だったからである。戦後の公平分配が条約で定められていたが、女達の一部が着用していた上質の衣服は別種の捕獲品と見做されて剥奪された。夜にはゲピドの女は二人宛背中合せに縛り合わされ、輜重車一輛に付前後二人宛が縛り附けられて監視を受けた。

ゲピド王国の全財産は均等に二分された。一大王国の消滅は、蛮人に計算出来ない程の財産を提供した。家畜、奴隷、穀物の他に住民も分割された。但し人民の分配に関しては数的にはとも角、質的に平等ではなかった。アヴァール族は民族の性格上女を欲したし、ロンゴバルド族は戦士補充の意味で男を望んだ。アヴァール側に分配された者はそうでない者よりも不運だった。ロンゴバルド族はゲピドの壮丁を戦士として対等に待遇し、その家族も同様だったが、アヴァール族は無差別に奴隷とした。近代ルーマニアに相当する土地に於て、千四百年の昔には蒙古人種がゲル

マン人を奴隷とする国家を二百年間維持した事実が厳存するのだが、何か不思議な気もする。

トレドの王宮やその他の都市も火災にならずに陥落したので、ゲピド王室用の貴金属や宝石類、家具調度類はロンゴバルド族に譲られた。アヴァール族は建物を得て満足した。

ローザモンドは身分を確認されない筈、アヴァール族の捕虜中に居た。彼女の高貴な容姿は忽ち注目を惹き、醜怪な蒙古人共はローザモンドを獲得する為に決闘さえ行う有様だった。アルボインは必死にローザモンドを捜し、辛うじて所有確定前に彼女を発見する事が出来た。アヴァール族はアルボインの武勇を認めていたから条約は忠実に履行した。

ローザモンド一人だけでなく、彼女の女軍を構成した侍女迄添えてロンゴバルド側に引渡された。但しその履行態度は忠実に過ぎてアルボインの機嫌を損ねた。ローザモンドは遁してならない重要捕虜であるという意識過剰が原因なのだが、ゲピド王国唯一の相続権者は厳しく後ろ手に縛られ、胸回りも嚴重に縛られた上、後は手首から縄尻を把られ、前は首に綱をつけて曳かれていた。侍女達も同様だった。然もアヴァール側は条約を字句通り

に解釈し、ローザモンド達の衣服は適用外の戦利品と見做した。王女は下着迄絹製品を使用していたから悉く掠奪を受け、代りに粗い獣皮の胴着が与えられていた。この一枚布は首の部分に穴を開け、前後を肩から腰迄掩うだけのもので、脇も隠さず、腿も腕も露出し腰を縄で締めていた。足は裸足だった。白い手と柔い腕は黒い革紐で縛られていた。實際ローザモンドの両手を自由にして置けば何時でも武器を握る事が可能な位に彼女の体格は優れていた。

アルボインは酒を飲んでいない限り高慢ではなかった。ローザモンドを受取る為に途中迄出向いたが、ゲピドの王女が憐れな姿で乱暴に引立てられて来るのを見ると、驚愕狼狽の色を現わし、駈寄って自ら縛を解いた。女の衣裳は持合せが無かったから自分の王衣を脱いでローザモンドに着せた。馬も王女に譲り、自分は歩いて帰った。尤もローザモンドを引渡しに来たアヴァール人には充分な謝礼を贈った。

アルボインはローザモンドに改めて結婚を申し込んだ。捕虜の王女は死以外に、これを拒否する手段をもたなかった。然も彼女の去就には全ゲピド族の死活が懸っていた。そし

てローザモンドは父クニムンドの頭蓋骨が金箔を被せられ、盃に加工されつつある事実を知らなかった。この戦勝盃はフン人から伝えられた蛮族の習慣に従っただけの事だが、ロングバルド戦士は国王からこの盃で酒を与えられるのを最大の名誉とした。但しアルボインはローザモンドにこの盃を使用させる事は気が咎めるのか当分差控えた。

かくてロングバルド王がゲピド王権正統の相続者となる結婚式が行われた。単純なアルボインは手難しで喜び、且つ泥酔した、ローザモンドの真意を察知出来なかったのは、勿論彼女の側に加えたゲピド出身の侍女が王女自身の指示で壁から短剣を抜き取り、秘かに手渡した事も知らなかった程に酔っていた。

ローザモンドは寝台上で覚醒した。眼の前にアルボインの顔が有った。悪夢は矢張り現実だった。併し彼女の手と胸を縛った縄や紐は既に解かれ、床に落ちていた。ローザモンドの体はアルボインの腕の中にあった。その左腕には綺麗に揃った歯形と凝結した血痕とが残っていた。吊られた位置から落下して危く絞首刑になる処をこの腕が支えたのだ。

全身は未だ麻痺していた。アルボインの手が触れる箇所から新たな激痛が拡がった。併

しローザモンドは、それを拒否しなかった。尤も体の方は自力で如何なる動作を起す自由も持たなかった。縛られてもいないのに。

麻痺と疼痛だけではない。自ら体を動かす意志を失わせる何かがある。甘美な陶酔にも似た何か。

「ローザモンド。御身は余りにも美しい。余はこれ以上何をする事も出来ぬ。」

勝利者である筈のアルボインの方が折れて出た。併しローザモンドは崩れんとする自己を辛くも支えた。

「ゲピドの王女は自らの意志では屈伏致しませぬ。貴下は野蛮なロングバルドの王。征服したければ、私の体から自由を奪い、暴力で目的をお遂げ下さいまし。」

アルボインにはローザモンドの言葉が理解出来なかった。ローザモンドは痺れた体を寝台上で無理に横転させて俯向きになった。アルボインは漸くその意味を悟った。ローザモンドは何とかして痺れている両手を自分から背に廻そうとしているようだった。

アルボインは床の上から飾帯を拾った。そして赤い充血が痛々しく浮んでいる白い手首を遠慮しながら背に重ね合わせた。

× × ×

本篇の五六八年から五七三年に至る部分は五人の男と結婚し、その内四人を殺すか又は事実上殺害し、財産を横領し、最後に自分も殺された悪女の物語である。故に不道德の話であり、本篇を掲載する書籍があれば、それは『悪書』である。併しその内容は中世史上第一級の史実であり、中世史を詳述する限りに於て凡ゆる歴史書も又『悪書』であり、学校教科書と雖も例外ではない。

ローザモンドの名は、悲恋物語として、文学・詩・戯曲から近代映画に至る迄、余りにも美化されている為、真実の歴史を書く方が却って筆が重い。

余談だが映画の『ローザモンド』はエレオノラ・ロシ・ドラゴであり、相手役というより寧ろ憎まれ役のアルボインはジャック・パランスだった。映画の内容は史実とは遙か離れた寧ろ十二世紀の騎士道時代に近いものだったが、この第一級史劇は故意に変更したり美化したりしなくても、充分雄大な悲劇性を内蔵している。筆者はアルボインとローザモンドの印象をエル・シドのコンビから部分的に得てはいるが、実際に映画を作るとしたらこの二人では年齢も頭髪の色も不適當だろう。

ローザモンドの魔女的本性は結婚の直後に現れた。

「私には愛していた男と子供があります。」

ローザモンドは問われもしないのに言い出した。アルボインも、その事は知っていた。愛人はゲピドの隊長であり、男児が一人出来ていた。この情夫はロンゴバルドの軍中に編入されていた。従ってアルボインにとっても甚だ厄介な存在だった。

「この二人についてお願いがあるのですが。」

アルボインは剛腹な男だった。国王と兵士では比較にもなるまいという自信があった。「解っている。助命してくれと、言うのだから。隊長に取立ててやってもよいぞ。」

だがローザモンドの眼は冷く澄んでいた。「そうではありません。殺して下さい。」

アルボインの頭髮が悉く逆立ち、陽焼けした顔は一瞬蒼白に変じた。

× × ×

五六八年春、アルボインはイタリヤ征服の大遠征に出発した。ロンゴバルド族はアリウス派キリスト教を信奉してはいたが、ゲルマン古来の習慣をも保存していたから、出陣に際しては牛馬と共に人身犠牲も必要だった。ローザモンドの情夫と私生児もこの中に加え

られた。一部の意見ではローザモンドが将来復讐を計る時に、その正当性を増す為の布石だという事になっている。併しそれならば父を殺された事だけで充分だろう。寧ろ邪魔者は抹殺して行く彼女の大方針が明確に現れた最初の例に過ぎない。そして以後六年間ローザモンドは、少くとも表面的にはアルボインの善良な妻となった。

アルボインがイタリヤ遠征を発表すると、二万のサクソン人を始めアレマン人、ブルグンド人、ブルガリヤ人、バヴァリヤ人やゴート族の殘党迄が続々參陣して来た。ゲピド王国から獲得された財宝を始め、ロンゴバルドの全動産は車載された。家畜の一部は乾肉に加工されて携行された。パンノニヤの土地はアヴァール族に引渡された。イタリヤ征服に失敗した場合は元通りに返還するという嚴肅な誓約が附けてあった。総人員は二十万を越えた。その内戦士は六万だった。輜重車は八千輛。民族移動の最終波に恥じない大陣容である。全軍雪融け前のユリアヌス・アルプスを肅々と越えた。約八百年の昔、ハンニバルは五万を率いてアルプスを越え、過半を失った。千二百余年の後、ナポレオンも同じ山を越えたが、その兵力は矢張り五万を出なかつ

た。

アルボインは彼の民族の名で呼ばれる事になるロンバルディの豊饒な平野を羨望と輕蔑を以て見下した後、全軍全族をヴェロナに導き、ミラノを焼き払いバヴィヤを攻囲した。ポー河下流の住民は沼沢を隔てた海中の島に通れた。幾代かの後、此の島からヴェニスの市と共和国が興った。

東ローマ帝国のイタリヤ大總督ナルセスは軍事能力は別として個人の徳望や威嚴に於ては甚だしく前任者ベリサリウスに劣った。ナルセスの強慾はラヴェンナにイタリヤ中の財宝を掻集めた。ナルセスが死んで後任に來だロンギヌスは無能で憶病だった。連年の戦乱と重税に疲弊したイタリヤ人は敢えて抵抗せず、ロンゴバルド族は文字通り無敵の進撃を行った。普通斯かる征服者は連戦連勝の形容を冠するべきである。アルボインは確かに一度も敗北しなかった。但し殆んど一度も戦闘を交えなかった。

只一度だけ、バヴィアの門前でアルボインが麾下の大部分を掠奪に分散させている時、市内からの襲撃を蒙った事がある。此の時ばかりは兵力を殆んど持たなかったロンゴバルドの王は敗走を余儀なくされた。その時、ア

ルボインの前に立塞ったのがローザモンドだった。駆出た彼女は無言で両手を上げた。右手には投槍が握られていた。

アルボインは顔を赤くしながら、辛うじて体面を繕った。

「逃げるのではない。投槍を受取りに来たのだ。」

そう言って投槍を奪い取り、一閃敵将を倒すと抜剣して敵中に駆入り、殆んど単騎で大敵を城門に追い込んだ。

ローザモンドが、何故斯かる態度に出たのか。ゲルマン女の本性か、真実にアルボインの名誉を思つての事か、内心ではアルボインの戦死を願っていた為か、それは解らない。

イタリア大総督ロンギヌスの仕事は毎日失われて行く領土を皇帝に報告する事だけだった。五七〇年迄にイタリアの大部分はアルボインの支配に歸した。ラヴェンナ、ローマ、ナポリ、ゼノアが残っただけだった。パヴィヤは三年の包囲の後降伏し、アルボインは此処に首府を定めた。斯くてパヴィヤは数代の間イタリアの都となった。

ローザモンドは此の征服中、戦闘に武勇を発揮する機会を得なかった。尤も言うに足る交戦は無かつたし、アルボインはローザモン

ドを危険に曝す事を好まなかつた。そしてロングバルド族は戦士より遙かに多い非戦闘員を擁した。ローザモンドは、その統轄と給養に非凡の腕を示した。

ローザモンドは逸早く地中海的服装を採用し、紫のガウンの下に色模様の半袖を着用していた。但し左右の手首には不釣合に大きな金腕環を嵌めていたと記されている。腕環の下に何が隠されていたのだろう。初夜以来彼女の性格は確かに変った。イタリア征服の間中英雄の妻として献身的に働いた。

五七三年六月、アルボインはヴェロナに於てイタリア征服の祝宴を張った。そしてファレルニヤの葡萄酒を飲み過ぎて泥酔した。ローザモンドは中坐したがアルボインは飲み続けた。遂にクニムンドの頭蓋骨が持出され、一同喝采の裡に戦勝盃が一巡した。最後に、既に常軌を逸していたアルボインは、此の金盃に酒を満たし、近侍に命じてローザモンドの所へ持参させた。

「イタリア征服の戦勝を父親と共に喜ぶように。」

という口上が添えてあつた。斯くてローザモンドの復讐という詩人好みの場へと舞台は廻るのだが、実際はローザモンドの方でも既

に妻の義務を侵害していた。ロングバルド王夫妻の間に女ではあつたが子供が一人生れてゐたから、此の夫婦関係が一応正常なものであつたと推定してよいだろう。にも拘らず、

ローザモンドは王の武具係ヘルミキスと密通していた。原因は浮気だろうか。ヘルミキスは美男子であり、アルボインは不在な事が多かった。それとも復讐の予備手段だろうか。彼女の情夫は如何なる忠義觀念も有しなかつた。併しアルボインの勇武は誰よりもよく認識していたから危険の前に躊躇し、ローザモンドを独占し得る機会を見送った。

ヘルミキスはアルボインに必敵する勇士は全ロングバルド族を捜してもペレデウス一人だけだと考えた。ペレデウスはヘルミキスの戦友だった。併し陰謀の相談を持掛けられたペレデウスは、秘密を守るといふ約束しか与えなかつた。

ローザモンドは復讐の爲一切の名誉と情操を犠牲にした。彼女はペレデウスの素行を調査し、此の勇士がローザモンドの侍女ベルタを愛している事を知った。王后はヘルミキスに命じ、ベルタを些細な事から罪に落して縛らせた。ローザモンドはベルタよりも稍大柄だったが、侍女の着衣を自ら用い、髪型も巧

妙に真似た。ベルタは裸に剥かれて縛られた上、猿轡を嚙まされてローザモンドの衣裳棚に監禁されていた。

ローザモンドは暗闇を利用してベルタの名代を務め、相手方に平常以上の歎息を満喫させ、そして怖らくは彼女自身も楽しんだ。然る後ペレデウスにロンゴバルド王の后を享樂した事を告げ、姦通の結果はアルボインとペレデウスの何方か一人が死ななければならぬ事を宣言した。ペレデウスは無恥無節操なローザモンドの方をアルボインよりも怖れたのか、叛逆の賞として予約されたローザモンドの体に惹かれてか、王后の共犯者となる事を約束した。

ローザモンドはアルボインが泥酔して午睡に退いた好機会を得た。王后は国王の休息を名として近侍を遠隔け、武器を隠し宮殿の門を閉し最大限の愛撫と技巧で夫を寝かしつけた。嫌がる共犯者共はローザモンドに急ぎ立てられた。武勇のロンゴバルド王は忽ち跳び起きたが、彼の剣は妻の手で鞘に縛りつけてあった。アルボインは足合を振廻して抵抗したが、間もなくペレデウスの槍先に倒れた。ローザモンドはアルボインの心臓に短剣を突き刺した。王の死体は階段下に埋められた。

ローザモンドの復讐は茲に達成された。

元ゲピド族の戦士等は大部分アルボインに心服していた。實際アルボインとクニムンドでは人物に大差があった。併し若干のゲピド兵はローザモンドの復讐を讃美し、彼女の身柄とヴェロナ宮殿を守った。ロンゴバルドの隊長達は騒乱の初期に一旦逃亡したが間もなくクレフォアを頭目にして反撃して来た。形勢の非を悟ったローザモンドは敵の中へ亡命した。東ローマ帝国のイタリヤ大総督ロンギヌスは軍艦を送って亡命者を引取り、ローザモンドと二人の情夫、アルボインとの間に出来た娘ロミルダ、ゲピド兵若干と、ロンゴバルド王室の全財宝を乗せた船はアデジュ河とポー河を下ってラヴェンナに安着した。

ローザモンドは二十三才。魅力の絶頂に在った。ロンギヌスは未亡人の美貌と、彼女がもって来たフン、ゲピド、ロンゴバルドの財宝を見て歓喜した。然もローザモンドは大総督の不倫な申し出を容易に承認した。恋人の情夫二人は無用の存在だったから抹消される運命にあった。

頭の弱いペレデウスに対し謀叛罪乃至不敬罪を押しつけるのは簡単な操作だった。その上此の剛力男は麻酔薬で眠らされている間に

鎖で繋がれ、両眼と声を永久に奪われた。惨忍なローザモンドはペレデウスを即時には殺さなかった。腰を太い鉄鎖で繋ぎ、彼女の私室の一隅に繋ぎ留め、不潔な食物を与えて楽しんだと言うのだから彼女の神経は確かに正常ではない。但しローザモンドは只一つだけ慈悲を施した。銀器に盛った猛毒が手の届く所に置かれ、飲みたくなったら何時でも飲むようにとの指示が与えられた。尤も此の毒薬は甚だしい苦痛を長時間伴うものであり、ペレデウスは敢て飲むとはしなかった。

次はヘルミキスの番だった。ペレデウスの失脚に対する功を賞してローザモンドはヘモロックの入った酒盃を与えた。ヘルミキスは酒を飲み終ると舌先から痺れて来た。飲み下したヘモロックは急速に作用し、回復の手段は無かった。ローザモンドの性格を知っているヘルミキスは直ちに事態を悟ったがもう手遅れだった。にも拘らず彼は自分自身の為に復讐した。但しヘルミキスに残された力は、嘲罵の哄笑を浴びせかけている女主人を、倒れながら突き飛ばすだけしか無かった。

若しヘルミキスに充分の力が残っていたらローザモンドを床に突倒しただろう。足らなかったら現在位置で動揺させるに止っただろう。

う。そして此の何方の場合でもヘルミキスの復讐は無効果に終る筈だった。併し彼の最後の努力は丁度此の中間の状態だった。即ちローザモンドは倒れずに室の隅迄後退した。

復讐の残部をペレデウスが達成した。視力を失った大男は聴覚を能力一杯に働かせて室内に起りつつある事態を把握していた。その腕の中へローザモンドが転げ込んだ。ペレデウスは唸り声で歎息を叫び、ローザモンドを膝下に敷き据え、腰帯を引き抜いて後ろ手に縛り上げた。口には手早く衣服の一片を詰め込んだ。

ローザモンドが破廉恥な場面を人に見られ

まいとしてヘルミキス以外の者を遠隔けた為救助に現れる者も居なかった。ペレデウスはローザモンドの手足を背に纏めて縛り、存分に楽しんだ後、彼自身の為用に意図されてあつた例の毒薬を銀器から女の口に注ぎ込んだ。斯くて万事は終わった。アルボインも、ローザモンドも、ヘルミキスもすべて死んだ。ペレデウスが何うなつたか筆者は知らない。此の物語には後日談がある。

ローザモンドが死んだ時、ロンゴバルド王位の継承権を持った只一人の人物、彼女とアルボインの娘ロミルダは未だ幼児だった。此の王女は母親がヴェロナから盗んで来た莫大

な財産を相続し、フリウリで成長した。

二十年の後、ロミルダは容姿に於て母親を凌駕し、無軌道に於ては数倍していた。ロミルダは終生結婚しなかった。その代り殆んど毎晩情夫を取替えた。彼女は二十世紀的モンロー主義者、即ち門戸開放主義者だった。此の政策が実行された為、フリウリの市民は数年間に親戚になった。

アヴァール王が襲来した時、此の無節操な王女は自身がアヴァール王の愛を受容れる約束を守った。フリウリ陥落の第一夜に於てロミルダはアヴァール王に抱かれて寝た。これで蛮王の約束は果された。二日目にはロミルダの財産の大部分が没収され、且つアヴァール王の精撰された護衛兵十二人と一晚の内に同衾する事を命ぜられた。三日目の朝が来ると、彼女に残された最後の財産、即ち夜着と膚着が取り上げられ、代りに充分な代償として一本の縄が提供された。但しこれは彼女の背に合せた両手に巻きつける事に依つて与えられた。足は自由だったから走る事は出来た。そして淫奔な王女ロミルダはアヴァール兵の軽蔑とフリウリ市民の憎悪に曝された中で鞭を持った兵に追廻され、悶絶する迄打ち据えられた。

(終)

梨花悠紀子逆吊り写真特集

大判印刷紙焼付
各集五枚一組 一〇〇〇円

第一集 略号(さか)

両足首括り逆吊り

足首を揃えて括られた縄を滑車に連結されて、足を上に逆さに吊り下げられた美女梨花悠紀子は、両手を背中後手に縛られ胸には乳房がつぶれんばかりの縄目が肌に喰い入っている。全体重を両足首の縄で支えて痛さを耐えている梨花悠紀子。

第二集 略号(させ)

逆吊りの女体折檻

逆さに吊りにあえぐ梨花悠紀子に対して、更にあくなき暴虐の手は、情容赦なく竹の棒にて女体のあらゆるところを叩き、こじ入れ、踏みつけ激しい折檻を加える。美しい眉をひそめて必死に耐える美貌の彼女の凄絶にして、しかも美しい吊責めフォト。

第三集 略号(さと)

手足逆宙吊り

両足首と両後手首を括った縄を滑車に連結して、じりじりと宙に吊り上げてゆく。顔胸、腹を下にして、足首と背中を上にして宙に浮いてゆく梨花悠紀子。柔肌には恐ろしい程縄がうずまわって、吊責めの真価が鮮明な印刷紙焼付によって發揮される。

映画漫歩

昭和39年のS M映画展望

かわかみ・けい

昨年中にみた映画から思いだすままに、S Mの印象を拾ってみることにする。

筆頭になった武智鉄二監督の「白日夢」を挙げるのが至当であろう。路加奈子の美しい裸体とうめき声に堪能した。ホテルの一室で、滑車を使って縛った両手を吊り上げ着衣をはぎとると、女体が身をくねらせる。吊り責めの場面の次に、電気のコードを柔肌の二の腕に喰いこませる電気責めがあつて、ここで、エクスタシーの声をたっぷり聞かせる構成である。後半のデパートでのシーンはエロチックではあるが平凡である。デパートの中で責め手の医師に追われて、路加奈子が薬品売場

に追いつめられ、そこから浣腸責めが始つてくるとしたら話は別だが……。

「白日夢」で有名になり松竹スターとして舞台に立った路加奈子は、観客に乞われて、例のうめき声をだしてみせたそうであるが、なかなか泣かせる人ではないか。電気責めでは「悪の紋章」で無実の罪を着せた真犯人を尋ねる山崎努が、顔役の安部徹を痛めつけるのが凄味があつた、また、夜の秋芳洞の洞穴で死体を鋸で引く音も無気味であつた。

「紅閨夢」は支離滅裂の愚作。女を裸体にして絵具をぶっかけ、大きなカンバスの上をのたうたせ、引きずりまわるシーンも、絵具の

色が黒色で濃いすぎるし、モデルが絵描きの顔にコンニャクを落す場面も美しさが無い。

そのほか、お色気映画専門の国映や新東宝のをいろいろと見た。女ターザンがでくる「情慾の洞窟」では、猟師の初妻が、二度にわたって裸にされツルで縛られる。むきだしの乳房の上をツルが喰いこみ、合さった腿を男の靴で踏んづけられて、しかめた女優の顔が可愛いかった。「青い乳房の埋葬」では、女高生たちが、父親の妾の寝室をのぞき、裸体への鞭打ちを盗み見して、小遣いを強要する場面は短くはないが迫力に乏しい。「妾」では、白日夢の看護婦役になった松井康子

が運命に弄ばされて、不能者の金貨の妾になり、裸身を見せることを要求される、たいしたことなし。

「0才の女」これはよかった。叔父に貞操を奪われそうになった少女が憲兵に救われ、スパイに育て上げられる。先ず他の女スパイから浴室で縛られ、性行為を見せつけられ犯される。次いで、和服でベッドに縛りつけられ敵スパイの好色の餌食に供せられた後、スパイとしての飼育が始まる。

全裸の女は地下室のベッドに寝ているが、空腹に耐えかねてアルミニウムの食器にこびりついた米粒のくずをかじっていると、憲兵が入ってくる。スープを手にした憲兵は

「ヨシ子、欲しいだろう。」

欲しかったら、言うことをきくんだ。私の使命は、お前の羞恥心や人間性を剥奪してスパイに育て上げるんだ。欲しかったら私の言うことを聞くんだ」

女は踊りをおどらされ、

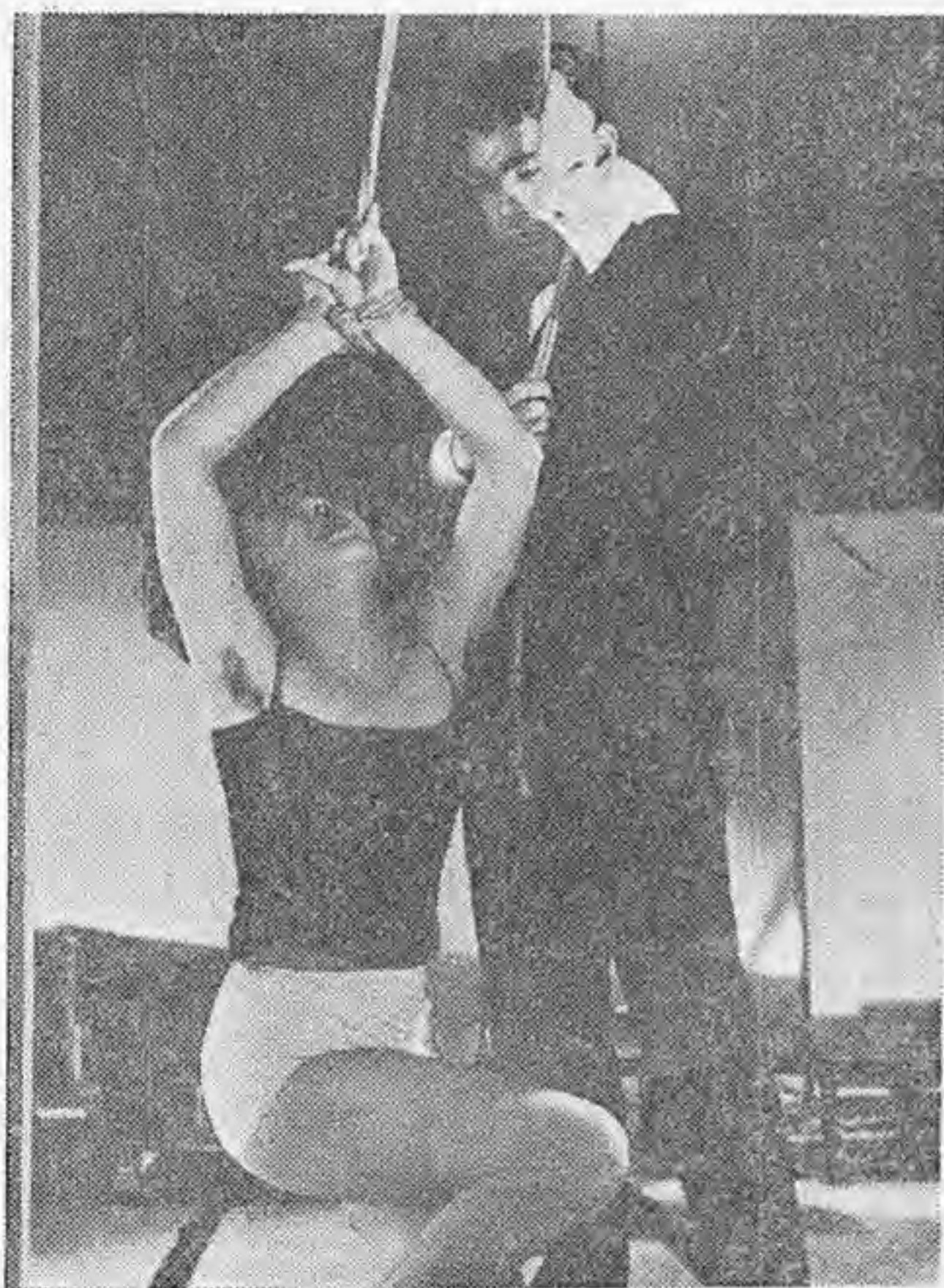
四っんばいで床をはいずりまわされ、さまざまの姿態を強要される。そして、手をだすんじゃないと叱られながら、一さじのスープを恵んでもらう。ほかに、敵性女スパイが、縛られて、憲兵から木刀を細目にこじいれられて拷問を受ける。外人の女がベッドに縛られ血清の実験材料にされたり、真空室で圧力試験のホルモットにされる。脚本の構成もしっかりしていた。

「グラマー独立部隊」では敵を欺く為に敵陣に乗りこんだ慰安婦が、露見して拷問を受ける。方々破れた支那服の上から後手に縛られ長い時間鞭打ち打たれる。ただし鞭が少し細すぎるようだった。

テレビで眠い目をこすりながら「憲兵と幽霊」をみたが男責めの処は迫力があつたが、久保菜穂子と母親が責められる場面は期待外れだった。私の脚本なら、妻とその妹が責め

られることになる。妻の方は肌着と腰巻だけに剥がれベッドに縛られて、竹刀で打たれ、皮のホルセツトで責られる。また床の上でエビ縛りにされ背中を打ちすえられ、妹の方は女学生で、政府の要職の娘が友人にいて、学生寮にいる為、肌に残らない責めとして水責めや浣腸責めを受ける。

日活で芦川いづみ主演で映画化された「佳人」という映画があった。發育不全の美少女の物語で、映画ではでないが、原作では嫁入りした後もオシメをしている女性である。これを原作に忠実に映画化する人はいないだろうか。体の



不自由な薄幸の美女がオシメされたり、取かえられたり、それに原作にはない浣腸のシーンを入れた映画なんていいと思いませんか。日活で思いだしたが「肉体の門」では三人の女がリンチを受ける、鞭音や縄のしまる擬音の効果がよく熱っぽかったが、色彩が鮮明すぎたせいか、何か綺麗事に感じられた。

友人の経営している映画館で「ショック」をみた。友達に面白いかときいたら、観客が

期待外れでショックだといって帰っていると聞いたが、内容もその通りの中途半端なよせ集め編集に思われた。しかし、フランスにあるという中世の拷問と処刑の様子を再現した博物館の実写は圧巻であった。博物館というより見物館のなかでは、さまざまな古風な拷問道具があって、雇われた男女のモデル達が拷問を受けるさまを、実演して観客の興に供せられるしくみである。

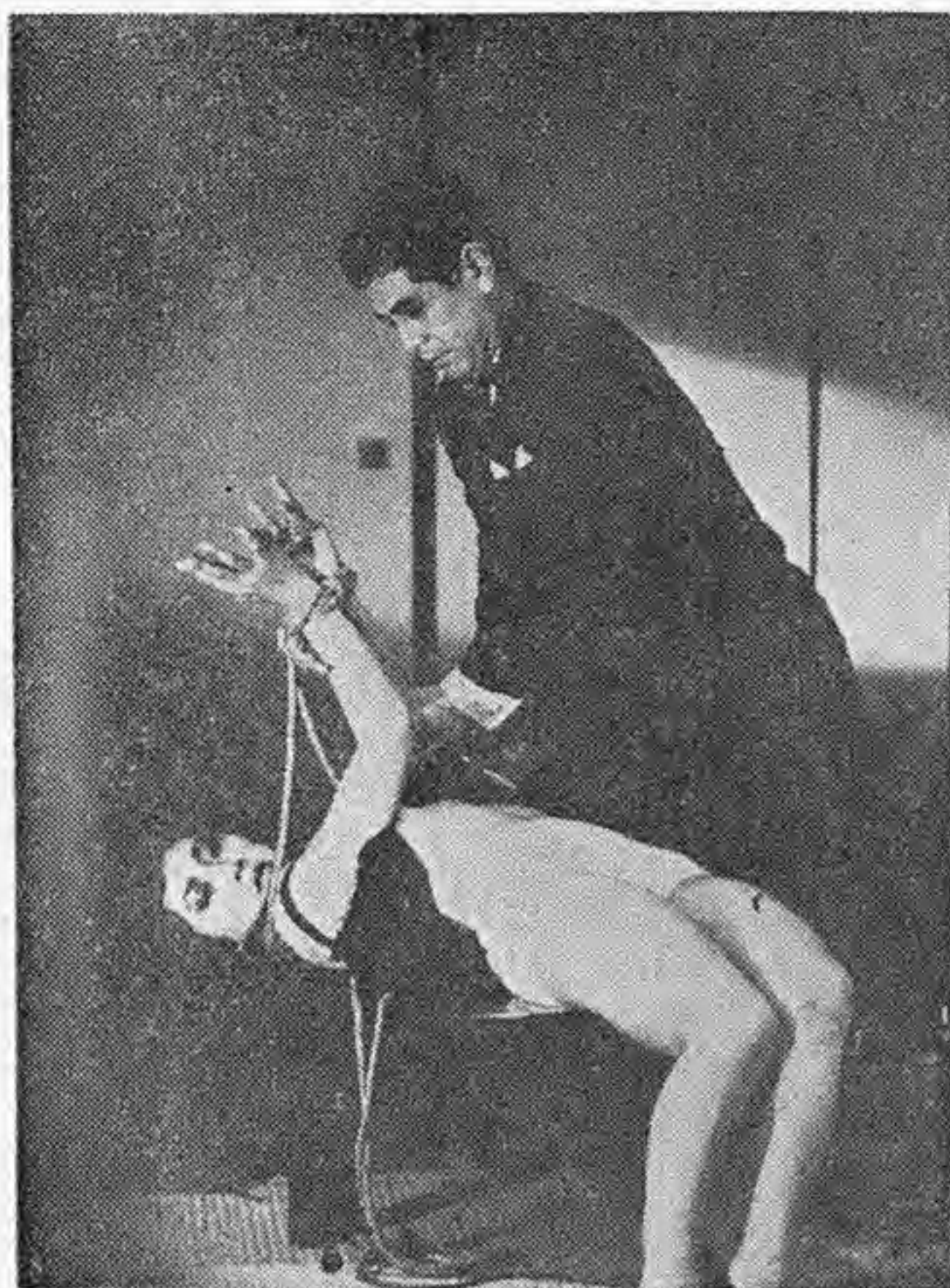
囚人を入れる鳥

籠のようなものが吊られていて、女のモデルが囚われている。観客は逃げようのない女囚に卵や、やわらかい果物を投げつける。トゲのある椅子に、裸体の男が縛りつけられている。女の観客が火のついたたいまつで、いじめる。ハリツケになった男がいる、棒をもつ

た案内人はそれらを説明して回る。車責めに合う女がいる。足は縛られて固定されているが、手は握りの金具をにぎっている。緊張の為手足がけいれんしている。水車が回転すると、女は上から下へ移動する。回転が早くなると、女が手を放すと、鉄の大きなトゲの植わった床にたたきつけられる寸法である。ほかに縛られ鞭打たれる男奴隷や、女の絞首刑、改心の情をあらわして床をなめまわる男の見世物があった。

このような博物館が公開実演されるヨーロッパというものに、私は自由というより、自由を保証する大人っぽい安定した精神を感じる。こういう見世物を求める人間の内面的な欲求を、動揺せずに過大視も過少視もしない安定した客観性のある態度というものが、日本人には少ないのではなからうか。それは取締りをする側にも、観客の側にもいえることであろう。

（「写真」は映画『白日夢』の一場面。）



×

×

×

限定版
写真集

美しき縛しめ

第三集 略号「美3」
頒価一〇〇〇円 (送共)

美人モデルの縄にあえぐ姿態が、両面特アート紙にギッシリとグラビヤで印刷されて、皆様のお求めを心からお待ち申しております。内容は次に掲げた百二十態の写真で、いずれも今まで一回も発表されたことのない、とっておきの秘蔵品ばかりです。何卒未見の方は、今すぐお申込み下さるよう、お待ちしております。

◎緊縛女体百二十態 〆本誌優秀モデル総登場の写真集〆

樹間にさらされる (絹川)	美貌を踏みつける (絹川)	顔枷の装着中 (四方)	被虐のマゾ女性 (東浦)	首吊りのプレイ (大塚)
豆しほりの猿ぐつわ (絹川)	悦虐の園にさまよう (水本)	鼻孔ゼムピン責め (絹川)	大きな猿ぐつわ (竹野)	後手縛り猿ぐつわ (絹川)
縄目と裸身の羞らい (長野)	若肌に襲う白ロープ (若原)	鼻孔から薬液注入 (大塚)	可愛い足首 (絹川)	電光に肌は映えて (梨花)
後手首に喰込む縄目 (梨花)	蚊群の襲うにまかせ (絹川)	豊軀にまつわる黒縄 (若原)	黒髪なぶり (大塚)	囁まされる猿轡 (東浦)
荷造り縛り人形 (大塚)	きびしき縄目に喘ぐ (加茂)	ピンクカパーと豆絞 (絹川)	喰い込む柔肌に縄 (大塚)	柔肌高手小手 (梨花)
バンド着用しほり (遠藤)	麗しき裸身の縄目 (絹川)	斬首処刑フォト (新宮)	裸身に投げたタオル (加茂)	高手背高しほり (水本)
替ゴム猿ぐつわ虐め (東浦)	猿ぐつわ黒フン縛り (愛川)	両手首吊りさらし (大塚)	緊縛の優美ポーズ (絹川)	後手小手股間縛り (絹川)
ゴム布に包まれて (梨花)	あえぐゴム布嵌口 (大塚)	後手足首逆エビ縛り (梨花)	くわえた赤い花 (絹川)	柱後手縛りにて (山路)
椅子利用エビ縛り (東浦)	美しい顔をなぶる (梨花)	丈なす黒髪 (大塚)	エビしほり正面 (梨花)	下げられたズロース (梨花)
厳しき胴絞 (絹川)	飛び出す双丘と後手 (長野)	責衣からのぞく乳房 (大塚)	美貌美身の緊縛 (大塚)	十文字しほり (桜井)
輝く白肌をさらして (関谷)	首縄胴縛り股間縛り (絹川)	美貌放心の表情 (梨花)	首を締めるくさり (絹川)	木洩れ陽に白き肌 (絹川)
荒縄黒皮フンドシ (大塚)	被虐に耐えた表情 (水本)	後手強烈しほり (梨花)	手吊りのけぞり姿態 (桜井)	叫ぶ捕われの乙女 (大塚)
野性的な緊縛模様 (絹川)	生首フォト (新宮)	従順なるマゾの発散 (竹野)	乳首に咬みつく蛇 (大塚)	汗まみれの被虐 (梨花)
全裸のいましめ (愛川)	祭壇のささげもの (大塚)	手錠足錠首くさり (四方)	後手縛りと臀部 (絹川)	洋服タンスに吊る (大塚)
白晒六尺フンドシ (遠藤)	越中フンドシ緊縛 (大塚)	白晒六尺フンドシ (大塚)	ピンクの腰巻さらし (東浦)	全裸にてもだえる (関谷)
百CC浣腸器責め (大塚)	飛びだした双丘 (加茂)	ガンジガラメの縄目 (絹川)	重圧に耐える表情 (大塚)	黒縄地獄 (四方)
荒縄のトゲに喘ぐ (大塚)	塩水を無理に飲ます (大塚)	首縄胴絞め股間縛 (桜井)	強烈アグラしほり (絹川)	るせつの裸身 (梨花)
両手吊りさらし (桜井)	胸部と臍窩の魅力 (遠藤)	引き回される裸身 (絹川)	ポリウムの誇り (桜井)	セーラー服を縛る (梨花)
M女性の本領発揮 (梨花)	臍窩を狙う蛇の舌 (梨花)	豊胸を彩る茶の縄 (大塚)	鏡にうつす裸しほり (山路)	首縄から膝縄まで (大塚)
足錠をつけられる (四方)		捕われの女学生 (竹花)	惜しみなく晒す裸身 (大塚)	高々と上った後手 (梨花)
			ゴム帽子麗身晒し (梨花)	くびれた胸と腹部 (大塚)
			首絞めに苦しむ (大塚)	カクテルドレスの女 (絹川)
			麗身をもだえさす (絹川)	浣腸責め (大塚)
			猿ぐつわの苦悶 (加茂)	首のくさりに悶える (絹川)
			黒縄にもだえて (大塚)	黒のズロース (絹川)
			全裸の手吊り責め (大塚)	破られたズボン (梨花)
			ゴムの猿ぐつわ (絹川)	正面立姿全身縛り (大塚)
			汚れた縄と輝く白肌 (絹川)	くさりに捕縛される (山路)
			手首足首椅子しほり (梨花)	亀甲型股間しほり (大塚)
			あえぐ夫人の表情 (関谷)	長襦袢と腰巻 (館)

最近のわたし

羽 鳥 水 江



しばらくぶりでお便りいたします。名前がかわっていますので、何のことかわかりにならないかも知れません。わたし、羽村京子でございます。

昭和二十七年以来、十三年の投稿歴？をもつわたしが、いまさらペンネームをかえるなんて、不審に思われる方があるかも知れません。その理由をかいつまんでお話ししようと思います。

あれからもずっと、求め難くなった奇クを毎月かかさず手に入れて読んでおりました。三十歳を大分過ぎて、体力に限界も出てまいりましたし、何よりも四年生と一年生（それも四月からは五年生と二年生になります）の二人のこどもの世話に追われておりまして、すっかりごぶさたしがちになっていました。その間、田中美佐子さんの臨月腹ヌード写真や、山原清子さんの刺青の写真などを求めて

よそながら奇クの健在と発展をよろこんでいました。しかし最近でも、わたしの名前がとまどき奇クにのって、執筆をすすめて下さる方が何人もあり、わたしはどんなにありがたく思ったか知れません。そう言われてみるとやはり昔とった杵柄というのでしょうか、雀百まで踊り忘れずとでもいうのでしょうか、ムラムラと書きたい気持がおそって来て、こうして矢もたてもたまらず書きはじめたような始末です。

でもわたしは、迷信を信じるのではありませんけれども、わたしの（三月で）三十四歳という年令がやはり気になります。昔ふうに言えば、数え年で三十三歳の厄年が昭和三十八年、つまりおとどしでした。主人も来年が四十二の男の大厄です。そういうことを信じないにしても、生涯の一つの転期だという気はするのです。これも年をとったせいでしょうか？

わたしは名前をかえて、この機会に出来ることなら、もう一度生まれかわりたいと思うのです。同一の人間ですから前と同じようなものを書くことになるかとも思いますが、羽鳥水江はまだやっと成年になったばかり、永久に二十歳で年をとらないものと考えてみる

のです。そうすると、京子の胸にあったナルシスは、いつまでも若々しく、一部の読者の方々のフェティシユとして、永遠に生きつづけるでしょう。京子の肉体が老いてみにくくなくても、マリリン・モンローのように自殺することもなく、時とともに老いていく京子の肉体から切りはなされて独立した水江の美しさに、わたしは絶望することがありません。そうだ、わたしは老いていく肉体は殺してしまっ、いつまでも若くてピチピチした女として語ることが出来るのだ、と思いついたのです。女の大厄といわれる年は無事にすみましたけれども、ここでわたしは一つのチャンスをつかもう、とそうわたしは思ったのです。

わたしに声援して下さい方、それは多分、浣腸マニアと妊婦マニア、それに解剖マニアの方々だろうと思います。そのいずれもについてわたしは書くつもりですけど、今日はほんのごあいさつ程度、妊婦のことについて書きたいと思います。新しい一九六五年が妊婦マニアの年でありますように——たしか瀬沼さんがそう書いていらっしやました。ところがこの年があるいは妊婦ブームの年になるだろうという事はほぼ確実なのです。

来年は丙午（ひのえうま）の年だそうです。まったく困った迷信でしょうけれど、この年に生まれた女は結婚の相手として嫌われるということがあって、なるべくなら今年の春までに結婚しよう、そうして年内にこどもを産みたい、という風潮から、今年の夏から秋にかけては、例年よりもずいぶん多くの出産があるだろうと言われています。まさに妊婦ブーム、妊婦マニアの方々にとっては六十年に一回しか到来しない絶好のチャンスというべきではないでしょうか。マニアの方々のハッスルぶりに期待したいと思っています。大いにハッスルなさって当然だと思っています。

わたしは瀬沼さんとちがって、やっぱり妊婦の「責め」があった方が好きです。芥川一夫さんや巽良一さんが奥さんの臨月ヌードの逆さ吊りを計画しておられると聞いて、そうあってこそたのしいことだと思っています。伊藤晴雨さんが臨月の身重の奥さんの逆さ吊り——はらみ女のさかさ吊るしと言っておられます——を写真に撮影されたのは大正十年六月と云うことですから、これも四十四年ぶりの快挙が実現されようとしているのだと言えましよう。どちらにしても、百年に一度か二度（ちよっと大げさですが）という千載一遇の

機会ということになります。もちろん、ただし実現されれば、の話ですけれども。

もっと長いものは、これから機会をみて、ぼつぼつ書いて行くつもりです。わたしは女ですから、そういう勇氣はありませんけれどもハダカの妊婦を見せるなどということも、もっとあっていいことなのでしょう。

「あそこでは、腹の中に、今にも産まれそうに大きくなった子を孕んでいる女を、丸ハダカで見せるんだってさ」

「ヘーエ、ずいぶん物好きもいるんだなあ。でも、おれだって女房のしか見たことがないから、ちよっと見てみたい気もするな」

「とにかく、見た奴の話だと、ものすごい腹なんだそうさ。圧倒されたって言うんだな」

「そうかも知れないね」

というようなことになるかも知れません。

ここまで書いて来ると、例によって、妊婦の責めだとか、解剖だとかいうことも書きたくなってしまうますが、いずれあらためて、ストーリーを考えてから投稿したいと思っていますので、今日はこれぐらいでやめます。もっとも、あまり期待していただかないように、おねがいしなければなりませんけれど。どうかよろしくおねがいいたします。

女斗美ファンタジック・シリーズ

職場女相撲

芦 浦 素 舞 夫

(サチ子対みえ子の決戦)

相撲は、必ずしも、身体の高い者が勝つとは限らない。心技体、三拍手揃ってはじめて、ほんとうの強さが発揮されるものなのである。

女相撲の世界もまた、その例外ではない。ことに女性の場合は、心理的にデリケートなだけに、なおさらのことである。この物語りのサチ子対みえ子の相撲はその最も代表的な例と言えるだろう。

一、ドライな女性とインテリ女性

みえ子とサチ子は、私と同じ職場のオフィ

スガールだった。当時、みえ子は廿才。サチ子は一つ年下の十九才だった。

みえ子は職場の女性たちの中で、一番大柄な体格だったが、人一倍内気な性質だった。

派手なことにはきらいで、何事にも消極的過ぎるくらい引っ込み思案で、どちらかと言えば古い型の女性だった。だが、おとなしい反面芯はなかなかしっかりしていた。

容貌も、同僚の女性たちがよく噂しているように、どこか山本富士子を思わせる日本的な美しさを持っていた。

みえ子は、知的な容貌と、しとやかな物腰

の裡に、高い教養が窺われるインテリ女性だったのである。

サチ子は、みえ子よりもずっと小柄だったが、ドライな性格で、何事にも積極的で行動的な女性だった。人一倍気が強く、容貌にもそれがはっきりあらわれていた。しかし知性の点では、みえ子よりはるかに劣っていた。

このように、性格の全く異なる二人は、日頃からあまり仲の良い方ではなかった。

みえ子は、サチ子の割り切った生き方に批判的で、彼女を軽蔑していたし、サチ子の方

でも、みえ子の、ややインテリぶった態度に少なからず反感を抱いていた。

こうして、暗黙の裡に対立していた二人の女性が、遂に、女性の斗争本能の、最も具体的な表現法である女相撲の舞台で、対決することになったのである。

みえ子とサチ子の相撲は私にとって印象深

い相撲だった。なぜならば、みえ子と私の間に、ある種の感情が流れていたからである。

私は、みえ子の知性と、古い美しさに惹かれていた。サチ子との相撲の件は別としても、みえ子は、私にとっては忘れることのできない女性だったのである。



一、職場女相撲のライバル

それは私たちの職場の春のレクリエーション大会の時だった。女子職員の保健体育として、女相撲大会が行われることになったのである。もちろん、このプランには、大多数の女性が反対した。みえ子も、最初からこの大会に出るのを拒んでいた。彼女も高校時代には、バレーボールの選手をしていたほどで、スポーツが嫌いだったわけではないが、相撲を自分でとるなど考えただけでも羞しいことだった。だが、職場の女性の中で一番体格の良い彼女は、無理矢理に相撲大会に出場させられることになったのである。

しかも、組合せの結果、みえ子は、最初にサチ子と対戦させられることになったのである。みえ子対サチ子の対戦は、日頃、二人の仲を知っている同僚の女性たちの間で、大へんな評判だった。

『みえ子さんとサチ子さんのお相撲は、面白くなりそうだわ、どっちが強いかしら？』

『そりゃあ、みえ子さんが強いわよ、だって体格が違うんですもの』

『でも実際やってみなくちゃ分ないわよ。』

サチ子さんも太ってるし、彼女、とっても気

が強いでしょ、とに角、楽しみだわ』

どうやら勝負の予想は、みえ子の方がはるかに有勢だった。なぜならば、みえ子が体格の点で、サチ子を圧倒していたからである。

大柄な、みえ子は、身長一六三センチ、体重六〇キロの堂々たる体格の持ち主だった。

それに対して、小柄なサチ子は、身長一五三センチ、体重五五キロで、身長割には体重もあったし、どちらかと言えば肥えている方だったが、みえ子に比べると身長体重とも、はるかに及ばなかった。

いくら相手の、みえ子がおとなしく、サチ子が人一倍気が強いとは言え、ちよっと勝てないだろうと思われたのである。

大柄な、みえ子が有利だと言う予想は当然、サチ子の耳にも入った。勝ち気なサチ子は、これが気に喰わなかった。

『どっちが強いのか、やってみなくちゃ分ないわよ！』

彼女は、憤然として言い放った。

一方、みえ子は

『ひどいわ。いくら私が大きいからって、あんまりだわ。そんな話、もう止して！』
みえ子にとっては、相撲に勝つことよりも自分の大柄な体格を、皆から話題にされるこ

とを嫌がった。もともと、大柄な女性は、自分の身体の大きいのを気にするものだが、内気な、みえ子は、特にそれがひどかったのである。

三、サチ子、初顔合せで

みえ子を破る

さて、いよいよ大会の当日。取り組は進んで注目の、みえ子対サチ子の一番を迎えた。控えに入った小柄なサチ子は、早くも、丸い顔に斗志をみなぎらせて、丸っこい太った腕を組み、向の控えにいる大柄なみえ子を睨みつける。

一方、大柄な、みえ子は、羞しそうに顔を赦らめて、俯向いて座っている。

いよいよ呼出し係の女性が土俵に上った。

「東しい、みえ子さーん

西しい、サチ子さーん」

牙えた美声で両女性を呼び上げる。

自分の名前を呼び上げられた、みえ子は、羞しさで身の縮む思いだった。

サチ子は、すつくと立ち上るや、右手で立ミツのあたりを「ポン」と叩いて元気よく土俵に上る。場内からワーツと歓声が起った。

サチ子は、土俵の一角で威勢よく四股を踏

んで、蹲んで同僚の女性に水をつけて貰う。

「かたやー、みえ子さん」

「こなたー、サチ子さん」

行司係の女性の、カン高いフレが響く。

両女性は、チリを切り終り、やがて土俵中央に進み出て、向い合って立った。二人の身長にかなりの差があった。

小柄なサチ子は、太い脚を大きく上げて威勢よく四股を踏む、肉付きの良いむっちりした乳房が「ブルン」と震える。

サチ子の四股に比べて、大柄な、みえ子の四股は小さかった。

「見合って、見合って」

二人は踞踞の姿勢で向い合った。サチ子は眼を大きく見開いて、真一文字に相手の眼を睨みつけた。このサチ子の強い視線にあってみえ子は思わず眼を伏せる。

「見合って見合って」

行司の声で立ち上り、第一回目の仕切りに入る。闘志満々のサチ子は、両脚を大きく開いて、ぐっと腰を落して仕切る。ぐっと前に突き出した両の拳にも、力が入っている。

小柄だが、よく肥えているため、なかなかいいポーズである。

一方、大柄なみえ子は、足の開きも狭く、

腰高の、ちようと陸上競技のスタートのような仕切りである。だが、高く持ち上げた大きなお尻が印象的だった。女相撲でなくては味えない魅力である。私は、見ている内に、だんだん息が苦しくなってきた。

私は、みえ子に愛情を感じていたので、何とかして彼女に勝たせたかった。

それに、相手のサチ子は、最初からどうしても好きになれなかったのである。

たしかに、皆の予想は、大柄なみえ子が、圧倒的に優勢だった。事実、体格の点では全然問題にならなかった。

しかし、さきほどから、二人の土俵態度を見ていた私は、みえ子に一抹の不安を抱いていた。サチ子の闘志溢れる動作に比べて、みえ子は、あまりにもおとなしく消極的だったからである。私は以前、サチ子が同僚の男子職員に、眼をむいて喰ってかかるのを見たことがあった。サチ子は怒ると、すさまじい女性である。みえ子は、サチ子に完全に気合負けしているのだ。果して勝てるだろうか。

五、素首落しで快勝

私の不安をよそに、制限時間は、たちまち過ぎて行った。場内からいっせいに歓声が上

る。小柄なサチ子は、溢れる闘志を満身にみながら最後の仕切りに入る。みえ子は、顔を硬くばらして緊張した表情。

行司の軍配がさっと引かれた。

素早く立った小柄なサチ子が、大柄なみえ子に激しくブチかまし、右をノド輪にして一気に押して出た。このサチ子の鋭い出足に、みえ子は、忽ち長身をのけ反らせて後退したが、土俵際で必死に足を踏ん張って耐え、やっとノド輪を外し、頭を低くして懸命に押し返そうとした。と、次の瞬間、小柄なサチ子は、いきなり左に体を開くや、右手で大柄なみえ子の肩口を激しくはたいた。この奇襲にみえ子は、思わず大きく前に泳ぎ、足を送って必死に残そうとしたが、サチ子が、さらに強く首筋を抑えつけたので、遂にたまらず、土俵にばったり両手をついてしまった。

場内が「ワッ！」と熱狂した。

小柄なサチ子の鮮かな素首落しだった。

敗れた大柄なみえ子は、顔を真赤にして起き上った。よほど羞しかったとみえて、首筋まで赤くなっている。一礼し終るや、逃げるようにして急いで花道を退場して行った。

私は、呆然として彼女を見送った。それにしてはみえ子の、いまの敗け方は、あまりに

も不甲斐なかった。

彼女が、サチ子よりもはるかに大柄だっただけに、なおさらだった。

小柄なサチ子に、首を抑えられて四つん這いになった大柄なみえ子の、大きなお尻は、いつまでも私の記憶に残った。

この勝負は、彼女たちの、それから後の対戦に重大な影響を与えた。

なぜならば、勝ったサチ子は、自分よりはるかに大柄なみえ子を、一方的に破ったことにより、みえ子に対して絶大な自信をつけてしまったのである。

一方みえ子は、サチ子との第一戦に、彼女に完敗して、その後の相撲に全く自信を無くしてしまった。みえ子が、もともと気の弱い性格だっただけに、最初の一敗は痛かった。事実、それ以後のサチ子との相撲は、彼女に主導権を握られて、終始、苦戦を余儀なくさせられることになった。

その後の二人の対戦経過を、ふり返ってみよう。

○サチ子（押出し）みえ子●

小柄なサチ子は、一瞬早く立ち、例によって強引な右ノド輪で押した。立ち遅れた



大柄なみえ子は、サチ子の鋭い出足に圧倒されてずるずると後退し、なすところなく押し出された。

○サチ子（寄切り） みえ子●

相変らず立合の積極性を欠くみえ子は、サチ子に飛び込まれて双差しを許す。サチ子は

すかさず寄りたてる。上手の引けないみえ子は、忽ち土俵際に追い詰められ、必死に耐えようとしたが及ばず、もろくも土俵を割ってしまった。

このあたり全く、小柄なサチ子の一方的な相撲だった。大柄なみえ子の敗因は、何と言っても立ち合いが、あまりにも消極的過ぎる

ことだった。いくら体力に優る大柄なみえ子でも、こうも一方的に攻め込まれては、どうしようもない。彼女にとって、立ち合いに突っ張るのが最も賢明な策と思われた。みえ子ほどの上背があれば、突張りもかなり威力があるはずである。さすれば、小柄なサチ子は、そう簡単には飛び込めないはずだ。そこで私は彼女に突っ張るように勧めた。だが果して、気の弱い大柄なみえ子に突っ張りが出来るかどうか疑問だった。

○サチ子（上手投げ） みえ子●

みえ子は、立ち合い突張ろうとしたが、小柄なサチ子の踏み込みが、あまりにも早かったため、突張れない。サチ子は、すばやく左で前ミツを引き寄って出る。みえ子は土俵際まで後退したが、よく左を差して残し、懸命に土俵中央に寄り返す。小柄なサチ子は攻撃の手を緩めず、またも激しく寄りたてる。そして、みえ子が土俵際、必死に寄り返そうとするハナを、いきなり左差手を抜き、首に捲くや、体を開いて右から強烈な上手投げを放った。みえ子の巨体は、どっと土俵に横転して倒れた。小柄なサチ子の、引き足を利用した美事な投げだった。私は、敗けた大柄なみえ子

の顔を正視できなかった。

○サチ子（内掛け） みえ子●

両者、ほとんど五分に立つ。大柄なみえ子は、突っ張りをみせたが、小柄なサチ子、すばやく左を差す。みえ子も左を差し、たがいに上手を引き、がっぷり四つに渡り合う。サチ子寄り身をみせるが、みえ子動かない。大柄なみえ子は、両マワシを引きつけるや一腰入れて、小柄なサチ子を吊り上げようとした。この瞬間、サチ子は右で長身みえ子の首を捲くや、右足を飛ばせて内掛けを強襲すれば、これが美事に決り、大柄なみえ子は土俵に尻餅をついて敗れた。

ついに、大柄なみえ子は、小柄なサチ子に五連敗を喫してしまったのである。

みえ子びいきの私は、無念この上もなかった。あれほど体力に優る彼女が、小柄なサチ子に勝てないのは全く不思議だった。敗因は、一に、彼女の闘志の不足にあった。私は彼女を叱咤激励した。

○みえ子（浴せ倒し） サチ子●

この相撲で、大柄なみえ子は、はじめてサチ子に勝つことができた。だが辛勝だった。

立ち合い、みえ子は激しく突っ張った。

だが、出足が伴わないため、小柄なサチ子に組み止められてしまう。サチ子、鋭く寄ったが、みえ子よく残し、逆に両マワシを引きつけて寄り返す。この大柄なみえ子の必死の寄りに、小柄なサチ子は土俵に詰り、苦しまぎれに右でみえ子の首を捲き、首投げを打った。みえ子は大きく傾き、思わずハツとしたが、からも長身を浴せて寄り倒した。勝つには勝ったが、危い相撲だった。私は、彼女の腰高を指摘した。

○みえ子（吊出し） サチ子●

大柄なみえ子が、はじめて完勝した。

両者、立ち上るや、がっぷり四つに渡り合う。小柄なサチ子、よく動いて蹴返えし、内掛けと矢次早やに攻めたてるが、大柄なみえ子はよく耐える。機を見て、みえ子がサチ子を吊り上げた。小柄なサチ子は足をばたつかせて残そうとしたが、みえ子構わず横吊りに、吊り出した。

私は、みえ子の快勝に、胸のすく思いがした。彼女も、ようやく自信を取り戻した様子だった。

○みえ子（送出し） サチ子●

先ず、激しい突っ張り合い、押し合いになった。体力に優るみえ子、突き勝ち、左をノゾかせて寄って出ようとした。小柄なサチ子は、いきなり右で大柄なみえ子の首を捲き強引な首投げを打とうとしたが、みえ子が首をすくめたので腕がスッポ抜け、後を向く。みえ子、得たりと送り出して勝つ。

小柄なサチ子の粗雑な取り口が目についた一番だった。

だが、サチ子が、この頃よくみせる強引な首投げは、腰高のみえ子にとって、充分警戒する必要があった。

こうして、二人の相撲は、いよいよ激しさの度を加えていった。

最初は、消極的だった大柄なみえ子も、私の熱心なコーチで、ようやくやる気になったらしく、よく稽古もするようになった。

もともと、恵まれた体躯の持主だっただけに、相撲の取り口をマスターすれば、職場女相撲の横綱になるのも、さして難かしいことではなかった。

だが、天は二物を与えず、とはよく言った

ものである。みえ子は、恵まれた体格を持ちながら、内向的な性格のため、どうしても、もう一つファイトに欠ける点があった。

そして、みえ子にとって、小柄なサチ子は相変らず最大の苦手だったのである。その後も宿命の対決は続いた。

そして、ついに運命の勝負の日を迎えたのである。

六、宿命の対決

この大会は、二人とも好調で、全勝のまま結びの一番を迎えた。職場女相撲のライバル同志が、優勝を賭けて争うことになったのである。私は、何としてでも、みえ子に優勝させたかった。私は、彼女の取り口について、色々とアドバイスをした。先ず、彼女の立ち合いの甘さを指摘した。内気な彼女は、立ち合いの気迫に欠け、どうしても受けて立つことが多かった。仕切り線より一步踏み込むくらいファイトが彼女には、なかったのである。

次に、突っ張りを完成することが、彼女にとって絶対必要だった。

また私は、みえ子の腰高を是正するように努めた。気の弱い彼女は、組んでもすぐ、へ

っぱり腰になる悪いクセがあった。

これは、彼女だけに言えることではない。女性の本能だろうか。相手を近づけまいとしてどうしても腰を引く傾向があった。

七、優勝を賭けて

私は、自分が相撲を取るような気がして、落ち着かなかった。ついに、宿命の対戦を迎えた。呼出しの声も、行司のフレも場内の歓声に聞きとれなかった。二人の仕切りは、入念の度を加えて行く。時計係検査役の手が上った。場内は興奮のルツボに叩き込まれた。

小柄なサチ子は、闘志満々、塩を大きく撒いて登場する。大柄なみえ子も、さすがに緊張した表情、足の裏の砂を俵でとんと落して土俵に入る。いよいよ待ったなし。最後の仕切り、小柄なサチ子が気負い込んで突きかけた。みえ子嫌って仕切り直し、二回目も、サチ子の気合に押されて、みえ子立てず、愈々三回目、両女性は、サガリを捌き、足の位置を決め、ぐっと睨み合った。行司の軍配が反る。

手が下りた。立ち上った。

二人の肉体が「ガン」とぶつかり合った。

次の瞬間、大柄なみえ子が小柄なサチ子を激

しく突き放した。

体勢を立て直したサチ子は、頭を低くしてふたたびブチかました。みえ子きらって、また突き放す。激しい突っ張り合いになった。しかし、上背に優る大柄なみえ子が突き勝った。彼女は激しく突っ張って出る。小柄なサチ子が左に大きく飛んではたく。みえ子はちよっと泳いだ。立ち直り、また激しく突っ張りたてた。一発、二発。大柄なみえ子の大きな手が、小柄なサチ子の顔面に炸裂する。おとなしいみえ子が、今まで一度も見せたことのない激しい突っ張りだった。

サチ子の顔が、みるみる赤く染まる。小柄なサチ子は、眼をむいて物凄く形相で、必死に組みつこうとするが、なかなか飛び込めない。土俵際まで突きたてられ何度かピンチに追い込まれた。この時、みえ子にもう少し出足があったら、突き出されていただろう。しかし、大柄なみえ子の突っ張りは、上体だけに力が入り過ぎ、出足が伴わないのが欠点だった。小柄なサチ子は、ようやく左で前ミツを引く。そして間髪を入れず引きずるような出し投げを打った。だが、これは充分ではなく、かえって相手に右上手を取られる。二人はがっぷり四つに渡り合った。大柄なみえ子

は両腕を引きつけながら、じりじりと寄つて
 てる。小柄なサチ子のアゴが上つてきた。み
 え子は、ぐいぐい寄りたてた。小柄なサチ子
 は、苦しまぎれに右手を大柄なみえ子の首に
 捲きつけ、首投げを打つ。みえ子は咄嗟に下
 手投げを打ち返す。サチ子が土俵に詰った。
 勝ちを焦ったみえ子は左足を飛ばせて外掛け
 を掛けた。

小柄なサチ子は左足一本で耐え、右足を内
 掛けに絡ませ、ぐいと右に切り返えした。二

人の身体が纏れ合つて、土俵下にどっと転落
 した。場内はワッ／＼とわき返えった。

八、ついに取り直し

ほとんど団体だった。判定の難かしい勝負
 だった。検査役協議の末、当然取り直しと決
 った。ふたたび二人は土俵の上に呼び上げら
 れた。小柄なサチ子は、さきほどよりさらに
 激しい闘志をみせ、大柄なみえ子を睨みつけ
 る。みえ子も、さすがに興奮した表情で顔面

真赤だ。二人は、こんどは、手を下さず中腰
 のまま立ち上った。大柄なみえ子は、また突
 っ張ろうとしたが、小柄なサチ子の踏み込み
 が早かったため果さず、サチ子に組みつかれ
 た。

小柄なサチ子は、すかさず蹴返えしをかけ
 大柄なみえ子を動揺させ、矢次早やに、内掛
 け、二枚蹴りと攻めたてる。大柄なみえ子は
 その都度、ぐらつきながらもよく耐える。サ
 チ子はしゃにむに寄りたてた。上手の引けな
 い大柄なみえ子は、大きく後退しながら、右
 から強引な小手投げを打った。サチ子の小柄
 な身体が大きく傾いたが、よく、すくい投げ
 を打ち返す。このあたり全く、サチ子の腰の
 良さが窺える。

大柄なみえ子は、ようやく右上手を引き、
 両女性はがっぷり四つに渡り合った。みえ子
 は、両腕を引きつけ吊り身をみせるが、サチ
 子はその都度、腰を割って防ぐ。みえ子は、
 何度も寄り身をみせるが、腰高のため寄り切
 れない。二人は、ふたたび土俵中央に戻っ
 た。ハッケヨイヤ行司が声を掛けて二人
 の周りを回る。

二人の動きが止った。そしてついに水が入
 った。二人の表情には、さすがに疲れが出て

新発足 懸賞入告白、手記、体験▽原稿募集

☆賞金☆

優作	一篇につき	参万円
秀作	一篇につき	五千元
佳作	一篇につき	二千元

☆規 定☆

一、本誌の内容刷新、充実を期して、ここ
 に新しく、「告白、手記、体験」の原稿を
 広く懸賞募集いたします。

一、従来、「告白」の分野で文獻味豊かな
 告白特集を度々刊行して、輝やかしい金字
 塔をうち樹てた本誌が、あらゆる傾向の告
 白をもって誌面を飾る考えであります。

一、事実味溢れる告白、万人の共感を得る

手記、数奇な体験、どうしても誌上に発表
 したいという熱意のこもった原稿を求めま
 す。どうか奮って御応募下さい。

一、文章の巧みさとか、表現や描写のうま
 さは求めませんから、実際に体験されたも
 の、事実の裏付のあるものが大切だと思ひ
 ます。従って必ず自作の未発表のものに限
 ります。

一、枚数に制限はありませんが、一回の掲
 載分としては、三十枚乃至五十枚が適当で
 す。用紙はなるべく原稿用紙をご使用下さ
 い。締切日は毎月十日。翌月号に発表。

一、入選作には掲載誌発売と同時に、賞金
 をお送りいたします。応募原稿は読者原稿
 と区別するため「懸賞」とお書き下さい。

いる。二人とも全身汗みどろだった。土俵の砂に、両女性の足形がくっきりとついていて、小柄なサチ子のは小さく丸っこい形だ。彼女は九文半だった。大柄なみえ子のは、はるかに大きかった。彼女の大足は職場でも有名で、十一文近くあり、羞しがり屋のみえ子は、ひどくそれを気にしていたのだ。それのみえ子はひどい脂足だったのである。彼女の足形のついた砂も、汗で濡れていた。

さて、土俵を下りて同僚の女性に、汗を拭いて貰い水をつけ終った両女性は、ふたたび土俵上に登場した。「ウーッ」と歓声が上る。

「サチ子さーん、がんばってえ！」

「みえ子さーん、しっかりっ！」

同僚の女性たちは、それぞれひいきの二人に必死の声援。二人は激しく睨み合った。サチ子は、すさまじい形相でみえ子を睨んでいる。みえ子も切れ長の眼をつり上げている。行司が、二人の足形を調べて慎重に元通りの体勢に組ませる。そして二人の立ミツをポンと叩いた。いよいよ戦闘再開である。

九、首投げ決る

小柄なサチ子が、すかさず寄って出た。や

はり彼女の闘志が優っている。大柄なみえ子は両腕を引きつけて懸命に耐える。サチ子は左差し手を抜きハズに当て、みえ子の胸に頭をつけて寄りたてる。みえ子は土俵際まで後退したが、俵に足を掛けて必死に耐える。寄り切れずとみたサチ子は、寄り返えそうとするみえ子の力を利用して、いきなり下りながら体を開き、引きずるような出し投げを放った。

そして大柄なみえ子が、大きく前に泳ぐところ、右に回りながら再び出し投げの強襲。左で彼女の首を抑えようとしたが、大柄なみえ子は、必死に足を送り、右手で小柄なサチ子の足を渡し込んで残す。場内、思わずハッと息を呑んだ。しかし、サチ子の出し投げは決らなかった。それどころか、大柄なみえ子に右を差され、双差しを許してしまった。ただでさえ、相手に双差しになれば不利になるのに、みえ子のような大柄な相手に双差しを許しては、どうしようもない。小柄なサチ子は完全にパンザイの恰好をさせられてしまった。止むなく右手で大柄なみえ子の首を捲く。みえ子がすかさず寄って出た。サチ子は退りながら苦しまぎれに、首投げをみせる。みえ子の大きな身体が、ぐらっと傾く。

場内から「キャーッ」と女性たちの悲鳴が起る。みえ子は、なおも激しく寄りたてた。小柄なサチ子は、土俵に詰り、またも強引な首投げを打った。勝ちを焦ったみえ子は、必死に上体を浴せかけた。

小柄なサチ子は、右足をみえ子の左足に絡ませながら、自ら倒れ込むような首投げを放てば、腰高なみえ子はいよいよたまらず、どっと土俵下に転落した。

場内が割れんばかりに熱狂した。私は、我を忘れて立ち上った。見れば、土俵下に、小柄なサチ子が右腕深く、大柄なみえ子の首を抱えたまま組み敷いているではないか。サチ子の丸っこい腕の中に、みえ子の紅潮した面長な顔がみえる。眼がつり上り、無念そうな表情が印象的だった。

まったく、激しい一番だった。だが、九分九厘みえ子が勝っていた相撲だった。ただ土俵際の詰めで、腰高の欠点を衝かれて、サチ子の捨身の首投げで逆転させられてしまったのである。あるいは最後まで勝負を捨てないサチ子の根性に負けたのかも知れなかった。

私は、この勝負で、女相撲の難しさを、つくづく考えさせられた。女相撲には、ほかの相撲にはない微妙な問題がありそうな気がしてならないのである。

(完)

「最新版」 女体悦虐写真集印画紙版

G組百姿集

大手札型印画紙 (9×13 ㎝) 焼付

各組一枚一組 (送料共)

一組一枚	一五〇円
五組五枚	五〇〇円
十組十枚	九〇〇円
二十組二十枚	一七〇〇円
三十組三十枚	二五〇〇円
四十組四十枚	三二〇〇円
五十組五十枚	四〇〇〇円
六十組六十枚	四七〇〇円
七十組七十枚	五四〇〇円
八十組八十枚	六〇〇〇円
九十組九十枚	六五〇〇円
百組百枚	七〇〇〇円

12	全裸しぼりと浣腸器 (玉田)
11	浣腸器に脅びえる女 (玉田)
10	恐怖のいたぶり (新井)
9	手吊り全裸さらし (玉田)
8	全身ガンジガラメ (大塚)
7	煙草責と荒縄緊縛 (大塚)
6	縄に羞らう裸しぼり (長野)
5	敷布に悶える白い肌 (玉田)
4	一糸まとわぬ晒し者 (玉田)
3	豊臀と足首と後手縛 (玉田)
2	アグラで縛られる (玉田)
1	顔面から全身嚴重縛 (東浦)

38	柔肌は縄にくびれて (玉田)
37	裸を誇りの椅子縛り (玉田)
36	写真に埋れた全裸姿 (大塚)
35	美貌と豊胸を誇る女 (長野)
34	典型的な股間しぼり (大塚)
33	足でなぶられる鼻 (大塚)
32	踊子の緊縛ポーズ (絹川)
31	肥り肉を晒らす女 (東浦)
30	逆エビと浣腸器 (大塚)
29	緊縛裸身を誇る足 (長野)
28	白肌は縄にくびれて (大塚)
27	革の猿轡で責める (新井)
26	机の脚に縛られる (新井)
25	肌に刺さる荒縄 (大塚)
24	豊胸に黒紐の輝やき (長野)
23	後手縛全裸椅子跨ぎ (東浦)
22	縛られて鼻を任す (大塚)
21	二つの乳房アップ (長野)
20	足首と後手首と (玉田)
19	椅子に縛られた全裸 (玉田)
18	諦観の後手しぼり (玉田)
17	責写真に埋れた緊縛 (大塚)
16	黒フンで縛られる女 (玉田)
15	そりかえる鼻の頭 (大塚)
14	美しき全裸強調縛り (大塚)
13	踏みつけられる美貌 (大塚)

69	木馬責め斜め後姿 (大塚)
68	首枷のさらしもの (大塚)
67	目かくしのハリッケ (大塚)
66	手吊り足縛り仰臥 (新井)
65	猿ぐっわの婉な表情 (新井)
64	後手縛全裸の美しさ (大塚)
63	強奪されたパンティ (大塚)
62	責めぬかれた表情美 (大塚)
61	可憐ないじめられ様 (大塚)
60	両手吊りの猿ぐっわ (新井)
59	無抵抗の裸いじめ (大塚)
58	不安定な台上股間縛 (大塚)
57	色魔に脱がされる (新井)
56	後手縛りで寝室へ (絹川)
55	椅子に跨がされた女 (新井)
54	全裸後手吊り晒し (玉田)
53	後手首縄膝頭一括縛 (木村)
52	全裸胴絞め首縄猿轡 (木村)
51	全裸正面強烈亀甲縛 (木村)
50	嚴重荷造縛りの全裸 (玉田)
49	股間縛り全裸重量感 (大塚)
48	後手逆エビ強烈鼻責 (大塚)
47	裸身の美を誇る縛り (長野)
46	荒縄と豆絞りの猿轡 (大塚)
45	トイレを前にして (大塚)
44	庭の見える部屋にて (大塚)
43	オシメカバー縛り (大塚)
42	女囚縛られ姿 (宇治)
41	女囚哀欲 (宇治)
40	全裸の肌は縄まかせ (玉田)

100	膨大な臀部を眼前に (大塚)
99	反りかえる緊縛裸身 (長野)
98	台上の緊縛裸身像 (長野)
97	股間縛り全裸の膝立 (大塚)
96	臍乳房強調喰込む縄 (大塚)
95	白肌に映える光の縞 (玉田)
94	全裸アグラ坐り縛り (玉田)
93	裸身を晒す両手縛り (大塚)
92	六尺禪巨大臀部虐め (大塚)
91	白布の猿轡と白肌責 (木村)
90	奴隷の裸身を捧げる (木村)
89	後手縛り裸立姿晒し (木村)
88	美麗の全裸に嚴重縄 (玉田)
87	豊満裸身を誇る緊縛 (玉田)
86	全裸でしやがむ後手 (玉田)
85	ヤンチャ娘開股縛り (長野)
84	膨隆見事な乳房責め (長野)
83	巨大な臀部全裸後手 (大塚)
82	首縄開股強烈縛り (木村)
81	蒲団上に転がった女 (遠藤)
80	全裸後手足首連繫縛 (玉田)
79	両手開き吊り顔虐め (新井)
78	首吊りの責め (新井)
77	美貌をいためつける (絹川)
76	縄にもだえる美女 (絹川)
75	白肌で縄にうそぶく (長野)
74	豊満を誇る露出癖 (長野)
73	長髪垂らし全裸縛り (長野)
72	火あぶりにあう女 (大塚)
71	革全頭マスクと手錠 (大塚)
70	木馬責め斜め前姿 (大塚)



「奇ク」に期待する

オーソドックス路線

久我 庄一 (仙台)

このお便りを差出すことになったのは、左記のような次第からです。私はどちらかと云えば、風俗文献を研究する意味ではオーソドックスな方で、動的というよりむしろ静的な方です。もっぱら読ん

うですな。さて、終戦後、あまりカストリ雑誌などが流行して専門誌がまだ現れてこない頃、私はよく昭和初期のこの種のものを古書店などでやっかいになり集めました。その頃『あまとりあ』が出現しました。

それから古書蒐集趣味もやめ同誌の創刊当時から廃刊まで集めました。一応この誌が出現し廃刊したことで風俗文献研究誌が世に果たす役割の時代は過ぎた、あとはこの一揃えを保存しくり返えし読むより外ない。これが偽りのない私の当時に於ける気持でした。

たまたま『風俗草紙』の増刊号を手にし『人間研究』なども拾読みしたことがあります、やはり『あまとりあ』で受けた満足までは至りませんでした。ところが今年のはじめ、たまたま商用があつて地方へ出張したとき、ある古書店で偶然にも『奇ク』を手にする機会がありました。その前にも夜店などで露店の片隅に並べてある

のを、ちらりと眼にしたこともありましたが、あまり気にもしませんでした。今度は軽い気持で車中の退屈しのぎにでも読むかと、五、六冊買いました。たいして期待もなく……。

読後、びっくりしました。ズバリ申します。『あまとりあ』に勝るとも劣らない風俗文献誌が、ここに立派に、しかも十有余年を営々として、出版し続けられていることに、驚いたのです。それから急に、他のこの種の風俗文献誌なども片っ端しから手にして読んでみました、やはり『奇ク』が一等です。まことに帰途は楽しく、久しぶりの読書で車中あまりにも早く、仙台駅に着いたのも気がつかないぐらいでした。

幸い購入した号は、昭和三十六年から昭和三十九年までの各一冊ずつ位ですので、およその編集の移り変りがわかるようです。簡単ながら感想を述べさせていただきます。昭和三十九年十一月号の表

紙は、三十六年よりの編集者の苦心が、ようやく結実したようである。エキゾチックな銅版画でも見るようなシャレタもので、表紙としては、これが決定打ではないでしょうか。

この種の雑誌を読む読者は、どうしても同人雑誌的オモチャ箱をひっくり返したような、楽屋のぞけるような編集を好むのじやないでしょうか。編集は正直にいて、表紙と違ってあまりスッキリしない迷路のみりよく、それだと思えます。まだ、ここに探せば、こんな面白い世界があったと云うような、そんな意味で、市販と云うよりは、発展はむしろ読者と直接手を結ぶと云う傾向にカギがあると思えますので、あまり一般的にするのはどうでしょうか。あくまで特色ある一線を打ち出すことでしょうか。

例えば、仙台の市内書店では、私の知るハンイでは、どこにも『奇ク』は見当りません。二兎を追

うものは——と云うことわざもあるように、部数は少くとも、直接購読者でも、十分に発行つづけるように出来る態勢が必要で、そのために、ますます独特な編集がのぞましいです。『読者通信』が増頁されたことを別にして、自肅自肅と云うヤカマシイ御時勢になってきたという点も考えに入れたいとしても、内容は年代をさかのぼるにつれて、よくなるというおかしな時代になっているように感じられます。

さて、広告によりますと、旧号在庫分の売行きがよいとのこと。営業的には結構なことですが、これから奇クのア読者になろうとする者にとっては、ちよつと不安です。旧号が売行きよいことは、とりもなおさず、現在発刊されている奇クを毎月読むだけでは、それだけで十分に満足できないことを意味しておりますから——。

むしろ旧号など、みむきもしない——ような傾向こそ奇クがますます前向きな姿勢で発展することになるわけですね。正直に云って私自身、現在売切になっている号の主要総目次に気持が引かれます。それは、これから、このような内容の興味ある編集が少なくなると云う気持が最近号を読んで、生きていくからです。むしろ、今後は次号発行の本誌の内容をデカデカと広告、読者のより購買力と興味を引く方に、力を入れるべきではないでしょうか。現在入手できない旧号の広告や内容を、いくら知らせてもらっても、気持がいらいだつことと、奇ク発行の現状に不満を倍加するだけです。また、いくら旧号が高値を呼んだとしても、御社に在庫なく、読者も入手できかねるような高価では、なら奇クの、これからの発展になりません。

むしろ、現在入手できるハンイ内で旧号のアンコール版を次々と発刊するとか（「悦特」のような形式で）昭和二十八年頃から現在

までが、その対象になるでしょうが、それと創刊及び再刊当時の、現在ではとても入手できないような号など——。

それから、別冊、または秘蔵版というような増刊形式で、創刊より現在までに、その比を見ない口絵、グラビヤ、小説、告白など（千円位で）五百頁位の大冊も出すべきでしょう。読者直接の注文による形式などで実現可能と考えます。以上、あくまでも、いま入手出来るハンイ内でサービス出版が、より読者に親切であり、発展の一助にもなるのではないでしようか。

本誌の内容その他詳しい便りは追々と致したいと思いますが、今回はじめてのことでもあり、この辺で終わります。失礼を顧みず思いついた発言をしましたが、これも奇クファンになるためである苦言と期待であると御理解願います。

懸賞募集入選作品

花 散 る 里

瀬 川 泰 子

アスユク」ミエコ

という電文を手にした瞬間、島野民子は怪訝な思いにとらわれた。

上野駅から八時間、更に下車駅から四十分あまり木炭バスに揺られて入るこの山峡の湯宿から、瓜生美恵子が帰京して行ったのは、つい五日前のことだ。

美恵子は、かいがいしいモンペ姿で、干鰯^{ほしう}とソバ粉でふくらんだリュックを重そうにバスにかつき上げ、いちばん後の席に座をしめると、くると後向きになり、いつまでも手を振りながら、七曲りの坂道を見え隠れに

小さくなって行った。それは、昨日のことのようになまなましく民子の目に残っている。

△それが、どうして、また………▽

美恵子は二月に一度ぐらいの割りで、食糧の買い出しにこの湯宿をおとずれて来るのだが、それももう一年近い期間に及んでいた。まるで定期便のように美恵子はやって来た。

日とともに苛烈になって行く戦況と、それに伴う極度の食糧難が、女学校以来の親友をこうして結びつけているということは、考えてみれば皮肉な因縁だともいえる。

民子がこの湯宿にひきこもったのは昭和十

九年の三月だった。夫の彰一に赤紙が来て四日後には字品に集結の命が下った時、

「一人で東京にいては心配だ。田舎の家に疎開するんだな。親爺やお袋にも逢って行きたいし、ついでに送って行こう」

と強いてすすめたのは夫だった。

一人息子の彰一はいずれは代々のこの湯宿を継ぐことになるであろうが、それはずっと先のことになるはずだった。

夫に赤紙が来たとなれば、民子は、天涯孤独の思いで残らなければならない。――父は女学校の時に死に、母もまた、結婚一年目の

秋に、盲腸炎をこじらせて、苦しみながら死んだ。頼りにするのは夫だけで、その夫に征かれては、心の支えを失ったも同然だった。

夫のことばにしたがって、民子は都落ちを決意した。あわただしい準備の後に、二人は山間の湯宿に着いた。しかし、四日間と限られた日限に間に合うためには、夫はたった一泊しかできなかった。近親や村人達の居流れる大広間の上座に『武運長久』の赤襷をかけて端坐している夫は、民子にとっては、もはや手の届かぬ遠い人のように思われた。

おろおろと叫びだしたいような、何物かに向って思いきり呪いの声をはりあげたいような、そんな心の波立ちを『軍国の妻』の仮面の下に押し隠して、しだいに乱れて来る酒席の馬鹿騒ぎにじっと堪えていたあの居たたまらぬ苦痛は、いまもなお民子の記憶のなかにあった。

軍歌と盆踊り唄の乱調のなかから、ようやく夫が解放されたのは、もう真夜中だった。二人にとって、最後の夜となるかもしれぬ思ひ出の部屋は、母のはからいで、離れの別室があてがわれた。

残されたわずかな時間だけが、二人のものだった。肌と肌を接し、強く抱きあい、二人

が、こうして生きてたがいに触れあっていることを確かめながら、民子は果てしもなく遠い夫をひしひしと感じさせられた。離すまいとして、はげしく縋りつく夫を、目に見えぬ何者かが無残にも連れ去って行くのだと思った時、正体の知れぬその『何者』かに、民子は命をかけて闘い^{たたか}をいどみたい衝動にかられた。たった一枚の赤紙が、人間を無視し、愛情と信頼と、ささやかな幸福をさえ理不尽に踏み^ふみにじって行く傲慢さに、気が狂いそうないらだちを感じた。

最後の夜だ！Vと思い、思い残すことなく燃えつきようとし、一切をわすれようとし、この刹那に生きようと努め、しかもそれは、たちまちに、ひえびえとする得体の知れぬおぞましさに打ち消された。

人間が、それぞれ、一つの個体として生きているという事実は、どんなにしても乗り越えることができないのだろうか。女が男を愛し、そのなかにすべてをなげうつたとしても、^{しよせん}所詮は、一つに溶けあうことはできないのだろうか。触れ合いの忘我の一瞬に、完全な融合と合体を錯覚し、瞬時の後にまた、二つの別々の肉体を思い知らされる遣り切れないさを、繰り返しているにすぎないのではな

らうか。この人は遠い所へ行ってしまうV——離したくないと心底から思い、なにかに祈りつづけても、黒い大きな手は容赦なく奪って行く。民子は、夫の胸にとりすがりながら、とめどもなく涙があふれた。

まんじりともしなかった一夜が明けて、悔いはなお山ほどあった。まる二年の夫婦生活は、男女の哀歓をつくすには、あまりにも短い月日だった。なにかもが残り惜しく、胸を咬^かむ思いだけが雲のようにひろがった。

夫が死^たった後の、いいようのない虚脱感のなかで、民子は人知れず泣いた。来る夜も来る夜も、孤独を思い知らされるせつなさ^{せつなさ}が民子を捉えた。

この山間の村からも、出征兵士はぞくぞくと出て行った。そのたびに、この湯宿は、壮行会場になった。

美恵子がい出しに來はじめたのは、夏の頃からで、もう小笠原上空に敵機が現れ、東京では、本物の防空サイレンが鳴りひびく時分だった。

美恵子は、たいてい一泊の短い滞在で帰ったが、そのまる一日の時間が、民子にとっては孤独を慰められるなによりの恵みだった。民子は、結婚後も、美恵子との交際を断^たつ

ていなかった。美恵子の弟が学徒出陣する時にも、渋谷駅前で千人針を作って贈った。弟は出陣後間もなく、輸送船団の一員として東支那海で死んだ。その悲しみを抱いて、親子三人がひっそりとつましく生きていた。

壮行会のある時のほかは、村の老人達が茶呑み話に帳場で時間をつぶすくらいで、湯治客があるわけではなし、閑散とした月日がすぎたが、本土空襲が頻繁に伝えられる頃になって、東京からの疎開児童をどっさりと引き受けることになった。湯宿はいっぺんにごった返しの毎日を繰り返して、民子も転手古舞いの忙しさに追いこまれた。

夫の両親は帳場の奥の部屋にやすみ、民子は、夫と思ひ出の一夜をともにした離れにやすむことになったが、十畳のこの部屋も、いまでは、机や小道具をうずたかく積んで、手狭な部屋に変貌していた。ありったけの布団を疎開児童達に提供していたから、美恵子が来ると、民子は一つ布団のなかで、温めあうようにして寝た。

訛りの強い東北弁の人達にかこまれ、異邦人のような肌合いの違いをかこっている民子にとっては、都会の風を吹きこみに来てくれるような美恵子の来訪は、心づよくなつかしいものだった。

いものだった。

東京は日に日に食糧の逼迫を加え、美恵子も二月に一度ぐらいの割りで買い出しに来たのでは、埋めあわせがつかなくなっていた。「またすぐ来るわよ。ほんとに助かるわ」と、晴れ晴れしく帰って行った美恵子だったが、わずか五日後に、しかも電報で前触れしてやって来るとは、合点がいかない。人なにかあったのだろうか？——民子は、ふと不安な思いに襲われた。

美恵子は、翌日の夕方バスで着いた。

からのリュックを左肩にぶら下げ、疲れきった表情でたどり着いた美恵子は、入るなり民子の顔をじっと見つめたまま、あふれ出る涙をぬぐおうともせず、唇をかんですすり泣いた。

「どうしたの、いったい？」

「……………」

「ま、とにかく上^{あが}ってよ。ね、美恵さん」

帳場に通った美恵子の姿を見て、民子の姑も不審げにたずねた。

「焼かれたんです。帰って見たら、なにもかもないんです。……家も、母達も。……一面の焼野原で、どこが家だったかさえも見分

けがつかないんです」

喘ぐようにさういふと、美恵子は、吹っ切れたように慟哭した。

空襲があったのは、美恵子が帰京の夜行列車に乗っていた頃だったらしい。山の手いったいは、無残な焼け跡と化して、多くの死傷者を出した。父母の安否をたずねて、まる三日間、さまよい歩いた。そして知り得たことは、直撃弾を喰って、瞬時に炎上したという確実な情報だった。東京の大半は瓦礫の野となり、饑餓と恐怖が、浮浪の人々を追いたてているという。狂気のようにたずねまわった三日間がすぎて、美恵子は、まったくの天涯孤独で放り出されている自分に気がついた。——生きて行くめどはどこにもなかった。

焼死体がころがっている無気味な焼け跡を見下しながら、放心の数時間がすぎた後、肩に食いこんだリュックの重みが、美恵子に、生きる血路をあたえたといつてよかった。——美恵子は、焼野原の遠くに見える校舎らしい建物を目当てに歩きだした。そこには、避難民の群れが、あふれんばかりに雑居していた。美恵子は、そこでソバ粉や干鰯を売り払って金を得ると、何時間もかけて上野まで歩き通した。

列車は定時には出なかった。交通もなにもかも、ずたずたに乱れてしまっていた。美恵子は駅で電報を打った。民子のいる山間の湯宿にすがりつくよりではなかったからだ。

「いいとも。……気を落さねえで、ここに居なんしよ。疎開児童の世話で手いっぺえだし、手伝ってもらえれば、こっちも大助かりだでな。なんぼか辛かんべが、亡くなつた人のこと、くよくよ考えてても仕様なかんべ。それよりも、自分の体が大事だぞい。おら達も力になつから、気を大きく持つてな」

人の情けが温く美恵子の胸にしみ通った。親もとを離れて、耐乏生活とたたかっている小さな疎開児童達も、あの空襲で、知らぬ間に孤児になった者もいよう。戦争のむごさは一人一人の上に、決定的な不幸を烙印して行くのだと、部屋部屋から聞える子供達のざわめきに、ふと耳をすます気持になった。

もう、心から笑える日はあるまい、この心の傷手が、癒^いえることはあるまい、と思ひながら、美恵子は、つとめて子供達の世話に打ちこんで悲しみを忘れようとした。民子は、母鳥が子鳥をいつくしむように、美恵子を抱きしめて寝た。それは、不幸と孤独の奈落へ、

いっぺんに叩き落されたこの友のために、民子がしてやれる精いっぱいの仕事^{しごと}だった。民子の体温が美恵子に伝わり、豊かな乳房と乳房が薄い寝衣を通して触れあい、入すがって行けるのだ！Vという安心感のなかで、美恵子は眠りにおちた。

間もなく沖縄陥落の報が伝えられ、いよいよ本土決戦の呼び声が高まった頃、島野彰一の戦死の公報が入った。昨日までの美恵子の境涯が、今日は民子のものとなった。

かけがえのない一人息子を失った両親の衝撃も大きかった。別れて一年あまりの月日もどこかで、元気に御奉公していると信じることで、どうやら淋しさにも堪えて来られたのだ。それがもうこの世のどこにもその姿を見ることができないのだと思うと、捉えどころのないむなしさが、ひしひしと胸に迫った。

村からも多くの戦死者が出た。合同慰霊祭も行われた。しかし、夫を失い、子を失った痛恨と悲愁の思ひは、残された人々が、それぞれに負わなければならぬ苦しみだった。それは、なにをもつてしても癒^いし薄らげることのできない大きな心の傷だった。しかも、『敗戦』の決定的な日がやって来たのは、それから一月ほど後のことだった。いったい、

なんのために命を捨て、なんのために、このような歎きを背負いこまなければならなかったのか。すべてがむなしく、愚かなことではなかったのか。……この山間の村には、一度の空襲もなかった。食糧も、買い出しに応じられるほど豊かであった。応召者を出さなかった家などは、終戦という幕切れによって暗い重苦しいものから解放された明るささえ取り戻している。しかし、肉親を失い、頼りにする者を永久に失った家では、終戦と同時に、なにかを呪い、憎み、歯ざしりする思いをどうすることもできないのだ。——民子は、こうなつてはじめて、「夫の死」を、怒りと悲しみのただなかに、はっきり実感することができた。

疎開児童は、大波の退くように宿を引き払って行った。森閑となつた部屋部屋に落書きの跡がたくさんあった。母らしい顔があり親子連れで動物園にでも出かけた時のらしい思ひ出の絵もあった。子供達は、そのなつかしい親のもとへ、胸ふくらませて帰って行ったのだ。

東北の山間部には、秋が足早やに来た。山峽を流れ下る急端^{たん}の紺青色^{こんじょういろ}が、ひときわあざやかさを増し、兩岸の断崖に色づきわたる

紅葉が燃えるように美しかった。

ぼつぼつ復員者が村に戻って来た。——民子には、うらやましく、ねたましい光景だった。——やがて穫り入れ時も終り、本格的な冬に入ろうとする頃、農事を終えた人々が、米を背負って湯治に來た。そういう自炊しながらの湯治客は、廊下つづきの別棟に、のんびりした日を送るのだったが、それらのなかには、家族とともにやって來た復員者も何人かいた。

河原に雪が積もり、バスも途絶え、湯煙が溪流をはさむ二軒の湯宿から温かそうにたちのぼった。

民子も美恵子も、それぞれ心のなかでは、重大な時機が刻々に近づいているにちがいないと思案じていたが、それに触れることが恐ろしかった。——一人息子に死なれた両親が、若くして残された嫁の身の振り方をどう考えているか。それは、民子にとって、なによりも重大な問題だったし、そういう不安定な立場に立たされてる民子の友人として、このままずるずると手伝い女のような形で居つくことが許されるかどうかは、美恵子にとつて大きな問題だった。いつかは別れなければならぬという氣持が、いつも美恵

子の胸のなかにあり、その時は、生活問題をもからめて、一つの決定的な危機が來るという予感が、美恵子をひどく憂鬱にした。

「民、さをどうする気だァ」

と、おせっかいな村の老人達の話題にのぼると、姑は、

「それで頭をなやましてるだ。民はいい嫁だで、手放したくはねえしな。彰一に弟でもあれば、改めて縁組みもさせられるだが……」
「おめえの里から庄造さでも、入れたらどうだ」

庄造は、姑の姉の子だった。民子は勿論その庄造を知らない。

「それも考えただ。けどな、小学校もろくに出られなかった薄ノロだべ。それで兵隊にもとられなかったほどだで、彰一とはくらべものになんねえ。民に押っつけるのはかわいそうだべ」

「そうかといって、これだけの財産を、あかの他人にくれてやる氣にはなるめえ」

「それはそうだ。あんな薄ノロでも、民が切りまわしてくれさえすれば、こんな温泉宿ぐらい結構やっていけっからな。……やっぱり肝心の民がどういうかだ」

「好きな男でもできねえうちに、早く話きり

出してみるこんだな」

「うむ。考えておくべ。……ほんに、おら、戦争が憎らしくなるだよ。なんのために、一人息子を東京の学校まで出して育てたか、わけがわかんねえだ」

まる四カ月、雪のなかで暮すこの山間の村では、隣近所に関する狭い話題が繰り返し語られる。民子も美恵子も、こういう退屈しきった人々の間で、好きな話の種にされることは当然のことだった。噂はいつの間にか、尾鰭をつけて二人の耳にも入った、

終戦後、重庄からの解放感、年若い男女の間に、いちはやくひろがり、それは無軌道な反動の形をとった。禁じられていたものを、いちどきに回復しようとする試みが、最もはげしく「性」と結びついた。

ながい冬ごもりの間、これらの若い人々の氣持の発散は、演劇活動に手とりばやいは、け口を求めたように思われる。この湯宿がその稽古場にあてられ、多くの青年男女が戦前には考えられなかった自由奔放な雰囲気なかで睦みあっている姿は、民子を内部から刺激した。

夫と別れて二年近い月日の間に、民子は、肉体のなかにひそむいいよのうのない寂しさを

味わったことも、一度や二度ではなかった。

あられもない夢のなかで身をほてらせ、覚めて後に、底知れぬ孤愁を一人でじっと噛みしめたこともある。夫の戦死を知らされ、一人ぼっちで取り残されたという実感が胸の奥にしみ通る頃から、夫は「夫婦の秘図」の場の人物として、しきりに民子の夢のなかに現れるようになった。それはおそらく、再び触れることのできない夫へのせつない思慕と、意識の下におさえて来た肉体の飢えとが、ひとつになって民子の夢を形づくったのかもしれない。人はしばしば、夢によって、自分の内側を思い知らされることがあるものだ。

夜ふかく目覚めて、まだ夢の名残りが体の芯にうごめいているような思いで、ふと気づくと、美恵子は、頼りきっているような姿でちかぢかと寄り添いながら、安らかな寝息をたてていた。民子は、思わず美恵子をかたく抱きしめた。体温が、夢ならかの思いをあらためて揺さぶるような気がした。

かって夜の床には、いつも夫がいた。民子は夫の胸に顔を埋めて、いたいけな少女のようになり添っている自分を見出し、夫の軽い軀に、なにかも頼れる安心感で、妻のしあわせを、あらためて思い返したものだ。

その夫は、もはやここにはいない。代りに、自分を頼り信じている美恵子がいるのだ。二人は、離れられない宿命につながっているのかもしれない！Vと思い、おなじような不幸を背負った女同志が、夜の闇の底で、こうして肌を接する近さで寝ているという図が、いじらしく、あわれなものに思えて来るのだった。

雪が消えて、また、バスが通いはじめた。「民子。すまねえがな、干ソバの注文があったで、届けに行ってくれねえか」

届け先は、H温泉のM旅館だという。バスで四十分、駅までいったん出て、そこからまたあらためて別のバスに乗り換えるのだ。この山間に来てからはじめての遠出だった。

姑から用達しをたのまれた時、民子は、何カ月もとじこめられていた冬から、やっと解放されたような明るい気持ちになった。

「美恵子、さにも行ってもらわねえと、持ちきれねえだぞ。有名な温泉場だけのことはあつてなかなか盛りはじめたらしいな。これからもちよくちよく行ってもらうことになんべ」

翌日二人は、重たいリュックを背負い。両手にも持てるだけ提げてH温泉に出けた。

「ゆっくりして来ていいからな。少し見物して来るといい」

姑は、機嫌をとるようにして送り出した。

「これは、これは。面倒かけやしたな」

と、M館の主人は、初対面とも思われぬいたわりようで民子達を迎えてくれた。

とろとろに磨きぬいた長い廊下といい、欄干といい、其新しい襖まで、山村の湯宿とは比較にならぬ豪勢さだった。

「すっかり疎開児童に荒されやしてな。仕方なく手を入れましただ。東京からの客人も見えるというのに、荒れ放題ではな。……ゆっくり湯使ってつてくだんしょ。所変れば何とやらで、お湯の味もまた違いますべから」

主人は、居間の方に膳部を取り寄せて、簡単な食事まで供してくれた。二階の奥座敷からは、三味や太鼓の音につれて唄声がひびいて来た。終戦後半年あまりで、ここは、こんなに昔の姿をとり戻しているのかと、二人は意外な思いにかられた。

「東京の闇屋の親分株の人らしいだ。仲間できりこんで来られての大散財でしてな。なんでも木綿の反物で^{おもち}大儲けしたとかいってただが、運がいいと、大金をつかめる御時勢だで

な」

あの焼け跡から、闇或金が新しく生まれ出る東京という不死鳥フエニックスの街に、美恵子は不思議な感懐がわいた。

「旦那さん。ちよっと部屋借りっから」

いきなりとびこんで来た若い芸者が、つかつかと部屋の隅の風呂敷包みのところに駆け寄った。

「ああ、いいとも。いよいよ十八番の御注文か」

「やっぱり白虎隊を出さねばな」

芸者は、民子達にちよっと会釈すると、衝立ついでのかげに入り、するすると帯をとき、着物を脱ぎ、包みのなかから剣道着の刺子さしこを出して着換え、すっぱりと髪をとった素の髪に白鉢巻をしめた。見る見るうちに変わった美少年姿に、二人はあっけにとられた。

若い芸者は、黒鞘の刀を左手に持つと下緒を右手で二三度ひっぱり、刀身を半分ほど抜いて滑り具合をためした。刃引きしてある刀身がヒヤリとするほど鋭く光った。

「お邪魔さま」

芸者は、白一色の装束を、鏡台に写して確かめると、そのまま廊下から二階に消えた。「剣舞芸者で名を売ってる妓こでな。あれも戦

時中は、徴用で工場にひっぱられてな。毎日愚痴ばかりこぼしていやした。この頃では、水を得た鯉ですわ。売れっ妓ですて」

「白虎隊の剣舞ですの」

「そうですて。本場だで、詩吟の達者な妓もいやす」

「恵恵さん。見てみたいわね」

「差支えねえ。階段の上り口からすぐ右手さ廊下が曲ってやすから、そこから見る分には客人に気づかれずに見られるだ。見て来させ。遠慮はいらねえ」

そういわれて民子は、美恵子をうながして教えられた廊下の曲り角へ行った。酒宴は盛りのようなだった。嬌声が聞え、音曲の音がすぐ近くで起っていた。広上二部屋をぶっ通して、手踊りの芸者連は、東側の床の間に近いところにいた。拍手が起り、二人の連れ舞いが終ると、

「剣舞、剣舞」

というだみ声がかかった。

また、ひとしきり拍手が起るなかを、先ほどの芸者は正面に進み、端坐して一礼した。拍手がやみ、この演者に集中したような一瞬の静けさが生じた。

「少年……団結す……白虎隊」

襖のかげから、重くおさえた女の吟声があり、芸者は、その声につれて、壮重で、且つ敏捷な身のこなしで、凛々しく舞いはじめた。

「国歩……艱難……堡塞を……成る」

大振りに振りあげる二の腕の白さが、短い袖にこぼれ、踏み出す腓はざの白さが、袴の裾からのぞいた。頬はすでに紅潮し、決意を秘めたような光を宿す眼は、清純な雄々しさをたたえて、まことの美少年とはまた違った一種独特のつややかさを感じさせる。

「大軍……突如として……風雨来る」

乱刃は虚空にきらめき、畳を蹴って一撃また一撃……

「殺気は惨澹……白日……晦し」

演者の額には、汗が浮いている。

「南……鶴ガ城を望めば……砲煙……あがる」

かざす小手の下に、悲痛の思いをこめて、黒瞳が涙にぬれる風情があった。

「痛哭……涙をのんで……しばし彷徨う」

刀を仗ついて二歩、三歩……よろめいては踏みとどまり、眼はまた遙かな空間を追う。

「社稷……亡びぬ……以て……止むべし」

膝まづき、抜身を背後に隠して、うやうやしく礼拝。

「十有九士……」

吟声はテンポを落し、演者は、同志を見まわす思い入れて、指を折りながら、新たな決意を面に表わした。……と見るや、ドカッと右膝をつき、いきなり逆手に持ちかえた刀身に、懐から半ばのぞいていた懐紙を当てがい、左手を脇腹に押し当てると、吟声は吹っ切れるように高く、

「腹を屠^ほって………^{たお}……」

演者は、唇をかみしめながら、着衣の上からキリキリと真一文字に切りまわし、カラリと刀を取り落すや、そのままドッと腰を落して、合掌しながら崩れ伏した。

吟声は更につづき、演者は、刀を提げてまた立ちあがり、延々る長詩の音律にのった格調ある舞姿は、なお観衆の前にあった。

民子は、胸苦しくなるほどの動悸を、息をひそめてやっと支えた。ながながとつづく舞に目をこらしながら、眼前のその現^{うつ}絵にかさなりあつて『腹を屠^ほって僵^うる』と演じた切腹の姿態が、まざまざと蘇り、二重写しの明滅をもつて、民子を圧倒しつづけた。——それは単に感情だけの世界ではなかった。引きまわされた刀の進行とともに、民子は確かにわれとわが下腹いっぱい、得体の知れぬ衝撃

を感じとったのだった。幻想ではなかった。

それは、確実に、一つの異常な感覚として、民子の肉体にのたうつた。民子は、狼狽し、混乱し、恍惚の思いにぐんぐん引きこまれて行った。民子は、その時、ふと羞恥の思いに突きあげられた。美恵子の目をはばかった。じつと堪^たえ、そして、思いきって美恵子を振り返った。おどおどと逃げ場を失ったような熱っぽく光る美恵子の目がそこにあった。カッ^とと体が燃え、隠しおおせぬほどに上気して来るのが自分でもはっきりわかった。民子は、はじかれたように視線をそらした。

二人は、主人にすすめられるままに、午^{ひる}すぎまで、温泉場のあちこちを見物して歩き、土産物の売店をのぞいたりもした。馬鹿げた高値で、名物の羊羹や煎餅などが並べられていたが、終戦後間のないことではあり、品数も少なく、店全体がうらぶれて見えた。そんな手薄な陳列の片隅に『白虎刀』の一束があった。白木造りのもあり、黒塗りのもあった。民子は、目ざとくそれを見つけた。

「記念に買って行こうかしら」

美恵子にいうと人そんな物、おかしくない？Vとでもいうような表情が走ったが、黙っ

て、民子とならんで、その『白虎刀』の方に歩み寄った。民子は、束のなかから、黒塗りの短刀を選んでとり上げた。抜いてみると、銀色のエナメルを塗ったちやちな竹光だったが、店^{たな}ざらしの商品らしく、ほかの品物とは不釣り合いなほど安かった。

民子が『白虎刀』の短刀を買う気になったのは、さっき美恵子のあの熱っぽい目を、はっきりと見たからだ。その時、羞恥は跡形もなく消え、まったく同じ感情にゆすぶられていたに違いない美恵子を、共感の友として意識できた安堵と、ひそかな悦びが取って代った。店ざらしの玩具にすぎないこの一本の小さな竹光は、民子の手のなかで、新しい命を与えられるかもしれない。——そんな漠然とした期待が、民子のなかにあった。

数日は、いままでと、少しも変わりなくすぎた。しかし、その間に民子の心のなかでは徐々に、やがて急速に、一つの胸苦しいほどの思いつきが、熟していたのだった。人それをどう切り出すか………Vと、その一瞬を考えつめると、妙に咽喉もとが息苦しくさえた。

いつものように、湯上りの温い体で、布団

のなかに入り、電灯を消すと、静かな夜の底から、溪流の音が枕もとにひびいて来た。川の音が、いっそうあたりの静寂を意識させるしばらくの時間を、二人はじっと横たわっていた。

「民さん。……私、どうなるのかしら。……ずっと考えてはいたのよ。でも、なんだかいいだすのがこわくて、黙っていたの」

美恵子が、突然口を切った。先手をうたれたという思いが、民子の胸にきざした。

「そりや、民さんに聞くまでもなく、自分のことは自分で考えるべきなのね。……そうは思うんだけど……」

「どうして、そんな遠まわしい方するの。……なんなのよ」

「……………」

「いままでだって、二人で頼りあって来たんだし、一人でよくよしてることないじゃないの。卒直に言ってよ」

「恩に着るわ。民さんがいなかったら、私、もうとうに死んでいたわね」

「お互様じゃないの。主人の戦死の公報が入った時、私の心を支えてくれたのは美恵さんよ」

「このままですつといわれたら、どんなにいいかしら」

「……………」

「離れられやしなわよ、私達」

「民さんは、たしかに不幸な未亡人にはなつたけど、とにかく、短い間にしろ、心から人を愛せたという思い出があるわね。それが、あなたにとっては、生きる力だわ。……私なんか、なんにもなかった。文字通りの天涯孤独よ」

「愛したことが、いまとなっては、辛さの上塗りみたいなものよ。いっも胸のなかに、黒い冷たい固まりがあるような遣り切れなさなの。これは、私のなかに住みついてしまった魔物だわ。これが、私の心を体を、奇妙に揺さぶるのよ。美恵さんには、わかってもらえないかもしれない」

「……………」

「この魔物が私のなかに巣喰って居るかぎり、別の男の人を愛するなんてできっこないし、生殺しなまころみたいな年をとるんだと思うわ。……愛せなくなったということは、愛を経験しなかったことよりも、どんなに淋しく辛いことかしのれないのよ。……こんな気持で若さを失って行くと、とてもたまらないわ」

「どうして生きて行くかっていうはじめなあがきのなかで、若さなんて、もみくちゃにされてしまうのよ。……でも、愛されたかったわ。そして、心から愛してみたかった。……思い出なんて、なんにもありやしない」

「美恵さん」

「……………」

民子は息をつめ、ふっと胸が高鳴った。

「美恵さん。……二人で思い出を作ればいいのよ。愛しあうのよ。誰にも邪魔あかされない二人っきりの世界で、生きている証しあかを確かめあうのよ。……私達は離れられないのよ。……私は、離さないわよ」

民子は、美恵子の手を探しグッと握った。

「民さん」

美恵子は、あらあらしく寝返ると、民子にしがみついた。動悸が、おどろくほどはつきりとお互の体にひびきあった。そのまま二人は、じっと抱きあっていた。

「美恵さん」

民子の、低い、渴いた声が、熱い息とともに美恵子の耳もとにささやきかけた。

「この間の剣舞、どうだった？」

「……………はじめてよ、あんなの」

「なんだか、ズーンと感動しちゃって、身動きもできないみたいだったわ」

「……………」

「あれが男なら、それほど感激もしなかったんじゃないかと思うのよ。……女が凛々しくやったというところが、ひどく胸にこたえたのね」

「……」

「表情たっぷり切腹したでしょ。あすこがいちばんよかった」

民子は、そうささやきながら、美恵子の反応をはかっていた。美恵子は、じっと耳をすまし、抱いている民子の背に力を加えた。

「美恵さん。……私ね、あの時思ったんだけど、十有九士っていうから、そこら一面、切腹したり、刺し違えたりして死んだわけでしょ。だから、一人だけの剣舞じゃなくて、二人か三人でいっしょにやったら、もっとその時の実感が出るんじゃないかしら。……美少年の、そういう集団自決って、なんだか、とても美しいわねえ。それを、男装の女が、いっそう美しく見せてくれたような気がするのよ。……若く、美しく死ねたら、本望だわ」

「民さん。……私、知ってる。……あなたが白虎刀買った意味、知ってるわ。……私も、美しく死ねたら本望よ。醜いこや、不安なことから遁れる道が、死しかないんなら、

私は、美しい死を選ぶわ。……愛の絶頂で

死ねるなら、きつと美しく死ねるはずよ。……美しく死ねるためにも、私は愛がほしかったの。……終戦の時に、青年将校夫妻が

自決したという例があったわね。むろん死はいつでも絶望の果てに来るわけだけど、愛に死ぬという形は、愛の永生を信じる悦びに裏打ちされてるわ。……私は、そんな、不思議な愛というものを一度も持たなかった」

「でも、もう淋しいことないでしょ。私は、あなたを離さないんだから」

「え。……でも……」

「民さんのなかには御主人がいらっしゃるわ。私は、あなたの心の隅の方に、ほんのちよっぴり座を占めるだけじゃない？」

「美恵子は、それを口には出さなかった。民子の手が、美恵子の背を静かに滑りはじめたかと思うと、あらあらしく民子の唇が美恵子の唇を蔽った。熱く濡れ、花開き、吸いこまれるような不思議な思いが、美恵子のな

かを突きぬけて行った。……針一本の音さえ聞きわけられるような静けさ——その実、溪流の音が枕がみに伝わっているのだが、それさえ耳に入らぬひそやかな時間が、二人を一つにもつれあわせて、際限もなく流れるよ

うな気がした。

「民さんの心は、御主人への思慕でみたくれている。民さんは、いま、肉体の淋しさ、肌のむなしさを、私によってみたそうとしていただけなのだ。この行為は、私への愛ではない。……Vと自分にいい聞かせながら、美恵子は、ぐんぐんひきこまれて行く甘美な昂りに圧倒されて行く自分を、はつきり感じとっていた。」

民子は、つと手を伸して、ソケットからぶら下っている紐を引いた。パツと灯りがつき瞬間に二段切り替えの豆電球になり、薄明りが部屋を色どった。民子は、そのままずりりと布団をぬけ出した。

「どうしたの？」

美恵子は、思いがけない民子の動きに度を失った。民子は、筆筒の抽出しを開き、たたんだ着物の間から白虎刀をとりあげると、くるりと振り返り、

「やってみるのよ、美恵さん。……起きて」と押しつけるようにいった。美恵子は、なにをやるのか、とっさには見当がつかなかった。民子は、布団にもどると、半身を起した美恵子をかき抱くようにして坐らせた。浴衣ゆかたの寝間着に伊達巻きをしめた二人は、斜めに

向いあう形で坐った。

民子は鞘をはらい、刀身を逆手に握った。

「あー！ 切腹！——美恵子は、民子の意図をはっきり受けとめた。伊達巻きでしめつけられている鳩尾の下から、腹部が盛りあがっている。

「この辺だったわね」

民子はそういういながら、左手で下腹のあたりをひと撫でし、左脇腹に竹光の先をしずかに押しこんだ。浴衣の上から、切っ先の部分がグッとくぼんだ。民子は、そこに目をおとしたまま右に引いた。

「駄目だわ。着物の上からだ……」

二人の目がからみあった。美恵子の黒瞳が濡れているように光った。

民子は、短刀を傍におくと、キュッキュッと鳴らしながら伊達巻きを解いた。襟もとが自然にはだけた。民子は、両手をかけて更にひろく押し開いた。盛りあがった乳房から腹にかけて、薄明のなかに、くっきりと白くむき出しにされた。民子はズロースを押し下げた。ふかい臍窩が、ふくらとした腹の中央に、妖しい翳を形づくっている。——二人はいつも湯をとみにして、隠すところなく体を見せあって来た仲だった。だが、こうして、

着衣を割って押し開かれた胸の隆起と腹部のふくらみが、こんなに生き生きと妖しい魅力をつたえているとは、美恵子のはじめて経験するところだった。

民子は、短刀をとりあげ、

「見て。……美恵さん！」

といいながら、左脇腹にググッと切っ先を押し当てた。素肌の肉が、思いきりくぼみ、左手の掌は、そのくぼみの横にびたりと当てがわれた。

切っ先は、ややしばらくそこにとどまったが、間もなく、静かに右に引かれた。肉は、くぼみながら薄紅色の線軌跡し、臍下一寸ほどのところを、大きく右脇まで引きまわされた。痛みに似た圧迫感が、その線の上にひろがり、下腹の奥ふかいところから、いいようなない感覚が、体じゅうに拡散して行くような気がした。民子は、心持ち腰を浮かし気味に、短刀を下腹の真中に突きたてたかと思うと、十文字腹の思い入れでジリジリと切りあげ、切っ先の動きにつれて、白い弾みのある肌に印せられる薄紅色の線を見すましながら、その切っ先を臍窩の奥に向けて徐々に力を加えて突き刺した。切っ先はふかく入り、得体の知れぬ快美感が、狂おしく腹

一面にみなぎり、餓え渴いていたもどかしさとむなしさを、あふれる豊かさでみだし包んで行くような思いに揺りあげられた。民子はそれを確かめるように、更に切っ先に力をこめた。

「大丈夫？……民さん」

美恵子は昂ぶった感情をそのままに、ことばをふるわせながらいった。民子の目はやや吊りあがり、集中した激情のなかにすっぱりとはまりこんだ忘我の放心が、その目のなかできらきらとゆらめいた。

美恵子は上気し、頬は薄桃色に染まった。切っ先をふかく突き立てたまま、恍惚の思いに身をまかせている民子の、その恍惚感がどのようなものなのか知りようもなかったが、美恵子は、その激情をわがものとせずにはおれぬ衝動につきあげられた。うらやましくねたましくさえあった。

「民さん。……私も切る。……切ってみるわ」

美恵子は、急いで伊達巻きを解き、胸前をはだけた。民子よりいくらか痩せぎすの美恵子だったが、乳房の隆起は、むしろ民子をしていっていた。グツとしまった胴から、豊かな白い腹が、丘陵のようにせりあがっている。

民子は、短刀を肌から離して、美恵子を見た。昂奮は、なお、民子のなかで息づいていた。△美恵さんのこの肌は、愛を求めて、大事に守り通されて来たのだ。なにも知らない肌だ。孤独な肌だ。……それがいま、私といっしょに燃えようとしている。私が、燃える術を教えてやるのだ。この体のなかに、女の火をともしてやるのが私なのだ。……V——民子は、吸い寄せられるようににじり寄った。

「美恵さん。……私、切ってあげる。……切らせて！」

「……切って！……切ってよ」

民子は美恵子の背にぴったりと体をつけ、短刀を擬した左手を、美恵子の腋の下から通してグッと前にまわした。美恵子は、自分の胸からかけて見下した。民子の手にかく握られた短刀の切っ先が、腹の前二寸のところ、小刻みにふるえていた。

「美恵さん。……」

民子の、かすれ、うわずった声が耳もとにささやいた。民子のはげしい動悸が、あらわにされた胸から、美恵子の背中にあたたく波うち伝わった。

「切って！」

美恵子は、腹をせり出すように背筋を伸ばした。民子の手が、探るように近づき、切っ先が腹に触れた。

「いい？」

「もっと」

静かに徐々に強く、切っ先は肌を押した。

美恵子は、つと左手を伸して、柄を握りしめている民子の手握り添え、みずから力を加えた。切っ先のその一カ所から、鋭い痛覚とともに、えもいえない奇態な感覚が走った。

「ウッ……」

「痛かったの？」

「ちがう。……ちがうわ。……切って」

その時、民子の左手が腋の下から、美恵子の左乳房をムンズとつかんだ。美恵子は、全身に走りひろがる官能の波紋に、思わず息をつめた。はじめてのことだった。自分の体のなかに、このような反応を示す部分のあったことを、美恵子は一度も経験したことがなかった。体がふるえ、呼吸が迫った。その昂まりを見すましたように、民子は短刀を右に引いた。ともすると腹部の弾力だんりよくで浮きあがりそうになる刀身を、美恵子は柄頭に力をこめておさえた。鋭いうずきが、切っ先の進行とともに、ほんとうに切り裂いて行くような錯

覚を、まざまざと肌に描いた。

△美恵さんを狂わせてみせる！V——民子は、掌にあふれる美恵子の乳房に力をこめながら、右脇いっばいに切りおわると、下腹の真ん中に切っ先を当て、一気に切りあげた。ミミズミミズばれのようにうっすらと赤い筋が、しろじろとした腹の上に、見事な十字をかけた。次いで、臍窩ふかく突っこまれた切っ先は、げしさに美恵子は堪えながら、しかも、下腹の奥ふかいところで、噴きあげるような異常な感覚が渦巻いているのを、はつきりと感じとった。それは、腰椎の中心部からみつく灼熱の甘美さであり、忘我にひきずりこむ恍惚感とは異質のあらあらしさで、美恵子を捉えた。

しだいに切迫して来る息づかいで、民子は美恵子の昂ぶりの度合いを的確にはかっていた。このふくよかな腹の内部でのたうっているにちがいない狂瀾怒濤のもだえの快感が、そのまま民子の官能をゆさぶった。——民子は、短刀をかなぐり捨てると、その手で、美恵子の腹部をいたわりいとしむように強く抱きしめ、そのまま横ざまに倒れた。不意をつかれた美恵子は重心を失い、仰向けに崩れな

がら同体に転った。パチンと音がして電灯が消えたのは、倒れながら美恵子がソケットの紐をひいたからだ。暗闇の底から、二つの体がつれあう陰微な音と、ことばにならない熱いささやきが、あらあらしい呼吸に入りまじって、小波のように断続した。

この日を境にして、二人の前には、まったく新しい世界が開かれたといっている。『夜』が、目もあやな特殊の色彩の香気をもって、二人を持っていた。美恵子は、たしかに民子によって火を点じられ、異常な開花を経験したことになる。

その後二人は、H温泉への用達しにたびたび出向く機会があったが、剣舞を見る折はついでなかった。しかし、もうそれはどうでもよかった。偶然見ることのできたあの時の剣舞が、すでに二人を別世界へ導き、あの時買求めた白虎刀は、夜の秘事ひめことの場で、ちゃちな玩具とは思えぬ光芒を放って、隠された二人の姿態のすべてを知りつくしていた。

溪流の断崖の上に、おそい山桜が咲きさかり、そしてたちまちに散り、やがてあざやかな新緑がとって代り、間もなくむせるような

緑のふかさが湯宿の四囲をとりまいた。

彰一の一周忌は、町の親戚や村の顔役連をまねいて、盛大に催された。姑の口から、亡夫の従兄弟いとこにあたる庄造との再婚話が持ち出されたのは、それから数日後のことだった。また聞きの時で、そういう時機が来ることを、民子は予知していた。それに対する覚悟らしいものも、とうにできていたといってもいい。

「見合いなんて堅苦しいことでなく、とにかく一度逢ってみてくれるや。彰一はもう還つては来ねえが、縁あってこの家の嫁になってくれたお前だし、親兄弟もいねえ身だし、……なによりも、おら達がお前を手離したくねえもんだからな」

姑は、心底からそういった。

「二、三日うちに、いっしょに町さ出してみんべ。向うにも知らせておくから。……逢ってみた上で、いやならいやで、また方法考えてみればいいこんだでな。楽な気持で行けばいいのさ。……いいな」

姑は、ひとりで事を運んでいるわけだったが、無理強いのははいはなかった。それにもかかわらず、民子はその話を聞きながら、この、人のいい姑を裏切ることになるだろうと

心の隅で思いつづけていた。

事件が起ったのは、それから二日後、町に出るはずになっていた前日の真夜中だった。

姑は午前二時頃、小用にたった。民子達の寝室は、鋸型に曲った廊下のはずれの離れだったから、厠から見通せた。夜更けだというのに灯りがついていて、離れとは反対側の棟に、泊り客が五六組入っていたが、時間が時間だし、いずれも寝についていた。漆黒の闇のなかで、離れの灯りだけがクッキリと見えた。

「おそくまで、なにやってんだべ」と思いつながら、厠の戸をあけようとした時、「アアッ」という叫び声のようなものを聞いた。溪流の音を破って聞えたその声が、はたして人声だったのかどうか、確かにはわからなかった。しかも、それは、たった一度だけだった。姑は、そのまま用達しに入った。

終って、居間にむかって廊下を曲ろうとしたが、

「へもしや、灯りを消しわすれて寝こんでしまったのかもしれない」と、ふと思い、擦り足で離れの方に向った。

離れに通じる短い渡り廊下のあたりまで来

た時、異様な音が耳に入って来た。ちよつと足をとめた。これは確かに、断続的な苦悶のうめき声にちがひなかった。姑は、小走りに襖を開いた。その途端、姑の足は釘づけになった。

いきなり目にとびこんで来た光景は、すさまじい血の色だった。それは敷布をあざやかに染めて、更に畳にあふれ、なお静かに動きひろがっていた。その血の海を半ばかくすように一人は頭をむこうにむけて俯伏せに倒れ、一人は後から折り重なるように崩折れて、はげしく肩をあえがせ、身をよじっていた。

「大変だアッ……」

がたつく足で、ようやく中廊下まで引返した姑は、そこでへたへたと腰を折り、狂ったように叫びたてた。

舅がまっさきに居間からとび出した。廊下をひた駆けるけたたましい音と、泊り客のざわめきたつ音と、……そのなかを、姑は狂乱のさまで這った。

「どうしたッ？」

「民が、……民が、……死んでる。……死んでるだよ」

舅は、開け放された襖のなかに駆けこむと

すぐはげしい剣幕でとび出して来た。

「民は、まだ息があるぞ。……おれが医者を呼ぶ。……しっかりしろッ」

いい捨てるゝと帳場に走った。

「騒がねでくだせ。お頼ん申しやす」

舅は、帳場におしかけた泊り客を制しておいて、電話にとびついた。

国鉄支線の駅のある隣村から、一里の夜道をかけて医者が車をとばして来たのは、それから約二十分後、三里さきの町から警官が駆けつけたのは、小一時間後のことだった。

二人は他所行きよそゆの単衣ひとえを着、帯はしめずに腰紐で着衣をととのえ、両膝をそろえて帯で結び、胸から腹までをひろくくつろげた恰好で倒れていた。

美恵子は左頬を血のなかにひたし、両手を頭のさきまで投げ出して、斜め前に俯伏せになり、民子は、その背中あたりに、両手で腹の疵口をおさえ、失神状態でうめきつづけていた。その傍に、細身の刺身庖丁が転っており、刃の部分には白手拭が巻きつけられていたが、それはじつとりと血を吸い、手拭からむき出しになっている二寸あまりの刃先にも、ベクトリと血が乗って、刃色が無気味に光っていた。——医者が来るまで、民子の体

をどう処理していいのか、人々はただおろろするばかりだった。

検視の結果は、つぎのように推定された。

民子が、まず美恵子の後から刺身庖丁で腹を裂き（深さは、一寸前後、深淺の差があり長さは左脇腹から右脇下腹へかけて、やや斜め上りに八寸あまり、切り口は、多少のジグザグが見られる）、次いで、左乳下を長さ一寸余、ふかく心臓を抉って、ほとんど即死。疵口からは腸が露出。

私が、島野民子にはじめて逢ったのは、この事件があつてから十三年後の秋だった。私はその時、夫の研究旅行に助手格で同道しながら磐梯山麓の古い温泉場の旅館にいた。

私達はその朝、駅をおりるとまっすぐ古城址に足をむけて、地図をたよりにあたりをさまよい、町役場に寄って古い資料を調べさせてもらったり、また、そこで紹介された郷土史家のN老人をたずねたりして、多忙な一日をすごした上でN氏のお世話で、この旅館に入ったのだったが、実は、そのN氏から借り出した秘蔵の資料を、今夜じゅうに書き写してしまわなければならぬ仕事をかかえてい



た。秋口だったが、夜が更けると、この辺は
さすがに肌寒さが感じられた。私は、ひと

ひとりで入って行く気にはなれなかった。
ガラス戸を開くと、幸いにも簾の乱れ簾の

りで湯槽に降りた。この宿には、大小四つほどの湯壺があり、大きいのは三十人ほどに入れそうな大浴槽だった。その先に、五六人は入れる家族風呂式のある。温泉で名を売っている宿だけあって、夜更けだというのに、どの浴槽にも灯りがともっていた。浴客の姿は見えなかった。いちばん奥の浴槽から、かすかに湯の音がした。もし湯を使っている人が女なら、私はそこに入ろうと思った。大浴槽に

なかに、まぎれもなく中年女のらしい着物が入っていた。私は安心して裸になった。浴室との仕切りのガラス戸を更に開けた時、私は円型の湯槽のなかにすっぽりつかっている人影を見た。私は軽く会釈して、離れたところに身を沈めた。冷えた体に、湯はあたたかくまつわりついた。明け方ちかくまでかかるかもしれない書写のことを思うと、私はいささか気が重かった。旅程はまだ三日も残っているのだ。だんだん疲れがたまっていることだろう。気楽な旅ではない。

「おそろいのご旅行で、結構ですわね」

しばらくしてその婦人は話しかけて来た。意外なことだった。

「え。……でも、研究旅行の同伴なものですから、はたからご覧になるほど楽しい旅でもございませんのよ」

「実は、夕方Nさんからご紹介のお電話、私が受けましたの。……大変でございましたね」

「それじゃ、この奥様でいらっしゃいますの」

「いえ、いえ。遠縁にあたるものですから、ときどき参ります」

「お住まいは東京で？」

「いいえ。もとは東京におりましたが、ここから二時間もかかる山のなかの温泉場におります。もうかれこれ、十四、五年にもなりますわ」

美しい顔立ちだった。三十代の半ばを少し出た年頃でもあろうか。

婦人は、手桶のなかのタオルに手をのぼすと、いったんそれを湯にひたし、立ちあがりざまに、そのタオルで、鳩尾のあたりからひろく前をかくして、後向きに湯槽を出た。すらりと伸びた肢体は、薄桃色に染まって見事だった。

婦人は左膝をたてた姿勢で、タイル張りの洗い場にしゃがみ、タオルで腹のあたりをかくしたまま、スポンジでゆっくりと体をこすりはじめた。

私は、婦人にちかいところにあがって、おなじようにスポンジを使った。なつかしように、東京の現況をいろいろ聞きだそうとする婦人の質問を通して、この人の過去を手探りで知ろうとする私の努力は、ほとんどむなしかった。

「機会がありましたら、一度私どもの宿にもいらして下さいまし」

といってくれた時にも、私は、この人が、

どうして東京生活を打ち切って、そんな山間の湯宿に納まるようになったのかを、たずねようとはしなかった。たずねることで、なにかしら、この人に、心の負担をおわせるのではなからうかという、淡い不安が感じられたからだ。

私は、洗いおわると、先に湯槽に入った。

婦人は、手桶に湯を汲みとると、肩からザーッと浴びた。タオルが、湯の勢いで右の太腿の上にずれて、おおわれしていた腹の半ばをあらわにした。私はその時、見るともなしに婦人の方に目を注いだ。盛りあがって弾力のあるような豊かな腹に、横に引いた異様な疵あとが見えた。ほんの一瞬のことだった。婦人は、さりげなく再びタオルをひろげて前をかくすと、静かに湯にひたった。

△手術のあとだろうか。……それにしては横一筋の奇妙な疵あとだった。……▽

悪いものを見てしまったという後悔が、私を急にこわばらせた。しぜん二人の間に沈黙の時間が流れた。私は話題に窮し、頃合いを見はからって「お先に」と湯を出た。

半徹夜の仕事を覚えて目覚めたのは、八時をとくにすぎた頃だった。朝食を運んで来た

女中に、私は婦人の名をたずねてみた。島野民子という名を、その時はじめて知った。

夜更けの湯で、偶然逢って、機会があればたずねてくれと誘われたのだという、今朝早い汽車で、もう帰って行かれたといった。いつまで滞在する予定だったのか、聞きもしなかったが、寝ているうちに発って行ったというところが、なにか私にかかわりがあつたのことはなかったのだらうかと、私はひそかに気にかかるものがあつた。

女中が、お膳を下げに来た時、島野民子の所番地をたずねると、Y温泉の『しまや』だと教えてくれ、民子が戦争未亡人であることや、ここにちよいちよい来るのは、この家の小学校六年になる三男坊を養子にすることにきまったので、手なづける心用意のためだと語った。

「やさしい、いい奥さんでなシ。……だけれど、並の女には、真似のできない気丈な方です。なにしろ女白虎隊ですからなシ。なんでも、亡くなつた旦那様の一周忌に、あとを追つて腹を切んなさつたというからなシ。やっ」と命はとりとめなさつたが、その時の疵があるって聞きました」

私は、謎がとけた思いで、まざまざと一筋

の疵あとを思い起した。女が、われとわが腹を裂くという場面をいろいろに想像してみると、一種の感動ともいふべき情感におそわれるのを否むわけにはいかなかった。

私はそれまでに、『女腹切り』を題材にしたいいくつかの作品を発表したことがある。悲愴美と哀切美の頂点として、私は、作品のなかの女主人公に、死に追いこまれる、さまざまな条件と環境を設定した上で、腹を切らせた。史実にそと書いたものもあれば、わずかの資料をもとに、奔放なフィクションで描いたものもあった。しかし、実際の切腹体験者に逢ったのは、はじめてのことだった。きいてみたいことが山ほどある。日を追って、私の思念のなかに、民子のあの時の肢体があらやかに定着し、湯のぬくもりに上気した肌の色と、異様な一筋の線が、妖しく私の興味をそそった。

だが、はたして民子は、私の要望にこたえてくれるだろうか。——慎重を期さねばならぬことは明らかだった。

私はある日、思い切って、長い手紙を書いた。——ふと目を注いだあの時の、心なきしわざを謝し、翌日の早発ちは、そのためではなかったろうかと、いまだに気がかりになっ

ていることや、女中から切腹事件を聞いたことなどを卒直に書いて、なまはんかな興味でお便りするのではないと念を押した上、いままです発表した作品の掲載誌を、参考のために別便で送った。

心待ちしていた便りが来たのは、かなり日が経ってからだった。ほとんどあきらめかけていた頃だったので、その長い手紙は、私をことさらに喜ばせた。

なかには、私の作品に対する感想がこまごまと書かれていたほか

「私の過去に、消すことのできない決定的な事件として残るあのことは、当時の新聞にも八軍国の妻の悲劇。親友と壮烈な自決」と題され、副題として八未遂、一人は絶命」と書かれました。この文字が、その後の私の心を強く規制しております。そう受け取った世間の人々に、くわしい事情や心境を説明する勇気はありませんでしたし、またその機会もありませんに時がすぎました。しかし、貴女様から、思いもかけずお便りやら御本などを送っていたいただき、いつの日か、貴方様にだけは、こまごまと、お話し申し上げておきたいという気持ちにかられております。きっと私の（いや、私達の）あの時の気持ちを、わかっていた

だけるといふ見通しがついたからでございませう。お目もじの日を、たのしみにいたしております」

民子の手紙は、予期以上の反応を示してくれたものだったし、なにか隠されているらしい真相を暗示されたという意味で、更に強く私の関心をひいた。

それから何度か文通がつづき、『女腹切り』に関する記事の載っている雑誌が目につくと、その都度送ったりした。

民子のいる湯宿をたずねたのは、ちょうど一年目。秋ふかい頃だった。夫はその時、研究の都合でH温泉に泊り、私だけ別れて、一泊の予定で、その山間の温泉場に行った。

ここ二三年の間に、競うように建てられたという新型の旅館が、溪流をへだててながめられた。『しま屋』も、それに刺激されて、一部をとりこわして洋風の建て物がつき足されていった。事件のあった離れは、いまでは、その洋館のなかに姿を消して、往年の面影はなかった。

私は、その洋館のいちばんはずれの部屋に案内されて、その夜、民子からくわしい話を聞き出したのだった。

「私の場合、戦死した夫に殉じようとした貞

婦だとか、烈婦だとかと持ちあげられて、世間の同情をひいたことは、まったく思いもかけぬことだったのです。私は、ひきつづき二カ月ほども入院しておりましたし、美恵さんを私の手で死なせておいて、生き恥をさらしているという自責にさいなまれていたうちに、もう世間の評価がきまってしまったというところで、退院後も、警察に呼ばれたり、いろいろありましたが、そういう世評がすべて私には有利にはたらいで、たいしたこともなくすんだのです」

私は、くわしい話をきいているうちに、事件のほんとうの動機や、その時の二人の心境などを、ほぼ的確に想像することができた。

△切腹△という異常な自殺形式は、この二人の場合、H温泉で白虎隊の剣舞に刺激されたという、そのことと切り離して考えることはできない。しかもその時の演技者が、男ではなく、男装の女性だったということ、ふかくかかわっている事実も見通すことはできない。——民子は、そこに、可憐美とけなげさを強く感じとっている。そして亡夫の死、真新しい未亡人という体験と自分の立場を通して、死そのものを身近に考えざるを得ない絶望的な心境にあった。

しかし、最も重要なことは、民子自身のことばによれば『長い刀の柄頭が畳についていて、若い女の白い手に支えられた鋭い切っ先が、剣道着をグッと押しながら、ほんとうに腹のなかにふかく突き刺さって行くように思えた瞬間、なんともいえない衝撃のようなものを感じました』という一点であろう。民子はそんな時、そんな激情に突きあげられた自分を、美恵子に気取られはしまいかと、一種の羞恥の思いで上気したともいう。この二つをつなぎ合わせてみた時、民子は、まぎれもなく、性的な衝動として、生理的に強く影響されたというのが実相であるにちがいない。

夫婦生活の第一歩に、民子が、女として宿命的に味わわれたあの肉体の苦痛と快感とが、この時、二重写しになって民子を揺さぶったのだ。夫の出征と、それにつづく死によって、否応なしにもたらされた肉体の饑餓状態こそ、民子を電撃のように襲った素地だったことも確かであろう。

美恵子との夜毎の秘事も、いつも民子がリードした。美恵子のなかに、民子と同質の狂おしい快感をばぐくみ育てたのは民子だといっている。

だが、美恵子もまた剣舞の演技を見た時、

強い刺激をうけたことは否定できない。しかし、それはおそらく、『白虎隊美少年の死』『若い美妓の死の演技』という一点にあったのではあるまいか。美恵子は、天涯孤独の身でわずかに親友の好意によって暮しをたてている不安な立場から、内心ひそかに、常に死を考えていた。絶望と厭世の暗い思いにうちひしがれていた。幸い薄かりし青春を、一つの愛さえも恵まれなかったと嘆いていた。美恵子のあこがれたのはおそらくは精神的な男の愛ではあったろうが、すでに二十四歳という肉体の成熟が、そうした単純なものだけに満足していたとは考えられない。心身ともにあたためうるおされることを祈念し、憧憬しそして絶望していたのかもしれない。

民子が、白虎刀をわれとわが腹に突きたてて、激情の恍惚に身をまかせている姿を見た時、美恵子は敏感に、民子の胸中をかけめぐっている思念を嗅ぎあてたのであろう。——民子の肌は、かつてその夫によって『女』を開眼させられたものだ。その肌が、白虎刀を突きたてたまま、うっすらと濡れたように息づき波うっているのを、ちかぢかと目にした時、うらやましく、ねたましく、美恵子をそそったとしても不思議ではない。

その夜から二人は、「死の演技」ともなった△切腹▽にとりつかれたわけになる。

「私は、いつの間にか、美恵さんをふかく愛しはじめていました。ほんとうに、二人は離れられない宿命に結ばれているのだと、思いこむようになっていました。△軍国の妻▽などとは程遠い、別なところで耽溺していたのです。……庄造さんを特に嫌ったわけではありません。そりゃ、精薄に近い人だということには知っていました。でも、姑が^{はは}どんな再婚話を持ちかけて来ても、その気にはなれなかったでしょう。いずれは美恵さんと引き離される時が来るという予感が、刻々に私達の心を押しつぶしていたのです。……もし、二人が勇気をふるって生きる道を考えたなら、それぞれに血路がなかったはずはありません。あの時は、一途に死を思いました。美恵さんも、その気持はおなじでした。」

回をかさねるにつれて、普通ではとても堪えられそうもないと思われるほどの強い切り方や刺し方にも馴れた。竹光の白虎刀を、本身の刃に代えたとしても、恐れずに決行できる自信が、すでにできあがっていた。

二人はその夜、まずいつものように、白虎刀を使って、長い時間、愛と死の演技に酔っ

た。それから、離れの横廊下から外に出て、少しはなれた野天風呂につかった。すぐそばを、幅ひろい溪流がゴウゴウと流れ下っていた。半月に^{はんげつ}近い月光に照されて、河原の石のひとつひとつが、命あるもののように濡れて光っていた。たちのぼる湯気のなかに、二人の裸身は妖精^{ニンフ}のようにゆっくり動いた。ときどき、夜鳥のけたたましい声が、崖の上の茂みのあたりから聞えた。迫りあう山と山の間——遠景はやわからかにけぶって、そのあたりへ溪流は小刻みな波頭を見せて消えていた。二人は、死を前にして、心ゆたかで、幸福にみたされているような気がした。

布団をかたづけけた畳の上には、真新しい敷布をしいた。小机の上には、一枚の便箋に連署した遺書があった。

「御両親様

お世話になりっぱなしで、なんのお報いもできず先だちます。不孝の罪をなにとぞお許し下さいませ。

民子

貴方さまがたのお情にすがって今日まで生きて参りました。あつく御礼申し上げます。御迷惑をおかけいたしますこと幾重にもお許し下さいますよう。美恵子」

敷布の上にすわってから、美恵子は帯で膝をしぼり、それから襟を押し開いて、^{むなぢ}胸乳から腹まで十分にあらわした。民子もおなじく前を開き、膝を割る恰好で美恵子の腰をふかく抱きこみ、刺身庖丁を前にまわして、美恵子の腹に擬した。刃先がドキドキと光った。

美恵子は、左手を左脇腹に、ピタリとつけて、心持ち左に引きつけ、左手で、民子の肘を軽くかかえこむようにした。民子は、左手を美恵子の腋の下から前にまわし、鳩尾のあたりを強く抱いた。

美恵子は、ふかく息を吸い、そして静かに抜きながら、ふと止めた。——その一瞬を見すまして、民子はグッと切りこんだ。手ごたえは十分だった。

「グワッ」

という絶叫が美恵子の口から洩れたのは、その時だった。美恵子の右手が、民子の左手に異常な力からみついた。民子の右手は自由を失いかけ、指の間をヌルヌルと血の触覚が這^はった。思い切って右に引こうとしたが動かない。そのまま、更にふかく切りこんだ。背後からは、なにも見えはしない。腹がはげしく波打ち、刃先がそれに押しあげられて浮きあがり、はね返されそうになった。民子は

力をしばって突きこんだ。美恵子は、野獣のような叫び声をあげると、左手で切り口をおさえ、はげしく上体をそらして、とびあがりそうになった。民子は狼狽し、動揺した。左手に必死の力をこめて浮かせまいとし、右手をグングン引きまわした。それは、ほんのわずかな時間であつたにちがいない。

「グワッ。……ウッ。……はやく。……早くして。民さん！」

美恵子は狂乱し、膝をしばった不自由な体をよじって、民子の左手のなかで、もがきのうった。刃先は、臍下をわずかに右まで進んだにすぎないことはわかったが、もうそれ以上、美恵子のはげしい動きに抗して、的確に引きまわすことはできないと思った。民子は

臨時増刊号「花と蛇」

売切れました。

好評を得ておりました臨時増刊号、団鬼六作「花と蛇」は、先般来お蔭さまで売切れとなりました。この分の再版の予定はございませんので、お申込みにならないで下さい。続篇と一括して単行本化の時は、改めてお知らせします。

サッと抜きとると、すぐに、左膝をたてながら腰を浮かした。美恵子の下腹を濡らして流れる血の色が、その時はじめて肩越しに見えた。夢中で、美恵子の左乳房を抱きあげるようにするや、一気にその下をふかく抉った。血が、目の前を真赤に噴きあげた。

「アアッ」

と、あとを引くような叫びとともに、美恵子の上半体が斜前に倒れ、血に染まった両手がバサッと頭のむこうまで伸びた。背中がヒクヒクと動いた。

「美恵さん。待って！」

民子は、血に濡れた刃先を見下しながら、思い切り左腹にたたきつけた。庖丁は、短刀とちがって、鋭い先端ではない。滑って、わずかに疵がついただけだった。民子はあせった。一度、二度——少しの疵に痛みは感じなかった。刃先を少し斜めにし、力をこめながら、こするように引いた。確かに肉を裂いて刃先が没し、カーッと目くるめくばかりの激痛がそこから渦巻いた。夢中で右に引いた。が、刃先は動かず、なお奥深く没していくような気がした。もはや、激痛などというものではなかった。熱鉛を滴々と腹中に注ぎこむような、堪えがたいものが荒れ狂った。

△失敗はできない！……失敗してはならない！▽

民子は、呪文のように心に呼びながら、最後の力をこめて引きまわしたと思った途端、脳髓は四分五裂し、重心を失ってグングン奈落へずり落ちて行くような錯乱のなかで、一切の感覚を失った。

「私の疵は、実のところ、たいしたものではありませんでした。特に、十分に引きまわしたと思った右腹の部分などは、腕の力が急にぬけ、刃先が上滑りして、浅い疵でおわっていたのです。本物の切腹というものが、どんなに苦しいものか、事前に考えていた自信が、いかに甘かったかを、私は、はじめて知りました。美恵さんのあの絶叫とも、だが、私にはよくわかります」

その凄惨な場景が、私にはありありと想像できた。

民子は△亡夫への殉死▽と受けとられ、美恵子は、身寄りのない不幸な身で、世をはかなみながら、親友と死をともしようとしたと世人は見た。

美恵子は、山の中腹の島野家の墓地に新しく建てられた小さな墓塔の下に埋められた。姑は、ほとんど自分の一存で事を運んだ庄

造との再婚話が、民子に死の決意をうながしたのだと、ふかく思いこんだようだった。その自責の念からも姑は、民子を手もとにおいて「息子を失った母」と「夫を失った妻」とが、おたがいに慰めあい、あたためあって行かなければならぬと心をきめた。どんなことがあっても、再婚話などは持ちかけまいと心に誓い、適当な時機に、養子をもらって育てさせればいいのだと考えついた。

民子は、世間の同情とは別に、多くの好奇の目が、いろいろな意味で自分をさいなむであらうとは覚悟した。しかし、美恵子の埋まっている、この土地を去ることはできなかった。あんなにまで自分を頼りにしてくれ、いとしみあった美恵子を、さびしく一人ここに残す気にはなれないのだった。

「この春、小学校を卒業するとすぐ、順一をこっちに呼び寄せて、正式に籍も入れ、どうやら母親ということになりました。毎日、元気に通学しております。……え、一里ほど先の中学校ですの」

民子には、いま新しく、『母』としての道が開けたようだ。しかし、私は思う。——美恵子とともに△愛の演技▽、△死の演技▽を体験した民子が、未亡人をたて通して行く人

生の過程において、心身ともに、世捨て人のようであり得るだろうか。

「私は、あれから後、しばらくは、何度もこわい夢にうなされたものでした。美恵さんの七転八倒する姿や、叫び声が、私を夢のなかで悩ましました。でも、いつの間にか、美恵さんを思い出す時は、必ず、二人でむつびあった頃の顔や姿やしぐさが浮んで来るようになりました。……私は、ひとり床のなかで、しきりに美恵さんを求めることがあります。そして、みたされないものが、私のなかでうごめきだすのです。そういう時私は、昔の白虎刀の代りに、髪ピンを抜いて、それで代用するのです。誰にも知られず、ほとんど身動きさえ気取られずに、することが出来ます。その間じゅう、私は、美恵さんが、すぐそばにいるような幻想を持ちつづけることができます。……なにかも奥様にお話し申し上げたことで、気持が軽くなりました。私は、いまだに白虎刀の刺激にとりつかれております。私は、貞操堅固な未亡人だといわれているようです。それを立て通せるのは、私なりに満足し、虫をおさえるひそかな方法があるからだと思っています」

そういつて民子は、私の疑問に答えてくれ

た。『母』の座を得てなお、肉体の奥ふかく息づく『女』の実態を私は民子の上に見た。

私は翌日、帰りぎわに案内されて、美恵子の墓に詣でた。墓域をいろどる秋の花々が乱れ咲いていた。見おろせば、『しま屋』の屋構えも、河原も、溪流も、そして対岸の蕭洒なホテルも、極彩色の一幅の絵のようにながめられた。右手の方、七曲りの一角から伸びる道路に、ミニカーのように動いて来るバスは、三十分後に私の乗るはずのものであった。

私は、もう一度、墓石に合掌した。そこには「刃薔花顔信女墓」と刻まれていた。行年二十四歳。——一片の花びらが、風にさそわれて、この土に散ったことを記録していた。

「お願いとお断り」

○本誌では寄稿家や投稿者の住所をお知らせしたり、読者を紹介したり手紙の転送や斡旋するといったとは一切行っておりませんから何卒御諒解願います。従って読者の方々からのそういった御依頼には応じられません故、誌上を以って固くお断りいたします。通信はすべて『読者通信』欄へ御投稿下さるよう、お待ちいたします。

四馬孝秘蔵版画集

大中判 (13×18 厘) 印画紙焼付↓コレクシヨン専用

口絵の制約によって十分その腕を揮うことのできない髀肉の嘆をかこっていた四馬孝氏が、登場の女主人公をすべて全裸に剥いで、美しく目ざましい秘蔵版をものしました。

△責められる美女波津子の痴態▽

大中判五枚一組 一〇〇〇円 略号(しお)

一、恐怖の浣腸責め

ベッドの上には、白く輝やくような肌にとす黒い縄が無惨にも喰い込んでいた。厳しい後手しぼりに身動きもできない波津子、伸びやかな脚を逆エビに持ちあげられし猿ぐつわの下で苦痛にあえいでいる。男の手にした30ccのガラスシリンドラーは、今まさにアヌスに迫るとしてゐる恐怖。

二、柱抱きの責め

斜めに立てかけられた五寸柱をアグラに組んだ足で抱くようにしてあらもなく縛られた波津子。豊かに肉のついた胸や腹が、じかに柱に密着して、大きく開ききった両方の太腿のアグラ縛りも恥しい妙齡の女性にとっても、最もむごたらしい責めである。それだけにS的ムード満点である。

三、庭のハダカ責め

夏草の生い茂る庭の棒杭に、両手をひろげ、左足を高々と頭の位置まで挙げて縛られた奇妙な晒しものポーズ。叢から蚊や蟻が白い

肌を這ってくるが、波津子は只、白布の猿ぐつわの下で、ううう、呻めくだけである。最大限に左右に開けきった四肢は、哀れにも自由にできないのである。

四、イルリガートル

皮紐で高手小手に縛られた波津子は、両足首に鉄の足輪をはめられ、その両足を高々と持ち上げられてチェンブロックのフックに掛けられようとしている。一リットルの石鹼液をなみなみと入れられたイルリガートルは、逆立ちのポーズをとらされた波津子の腸内へ、ドクドクと注入されてゆく。

五、荒縄の股間縛り

均整のとれたグラマーの美しい肢体の波津子の腰部には、トゲトゲとした太い荒縄で締められ、鼻孔には火のついた巻煙草が挿し込まれ、荷造用のロープで両手は背後で揃えて括られて、そのうだ、波津子の女体が、一つ一つの物体として、非情な男の手になぶられるのだ。

△可憐な少女加奈子の羞恥責め▽

大中判五枚一組 一〇〇〇円 略号(しる)

一、ロウソク責め

可憐な美少女加奈子が、この屋敷に囚われの身となつて、すでに幾日経つてあろうか。なよなよとした青い実の裸身には、麻縄がむごたらしく肌を痛めつけ、火のついた百匁ロウソクの焰が、テレビの前で足挙げポーズで縛られた加奈子の頬を襲ってくる。嗜虐的な男の眼が恐ろしい。

二、アンヨは上手!

加奈子は男の可愛いペットである。全裸に剥かれて、後手高手小手に縛られた上、首と膝頭とを革紐で繋がれ、ヨチヨチと部屋の中を歩かされる。ピンク色に染った繊細な足の指先に力をこめて、転ろげないようにと、懸命に歩こうとするが、縛られた身体は遅々として前へ進もうとはしない。

三、逆エビ柱吊り

夜の縁側の柱に、加奈子の白い身体が逆エビ縛りにされて、柱に宙吊りになっている。スタンドの

スポット・ライトが蠟のように白い加奈子の全身を、闇の中で浮彫りのように照らしだしている。肌に喰い込む縄の痛さに、思わず、ああと挙げる悲鳴を、心地よげに聞く怪しい男のシルエット。

四、被虐の絶叫

後手高手縄縛りの上に、革のベルトの股間縛りで締めつけられて喘ぐ加奈子の右足を無理矢理に挙げて固定しようとする、いやらしい禿頭の暴虐。可憐な加奈子は、あまりのこと悲鳴をあげて絶叫すれば、一層の被虐の念が全身を戦慄させる。そして男には快い音楽と聞えただろう。

五、美しき犠の鑑賞

美しい宝石のような加奈子の身動きも出来ない全身を、それこそ足の爪先から髪の毛の一本一本に至るまで、刻明に観察しようという野卑な男の欲望は、彼女をして部屋に柱に晒しもののような恰好で括りあげてしまったのである。好じろじろとナメクジのような目で全身を眺められる気味悪さ。

濡れしぞ濡れし……………

……………ガン作・マニヤのノート……………

芳野眉美

A 初神酒拝受

一月七日

……それが中途で止まってしまった。

顔をはなすと、

「ちよっと待ってね」

と笑いながら云った。

寒いので、お湯を浴びたらしい。熱い湯が

足にかかった。

蘭子の美しい眉がきつとあがった。

起きあがると

「顔をよく洗いなさい」

と化粧石けんを差し出した。

「首も、胸もよ」

そう云うと、湯を浴びて、さっさと和服を

着た。

「口は」

「えっ」

「ゆすがないの」

「ああ」

「ゆすぎなさい」

「もったいない」

「もったいない」

「せっかくの匂いが消えてしまう」

「馬鹿ね」

「キスをしてくれと云わないから、いいだろ

う」

「足ならいいわよ」

「足か」

「好きなんでしょう」

「それもそれだ」

「足袋を穿かせて」

「もう帰るの」

「ほら」

と蘭子が足を突き出した。

「早く舐めなさいよ」



「――」

「足袋が穿けないじゃない」

三面鏡に向いながら、蘭子が妙なことを云った。

「前はいいけど、うしろはだめね」

「うしろ」

「匂いがあるから」

「ああ」

江戸棲模様の蘭子がふっと笑った。

新春から蘭子にコート放談を聞くとは思わなかった。そこで『ソドムの百二十日』からコート関係の話をひろってみた。マルキド・サド、新流社刊世界セクシー文学全集大場正史訳。

その一、

（わたしはある放蕩者の家へ呼ばれていました。まだ二十の若さでしたから、髪もきれいなら、顔もきれいというわけで、少年の衣裳がとてもよく似あいました。でかける前にわたしは、用心深くズボンのなかに……を用意しました。相手の男はベッドでわたしを待ちかまえていて……わたしのもってきた荷物を見たとき、彼がどのようなエクスタシーにおちたかは、とても口ではいい表わせません。

——第九日）

その二

（わたしたちは、のぞき穴へいそぎました。その隣りの部屋には、穴のあいた椅子が一つと、その下に便器がおりてあり、そのなかには、わたしたちが四日間もせつせと……していたので、少くとも十数個の大きな……があったにちがいありません。当の男がやってきました。ドアを閉めると、まっすぐ便器のところに近づきました。そして、容器をとりあげると、ひじ掛け椅子に腰をおろして、まる一時間も、じぶんが持ち主になった宝物をいとしそうに眺めつつづけていました。——第九日）

その三、

（少女たちの八個の……が、夕食のご馳走のまっただなかにあしらわれたのである——第九日）

その四、

（わたしは三十六時間もトイレにはいりませんでした。相手の主人公は、王家づきの牧師をつとめる年長の聖職者でした。いよいよ……が現われると彼は息をはづせました。

「やっておくれ、どんどんやっておくれ、わたしの天使よ」彼は全身火と燃えて叫びました「おまえのかわいいところからでてくるや

つを見せておくれ——第十日）

その五、

（わたしは皿の上に……し、これを彼のところに持参して、鼻さきにつきだしました。彼は一片の……をじっとみつめたまま……しました。——第十日）

「直接よ」

という蘭子の言葉が耳に残った。

……とはいえ、夢はこわしたくない。

B めかくし

一月十九日

「何事もだ」

と雪絵に云った。

「経験してみるものだ」

「そうね」

「そうとわかれば話は早い」

「何を云いたいの」

「――」

「早くおっしゃい」

「飲ませてくれよ」

「さっきからなんだかんだ云っているけど、

そのことを云いたかったのね」

「うむ」

「始めに云えばいいのに」

「でも、間接はイヤですよ」

「あら、直接よ」

「眼をつぶっていいばいいでしょう」

「眼かくしをして」

と雪絵が云った。

C 青木順子さんに会う

一月二十日

辻村氏から速達が有り、三十九年十一月号（SMカメラ・ハント「青木順子を知る」の項参照）を向井一也氏と青木順子さんに贈呈したいから連絡を取るように依頼を受ける。

一月十五日より二十日まで、東京足立の本木セントラル劇場に出演中とのことである。

夜八時半頃劇場に着いた。

モギリの親父に向井さん呼び出してもらった。辻村氏の手紙が、そのまま紹介状になる。楽屋に通された、御二人に暖かいもてなしを受けた。

向井一也氏は柔和な方である。親切でやさしい。ところが、順子さんの話に依ると、彼は本質的にSだという。舞台と日常生活は違ふし、そんなものなのかもしれない。

舞台とは反対に、日常生活では向井さんは順子さんをいたわっているし、順子さんは向

井さんをイジメル（と云ってもSMプレイではない）らしい。向井さんがいやがるから面白いのだそうだ。とにかく仲が良すぎるてうらやましい。

初対面なのにもかかわらず、居こちが良いの、御二人の暖かい人柄のせいである。

順子さんは全く可愛い（失礼）しチャーミングだ。

辻村氏に連絡して雑誌を送ってもらうことを約束する。

舞台を見る。

終って、次の出演劇場に移動するので、図う図うしく同車した。

最終日にならないと、次の出演劇場がわからないのだという。これでは予定はたてられないし、KK読者の方々に予告するわけにもいかない。

車中で、御二人よりSM演劇論をきいた。

勉強になった。

一月二十一日から二十五日まで、東京目黒の月光館に出演。

一月二十一日

辻村氏に速達をだす。

一月二十三日

編集部より速達で十一月号が配達された。

一月二十四日

昼過ぎ、劇場にお二人を訪問、雑誌を手渡した。楽屋は花ざかり。

舞台まで一時間ばかりあるので、近くの喫茶店で三人で話をする。

あらためて、自己紹介。これはコミーション。順子さんが興味をしまったのでうれしくなった。神酒のことですよ。

二十三日、S氏とM氏（四十年二月号「廣作悩ましのサディズム」参照）が陣中見舞していた。私が連絡しておいたのである。

S氏はお二人の舞台に相当刺激を受けたらしい。仲間になって舞台にたってみたいそうだ。そうすると、S氏はMだから、順子さんに責められることになる。

これからの交際をよろしく願う。

舞台を拜見

『生の確認』くわしくは十一月号のカメラ・ハントをどうぞ。

「観客の一割が、理解してくれればいいのです」

と順子さんは云った。

「筋や主題はわかりにくいかもしれませんが」
これからどのように変化し発展していくのか楽しみだ。

二十二日の夜は、新しい舞踊劇を振付けし
たらしい。

観客の深い静かな嘆息をきいて、劇場を出
た。

その日一日が楽しかった。

文献資料を求む

本誌上に紹介して価値のあるS・M・F
等各種の文献、資料を御所持の方で御提供
可能の方は御連絡願います。誌上発表の分
につきます。出来れば、出来れば、出来れば、
上げたいと存じますので、文献誌としての
本誌の価値を高めるためにも何卒新古多少
に拘らず御提供願います。
写真、絵画、文章、パンフレット、広告
スクラップ・ブック、チラシ等なんでも結
構です。御希望により使用後資料は御返却
いたします。

「奇クサロン」 原稿募集

読者の皆さまの共通の広場として、「読
者通信欄」と共に、皆さまに親しまれてい
る「奇クサロン」の欄をこれから益々発展
充実させてゆきたいと思えます。マニヤ通
信、モデル通信、短信往来、編集者執筆者
モデル投稿者などへの呼び掛け、文通交際
写真、絵、告白の便り等々、なんでも構い
ませんからお気軽に寄せ下さい。

本誌編集部

一月二十六日より、宇都宮国際劇場に出演

D 匂い

Kと二人で飲んでいたら、並んでストール
に坐っていた二人連れの和服の婦人に声をか
けられた。

一人は二十七、八、もう一人は三十七、八
ぐらいの年配だった。聞くつもりはなかった
が二人の会話から人妻と知れた。

そのバーはバーテンだけで、細長いカウ
ンターに坐っている客の多くはペアだった。九
時頃だったろうか。いや、もっと遅かった。

私はどっちかと云うと、静かに飲むほうが
好きだし、見知らぬ人に声をかけたことはな
いし、勿論かけられるのも好きではなく、楽
しいのか楽しくないのかわからないほど無口
なほうである。

その反対に、Kは誰にも慣れ慣れしく、誰
とでも話をしてしまうから、はじめに声をか
けられたのはKであった。

「女同志で飲んでいてもつまらない」

と若い婦人がビールを持ってKに云った。

「いかが」

「そういうこと」

とKが云った。

「一緒にパツとやりましょう」

そこで、Kと、その婦人が席をいれかわつ
た。即ち、私、若い婦人、K、中年の婦人と
いうことになる。

仲良く、男女男女という席にしたのだが、
それがそのままペアになり、あとで、Kが残
念がるのだが、その時はそこまで考えてはい
なかった。

そして、それからしばらくの間、私とKは
二人の和服の婦人の御主人の悪口なのか、オ
ノロケなのか知らないが、聞き役に廻ったの
である。

二人の御主人は、とうに寝てしまったらし
い。

「身体が燃えてきたわ」

と若い婦人がブツブツウなことを云った。中
年の婦人は静かに笑っている。

バーに引っ張り出したのは、どうも若いほ
うらしい。二人とも近所らしかった。

もう一軒のバーに寄った。

そのバーを出ると、

「もう飲むのはイヤ」

と若い婦人が云った。自己紹介は別にして
いないから、お互いに名前がわからない。そ
れはそれでいい。

「食事でもする」

とKが云った。

「おなか一杯」

「とすると」

Kが私を見てにやっとした。

「行くところは決まってしまうよ」

「そこへ行きましょう」

と若いほうが云った。Kが何も云っていないのに了解したらしい。これなら話は早い。

ぐずぐずしている中年の婦人に、

「ね、いいわね」

と云う。

「行こう」

こうなるとKは早い。中年の婦人の返事を待たず、タクシーを止めた。

「軍資金は大丈夫か」

私はKにささやいた。Kはウィンクした。

それならいい。

ホテルの前で、若いほうが私の腕にからみついた。はじめのバーで偶然並んだペアが、ここでもくずれてはいなかった。Kがしまったという顔をして私を見た。

「悪く思ふなよ」

若いほうが、身体もしなやかで美しかったのである。

とにかく、こちらからクドイタわけではないから気が楽だった。クドカレルのがこんないい気持だとは知らなかった。ネ。

バス附きの部屋が一室しかあいていなかったが、若い婦人に優先権があるのは始めから決まっている。その点、Kはあっさりしている。バスの附いていない部屋でがまんした。

Kのフコロががぜん軽くなった。申し訳ない。

Kは、小さくてもバーの店主である私を引っ張り出した責任を感じて、支払はすべて自分ですませるのである。そういう奴である。そのくせ、バーで飲んでいても、私はあまりKと話はしない。それでいて外に引っ張り出すのだから、何が面白いのかわけがわからない。同年輩だというだけで、外に理由はないのである。オカシナ話。

十一時頃になっていただろう。

二人きりになって、はじめて若い女は羞恥をしめした。話をする事がない。

困っていると、

「先におはいりになって」

と云った。バスのことである。こうなると次第に男は図う図うしくなる。さっさと服を脱いだ。

湯舟に身体を沈めて、一人ニヤニヤしていると、ガラス戸が静かに開いた。

湯煙で女の裸身がかすんでいた。

女が胸にタオルを巻いているのに気がついたのは、女が湯舟に入ってからである。

女の肌は決して白いほうではなかった。むしろ小麦色と云ったほうがよかった。健康で若々しい肌であった。

女は無言だった。

これは一月の日記ではない。昨年春の話である。

それから、私はその婦人に会っていない、名前も知らない。

E 春川ナオミ画伯

一月三十一日

三月号を読む。奇クサロン『囃の魅力』の絵に驚く。

何も云う事有りません。ああいう絵をどうしどし発表して下さい。



四馬孝画廊

浣腸美媚態

大中判(13×19) 印画紙焼付
三枚一組 六〇〇円

略号(のゆ)

新しい狙いによる四馬孝画伯による浣腸美の極致を最高度に描き出した女性美の魅力を女体浣腸に求めた芸術的作品

一、令嬢の浣腸

美しい令嬢、二人の看護婦に腕をとられて身動きできぬようにつかまえられる、真白な遅まじいお尻をあらわにされて、百CCの巨大なガラス製浣腸器が医師の手によって迫ってくる。美に対する汚辱のスリル。

二、BGの浣腸

診療所の治療室にて、花恥しきビジネスガールが、羞らいながら、医師の目の前に臀部をつき出して浣腸ポイズをとるという、医療という目的のために、やむにやまれぬ緊縛をうけて、浣腸の祭壇に立たされる美しい女性。

三、女学生の浣腸

セーラー服の可憐な少女が、ズベ公とチンピラ達に、よってたかかって浣腸される。華々しい美の断層の一場面。

女体切腹図絵

△時代物女性切腹△

大中判(13×19) 印画紙焼付
五枚一組 一〇〇〇円

略号(しせ)

一、姫君切腹

美しき姫君、豊かな上半身をくつろげて、短刀をたたかた下に下腹に刺す。鮮血あふれる膝の上。

二、介錯寸前

覚悟の切腹。白裳束の娘くつろげた前をきりと九寸五分にて斬る。ふり上げた大刀まさに首筋へ

三、娘子軍切腹

城を目前にして、力及ばざるを殿にお詫びして、いさぎよく腹を切る。姫子軍の娘二人。

四、早まるな

屏風をめぐらした一室で白衣の胸もあらわに腹を切る若妻。帰宅した夫の止めるのもきかず。

五、恋人の介錯

さあ早くお討ち下さい。と下腹をかき切った娘は、首さしのべて恋人の刃を待つのであった。

浣腸責め図譜

△強制浣腸五態△

大中判(13×19) 印画紙焼付
五枚一組 一〇〇〇円

略号(しき)

一、片足吊り浣腸

片足を高々と吊られて、逆さ吊りの女の臀部に対してイルリガートルの嘴管が非情に迫ってくる。

二、いちじくの恐怖

革紐で身動きもできない女を抱えあげて、露出した尻へイチジクの軽便浣腸が挿し込まれる。

三、高圧浣腸

後手に縛られてタイルの上にころがされた女体の口には、高圧ポンプのゴム管が挿入されている。

四、五十cc硝子ポンプ

カウンタに麻縄で縛られたホステスの盛り上った双丘に狙いをつけガラス浣腸器のあくどさ。

五、大量浣腸

医局のテーブルに手足を縛られた看護婦が医師の手でイルリガートルから浣腸を施されている。

浣腸責め図譜

△浣腸緊縛五態△

大中判(13×19) 印画紙焼付
五枚一組 一〇〇〇円

略号(しえ)

一、踊子の浣腸

両手と片足を天井から吊られて奇妙な恰好のままイルリガートルから浣腸される踊子。

二、ヒマシ油

足をバタつかせても縛られた上にヒマシ油を無理に飲まされて、このあとに来るものが恐ろしい。

三、逆さ吊る浣腸液

ガラスポンプからグリセリンの原液が腸内へ送り込まれると、激しい便意が身をさいなむ。

四、浣腸用責衣

お尻のところだけが、ぼっかりと口の開いた奇妙な責衣。液を流しつづつゴムが尻に近づく。

五、両足吊り浣腸

このポーズだったなら、イルリガートルの液は、もういくらでも体内に流れ込むだろう。

羞恥責め絵巻

△異色責め五態△

大中判(13×19) 印画紙焼付
五枚一組 一〇〇〇円

略号(しい)

一、人工妊婦

女の腹はもう臨月に近いくらい膨れ上がっているが、まだ水はどんどん送られてゆく。ああ。

二、浴槽の女神

後手を括った皮は、湯を吸って喰いちぎれるように痛い。男は荒縄タワシで柔肌をさいなむのだ。

三、三角木馬の責

荒縄で乳房の上下を縛られた女が三角木馬に跨がらされて、呻めきながらムチ打たれている。

四、全裸の柱抱き

真白な豊満な背中から臀部にかけて、むごたらしいミミズ脹れが女に対する激しい責を物語る。

五、女体洗滌

二つ折りの奇妙な形に縛られた女体に、汚れを洗う水が手荒く注ぎかけられる。

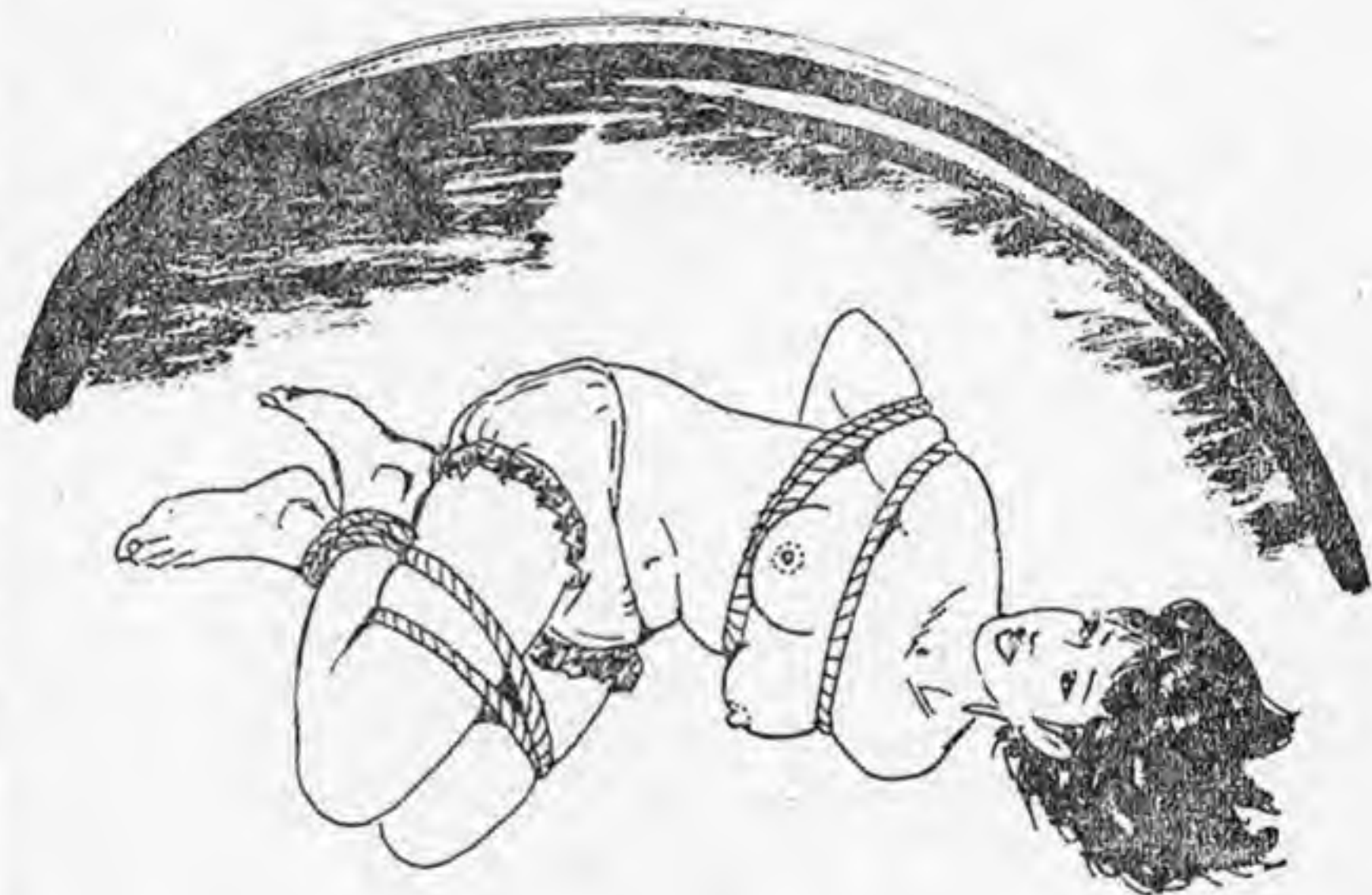
〔告白〕

ゴムマニヤの たわごと

平 川 靖 雄

私は小さい時からのゴムマニヤである。小学校の時、同級生が黒の総ゴムの短靴をはいているのを見て物すごく羨ましく思った事を覚えてる。だが、その時代はただ人のを羨ましく思うだけで親にせがんで買ってもら

という様なことはしなかった。勿論自分で買うなどという事は夢であった。だから当然雨具等は親が買ってくれて自分にあてがって呉れたものを無条件に使うのみであった。大体その当時、我々が着る雨衣は大ていゴ



ムマントであった。近頃のようにビニールやパーバリー等という気のきいた物がなかったから、皆一律に色々なゴムマントを着ていた。私のはたしかカーキ色であったと記憶している。ゴム長靴は中に布が貼ってあった。布の貼ってないのは、めったに無かったと思う。ところが親類のいとこの家に総ゴムの長靴があったのである。梅川幸子さん御愛用の足袋のようになっていた茶色のゴム長靴であった。御存知のように、あれはゴムが軟かく立てると二つに折れてしまうので、中に棒を入れて折れないように納屋の隅に立てかけてあったのを覚えている。それを見つけてからは、よくその家へ遊びに行った。そして家人にかくれてコッソリと履いて冷たいゴムの感触を一人で楽しんだものであった。しかし、人前で自慢げに履いているいとこを見ると無性に腹だたしくなって彼に生まれかわりたい様な羨ましい気持ちで一杯であった。

我々ゴムマニヤは他人が当然の義務としてゴム衣を着用しているのを見ると、大変うらやましく又時としてねたましくさえ思うものである。たとえば、皆さんもテレビ等でよく御覧になるであろう、台風の際の災害救助活動とか、雨中の線路工事、郵便配達等、黒ゴ

ムの合羽を着て、雨にテラテラとゴムを輝やかせ乍ら働いているのを見ると胸がワクワクして、自分もあの様にして働いてみたい、いやむしろ誰かが命令して自分に必ずやらなければならぬ様な義務を与えてほしい。そうして嫌も応もなくゴム衣を着て雨にうたれ乍ら人前で働かなければならないと云う風に強制されたいと思うのである。他人に見られず一人でやったのでは駄目で、衆人監視の中でゴムに身を包んで働かされるのである。如何ですかゴムマニヤの皆さん、この様な考えをお持ちになった事がありでしょうか。

私は中学時代に学徒勤労動員で一年ほど大阪のある伸銅所で働いた事があった。私の仕事は圧延であったが、いろんな仕事の中に鉄板を洗う仕事があった。同級生約四、五人がその仕事をしていたが、黒のゴム手袋、ゴム長靴、黒のゴム前掛という恰好で仕事をするのである。それが又大変羨ましく、どうか自分と替ってほしい。自分もあの様にゴム前掛を着て、前を水でゴチャゴチャにぬらし乍ら仕事をしたいと、そればかり心に念じつつ働いていたものであった。しかし、それも果たされぬままですんでしまった。

又以前ゴム引レインコートが大流行した時

若い女の人達が大概ゴム引レインコートを着ているのを見て、彼女等がどんな気持であれを着ているのだろう、レインコートの中はやはり汗でむれていよう等と想像をたくましくしていたものであった。今から考えるとあの当時ならゴムマニヤの女の人達は案外見つけ易かったのではないかと思う。なぜならば皆が着ているコートだから話題にもせ易かったし、着心地などを割と気軽に尋ねることが出来ただろうと思うのである。しかしこれもはかなく過ぎてしまった。

よくグラフなどで見るのだが、漁村などで若い女の人達が胸まであるゴムの胴付長靴をはいて働いているのを発見する。又近頃はやりのレジャーの中にアクアラングという物がある。例の黒いスポンジゴムの潜水服、あれなどを若い女の人達が着ているのを見ると、えいコン畜生と思う。なぜかと云うと、胴付長靴をはく時は下にちゃんと着物を着ていない筈である。つまり素肌の上にじかにゴム服を着ている事になる。我々ゴムマニヤは隠れてコッソリ素肌の上にゴム引レインコートを着て嬉しがっているのに、彼女等は堂々と人の前で素肌の上にゴム服を着て得意になっているのである。つまり彼女等は我々ゴムマニヤの

上を行つとるのである。何と腹も立とうではないありませんか。勿論彼女等はマニヤではないだろうから、その様な気持は毛頭ないと思うが、我々ゴムマニヤにとっては何とも情ないと言ふか、コン畜生と思うのも無理ないのである。

私は是非一度ゴム潜水服を着ている若い女の人にあたずねてみたい。「その服は素肌の上へじかに着るんですか」

「着た時の感じは如何ですか」「勿論中へも水が入るでしょうが気持悪くはないですか」彼女等は何と答えるだろう、考えただけでも胸がワクワクする。

又私はこういう事も想像する。ゴムの胴付長靴をはいて仕事をしている漁村の若い女の人たち、あの人たちに着物を脱いでもらって裸の上にゴム胴付長靴を着て、いつもの様に仕事をさせて見たいのである。これはあくまで空想の域を出ないが、この様に強制的に裸の上へゴムを着せて働かせてみる事が出来たらどんなに楽しいであろう。この様な楽しい空想は果てしもなく続く。

又我々ゴムマニヤの、もう一つの願いとして、自分等の好きなゴム衣を相手の人にも着せてみたいと云う欲望も持っている。先の話

もそうであるが、空想ではない實際の話である。相手の人にどんな人を選ぶかは皆さん各自で違ふであろうが、私の場合はやはり若い女性である。

十年ほど前、ヌードスタジオが盛んな時、私もよく行ったものである。そこで勇気をふるってモデルにゴムレインコートを着て写させてくれと頼んだのである。又そのモデルは気の良い子で、変な顔をしながらも素直に着てポーズをしてくれた。胸をときめかせながら夢中で十枚とったらフィルムが無くなった。ポーズに注文をつける余裕もなかった。すんでから着心地を聞いたら「すごく暑いわ」と云った。至極あっさりしたものであった。又そのモデルは出張撮影の時、買っておいた自転車用の荷物紐を見せて、これをアクセサリーに使えないかと云うと私の身体を巻いてみたらと云う。渡りに舟と後手に縛ったり椅子に縛りつけたりしたが別に何とも云わず素直に撮らせてくれた。この調子ならと思い、もう一度出張してゴムレインコートを着せて縛り写真をとる思い乍らいつの間にか時期を逸して遂に実行出来ず、今から考えると、なぜあの時無理にでも都合をつけて行かなかったか、やしくてならない。

私は又次の様な事を考える。若し日本の若い女性に素肌の上へゴムレインコートを着せて、その感じをたずねたらどうであろう。百人の中、まず半分以上は、いやらしい、気持ちわるいと、汚いもののように投げ捨てるであろう。しかし、その中何人かはその身にふれた感じに何となく気を引かれる人もあるだろうし、又何人かは気持ちいいわと思う人もあるかも知れない。又事実今まで何とも感じなかった人が、又そういう感じを持つ機会になった人が偶然にもある機会にゴムを素肌にあてて急にその魅力にとりつかれる様になるということもなきにしもあらずである。又お互いにゴムマニヤ同志が隠しながら交際していて、彼女がゴムマニヤであつたらなあ、彼がマニヤなら私とっても嬉しいのに等と、恥かしさが先に立ち打ちあけもせず歯痒いばかりのお付き合いをしていられる人もあるかも知れない。ゴムマニヤの皆さん、思いきって相手に打ち合ってみたらどうですか。若しかすると貴方の相手もマニヤかも知れませんよ。

しかし私の彼女は駄目だった。恥かしさを忍んで私が打ちあけた時、彼女はそう大して驚きも又不思議がりもしなかった。苦心して

私がプレイにまで持っていた時も大して表情をかえず素直に素肌の上にゴムレインコートを纏ってくれた。ボタンをかけベルトを締めフードをかぶせても別に何と云わなかった。それではと紐で後ろ手に縛り上げて布団蒸しにしてもあまり変な顔もしなかった。こっちは興奮して胸がドキドキしているのに、彼女は至極平隠無事という様にみえた。何のことはない、一人相撲という感じで完全に氣勢を削がれてしまった。尤も春ごろであまり汗をかく様な気候でもなかったし、彼女もそう汗かきでなかったから、余計何とも感じなかったのだらう。しばらくして紐をほどいてから着心地をきくと、別に何とも感じないわと云って私がこんな物を好むのを、どうも理解出来かねるという顔をしていた。全くガツカリでした。こういう女の人は如何に教育しても到底ゴムマニヤにならないと思う。やはりある程度の反応を示すような人でないと駄目だと思うが如何でしょう。むしろ少しやがる様な人の方が持つて行きようによってゴムマニヤに仕立てる事が出来るかも知れない。

私たちゴムマニヤにとってゴムは何物にも替え難い魅力のある物であるが、やはり世間

一般の人達には何とも理解し難いであろう。その中から同好のゴムマニヤの相手を探し出すという事は難事中の難事である。これが芝居なんかだったら、いとも簡単である。厚かましくも若い女の人たちの屯している所へ行つて「どなたか歌舞伎の好きな方居られませんか。顔見世の切符があるので、よかったですら御一緒に」なんて云つてうまく同好の相手を

見つけ出すことも出来るが、これがゴムとなると、そうは行かない。若い女の人達の前で「どなたかゴムマニヤの方居られませんか。ゴムのレインコートとおしめカバーがあるの、よかったですら一緒にプレイを……」それこそ忽ち袋叩きにされて一生変態性の烙印を押され馬鹿か気遣いの様に扱われるのが関の山です。

毎月確実に入手されるために

本誌予約購読者を募る

予約申込者月毎増加中です

毎月確実二十五日発売!

○本誌は現在地方にては、非常に入手が困難な状態だと思われまますので、確実に毎月御入手されるためには、是非直接予約お申込み下さるようお願いいたします。

○直接御予約下されるのには、天星社宛に(阿倍野局私書箱第十四号) 予約購読料をお払込み下さい。

○本誌の送料、包装代などは総べて当社にて負担いたしますから、誌代のみ御送金下さいは結構です。

○本誌の誌代は、一部三〇〇円ですから、従つて、予約購読料は一月一冊三〇〇円、三ヶ月分三冊九〇〇円、半年分六冊一、八〇〇円、一年分一二冊三、六〇〇円です。今後誌代の改訂は当分の間しない予定です。

○予約お申込みの方には、毎月二十日頃印刷完成と同時に、外部から見えないように厳重

包装の上、お送りいたします。

○毎月一冊宛お申込み下さる方は、誌代三〇〇円を、なるべく十五日頃までに御送金頂ければ、印刷完成と同時に、予約者の分と一齊に発送できます。

○予約購読のお申込みの際は、必ず何月号から何ヶ月分とお書き願います。何月号からとお書きにならないときは、重複や欠号をきたします。お留意願います。

○予約金が切れましたときは、封筒の上に「本号にて前金切」の判を捺印いたしますから、継続お払込み願います。その際、継続でも何月号からとお書き添え下さい。

○局留にて雑誌をお受け取りになられる方は、毎月二十五日頃、局へおいで下さい。局留郵便物の受取り方は、先ず御注文の際お受取りに行きたい郵便局(特定郵便局でも結構です)と受取人のお名前とお知らせ下さい。当方では御指定の局留としてお送りいたします。数日後その局で御受領願います。局での留置期間は十日間ですから、その間にお受取りにならないときは、発送人に返戻されます。

私も奇クを知るまでは、こんなゴムマニヤは私一人だけだと思つていた。他人に話すなと云うことは思いもよらなかったし、若し家人などにこの秘密を知られたら、それこそ死んでしまいたい様に思つていた。ところが偶然貴誌を発見して中のゴムマニヤの文を読んだ時の私の驚きと嬉しさ、中でも古川裕子さんの告白文、みずしままるさんの夫婦間のプレイ、近くは梅川幸子さんや大西良子さんたちの一人楽しんでおられるゴムプレイ、竹野ひろ子さんの呼びかけ等、どれもこれも私たちゴムマニヤにとって大げさに言えば天の福音と云おうか、実に我々の生き甲斐をここに示されたと云つても過言ではないと思う。今一歩進めてこれら皆さん方や私たちの様な無名のゴムマニヤが一緒になつて一つのゴムマニヤ同好会を結成したら如何であろう。勿論いろんな障害もあり又秘密が他に洩れるのを恐れて実行出来かねるのであるが何処か京阪神の内で一個所きめて(喫茶店などを利用して)日時をきめて集まるのもよし又どこか電話を一つ借りて(テレホン喫茶などよいのではないか)日時をきめて電話をかけ改めて集い合うという方法もある。

(おわり)



〔読者原稿〕

生活体験報告

洋装下着を着て歩く

真 山 淳

女装愛好家のグループや雑誌の記事は数多くあり、よく読みもするが、女性洋装下着の愛好者は数少く思います。奇ク三月号に細田隆氏の生活体験報告が掲載されており、久方ぶりにたのしく読むことができました。

女装愛好家の場合は、ほとんど和装であります。たとえば『着物』用品を集めておられる方など、その用品の購入の場合は、容易に手に入ることができですが、洋装用品の場合は入手困難の場合が多いですね。

私も洋装下着に興味を持ち、少しずつ集めております。細田氏と同じくブラジャー・コ

ルセット・パンティ・ショーツなど数々集めております。色は赤・黒・ピンクのものが多くです。この間も全部黒色の下着を一式集めることに熱中しましたが、最近になって、やっと集めることができました。

黒色のブラジャー・ガータベルト・ショーツ・ストッキングの一式です。そして着用して写真も取っておきました。

下着の購入方法は、私も大変困っておりますが、勇気をだして婦人下着の店やデパートに出掛けて購入しております。最近では専門店や代理店で購入する方法がわかり、通信に

て真送してもらって入手しています。

例えば東京に店のある舞台衣裳の専門店や女性下着の店とか、大阪では鴨居羊子のチュニック、又は宗右衛門町の女性下着専門店などよく利用しています。

デパートへも買いに行きますが、店員にじろじろ見られて、変な男のように考えられているのではないかと思いつくことができません。しかし店員によっては、気持ちよく応待してくれる人もいます。先般も妻へのプレゼントにネグリジエを買うため、デパートに行きました。その時ネグリジエに合

ったパンティを買うつもりで、よっていますと、店員が来ましたので「ネグリジェに合った色のがありますか」と尋ねました。そして「変り型のパンティがありますか」と云ってウインドを見ていますと、店員が二、三枚出して来て親切に説明してくれましたので、その中より変り型のショーツを二枚買い求めました。これも私の使用するものですが、時にはサイズの点で困ることがあります。自分のサイズを言えば変に思われますからね。だから大きな目の物を買って来て、自分で加工することもあります。ブラジャーの場合は、背ゴムを長く付け換えました。

このように無理して今までに買い集めた洋装下着は衣装箱に一ぱいあります。

私も細田氏と全く同様に、赤色が好きですが、時により始めに述べたとおり、黒・ピンクもバラエティのため購入しています。

そして、何時も何か女性の下着を着用しています。通勤のときもショーツかガーターベルトとフルファッションの何かを下着の下へ着けています。コルセットも時々着用してみますが、サイズの大きなものがないのでLサイズを買っていますが、私のように体の大きいものは、長時間、着用するとさすがに苦しく感

じます。一日中着ていますと食事ができぬほどになります。

私の場合は妻がありますので、兼用ということになっていますから、万事うまく取計ってくれるので、その点では安心しています。妻の前で全部着けてみることもあります。冬などでは男性用下着の下へブラジャーを付けショーツを穿き、そしてガーターベルトをし黒いフルファッションをはいて、その上にシヤツとズボン下を着ております。ショーツは変り型や色も数々ありますので毎日、変わったのと穿きかえています。腰のあさいパタフライ型やフリルの付いたパンティと時によってかえていますので、毎日がたのしくてなりません。まだスリッパは一枚しか持っていないので、毎日着用できません。日曜日に時々着てみる程度です。

最近の女性洋装下着も現代的なもので変り型が多く発売されるようになりました。ティジンのUウェアが、もっとも新しい型の下着です。スリープ・レス（ショート）は、ブラジャーの変り型です。同じく（ランニング）型、キヤミソル、シユミゼット、タイツ、ビキニ・ショーツ、スリーマー（ロング・スリーブ）などは他社の下着より変わった型で、着

用しても暖くて着よい感じでした。サイズはフリーですから男性でも充分着用できます。私も一式購入して、何時も着用して楽しんでいました。

又変り型の多いメーカーはチュニック製です。透明の下着はチュニックに限ります。紅い色の透明の生地には黒いフリール付きのショーツなどは、よく出廻っています。

シエリーセット、ナイロン・トリコットの半透明と透明の二種・絵模様入り、で上下のセットになっています。これなどは着ている、思わず嬉しくなるような衣裳です。その他チュニックには、チュールリップ・スリッパ、キキー・スリッパ・ギリシヤ・ネマキ、ファイ・スリッパ、キヤミターなど他社にない変り型の衣裳が数々あり、私はこのカタログを見て何時も着たつもりでおります。全部購入することができませんものでね。

たしかに女性洋装下着は、色があざやかで肌触りがよく、伸縮性があるのがもっともたのしみです。年々新しいものが売り出されて見ているだけでもたのしみです。私は時々、買い集めたものを全部座敷に出して、広げて見えています。パンティだけでも五十枚ほどあります。そして時には生地を買って来て自作

することもあります。以前にも自作のバタフライを、東京のメーカーに送ったところ試作品としてカタログに出ていたこともありま
す。これは両わきがホックで開くようになって
いるもので、下へぬがなくてもすぐぬげる
ものです。このようにして婦人洋装下着を買
い入れたり、自分で作ったり、そして着用し
てはたのしんでいます。

黒のブラジャーを付け黒のガータベルトと
黒のフルファッション、紅色のフリル付きシ
ョーツを穿き、その上から紅色スリッパを着
用すれば、下に付けている黒色のフアンデー
ションが透けて見られますので何とも云えぬ
美しさで何時までもぬぐことができません。

愛好家の皆様方には、この感じはよくわか

〔切腹研究夜話〕

戦国の切腹

戦国時代の切腹の特色については、小著
「切腹―悲愴美の世界」と、群書類従刊行会
の会誌に載せた「合戦記における切腹の種
相」をご高覧頂けば、大体お判り頂けると存
じますが、まず合戦と切腹の関係について申
しますと、大体源平初期は敗けても捕えられ

ることと存じますが、他の人が見れば変態性
だと考えることでしよう。細田氏の文中に御
自慢のオーロラ・カラのパンティとスリッパ
が出ていましたが、これはどんな色のものか
おしえて下さい。又レインボ・カラーに付い
ても知りませんのでよろしくお教え下さい。

愛好家が集まる機会があれば、各人が自慢
の下着を着用して、コンクールでもやれば、
さぞ楽しいことだろうと思います。又カラー
写真にとっておけば一生の記録になることで
しよう。

貴兄達の云われるとおり、第三者が見れば
プロテスクかもしれないませんが、他人に迷惑を
掛ける訳でもないのです、自分達の趣味を満足
させるだけのことですものね。他人に害をお

中 康 弘 通

て恥とせず、斬首されるのが常で、また勝っ
た方も腹を切れとは云わなかったようです。

ところが為朝、頼政、義経など源氏の将が
追捕逃げ切れずと見て、敗戦の跡始末に腹を
切りました。そして太平記の世界は切腹の連
続というわけで、敗けたり、負けそうになっ

たえるものとこまりますが、私達の場合
はそうでないのですから、大きな顔をして趣
味を満足させるべきですよ。

細田隆氏の読者原稿『婦人洋装下着のこ
と』の文章に感動して投稿することにしたも
のですが、意余って筆足らずで、自分の云い
たいことが十分に書けずに終わりますが、同好
の志はどしどし投稿されて意見の交換の場を
埋めるべきです。そして知らぬことは教えた
り、教えられたりして、趣味の向上につとめ
てゆきたいと存じます。又入手困難な品物は
交換できることや購入先を教えあえることが
一日も早くできるようにしたいものです。同
好の皆様方の御活躍を期待します。細田氏、
小野氏の御投稿を心から待っております。

ただで、もう腹を切るという事になりました。

敗けて捕虜になる者はなく、降伏する前に
斬り死にか、腹を切るかということになった
わけです。

次いで戦国に入り、千葉介胤宣の例（小著
にあり）あたりから始めて城将が、敵に申入
れ、城外に出て腹を切るようになりました。

このとき主な郎党は主君の切腹を見てやは
り腹を切っています。こうして、城の方から

申入れて、腹を切るから開城、士卒の生命保証をせよ、という方式が始まったようです。

別所長治（播州三木城主）も然り、また上田孫次郎実親（備中鬼ノ身城主）も同様です。

この長治のときは兄弟夫婦が自刃しています。実親のときは、士卒が助かりたいために早く実親が腹を切ればよい、と待ったということが書かれています。殉死した者は藤若という小姓らしい少年（是は男色関係かと思われる）一人です。小生もこの藤若を腹を切らずに、腹を切ろうとして彼を慕う少女にとめられ、生き延びようとするおハナシを作ったことがあります。（第二回双葉賞佳作「藤若物語」）

ところが攻める方から申入れたのは清水宗治（備中高松城主）が最初ではないでしょうか。といっても是も両方から持ち寄りの条件であったかも知れず、その辺、小生文献に当たっていないのでハッキリしないのです。

秀吉は三木城で長治、高松城で宗治、小田原で北条氏と、城将に腹を切らせる条件で士卒を助けています。この点が信長の皆殺し主義と対比して面白いと思います。家康は信長とも違い、又秀吉とも違って、主に、最も憎むべき謀将（軍師、参謀みたいな人物）を斬首し（切腹も許さない）ているのではないのでしょうか。尤も、大阪城では皆殺し主義で主なものに備倉に押籠めて腹を切らせてしま

ました。この辺が面白いところです。

ところで、戦国の切腹の特徴は、やはり腹を切る者が納得して進んで遂行している。というところで、江戸の切腹と精神が違ふようです。傷ついて捕えられ、改心せよと云われても、なお乞うて腹を切った侍大将格の武士の話もありますが、総じて自他ともに派手に腹を切ることにヒロイズムを感じているようです。敗北とか捕虜は恥すべき状態であるが、腹を壮烈な切り方で切れば、その人物は勇者として尊敬されるし、また本人も満足するという風潮が感じられます。但し以上は軍記、合戦記の美化表現を肯定しての話です。

ところが江戸時代では、もう戦はなくて切腹は刑罰か殉死に基因する例が多いのです。すると本人は必ずしも得心せず、陥れられて敵対者のために腹を切らされるとか、本当は余り死にたくないが、体面や義理、子孫の保障のために追腹を切るというケースが多くなつて来ています。

従って奇妙なことに、切腹も、凄烈ながら完全に遂行した戦国の世と違い、切り損じも出て来るでしょうし、また反面、いろんな奇妙な理窟が付いて、例えば刑死者は真刀を持たずと暴れるといけないから、木刀や扇子を当てがい、まるで斬首みたいな事にする、ということも起きて来ます。

かと思うと、殉死者は忠義な人だから苦し

めてはいけなから、腹を殆んど切らぬうちに、精々突き立てたぐらゐで介錯するということになります。一方では仇討のために討つ人が介錯、討たれる人が切腹という立場で、わざと刃引きの刀で介錯したり、「存分にお腹召されよ」式で、本人の苦しんで腹を切るのを見ている、というケースもあります。

小生の考えは少々「切腹」という特異現象を肯定的に見すぎるかも知れませんが、ありのままに過去の事実として見て、戦国の精神を高く評価します。そこにはやはりヒロイズムと自己犠牲の精神があり、ギリシヤ悲劇など一脈通ずるものがあるからです。江戸の切腹は陰惨で精神的に美意識が乏しくなります。

参考文献としては、

広文庫の（せつぷく）の項、

古事類苑の（切腹）の項、

このほか

正統群書類従の合戦部

国史叢書、史籍集覧の軍記、戦記類

是らは必要事項が散見されるので、探究がなかなか大変でしょう。人名が判っていれば国史人名辞典の類に当たってみれば、文献が記されていると思います。

（本稿は御質問にお答えした書翰を骨子としたものであることをお断りしておきます。）

懸賞募集入選作品

「革の盛装」

△第一部▽

革の招く運命

山 口 広

まえがき

この『革の盛装』は、二、三年来ますます流行する『革の服』の幻想にあこがれる筆者がさきに編集部にお送りして、三月号に掲載された小品「革の服の流行」を発展させたものである。

何分にも実際のSMプレイの経験も少なく又、文才も乏しいので、折角毎号の貴誌を飾る種々の責めのアイデアも充分に生かし切れない。無断借用してしまったが、四馬画伯の毎号を飾るさし画、第一期全盛時代のもとに

なった『蜘蛛と蝶々』白表紙時代の『壊滅の前夜』『魔教團No.8』更に現在満天下の読者を魅了している『花と蛇』その他、時に応じて本誌にあらわれる告白、創作などの作者の諸氏にお許しを乞います。

脱稿して見ると、設定もぎこちない。心理描写も、情況説明もまことに不満である。一言にして云うと「筆足らず」であろう。

今後これに懲りず、創作を読けたいと思っておりますから編集部の諸氏の、そして幸運にも印刷されるならば、読者諸氏の御指導をお願いするものです。

主要人物

「夫人」実の名は、道川幸子、若くして資産家にみこまれて結婚したが、日ならずして夫を交通事故で失った。莫大な遺産と豊かな才能によって、医師となって縁者のない道川家を夫の年若い弟、光彦と守っている。光彦の云う医学士は本当だが、工学部へは数課目の聴講に行っただけである。三十七才。

「光彦」勿論、(小野)と名乗るのは偽名である。大学の経済学部に入りながら、デザイナー仲間飛び込み、その方で身を立て

ようとしている。大学中退、夫人の助手をして養われている。夫人を叔母様と呼ぶ様に、全く夫人にはおさえられている。一七五センチ、七〇キロ、二十九才。

「小山美代子」二十一才のBG、高校時代にスポーツで鍛えた均勢のとれた体を持ち会社でも仕事早く、公務員である父と母を愛し、弟をよくいたわる朗かな女性。一六一センチ、五八キロ。

(一) 革袋

年末に近くなると五時を過ぎると全く暗くなってしまう。美代子の勤める運送会社も年末の忙しさで残業が多くなり、今日も七時をまわるまで会社を出られなかった。美代子がこのあまりばつとしなかった運送会社に就職を決めたのは、運転手や助手にこげ茶色の革ジャンパーが貸与され、少し粋きな従業員は同じ色の半長靴やズボンを着けているのを見たからであった。いかにも活動的に見える革ジャンパーは、それだけで従業員自身を活潑にし、荷扱いの敏速さを印象づける為か、次第に得意先も増えて不況だと云われるこの年末も無難に乗り切れそうであった。

一日の仕事から解放された美代子は、今日

は仕事に疲れながらも満足な気持ちで、平凡な仕立の事務服を昨夜届けられた真赤な革のスーツに着がえた。今まで三年近く、あの高価な革ジャンパーが男子のしかも比較的粗野な運転手たちに貸与されるのは片手落ちだと思っていただけに、ボーナスをほたいてオーダーで仕立てた羊の革のスーツを身にまとうと、心からの満足感が湧いてくる。同僚の高田早苗も一緒に仕立てた濃い緑のこれはバックスキンのオーバーを着ると二人並んで、トラックの荷台と同じ高さに作られた荷物集積所の前を通って、若い運転手と

「小山さん、シックでイカすね」

「軽くて暖いもの。じゃさよなら。」

とやりとりしてから、会社をあとにした。

美代子と早苗は、センター街の店をのぞきながら二宮駅に向った。中流家庭に育った美代子は給料は家に入れる必要はなかったが、それ以上の小遣も与えられなかった。革のスーツを作ってしまったので、この正月は他にまとまった買物は出来そうにない。同色のハイヒールも少しくたびれかかっている。これさえ新調できればもっと人目をひけるのだかと思いつながらも、すれちがう同性の幾分羨望のまじった一瞥^{ベッ}を感じると悪い気はしなかつ

た。ただ濃い緑に統一された早苗のシックなスタイルに注がれる目の方が多いのがわかると、今までのおしゃべりも何処へやら、早く別れてしまいたいというねたみが湧いて来た。私の方が顔も個性があり、体もすばらしいのに、そして頭だって比較にならないのに生意気だわ。と心の片隅に日頃の意識されない不満が起って来た。

早苗は社長の再従妹であるというだけで、

同時に入社しても給料もちがい、同じミスしても叱られるのは美代子だけである。高校時代にバスケットボール部のキャプテンであっただけに、美代子は頭もよく、殆んどミスはしなくなったが、早苗の仕事の遅さが彼女の負担になっている。

美代子がうっかり「今度のボーナスで革のスーツを作ろうかしら。」と洩らした為、同時に早苗にバックスキンのオーバーと同色のブーツを作られてしまった。美代子より少し小柄で平凡な顔立ちの早苗はお嬢さん育ちの為か、それを装ってか、ことさら美代子にはわがままにあたって来た。

「小山さん、お正月にスキーに行かない。乗鞍に国民宿舎が出来たから、予約とってあるのよ。どう？」

美代子はスキーでも早苗には負けたくなかった。

「そう、考えておくわ。冬の信州って、良いでしょうね。」

「だめだめ、貴女も人数に入っているのよ。」

「だって、まだお正月の予定も立っていないのに、それにお家^{うち}で相談もしなきゃ。それにお小遣^{おこづ}だって……」

「小山さん、貴女が行かなきゃ楽しみが減るというものよ。是非行きなさいよ。スキーなんか向うで借りられるわよ。」

美代子はスキーを持っていない事を、わざと指摘する早苗がにくしくなって来た。

三宮に來たので阪急で帰る早苗と別れて雑踏する国鉄の駅に入って行くと、夜行を利用してスキーに行くらしい男女のグループを見かけて、またしても早苗に対する対抗意識が湧いて来る。この革のスーツさえ作らなかつたらスキーに行く費用はおろか、スキーだって買ったのにと口惜しさがこみ上げて来た。

改札口に近づき、ハンドバッグから定期を出そうと歩みをゆるめた時、突然後から

「失礼ですがお嬢さん、私はこういう者ですが、お願いがあるのですが。」

と一米七五ぐらいの均斉のとれた体つきの

一見三十才前後のやや目つきの鋭い紳士に呼びとめられた。手にした名刺を受取ると彼女はもう一度青年を見返して顔をやわらげた。阪神地方で有名な畑中千代女史の名を名刺に見かけたからである。小遣はしさも少し働いた。

畑中千代服飾研究所

デザイナー 小野 光彦

とだけ印刷され、住所も電話もないその名刺に疑問を持とうともせず小野と名乗る青年に微笑をかえした。

「どんな事でしようか」

「実は近頃になって随分こんな革のスーツを見かけるのですが、貴女のように素直に着こなしている女^{ひと}を見かけた事はありません。是非僕の新しいデザインのモデルになってくれませんか。失礼ですがお礼は叔母にたっぷりさせますよ。こんな所で立ち話もなんですから落着ける所へ行つて御相談しましょう。」

美代子には諾否の返答もさせずに大またに駅を出てゆこうとする小野の後を当然の様に追いかけてながら、美代子はまさに降って湧いたこの好運に胸をおどらせた。

阪急三宮駅の北側の呑み屋街を通り抜けて

少しさびれた通りにある一寸場外れの感じのするシックな喫茶店に入り、奥の方のテーブルに席をとってコーヒーを注文するといきなり小野は小脇にかかえたスケッチブックを開いた。

「僕がパリから帰ってから考えたデザインですが、貴女にぴったりフィットするのは……」

美代子はパリと聞いただけで、すっかり小野に心服してしまった。小野の手ぶりをまじえた話術にすっかりひき込まれ、運ばれたコーヒーに口をつけたのも冷え切ってからであった。二時間ばかり話し込んで、美代子は小野のデザインになるドレスを身にまとった自分の姿をまぶたの裏にえがいた。

喫茶店を出ると、近くに駐車してあった小野の車で送ってもらうのが当然の様な気になっていた。平常より遅くなったことも気にならなかった。

「どこまで送ろう？」

約二時間の会話ですっかり打ちとけた小野の態度にすら好感を持って美代子は答えた。

「須磨ですの。」

運転台に並んだ二人は何年も前からの知り合いの様に楽しく語りあった。車の混まない道をという小野の声に黙ってうなずきなが

ら、そつともたれかかる美代子を抱きとめて車はわき道へそれて行った。

小野は美代子を抱えた手を離さずに静かに車を停めると、彼女に不審の念を抱くすきも与えずに、ダッシュボードのポケットを開き素早くガーゼと小瓶を取り出すと、彼女の口と鼻をガーゼで押えて、瓶の液体をふりかけた。美代子はクロロフォルムを嗅ぎながら眼を閉じた。「む、む」うめきだけが残った。

小野は美代子の体をそつとシートの上に横たえたと車の外へ出て、左側のドアから美代子を後の席に移し、トランクの中から大小二つの革の袋をとり出して、後の席に入ってしまった。

(二) 脱衣

普通の住宅とすれば異様に広く細長いこの部屋の入口は片隅の厚い木で作られたたった一つのドアで、内側には把手がなく鍵穴だけが輝いている。二十畳はあろうと思われこの部屋の半分は豪華な絨氈がひきつめられ、落着いた応接セットが置かれ、調度も立派で、部屋の中央にひかれたカーテンを閉めると、まさに富豪の応接室としても恥しくないものである。ところが残りの半分は床は板張

りで粗末な木のベッドと体操の器具に似たものが幾つかと、縁だけの高い丸椅子が置かれ天井からは幾本もの鎖や紐などが下げられている。正面の壁には一面に色々の高さに鉄の環が埋め込まれ、左の壁にはカーテンのついた広い窓が、右の壁には全身用の鏡がはめ込まれている。壁の下の方ははめ込みになった引き出しが幾つも見かけられる。中央のカーテンを開くと、この二つの部屋のあまりにかけ離れた対照に驚かされる。

ソファの上に横たえられた革の袋の中には美代子が眠っている。足の方からかぶせられた大きい革袋は首の横で尾錠で締められ、頭はずっぱり小さい革袋に入れられ、やはりこれも首のまわりでしばられている。鼻のあたりの小孔が呼吸を助けている。

「光彦さん、今度の獲物はどう？」

「この牝は顔も体もいかしますよ。家が中流らしいから、そんなにすれていません。今に何でもする様になりますよ。きっと叔母様のお氣に入るでしょう。」

「じゃ、眠っている間に用意してよ。どうせ泣声はあとでたっぷり聞けるんですからね。ほほほ。」

もちろんと幾分地味な和服を着た女性が光

彦をうながした。年の頃は三十代の半ば過ぎであろうか、切れ長の眼が声は笑っても、ほころびてはいない。冷やかな目つきは革袋に注がれている。

光彦は洋酒瓶の飾ってある棚の下の引き出しから、革のベルトが複雑に繋がったものを取り出して、ソファの革袋に近づいた。小さい方の革袋を結んである紐をゆるめてぬがせた。美代子はこんこんと眠っている。光彦はなれた手つきで美代子の顎の下から額の上にベルトをまわし、口をおおう巾の広いベルトを後頭部で締めつけ、こめかみのあたりで連っている目かくしも後頭部にまわして固定した。たとえ美代子が眼をさましても、何も見えず、ひとことも話すことは出来ない。完全な猿ぐつわと目かくしである。しばらくして美代子の意識がかえってきはじめた。顔が固定されているのもまだはつきりしないのか首を動かし、大きな袋がもぞもぞと動きはじめる。袋がそれほど大きくないので手も足も少ししか動かない。

「光彦さん、氣が付き始めたようよ。さあ始めて頂戴。」

光彦は袋ごと美代子の体を抱き上げると板の間の方に運んだ。そしてまるで荷物でも扱

う様に床の上に落した。美代子は可成り強く足と尻を打って、その痛みに大声をあげた。しかしその声はきびしい猿ぐつわの為に消えて、自分自身の耳にも「うふ——」といううなり声しかとどかなかった。猿ぐつわだわ、と気づくと無意識に手が袋の中でもがいた。

光彦は袋の外からその手を押えると、美代子を立たせた。袋の中で片方のハイヒールがぬげて転びそうになった体を立て直した美代子は

「何をするんですか」

と叫んだつもりであったが、やはりくぐもったうなりしか聞えなかった。

首のまわりをしめつけた袋の口が開かれたが、両腕を自由にする隙も与えずに右手が背中にねじ上げられ手首にかけられた細い紐が首にまわされ、続いて左手も背中へ、そして両手首をしっかりと縛られてしまった。美代子は片足だけハイヒールをはいたまま膝をついてしまった。

そのとき始めて美代子の耳に二人の会話が入って来た。

「あざやかなものね。私が用意してくる間に吊しといてね。ほほほ」

「ナイロンのコード（組み紐のこと）は強く

て捌きやすいので便利ですよ。早く用意して下さらないと、叔母様が来られる前に始めてしまいますよ。」

「それじゃ、このままで飼育にかかろうかしら、そのうちに私の盛装もいやというほど見せてやれるんですもの。……ほ……ほ……ほ……」

『シイク؟؟ セイソウ??』美代子は言葉の意味をはかりかねて、後手に縛られた両腕を光彦にとられながら首を振り、尻をもがいた。うめきだけが続いた。

光彦は美代子を立たせると頭上の細い紐を二本引き下して、縛られたままの両手の中指のつけ根を別々にしつかりと結びつけた。そしてゆっくり両手首をしめつけた紐をほどいた。両手の自由がとり戻せたので美代子は床にしがみ込んで顔に装着された猿ぐつわとも顔枷ともつかぬマスクを外そうと夢中で顔をなでまわした。しかし氣持がすっかり動揺してしまっているの後頭部まで手がまわらないうちに天井でモーターのうなりが聞えて中指を吊った紐が徐々に、強く引き上げられ美代子の体は真つ直に伸び、ハイヒールが残っている左足のかかとが浮いた時にモーターは止った。二本の中指で体を吊られると少し体を動かしただけでも指がもげそうに痛む。

両脇の筋肉も痛む。美代子はうめき続けた。どんな声を出しても「うふうふ」としか聞えない。

真赤な革のスカートの下からのぞくすらったとした脚はやがてがくがくと震えはじめる。胸は大きく波うちはじめる。

「さあ叔母様、始めて下さい。」

美代子は光彦の声を後に聞いた。そして正面から叔母と云われる夫人の宣告が冷やかな声ではじめられた。

真赤な革のスーツのまま、両手を高く吊られ、黒髪の上からかけられた黒い革ベルトの猿ぐつわと目かくしは奇妙によく似合った感じを与えた。夫人は嬉しそうな、そして冷やかな口調で

「貴女は小山美代子、二十一才、栄光陸運の事務員、住所は神戸市須磨区離宮道。……」

……しかしそれは過去の事、たった今から私のそして光彦の大切なモデルなの。私たち二人に心から服従すると誓える？ 貴女が従順になれば楽しい生活を保障してあげるわ。どう？ 誓える？ そうそう、お口がきけなかったのね。うなづくのよ。」

美代子は中指のもぎ取れそうな痛みを逃れることしか考えなかった。そして命ぜられる

ままにうなづいてしまった。

「そう、良い子なこと。はじめから素直だね。それではサイズを取りましようね。」

夫人の声が終らぬうちに、ボタンをかけていなかった革の上衣がするすると袖口を引き上げられて両手を吊った紐を通して天井へ上って行く。はっと思う間もなく、革のスカートの左脇のファスナーが下されて足もとに落ちる。これまた真赤なセーターも裾からまくり上げられて天井へ。シューミズの肩紐が缺で断ち切られて体をすべる。他の下着は大きな裁ち缺でざくざくと切れ、体から除かれ残されたのは、ピンクのパンティとブラジャーとストッキングだけになってしまった。

抵抗しようにも中指だけで吊られた痛さの方が先に立って体をゆるする事すら出来ず、ただ意味のないうめき声だけが驚きを、怒りを、悲しみを、そして恥かしさを伝えた。

「じゃまだから、それも取ってしまった。」

夫人は立って見ているらしく、美代子には先ほどの宣告のと同じ位置から聞えた。

ブラジャーは肩紐が切られ、背中で缺が入れると、ピンクの布片れとなって、一度上に向いた乳首で止ってから足もとに落ちた。左腰の脇に冷い金属の感触が走り、パン

ティの左側が裁たれ、ゴムの弾力で右脚のつけ根にだらりとぶら下った。右脚のつけ根にもう一度缺を入れられると、弾力を失った布は足首までずり落ちた。ゴムの跡だけが肌に残った。

「許して！」

美代子は大声で叫んだが、幾分高いうめき声に変わったのであった。

「光彦さんは流石に眼が高いわ。これだけの体はそうないものよ。吊してもバストが八九センチだから九一はあるかしら。でもウエストは六二センチ、少し肉がついてるわね。」

「ウエストの九センチぐらいは、しばらくですよ。手はいくらでもありますから、それにしても肌はきれいでしみやあざは見つからない様ですね。」

体をなでまわされ、メジャーをあてられていた美代子はこらえていた恥しさと口惜しさがこみ上げて来て、大声をたてて泣いた。目かくしのすき間から涙が頬をつたわり、乳房の上へしたたった。声は猿ぐつわに殺された。

涙にぬれる美代子の体はなおも夫人の手でサイズが測られた。

「もう終りよ。泣かないで。」と夫人は美代子

の乳首を指ではじいた。体中にひびくショックを受けて中指の痛さも忘れて倒れかけたとき、天井のモーターの音が聞えて、急速に紐がゆるめられた。美代子は布片れになってしまった下着の上に横たわった。中指の紐を解かれても腕も、脚も自由に動かなかった。ようやく両手で猿ぐつわと目かくしの上から顔を覆って、床の上にうつぶした。

「しばらく休ませておいて、その間にどのデザインにするか相談しましょうね。」

「これなら万人共通ですから。」

まだ鳴咽おんげんを続ける美代子の右手を背中からねじ上げながら光彦は答えた。ようやく手足の感覚が戻りかかった美代子は右手をねじ上げられながら抵抗しようとしたが、背中を膝で押えられるとあきらめて、力を抜いた。乳房が冷い床にすれて痛んだ。すかさず左手も背中で重ねられて、革手錠の尾錠がかけられ、又しても涙がこみ上げてくる。

「さあもう一度中に入るんだ。」とあのおぞましい厚いごわごわした革袋を足にかけられると、自分が盲目同然であるだけに、おとなしく革袋をかぶせられる美代子であった。首の横でしっかりと尾錠をとめられて床に横たわる美代子を眺めながら

「ここはこれからずっと貴女のお部屋ですかね。そうそうもうお前は私たちの飼育する牝だから、貴女なんておかしいわね。良い名前を考えてあげよう。」

夫人は、光彦を連れて衣ずれの音と共にドアの方へ達さかった。ガチガチと鍵をあける音がして厚い一枚板の扉が開いた。外からは押すだけで錠がかかり、中からは鍵を持たずに出ることは出来ない。

美代子は真暗な視野の中で『シイク』の意味をはじめと噛みしめ、また涙で目かくしをぬらした。しかし『セイソウ』の意味はどうにも想像がつかなかった。

(三) 誓い

今いったい何時頃だろう？　ここは何処だろう？　家では両親が心配しているのではないだろうか？

光彦とは何者だろう、そして叔母と呼ばれるのは？？

美代子の自由になるのは、首を動かし、せまい袋の中で両足を動かすことだけである。袋の中で体を動かす、足を動かすと、袋が床にすれる音だけが耳に入ってくる。その音があらためて、美代子に囚われの、いや飼育され

る屈辱を思い知らす。何とかして母の待つわが家に帰りたいという気持ちがさきほどの苦痛と羞恥の中で誓わされた服従を忘れさせた。

しっかりとした目かくしと猿ぐつわは、どんなに首を振って床にこすりつけても緩みさえしなかった。視力をうばわれると時間の経過がわからなくなってしまう。さきほどのあの苦痛と屈辱感の違いは昔であったのか、それともつい今終ったばかりなのかすら、はっきりしない。

「カチン」と錠の外れる音に、袋の中で美代子は体を固くした。袋に入ったまま美代子はいかにベッドの上に運ばれ、袋から出されると、うつむけに押さえつけられた。

「やめて！　許して！」

声にならないことはわかりながら、美代子は首を振って叫び続けた。背中と尻が冷気を感じる。

光彦は慣れた手つきで美代子の右手首に幅四センチの厚い真赤な革ベルトを巻きつけると、両端に接着剤をつけた上で麻糸で縫い始めた。この太く厚い革ベルトには小さい尾錠がとりつけられている。真赤なエナメル塗装が白磁の肌を一層引き立てる。

手首、足首のほかは肘の上と膝の上にも同

様のベルトが取り付けられ、首のまわりにも同じ様なベルトが縫い止められたが、これには尾錠はつけられていない。その代り丸い金色の環が通されてあった。

九つの赤い革ベルトは、それにつけられた小さい尾錠と環で、手枷や足枷、首輪となつて美代子の体を自由自在に固定するだろう。

ベッドの四隅の革紐を解かれると、両手を再び背中で固定され、部屋の中央まで歩かされて、天井から下った鎖のなす環が首輪の環につながれた。後手は尻の上に垂れ下った。

長い間、美代子の視力をうばっていた目かくしが取られ、顔枷が除かれた。

「あー」

美代子ははじめて自分の声をはっきりと聞いた。暗黒に慣らされた眼は明るい光に痛みを感じ、周囲のものを識別することが出来なかった。

「お前を今日から『マミ』と名づける。昔の苗字と名前から一字ずつとったからおぼえやすいだろう。」

ようやく視力が回復した美代子の目に叔母と呼ばれる夫人の姿がうつった。

襟ぐりが深くとられた革ジャンパー、乗馬用の両足を別々に入れる革のスカート、これ

も羊の革、銀色の拍車をつけた編み上げの長靴、これらが皆濃い紺色で統一されている。

美代子よりは少し小柄であるが、両足を開いて美代子をにらんですくと立った姿には威厳が感じられた。面長な整った顔立ち、すらっとした鼻筋、切れ長な眼、これらが冷い感じを与える。

「私をどうしようと云うのですか。早くお家に帰して下さい。マミなんていやです！」

屈辱に体をよじりながら美代子は叫んだ。右手の笞をしごきながら、

「さっき誓ったのをもう忘れたのね。それでは自分の口で誓わせてあげよう。」

冷やかな声が終らぬうちに

「ギャウ」

美代子は全身を貫く電撃に、自分でも信じられない悲鳴をあげて二三歩前に走り出た。

その為天井から吊られた首輪を自分で引っぱって、一瞬息が止った。もとの位置にもどると再び尻に鋭い感触を感じるより早く、

「ギャウー」……………

首輪をこすりながら首を後にねじ曲げると光彦の姿がうつった。光彦は真黒なズボンとセーター、黒手袋という姿である。しかし夫人とちがって革は身につけていない。手にし

た短い笞の先はきらきら光り、手もとから壁のコンセントにコードがつながっている。

「もう一度おどらせて。」

夫人の声と共に笞の先端が美代子の尻に迫った。美代子は光彦の方に向き直って首輪の鎖いっぱい離れた。光彦はゆっくりと美代子の左腰の方へ笞を突き出した。美代子の尻は右へ逃れた。次いで笞は右に、次第に左右に突き出される速さが加わった。

「はあ、はあ、止めて、お願い」

あえぎながら美代子は尻を振り続けた。

「ほ、ほ、ほ、よく動くお尻なこと。」

背後に冷い夫人の声を聞くと、美代子は羞恥に、顔も耳も尻も、全身をほんのりと赤くそめて、体を固くした。その虚をついた笞が大きく波うつ胸をおそった。又しても悲鳴。

「まだ誓えない？ マミ。それとももっとおどる？」

背後の夫人の声に美代子は思わず答えた。

「は、はい、誓います。」

夫人の目くばせで、天井の鎖がゆるみ、光彦が一枚の紙を夫人の足もとに置いた。

「マミ、この誓いを読むのだ。」

美代子はおそるおそる夫人の前に進み出て跪づいた。後手に固定された両手をにぎりし

めながら読み始めた。

「私こと、女王様に飼育されるマミは、従順な一匹の牝として、女王様の御命令に心から服従し、……………」

誓いの文を読みながら、悲しさがこみ上げて来て、幾度か声がかくぐもり、途切れた。

「……………何とぞ、女王様の御寛容を以て一匹の牝、マミを末長く御飼育下さいますよう、伏してお願ひ致します。十二月二十日、女王様の飼育される牝、マミ。」

読み終るといきなり夫人は足をあげて美代子の頭を踏みつけた。美代子は鼻も口も誓いの紙に押しつけられ「うわうわ」ともがいた。後手の指がむすばれたり開かれたり、お尻が左右にゆれて美代子の苦悶を表現した。足を離れた夫人は誓いの紙を取り上げると「お前もこれで捺印までしたのだから良い牝になるのだよ。しかしこの捺印は大分かすれているからもう一度丁寧にしてもらおう。」

長い間かまされていた猿ぐつわのため、美代子の口紅は殆んど剥けていた。光彦がまだ膝まずいている美代子の顔をおさえ、ポケットから口紅を出して丹念に塗り始めた。

「さあもう一度丁寧に捺印するのよ。マミ。」紙を床に置かれると、美代子は膝で歩いて

その前に近づき、顔を寄せた。自から鼻を紙に押しつけ、唇をつき出して紙に口づけをした。涙が二滴、三滴紙をぬらした。

「もう十二時もまわったわね。光彦さん夜食にしましょうか。マミ、ここへおいで。」

美代子はソファに腰を下した夫人の前に長い鎖を引きずりながら歩み寄った。夫人は冷たい口調で、軽く美代子の腰に臂をくれて、「マミ、呼ばれたら直ぐ返事をして膝まずくのよ！」

美代子はあわてて腰を落した。

美代子はまだあれから三時間しか経っていない事を知った。光彦と喫茶店を出たのが九時前だったのを思い出した。そしてこれで喫茶店とか、会社とか、それどころか両親の待つ家庭とすら完全に離れてしまった自分の運命をのろった。ついうっかり光彦の名刺にだまされた愚かさにながつかない。しかしどうしてもここから逃げ出して家へ帰ろうとする気持は捨てられなかった。

光彦が小さな配膳車を押して来た。テーブルの上に皿が並べられ、食事が始められた。ナイフやフォークの音、スープをすすする音、胃の腑にしみわたる匂いなどが、美代子の空腹をかき立てる。ちらちらとテーブルの上を

うかがいながら、何度も唾を飲み込んだ。当然である、昼食からは、退社前に飲んだ一杯のお茶と、喫茶店での冷えたコーヒーだけが美代子の喉を通っただけである。

「マミ、お前もおなかのすいたのかい？」

「はい女王様。」

思わず知らず女王様という言葉が、口をついて出た。

「はじめから女王様と呼べるなんて感心だね。そんなに食べたければ、もう一度誓いを読むのよ。」

投げ下された誓いの紙にはくずれた形のかすれた口あとが濃い形のよい口紅に並んでいた。美代子はまた膝まずいたまま読み始めた。

光彦はふと手を伸ばして配膳車の下から琺瑯引きの皿を美代子の前に置いた。琺瑯引きの皿なんて犬と同じだと感じながらも食物が待たれた。皿の中に夫人と光彦が食べ残したスープ、野菜、肉、パンのかけらなどが入れられた。美代子は残飯なんてと屈辱を感じながらふと顔を寄せようとした。

その時、夫人は乗馬靴で美代子の顎を下から持ち上げた。

「よし、と云うまで口をつけては駄目。絨毯

の上にこばすと、つぐないをさせるよ。」

食物を前にして空腹感はいよいよ増し、口の中は唾がたまってくる。よだれとなって唇から溢れ出た頃やっとお許しが出た。恥も外聞もない気持で皿に顔を突っ込んで、どろどろの食物をすすり込んでようやく空腹感が去ったとき、冷やかな夫人の声が頭上で聞えた。

「手が使えなくても上手に食べるわね。マミは素質がありそうよ。光彦さんのお見立てはさすがに見事だね。ほ、ほ……。」

「明日から、あのデザインの仕立てにかかりますから楽しみですね。午前中には仕上げられるでしょう。ウエストを少し締めて見ましょう。」

美代子は皿をきれいに舐める様に命令された。光彦にナプキンで顔を拭かれて食事は終わった。

「マミ、お前も休ませてあげる。明日からが本格的な飼育だからね。」

光彦は美代子の首輪の鎖を外すと一メートルばかりの短い革紐でベッドにつないだ。美代子は光彦がああ革袋の口をあけると後手に固定されたまま、自分からその中へもぐり込んだ。

外から電灯が消されると、暗黒とわずか三時間の短い時間におそった、大きな屈辱と羞恥が彼女のすすり泣きを呼びすすり泣きは、次第に大きくなっていった。

美代子は泣きながらも、以前からのほのかなあこがれであった革の服の完全さを夫人の紺一色に統一された乗馬姿に認めた。

革に包まれながらも、肩と腰の丸み、乳房のふくらみにこの上もない女らしさを感じ、嫉妬めいた気持ちさえ起った。

いつしか、疲れが彼女を眠りにさそった。

(四) メトロノーム

耐えられない尿意が美代子の体をおそってふと眼をさました美代子は、自分の家に居るのとまちがえて、便所に立とうとした。両手が後手に固くいましめられ、しかも体は革の袋に、そして首輪はベッドの柱に、短い革紐でつながれていることを身をもって知らされた。起き上ることすら出来ない。昨日のことは悪夢ではなかった。私はもう飼育されているマミなんだわ。と昨日の辱かしめと、つづってくる尿意に泣きだした。

足を袋の中でもじもじさせながら、大声をあげたが、ただ壁の反響だけが残った。

「カチン」扉が開き夫人が一人で入ってきた。昨夜とちがって軽装である。ブラジャーを兼ねた革のコルセットとショートパンツに身を包み、革のふくらはぎの下までのブーツそして、肘までの長手套、それらがやはりすべて濃紺の革で統一されている。その年配の女性に似あわず、革のショートパンツの下ですらりとした均勢のとれた脚が見事であった。コルセットに細く締められたウエストに続く形のよい乳房を豊かに揺りながら、窓に近づくときカーテンを引いた。むき出しの丸い肩が朝の光をうけて、白く輝いた。空だけが見えた。

「お願い、おトイレに行かせて、早く。」

「マミ、それがこの私に云う言葉なの？」

冷たい夫人の顔を見上げながら、美代子は昨夜の誓いを思い出した。腿をすり合わせながら繰返した。

「女王様、お願いですからおトイレに行かせて下さい。」

「中でされると面倒だから……」

つぶやきながら、夫人は壁の引き出しをあけて尿瓶をとり出し、窓の反対側の壁にはめられた鏡の前に置いた。

美代子は革袋の口をゆるめられ、首輪の革

紐を解かれると、体のどこにも余分の力を入れない様に、そして大きく息を吐かない様につとめながら、床に置かれた尿瓶に近づいた。両手は背中であぐらをかいているので持つわけにゆかない。

美代子は眼をあげて、はっと驚いた。眼の前の鏡にうつる「マミ」の姿を見たのだ。美代子はこわい物を見る様に鏡の中の自分を見た。後手にまわされている両腕の肘の上の革ベルト、膝の上をしめる同様の環、金環のついた首輪、その真赤な輝きがほんのりと羞恥にもえる白い肌に映えて、奇妙なコントラストをかもし出している。腰を落して、「わあー」と泣き出す美代子の背後に夫人の冷い声

が次の動作を命じた。

「あと始末は自分でするのよ。」

静かに近づいた夫人が、美代子の大きな尻に軽く手をのけて、顎で命じた。

しゃくり上げながら、美代子は尿瓶に近づき、しばらくためらったが、もう一度尻に手を感ずると、片膝をついた。瓶の取手を口で銜えようと云うのだ。命ぜられるままに、部屋の片隅の流しに内容物を、体をよじり、首を曲げて流し込んだ。しぶきが美代子の額に、頬にはね返った。尿瓶を足もとに置くと、小

走りにベッドの縁の襪で顔をぬぐった。

「マミ、お前は命令されない事までしたね。命令がなければ動けない身分だって事を忘れたいわね。」

鋭く空を切る音がして、強い答が美代子の尻に走った。

「あ、あつ。」悲鳴にかぶせて「マミ。」更にもう一度「マミ！」と強く呼ばれて、

「は、はい。」

と答えて、無意識に向き直り、夫人の足もとに膝まずく美代子は、夫人の濃紺のブーツを見つめながら「マミ」という牝になり下ってゆく自分の心に抵抗を感じた。

「マミ、私は体に傷をつけることは好きではないの。だけどお前が命令に背く様な事をすれば決して許さないわ。いも虫の様に手も足も切ってしまうことだって出来るんだよ。」

夫人の口調に冷いものを感じて、美代子は背筋を悪感走り、思わず哀願した。

「は、はい、これからはお言いつけに従いますから、どうぞお許し下さい。」

夫人はふと、別の引き出しから奇妙な器具を取り出した。美代子は上目でそれをうかがった。メトロノームみたいだわ。器具から伸びたコードを壁のコンセントに差込みながら

「マミ、お前のウエトを少し細くするんだから、ひと汗かいてもらうわよ。」

メトロノームの様な器具の振り子の先は銀色に輝いて、左右に振れ始めた。その振り子の先に天井から引き降ろされた鎖が触れたと思うと「パシッ」青白い火花が散る。昨夜の電撃の原因を今見せられて、声も出ない美代子の首輪の金環に鎖のなす環がはめられた。肘の上の腕輪が左右から紐で結ばれる。天井のモーターの音と共に美代子は、首と両肘を引かれて、鏡の前に正対させられてしまった。両脚の間に器具を入れられ、足輪の尾錠がとめられると、そのままでは必ず振り子の先が、ふくらはぎに当たる。

真白な体が、美代子から見ると七つしか見えない真赤なエナメル革のアクセサリーで引き立つている。

「マミ、スイッチを入れるわよ。振り子の先が当たると痛いから、うんとその大きな尻を振るのよ。」

「ギャウウ」

いきなり第一回の電撃が全身を貫いた。両足を同時に曲げる事は高く吊られた首輪にせかれる。いやでも片足ずつに重心を移して振り子を避けなければいけない。美代子は尻を左

右に振り、その反動で豊かな乳房が揺れた。鏡を見なければ振り子の動きはわからない。美代子は目を閉じること出来ないで小さな振子に全身をおどらされて「マミ」を見せつけられた。振り子は時には早く、時には遅く振動した。何度か電撃をうけてその度に絶叫をあげる美代子の体はみるみる汗ばんで来た。汗がさきほどの尻の答あとにしみて痛い。

苦痛を逃れようと、美代子は必死に尻を振りながら考えた。首輪の金環さえ肌に触れていなければ、振り子の先が幾ら当たっても平気なのではないか。呼吸が苦しくならない程度に喉に首輪を喰い込ませると、ふくらはぎには只軽い冷い感触だけが感じられた。首輪に体をもたせかけ、大きく波うつ乳房が荒い呼吸を続けた。眼を閉じて休むことができた。

「おや、さばる気なのね。それじゃ絶対に怠けられない様にしてやろうね。」

ソファに腰を降して、斜め後から美代子の苦行を眺めていた夫人は、急に動きの鈍った美代子の尻を見てスイッチを切ると、両端の被覆をむいたコードをつかんで立上った。しつとりと汗のにじんだ美代子の形のよい乳房を、革手套でつかむと、乳首のまわりに銅線

をまきつけてひねった。美代子は今までと種類のちがったショックを全身にうけてうめいた。

「ふわうう……」

コードの他の端を首筋の後の鎖につなぐと夫人はソファにもどった。鏡の中に夫人がソファに腰を降すのを見て、美代子はあわれて振子に尻を合わせた。電撃をうけなくても乳房が揺れる度に、コードを結ばれた乳首から別のショックが伝わった。やがて全身から玉のように汗がふき出した。

悲鳴をあげながら、美代子は動いた。額の汗は眼に入った、その痛みもこらえて大きく眼をひらいて、鏡を見つめた。乳房がゆれる度に涙と汗が玉になって床に散った。

美代子の背後から、夫人が冷たく微笑みながら声をかけた。

「ママ、そうして汗をかいているうちに、お前のすばらしい服が出来てくるよ。あと三十分位のものかしら、ほほほほ」

もう三十分も、この苦しみを続けなければいけないのか。早く許して。心に念じながらも美代子は一生懸命に尻を振った。鏡の中に始めて見せた夫人の微笑を見ながら。

(五) 普段着

扉が開かれると、光彦が両手に革の服をかかえて入って来た。みんな美代子の革スーツと同じ真赤な色である。夫人がスイッチを切ったのも気付かず美代子は、なおも尻を振り続けた。冷い感触をふくらはぎに受けてやっとなとスイッチが切られた事を知ってぐったりと体の力を抜いた。首輪が喉にくい込む。汗にぬれた肌は鏡の中で輝いている。

「叔母様出来上りましたよ。普段着とZ。こです。それにこれがあると着せ換えが便利ですから。」

と首輪などと同じ幅十センチばかりの厚い革ベルトをぶら下げた。

「そうね。その前にあれをきれいにしてやってくれない。顔と頭は私がするわ。」

「叔母様は何でも出来ますからね。医学士で工学士で、デザインだって一流だし、男にしてみても恥しくないですからね。」

「それは云わないこと。私には飼育が一番むいているのよ。ほほほほ。」

美代子に、いやママに對す時と口調だけでなく、声のまる味も違う会話が交された。

モーターがうなり、美代子を吊した鎖と紐

がゆるめられた。飛び散った汗でぬれた床の上に、あの器具をまだ脚の間にはさみ、乳首と鎖をコードでつながれたまま、美代子はうつ伏せた。声もかすれはじめたが、

「助けて、お母さん。」とつぶやいた。

車のついた浴槽が運び込まれ、美代子は後手のまま湯に入れられた。暖い湯にはげしい運動のあとの快さが倍加された。黒いセーターの袖をまくり上げた光彦が、足の指の間も後手も、臍の凹みまでも丹念に洗うので、その度に笑い声とも悲鳴ともつかぬ声が出た。首と手足の九つのベルトの裏は洗うことは出来なかった。

全身をきれいに清められ、うつ伏せにベッドの上に横たえられた美代子のウエストに、あの厚い幅広いベルトが巻かれ、斜後で二本の尾錠がしめられた。背中と両脇に小さな環がとりつけてある。尻の上にだらりと垂れ下った後手の尾錠をこの環にとりつけると、緊縛感が強くなるだろう。

「ママ、楽にしてやろう。」

後手のはじめて解かれると、直ぐに両腰に固定された。簡単な尾錠だが、いくらもがいてもびくともしない。

仰向けにされると、夫人が代った。何種類

もの良い匂いのする化粧品をふんだんに使って、化粧が始まった。化粧されると、鼻をつままれ、唇をめぐり上げられても不満は感じなかった。アイシャドウもつけ、目ばりされてもおとなしく身をまかせた。次に美代子は縁だけの、真中のない丸椅子の上に坐られ、ぶらぶらする両脚を椅子の脚に固定されて、鏡に正対した。

今までの自分とすっかり感じのちがう顔が鏡にあった。乳首にさされた紅が印象的である。幾分長めに垂らしていた髪が、夫人の手でザクザクと切られ、強めのコールドパーマがかけられた。髪型が変わると、とても自分の顔とは思えなかった。

美容が終って鏡の前に立たされた美代子に後から夫人の声が

「マミ、よく見ておおき、それがマミという牝の姿だよ。もう、小山美代子という人間はこの世に居なくなることがわかって。マミ、こんなにきれいにして頂いたお礼が云えないの？」

美代子はあわてて、向き直り、夫人の前に膝まづいた。

「女王様、マミをこんなにきれいにして頂いて有難うございます。う、う、う。」

美代子は自分のことを『マミ』と自分で云う様になった変化に気がつかなかった。

両脇にあった手を再び後手に組まされ、しかもその尾錠がウエストに固定された為今までより緊縛感をおぼえた。

「マミ、それがお前の普段着だよ。スーツを直してもらったんだから大切にするんだよ。きつとよく似合うわよ。」

後から光彦が革のオーバーを肩にかけた。

美代子の革のスーツの上衣は袖がとられ、裾にスカートがつながれている。スカートの後を広げる為に片袖が、そして背中の後手が入れられる為に残りの片袖が使われた。膝の下から前で裾からフアスナーが引上げられ首の金環につながれると、赤い袋から頭と足だけを出している、何というか、みの虫の様な感じすら与える。

よほど仕立て直しの技術がうまいのか、美代子の形の良い大きな乳房の形がこの革オーバーの胸に、そのままつき出ている。

異様な形ではあるが、今度は落着いて鏡の中の自分が眺められる。革ベルト以外は何にもつけていなかった。さきほどの自分の姿を見た時の羞恥はようやく去った。ただ、昨日まで自由に動いた両腕の出ていた袖つけが楕

円形のとも革でしっかりと縫い閉じられているのにも、『マミ』の運命が思い知らされる。

足と頭を除いて全身が覆われるこの『普段着』には、全裸のまま放置するよりも、時々それを剥ぐ方がはるかにマミに与える羞恥が大きいのを計算に入れた深い夫人のたくらみが、こめられているのに、美代子は気がつかず、夫人に対する感謝さえ感じはじめた。

「マミ、お前は赤い革が好きでしょう。」

「はい、女王様。」

「このスーツを脱いだとき、一体幾らかかったの、マミ。」

「はい、四万八千円ほどです。」

「ほっほっほ、それでボーナスが飛んでしまったわけね、マミ。」

あの早苗との会話まで知られているのか、通常人の常識が頭をもたげ、夫人の足もとで耳を真赤にした。幾ら好きな革の服でも、袖のないのはいやだ。

「少し遅くなったわ。光彦さん、お昼にしない？」

昼食が始められると、美代子はテーブルの横に立たされた。激しい運動と入浴で急に空腹感が強くなって、美代子は皿の料理が次々

に二人の口に運ばれるのを見て、より多く残してもらえないかと祈った。二人は会話を続けながら楽しそうに食事を続けた。美代子は自分の呼び名を耳にしてきき耳を立てた。

「叔母様、マミはお気に入りでしたか。随分長い間探したのですから、まあ点をつければ九十五点位でしょうか。」

「百点に近いんじゃない。好みによるけど、この顔は良いわよ。歯並びだって申し分ないし、やはり光彦さんは、私の好みを知ってるわね」

「しかし難を云えば少し毛深いんじゃないでしょうか。深情ふかなさけですか。はっはっは。」

美代子は毛深いと云われ、耳まで真赤にして、深く腰を折った。

「そうね。少し毛深いわね。そのうち光彦さんと二人で、きれいにしましょうね。」

夫人と光彦の会話は美代子の体の各部の話に移っていった。勿論美代子には耳を覆う手がなかった。背中のふくらみだけがもぞもぞと動き、とうとうしゃがみ込んでしまった。夫人の打って変った厳しい口調が飛ぶ。

「マミ！ 命令は立っていると云うことよ。」

美代子は思わず立ち上って姿勢を正した。すぐに命令に従うもう一人の自分「マミ」を

軽蔑しながらも。

昨夜と同様に、美代子にも食事が与えられ化粧を直されると、今度はベッドにも壁にもつながれないで、板張りの部屋に追いかえされた。

「マミ、少し休ませてあげる。私たちも午後はお仕事があるから、また夜になったら調教してあげる。」

云い残して夫人と光彦はドアを閉めた。美代子は部屋の真中で跪いてその声を聞き、扉の閉まる音を聞いてはっとした。

(六) 外界

一人残された美代子は、早速カーテンが開かれたままになっている窓へ走り寄った。

「普段着」の裾は、スカートであったときより縫い締められ、膝の下で十センチ位しか開かない。後の切り込みも勿論縫いつぶされている。腿をすり合わせる様にしか歩けない。

横一メートル半、縦一メートルばかりの窓は壁にはめ込まれた一枚ガラスで、四隅には丸みがとられている。

窓の外は、今日も少しスモッグがかかっているが、眼下に大阪湾が広がっている。あれはポートタワー、これは摩耶埠頭らし

い、出光のタンク群も見える。神戸製鋼の平爐が赤い炎を吹き上げている。美代子は神戸の東部には詳しくないが、どうやらここは六甲あたりではないかと見当がついた。窓の下は十米以上もある石垣らしく、前の家の屋根だけが遥か下に目に入る。長いゆっくりした貨物列車を、橙と緑の快速電車が追い抜いてゆく。

美代子は窓に顔を押しつける様にして、外を眺めた。奇妙な事にあれほど活動している街、港からは何も聞えない。部屋の中は全くの静寂である。

あのあたりに会社がある。そして、その向う、視野に入らない所に家がある。又しても美代子の心に、何とかして家に帰りたいという気持ちが湧いてくる。

あらためて部屋の中を見まわす。膝から下を小さく動かして、部屋を全部見ておこうと歩きはじめた。足首の赤い足環が真赤な「普段着」に包まれた美代子を可愛く見せる。

入口の扉、これは何の手がかりもなく、小さな鍵穴だけがついた見るからに厚そうな一枚板である。念のためと思って、肩で押して見ても微動だにしない。壁にはめ込まれた沢山の抽き出しを全部あけて、脱走に都合のよ

いものを見つつけようと決心したのだが、一つの抽き出しをあける事さえも、今の美代子には難しいことである。手は後に、背中の真中に固定され、上手に仕立てられた革オーバー——普段着——が後の物をつかむ事も出来なくしている。膝の自由は十センチである。口で抽き出しの取っ手を銜わえても、しゃがみ込むでは力が入らない。

それでも人間の努力は大きなもので、やっとな洋酒瓶が置かれた棚の下の抽き出しが抜けた。その中には、美代子が最初に装着された顔枷やら、色々の形をした猿ぐつわなどが並べられている。美代子にはどの様に使うのか想像のつかぬ形をしているので、あまり驚かなかった。それらが美代子をこの上なく苦しめる道具なのに。

一度抜けた抽出しは、美代子にはさし込まない。しゃがんだり、立って足で押したりしても、元に復らない。

つるべ落しと云われる秋の日より、もっと早く急激に、光があせてゆく。部屋の中も急に暗くなって来た。美代子はまた窓の側に戻った。西の方、山の陵線だけがくっきりと浮き立ち、街のネオン、家庭の電灯、道を急ぐ車のライト、沖に停泊する船の灯などが眼下

に広がる。

無断で家を明けた事のなかった美代子が帰らなかったのだから、きっと母は心配しているだろう。どうしても母の待つわが家へ帰るんだ、と決意を新にした。

「お母さん、お母さん、助けて。」

小声で云うとまた涙がこみ上げる。

壁の上の幾つもの蛍光灯が「ピン、ピピン。」と点くと、扉が開かれ、和服を着た夫人が、昨夜会った時のグレーの背広姿の光彦をつれて入って来た。帰宅したばかりであるう。

抜き出された抽出しを見ると、鋭く、

「マミ、命令されない事をしたね。お仕置だよ。」

美代子は窓を背にして立っていたが、転びそうになりながら、夫人の前へ小走りで近づき、跪いた。さきほどまでの決意もどこかへ行ってしまったこの情けない「マミ」と心の中で闘いながら。

髪の毛をつかまれて、また窓の側まで引きずられた美代子の顔を、ガラスに押しつけながら、冷やかに夫人が話しはじめた。

「マミ、この窓は、よく見てごらん。自分の顔が四重にうつるだろう。『こだま』の二重

窓と同じ構造の防音ガラスだよ。しかも倍の厚さの強化ガラスが使っているから、ほら、こんなにしてもこわれないよ。」

いきなり、髪をつかまれたまま、額を強く打ちつけられた。眼に星が散り、鼻の奥がきな臭くなった。

「うわっ！ 女王様、もうしませんから、どうぞお許し下さい。」

夫人は尚も哀願する美代子の髪を、放さず今度は反対側の鏡の方へ引っばった。

「マミ、この鏡も強化ガラスだよ。そして向うからは素透しだから、お前一人で居る時も見られていることを忘れないでね。」

もう一度、冷い鏡に打つけられて、床にぱたりと倒れた。倒れた美代子を見もせず「さあ光彦さん、準備して頂戴ね。今夜は時間にはたっぷりあるわね。」

打って変ったやさしい調子で光彦をうながして、二人は出て行った。お仕置は終わったのではなかった。

(七) 検診

まるで儀式にでも出る様なウエストのしまったスーツを着た夫人が、白衣を持って現れた。このスーツも濃紺の革である。五センチ

ほどのやや低いハイヒールも濃紺である。タ
イトスカートは、後が割ってあるので足はこ
びはごく自然である。白衣も真白い革で、そ
のポケットに無造作に聴診器がさし込まれて
いる。

今日はいきなり食事である。美代子にも、
残り物でなく、殆んど夫人と光彦のものと同
じ物が与えられた。しかし例の琺瑯の皿であ
り、床に跪いて、口だけでの食事である。

こんなに優しく取扱われると、夫人に対す
る憎しみとおそれが少くなる。しかしそれが
はかない誤解であることが、間もなく思い知
らされる。

きれいに皿を舐め終ると、

「マミ、お前はトイレに行きたくない。今度
は始まると仲々終らないよ。」

「はい、あの……」

「マミ、あの、ではわからないよ。どっちな
の。」

「は、はい、女王様、おトイレに行かせて下
さい。」

光彦が部屋の片隅の流しのすぐ近くの引き
出しをあけた。抽出しと見たのは巧妙に作
られた洋式便器である。

美代子はやっと『普段着』のフラスナーを

引き降されて、両足の自由を回復した。裾の
後を、丁度尻はし折りする様に背中中央の
後手に持たされると、部屋の隅へ行った。

健康な美代子は毎朝便通がある。しかし昨
日から今日にかけての激しい境遇の変化が、
便意を忘れさせていた。いま夕食も充分にと
り、夫人からそう誘われると、急に便意が増
して来た。

「マミ、洋式便器を知らないの。こっちを向
いて、そう、腿を縁にかけて腰かけるのよ。」

夫人を正面に見ながら、美代子は顔を赤ら
めた。人の見ている前でとても出せない。

「マミ、早くするのよ。それとも浣腸がして
ほしいの。」

眼をつぶって、美代子は頑張った。

「マミ、終わったら右足のペダルを踏んで。」

温水が前後から吹き出して汚れを落した。

温水が次第に冷水にかわり、体をひきしめ
る。美代子はペダルを離した。

食事のあとで配膳車を押して出た光彦が、

代りに押して来たのは、注射器や、ピンセツ
トや箆子類カンゼを乗せた台車は、それらの医療器
具の入ったバットをとり去ると、もたれのな
い椅子に使える。

夫人は濃紺のスーツの上に、革の白衣をは

おった。聴診器を耳にして、美代子の胸が終
ると背中である。肩にかかっていた普段着は
床に滑り落ちた。後手を避けながら、聴診器
は要所、要所を聞いてまわった。

鼻孔が箆子で開かれる。まぶたがめくられ
る。耳たぶを引っばられて検診される。その
結果が、光彦によって記録されてゆく。

夫人の目くばせで光彦は側を離れた。美代
子が先程苦勞して抜き出した抽出しから、革
製品をつかみ出した。

「マミ、口をあけて、上を向いて。」

箆子で奥歯まで入念にしらべられた。

「虫歯はなし、まだ親知らずは生えていない
わ。扁桃腺へんとうせんもよし、と。」

まだあけたままの口にいきなり、大きな革
の玉が押し込まれた。

「あわわわ。」

舌で押し出そうとしたが、昨夜の様に顎を
下からと、口を前からと革ベルトで押えられ
ると、却って喉の方へ押し込まれ、舌の自由
も失った。こうして上半身の検診は終わった。

足の固定が解かれると、横抱きにしてベッ
ドへ運ばれる。仰向けに置かれると、足もと
の方から引き出された紐に腰ウエストのベルトの両
脇の環がつながれる。これで体は上の方へは

ずり上らない。肘の尾錠を通った紐がベッドの下をわたされる。

(八) No. 13

体を固定した紐を解かれ、ぐったりとベッドに伸びた美代子は、厳しい箝口具に声を殺されて、すすり泣いた。

見上げる美代子の眼を見つめて、夫人は云った。

「光彦さん、今日はこのままにしておいて。明日は舌を噛めない様にするから。」

心の底を見抜く様な夫人のおそろしさに、美代子は目を伏せた。あきらめの気持も起りはじめる。

「あれを着せて見てね。」

云い残すと、夫人は白衣の裾をひるがえして出て行く。

美代子はハンガーから奇妙な形の革の服が外されるのを見た。

両腕をとって立たされた美代子は、三角形を二つ頂点で連がれた赤い革を腰にあてられた。

両脇がホックで止められると、形のよいビキニパンティに見える。股のつけ根に喰い込む小さいパンティが外されてから、始めて腰

が覆われたので、一種の安心感がこみ上げる。ウエストをしぼるベルトから右手だけが解かれ、短い革上衣のようなものの袖に入れられる。この上衣の袖は先が開いていない。靴底かと思われるほど厚い手袋が袖口に続いている。指を伸ばさないと先まで入れられない。あしかの鱗ひれの様になった手袋の先に長短二本の革紐が縫いつけられている。短い方の紐でまた右手が背中に固定される。片手づつを別々に固定することの出来るウエストベルトは確かに、着せ換えに便利である。

今度は左手が前でつながった上衣の袖に入られる。あきらめの気持が強くなった美代子は、今度は素直に手をのばした。着せられると上衣は乳房の上下しか覆わない。丸くくり抜かれた穴から大きな乳房が顔を出す。

両脇の下と肩から後にまわった四本の革ベルトは、左右の肩胛骨の間で尾錠がかけられた。締められると、周囲を押しつけられた乳房が一層盛り上った。

始めて自由にされた左手で胸を押えたが、掌は弾力だけしか感じないで、厚い革にこすられて、乳首が痛んだ。

夫人が服装をかえて現れた。革のベレーを斜めにかぶり、七分コートの

ぼたんは一つしかかけられていない。コートの下から裾の広いスカートがのぞき、ローヒールをはいた足が延びている。その服装はみな濃紺の革である。濃紺の革が夫人の象徴であろう。

小脇にスケッチブックをかかえ、右手をコートのポケットに突っ込んで、美代子の前に立った夫人は頭の先から足もとまで見上げ、見下して、

「光彦さん、No. 13のデザインも一寸いかなすわね。左手が邪魔だから後にやっというて。」胸を覆った左手を、また背中にねじ上げられ、両袖についた長い紐を体の前にまわして引きしぼられ、みぞおちの前で蝶むすびにされた。

両手で背中を抱きかかえる形になり、両脇に袖口の短い紐がリボンの様に垂れる。胸を張った為に、乳房が一段と突き出す。

「これはNo. 13にはついて居ませんから。」ウエストの幅広いベルトが外される。「手先は丸くしておいた方がよくない？ ほらこんな風に。」

スケッチブックに鉛筆が走る。

「女ボクサーみたいですね。それならこんなパンティよりも裾の開いたトランクスの方が

「似合いますよ」

「でもトランクスみたいだと緊縛感が少いわよ。もう少し股ぐりを切りつめてはどう？」

「丁度Z.O.I.sのパンティみたいですね。」

「この次は、もっと幅を狭くして作って見ましょうね。もっと別の固定の仕方をやって見てよ。」

背中を抱きかかえていた両腕が解かれ、手先の短い方の紐が肩胛骨の間の尾錠に結ばれる。後で長い方の紐を軽く引きながら

「叔母様、こうすると手綱たづなみたいですよ。どこへでも追いたてられます。」

その紐が更に肘にまわって腕を背中にしほり上げる。これ以上張れない胸が揺れる。

「む、むむむ。」

肘を後にしほり上げた長い紐だけが解かれ、ほっと気を抜いた時、後に引き倒され、美代子は尻もちをついて、両足があられもなく踊る。その足をあぐらに組ませ、肩からまわった長い紐が、左右の足輪の尾錠に通されて、足を別々に肩へ引き上げる。足の裏が頬に近づき、紐は後頭部で結ばれる。両足の裏を頬をはさんで丸くなった体が後へ転がる。

太腿の裏の筋肉が張り、呼吸も止りそうになり、体中からあぶら汗がにじみ出る。

「海老しぼりは、両足を別々にした方が凄いですね。あの足輪や腕輪は便利ですね。」

美代子のうめきは次第に低くなり、体中の赤みが引いてゆく。後頭部の紐が締められると、膝を開いたまま足が力なく床に落ちる。頭がぐりと後に落ちる。胸と腹が大きく波うっている。もうろうとなりかかった意識が戻って来る。

「光彦さん、このZ.O.I.sが一番実用的だね。」

美代子は裏返しにされた。背中の紐を解かれても、両手は体の側に伸ばしたまま、動かなかった。むき出しの乳房を床に押しつぶし、左の頬を床につけて、もう終わったのか、早く終ってほしいと願った。

そのままの姿勢で膝が曲げられ、右足首と左手、左足首と右手がつながれる。両手は伸びているので、そんなに苦しくはない。

「もう嫌！ 許して！、お母さん。」

叫びにはならない。天井から降された鎖に紐が結びつけられる。モーターの唸りと共に膝が、肩が、そして腿も胸も床を離れた。

腹の皮がつっ張る。乳首と腹が床に着いている。がっくりと前に落した頭を振りながら、美代子はうめき続けた。

Z.O.I.sの拘束衣は汗を吸って、少し純んだ。美代子の口の中の玉は、革の独特の味と臭いを鼻孔の奥まで充した。

拘束衣を脱がされ、九つの腕輪や足輪だけになり、しかもそれを全く自由にされても、床にうつ伏したまま、猿ぐつわに手をかけ様ともしないで、ぐったりとなる美代子であった。

又もや後手にされ、腕輪を連がれて、夫人の前に跪かされた。

「マミ、やっとお前が、マミという牝が生まれてから一日経ったよ。どう？ 牝の生活って楽しいでしょう。尤もたった一日では楽しさはわからないだろうけど。まあ、……その楽しみが解る様になったら、別の御主人の所に連れて行ってあげるから、安心おし。マミ、良い牝になる様に努力するね。」

小さなうなりと共にうなずく美代子の背に普段着がかけられた。

箆口具を外されないうままに、体を洗われ、あの袋の中で眼を閉じた。

(九) 舌袋

翌朝、美代子は腿、腕、腹、そして体中の筋肉に痛みを感じた。急に激しい運動をした

時の経験と同じである。

光彦だけが入ってくると、排便の用意だけをしてから、美代子を革袋から出した。革袋を出るとき、あらためて、羞恥をおぼえたが光彦が美代子の方を見ようとししないで急いで部屋を出て行くのを見て、ほっとした。こんなに着いて用が足せるのが、どれほど良い事か、僅か一日の経験で始めてわかった。

あの鏡の向うから夫人が監視しているかも知れない、とベッドの上に鏡を背にして横ずわりに坐った。

昨日の羞恥、屈辱、苦痛を思い出すと半ばあきらめて、『牝』の運命を受けようとする自分をはげました。この箝口具が取られたとき、舌を嚙んで死んでやろう。若し取られなければ、そのまま飢え、渴えて死んでやろう。昨日の決心を新たにした。逃れることは不可能だ、窓の外に広がる一般社会とは完全に切り離なされている。

夫人があのおぞましい革の白衣をまとうて入って来た。その姿を見て背筋に戦慄が走った。後から光彦が、色々の器具のついた、病院にある患者輸送車を押して来た。

何をされるのかはわからないが、その恐怖

に思わずベッドから降りて部屋中を逃げまわった。しかし直ぐに捕えられ、車の上に押し上げられると、体につけられた九つの環がしっかりと台の上につながれ、更に胸も腹も腰もしっかりと別の紐で固定された。美代子は天井から下る何本もの鎖や紐を見た。

夫人は美代子の顎に両手をかけて云った。

「はい、光彦さん、それを締めて。」

長い間、美代子の声を封じていた箝口具が締められた。その途端に美代子の顎が外された。口の中の王を取り出されると何か叫んだつもりであったが

「あう、あうあう。」

言葉にならなかった。

顔が動かないように、顎に革ベルトをまわされながら、夫人の声を聞いた。

「マミ、お前は逃げたいと思ったね。逃げられないと知ると、今度は死のうと思ったね。」

そう、手が自由にならないんだから、舌を嚙もうってね。舌を嚙ませてたまるものですか。自殺というのは人間だけに許される事なの。牝は自殺なんてする資格がないのだよ。

これから舌も嚙めない様にしてやる。マミ、お前は知らないだろうが、飢え死にも出来ないよ。注射や栄養浣腸という手があるんだか

らね。」

車の上の長い腕が、びゅーんとうなり出した。顎がはづれているので、口を大きく開けたまま歯科医の使うモータードリルで歯に加工される不快感をこらえた。唾を飲み込めないで、よだれが唇の両端から頬にあふれ出る。

奥歯の神経を抜かれて、飛上る。いや実際には、体がびんと伸びただけである。手を握りしめてこらえる。

「ああ、ああ……」

両方の奥歯に穴をあけられ、その穴にしなやかな金の網がとりつけられ、舌の自由が奪われた。口の中に酸っぱい感じが広がる。

顎がはめられて、美代子の手術は終わった。

舌が下顎に押えつけられているので、何を云っても

「あう、ああ、うう、」

としか聞えない。

「マミ、お前が本気で、心から牝になり切るまで、その舌おさえは取ってやらないよ。しばらくは食物の味が悪いだろうが、栄養だけはちゃんと計算してあるから大丈夫よ。ただあとうしか発音出来ないのは、不便な時があるかも知れないね。まあ私はお前の眼を見れ

ば、お前の考えている事はわかるからね。」

口の中の異物感は二三日しなければ去らない。美代子はどうしてもなじめない異物感に眉をひそめた。それと共に発声には細い動きをする舌が絶対必要なことがわかった。

「叔母様、今度は美容にしますか？」

「そうね。それもお昼までに、すませましよう。」

美代子はやっと台の上から解き放たれた。尾錠で固定はされなかったが、光彦に両肘を持たれてベッドの方に押された。昨日のような美容ならと安心した。たとえどの様に辛目に合わされても、女としてより美しくなりたいと思ふのは当然であり、また悲しい性であった。

袖なしの革オーバー、普段着を着せられると、いとおしむ様に、その肩に頬をすりつけた。それだけが以前の美代子の物であった。

(十) 汗と脂

美代子の日課は午前中が、美容体操と入浴、午後は夫人が外出するらしく、休息が与えられる。夜になると色々のデザインの拘束具の装着が行なわれる。最後に又入浴、これで終る。

午前の美容体操は特別のことがなければ、軽装の夫人一人によって行なわれる。しかし夫人は色々の仕掛の器具によって、美代子が汗にまみれ、脂を^{あぶら}しぼられるのを見ているだけである。それらの器具の殆んどは夫人の考案になるもので、電気が多く使われている。

例えばこんな日もあった。

膝の上の、膝輪と肘輪が結ばれ、腕輪を首筋で止められると、丸くなって尻をつき出さねばならない。首輪を天井の中央の鎖につながれると、鎖が絶えずぴんと張る様にして円を描いて歩く事を強要される。両乳首はコードが結びつけられ、鎖の回転速度が規定以下になったり、鎖の張力が弱まったりすると、はげしい電撃が来る。

このときは、あひるの様につき出した尻を振りながら、夫人の腰を降したソファの前に来るとその一周の早さに応じた電撃が来る。

途中で転んだりすると大変である。転んで体を起すのには時間がかかる。そこで次の回は必ず電撃を受けて、運が悪いと又倒れる。疲れて来ても立止ると夫人の手の電気笞がおそ^う。正味二十分位この『あひる歩き』が続くと床に丸く流れ散った汗の跡が残る。

『自転車』とか『ボート』とか普通に考えつ

く様なものもある。しかし『魚釣り』もみじめであった。勿論後手にされたまま、口に紐のついた革の玉、あの箝口具を嚙まされ顎を固定される。その紐はモーターで巻かれる魚釣りのリールに巻かれ、壁の鉄環をくぐる。足を踏んばって力強く引き戻せば、紐は伸びてくれる。しかし力がリールに負けると口が鉄環に引き寄せられ、額の真中に電極があたる。一瞬の電撃がコードの結ばれた乳首まで走り、リールは再び逆転する。美代子が一生懸命に尻を振りながらリールを引き戻している時、夫人の手で乳首のコードが引かれるとバランスが崩れリールの力が美代子の動揺した体を引きずる。

美代子の体に合わせて電撃の電圧と電流が二三回のテストで決められたので、何度受けても、この電撃には慣れる事が出来ない。

美容体操の後の入浴、これは後手を解かれた事はない。だから光彦の手で体のすみずみまで洗われるのに次第に慣れて来た。

しかし、その様子を見ると夫人の眼はけわしさを見せた。美代子はそれに気づかない。朝食抜きで、はげしい運動と快い入浴をした後の昼食は、あの舌を固定する金の網にさまたげられながらも美味である。何日も経つ

と舌の袋の金網の異物感は去った。

午後の休息の時、はじめは夫人や光彦を憎み、窓の外の世界に帰りたいと涙を浮べたが次第に、牝としての『マミ』の運命に従おうというあきらめが強くなり、死も、脱走も考へなくなってしまう。ただ巧妙な夫人の計画で膝から下と、首から上だけの出た袖なしの革オーバー、普段着に包まれている時間が長く、夜は全身の入る革袋に入れられる為、体の九つの関節にはめられた革の環で飾った時に見せる羞恥は却って強められている。

(十一) モデル

美代子にとって恐ろしいのは夜である。時々革の白衣をまとった夫人の健康診断が行われるが、それ以外は毎晩、ザダイナーとしての夫人と光彦によって次々と新しい形の拘束衣のモデルとなって、可能な緊縛の形が研究される。

型によっては一種類の緊縛しか出来ないものもある。しかしそれはそれなりに使用され研究される。何種類もの拘束衣を同時に着けられることもあった。

あの NO.13 などは応用の広い方であるが、きちんとした仕立てが必要である。しか

し変ったものとしては次の様なものがある。

NO.6 全身を覆う革のタイツである。伸び縮みの少い革の特性から肌のどの部分にもびったりと合う物を作る事は出来ないの、このタイツは手首から腕の外側を通して肩から首のつけ根まで、編紐でしめられる。同様の編紐が首筋から背中を通して下へ、更に腰の下で左右に別れ、脚の裏側を通して足首まで続いている。

美代子のためには、これまた真赤な革で作られた。拘束衣としては珍しく乳房も覆われている。しかし小さな穴から乳首だけが突き出ているのが赤の濃淡でわかった。

この革タイツを着けられたときは、美代子は苦しんだ。全身を包むこのタイツをつけて手首だけを後に止められ、『魚釣り』が始められた。全身からしぼり出された汗に、革が少し鈍んだが、編紐をもう一度締め直され、鏡の前で両手を左右上方に両足は大きく左右に紐で引かれ、大の字に固定された美代子は四方から赤外線ストープで熱せられた。顎を下から固定され、口の中の革の玉につながる紐を唇から下に垂らす美代子の体は、真赤な革に包まれた全身と、手足と顔の白さ、黒髪とにこの上もないコントラストがあり、自分

でも見とれる程の美しさであった。ピンクの乳首も周囲の赤い革に映えて、白く見えた。自分の美しさも次第に乾いてゆく革のしめつける圧力で意識の外に追いやられる。

「むむむむ」

革の玉をくわえながら、顔に、^{てのひら}掌に、足の裏に、脂汗をにじませてうめき続けた。

美代子の体にまとう、あの九つの革ベルトの環も、拘束衣 NO.8 である。美代子にはとても『衣』とは考えられない。着せられている者にとっては、全裸に等しい。それどころか、赤く輝く輪にそれ以上のみじめさが感じられる。

この様な種類に属するものは NO.14 である。これは、美代子が着けられたウエストを締める幅の広い、太い革ベルトを中心に構成されている。太い革ベルトの前に七センチ位の間隔がおかれて二本の幅一インチ(二・五センチ)の革ベルトが上に伸びる。その先に菱形の乳枷が互に連絡される。肩をまわった革ベルトと両脇を横にまわったベルトが肩甲骨の間で、腰ベルトから上ってきたベルトに尾錠で止められる。

首の紐を引かれながらも、腿を動かすまいと、しゃがみ込む美代子の背に鎖がつけられ

天井に引き上げられた。立ち上り、つま先立ちになり、遂に足先が床から離れた。

乳房のまわり、胸に、縦ベルトに、五十八キロの全体重がかかり、呼吸が苦しくなる。

ばたばたと前後に振られていた足がだらりと垂れ、呼吸困難の苦しさと共に美代子は失神した。

毎晩夫人について来る光彦が今日は来ていない。デザイナーとしての夫人がソファに腰を降して美代子と呼んだ。袖なしの革オーバ―、普段着を着たまま、小走りに近づき、夫人の前に跪いて、今夜はどの様に責められのかと、その苦痛と羞恥に対するおそれと、あの自分でもわからない期待を以て見上げる美代子の眼を見ながら、夫人は始めてやさしく話しかけた。

「マミ、お前にもやっとマゾの気持が目を覚ましたのね。責められる喜びが解りはじめたようね。マミ、お前はおとなしくなったのだから、その舌袋を外してあげようか。」

喜びに、眼を輝かせて美代子は「あああ。」と大きくうなづいた。

夫人の指にぶら下げられた金の網を見ながら、あんなに小さい、きゃしゃな網が着けられただけで人間として、無くては済まされな

い言葉が完全に封じられたのに驚き、夫人に對するおそれの混った尊敬を感じた。

「女王様、有難うございます。どうか、マミを、今まで以上に可愛がって下さい。」

舌の自由が回復して始めて出た自分の言葉にすっかり、牝になり切った美代子は当然のことと思つた。

光彦が居ないので、拘束衣の装着にも時間がかかり、尾錠の締め方も鈍るかった。

厚い一枚革の幅の広いベルトを胸に巻かれ、丸くくり抜かれた穴から乳房が飛出す。ここへ来る前よりも大きくなった様だ。

(十二) 別れ

夫人の服装は、一番始めに美代子を誓わせ、た時の乗馬姿の女王の盛装である。はっと驚きながら、前に脆く美代子に冷くしかもやさしく夫人の宣告が下された。

「マミ、お前はもう完全に牝になり切ってしまったね。より強い責めを希望する牝を作り上げるといふ私の目的は充たされたの。それで私はマミを新しい御主人にお譲りして、もう一匹の牝を作り出す仕事にかかるわ。今夜はこれでお別れというわけよ。」

美代子は夫人の、いや女王様の拍車のつい

た編上長靴に顔をすりつけながら願つた。

「女王様、どうかマミを、ここに置いて下さい。マミは一層良い牝になりますから。」

涙が靴の甲に落ちた。

「マミ、もうお約束してあるの。新しい御主人もきっと可愛がって下さるわ。」

ドアが開かれた。光彦が大きな革の袋を抱いて入って来た。ソファの上に横たえると、

「叔母様、うまくゆきました。この牝はマミとは感じがちがいますよ。」

「光彦さん、御苦労様。今度の牝はマミより少し小柄らしいわね。」

頭にかぶせられた二つの小孔のあいた小さい方の革袋がとられた。美代子よりも少し若いか、やや丸顔の美女が緑色の革のフードをかぶって眼を閉じている。

「マミ、これは先方の御希望で着けたまま、お渡しするよ。」

首輪、腕輪をぼんと叩かれる。

「お願いです。お願い、マミを人に渡さないで。……」

涙を流しながら哀願する美代子の左腕に、注射器をつき立てて、夫人は云った。

「マミ、おやすみ。眼が覚めたら新しい御主人のお家よ。」

(終)

妖異女斗美八景

佐藤健児

アマゾン女軍始末記

配役

アンチオペ……………岸 恵子
 ペシテクレイア……………山本富士子
 ペリベア……………久我 美子
 デスデモナ……………有馬 稲子
 モルパデア……………若尾 文子

(一)

その女王アンチオペを連れ去られ、しかも彼女がアテネの勇士テセウスと恋におちたと聞いて、烈火の如く怒ったアマゾン女兵は、副女王のペシテクレイアとペリベアに率いられて、長距離の行軍もものかわと、揉みにもんでアテネに攻め来り、到る所でギリシア軍を破った。もっともこの時、ギリシアはトロイと戦争中であって、その主力は国内にいな

かったからでもあるが、そうでなくともアマゾン女兵の勇猛さは定評があったのである。

元老院の長老達が、戦慄したのも無理はない。

「アキレス、君の好色がアテネをほろぼそうとしているのだ。早くアンチオペを捕えてアマゾンにひきわたすなり、それで聞かぬ時にはアンチオペを首にして謝罪するなり、何とかしてアマゾンに兵を引いてもらわぬと、腹背に敵を受けてアテネはほろびてしまう。」

長老達にとり囲まれている一際背の高い男性は、これぞ人も知る稀代の英雄アキレスであるが、がっしり腕をくんだ彼の頬にも、何時にも似ず、苦悶の表情があらわれている。

「それはわたしも責任を感じている。わたし

に何時もの部下があれば、アマゾン女兵のとき、一呼して追い返してしまうが、いかにせん彼等はトロイにある。とすればアンチオペを返して一旦和を結ぶしかほかはないが、今や彼女は、わたしの親友テセウスの妻なのだ。」

「だから、君からこの事情をテセウスに分らせてほしいと頼んでいる。」

「それが出来るぐらいなら、このように苦しまん。」

「それでは、君はアテネがほろびてもよいというのか？」

「いや、そうではない。しかし個人の私からだけではなく、国家の代表である君達からも言葉を添えてもらいたいのだ。」

「なに、テセウスがここにくるのか？ それは危険だ。あからさまに我々からそのような要求をすれば、テセウスは怒ってアテネに反抗するかもしれん。」

「いや、テセウスにアンチオペを与えたのはこの私だし、テセウスも英傑だ。この危機に際して私情に走ることはない。彼の意見も聞いてもらいたいのだ。」

一座に重苦しい沈黙が流れた。

アンチオペは絶世の美人をもって四隣に聞えたアマゾンの女王。好色家のアキレスはクレテ島に遠征した帰途に、計略を用いておのれの軍艦にアンチオペを乗せて連れ去ったのである。アキレスはもとより限りなくアンチオペの美に心酔していたが、アンチオペはむしろアキレスの親戚であり、親友である若いテセウスを恋したので、アキレスもいさぎよくテセウスのこの遠征の勲功に報いるためにアンチオペを与えたのである。

テセウスはこの時、アンチオペとのしばしの新生活を許されて、トロイ戦争にも参加せず、アテネの郊外で安息していたのであるがアキレスからアマゾン侵入の報を得て、今ここに馳せもどったのである。

彼は長老達から事情を聞くと、少考してか

らキッパリ言った。

「こうなつては、アンチオペを犠牲にするよりはかはありますまい。わたしもつらいが、アテネ人民全体の命には変えられない。生きたまま送り還すか、首にして渡すか、それはアマゾンの意向にまかすはかはなく、どちらにするかを元老院の方々が聞いてきていただきたい。」

その言葉に顔色を変えたのはアキレスで、
「テセウス、何ということを使う、君までがあのアンチオペを……」

憤然とつめよるのを、目顔で制して、テセウスは長老達に一礼すると、アキレスの手をとって元老院を去っていた。

(二)

以下はアキレスの部屋にもどつてからの、テセウスとアキレスとの対話である。

「テセウス、君にもあのアマゾンを撃ち退ける自信はないのか？ 私はたとえギリシアがほろびても、アンチオペだけは生かしたい。」
「その気持はわたしも同じだ。アキレス、元老院でのわたしの言葉は敵、味方を油断させる策にすぎない。わたしはアンチオペを守る。そしてアマゾンを撃退する。」

「オ！ テセウス、それでこそ君はギリシア

の華だ。しかし、どうやってアマゾンに勝つ？ この留守隊の少人数で。」

「うむ、君に面白いものを見せてやる。たしかに、今アテネの兵は少なく、アマゾンに勝てる強兵ではない。そこでわたしは女軍を用いる。」

「な、なにっ？ テセウス、君は今何といった？」

「男兵のはかに、ギリシアの女兵を使うといったのだ。」

「そ、そんな無茶なことが……、アマゾンは生れながらの女戦士だが、ギリシアの淑女たちが戦闘などできるものか。」

「ギリシアでも、スパルタの女子は武器をとって立派に戦った例がある。アテネの婦人にも出来ないことはない。いや、わたしはすでに女兵をつくった。今すぐにでもアマゾンと戦わせることができる。」

「……、君が女兵を……？」

「アッハハ……、さすがの君もおどろいたな。しかしこのはかりごとの立案者は誰だと思ふ？ 驚くなよ、アンチオペだ。」

「えっ？ アンチオペが……？」

「そうだ。アンチオペは賢い。彼女はわたしのいるギリシアを愛してくれたばかりでなく

アマゾン族をも、その不自然な生き方をやめて、男女共存の普通の国としたい悲願を持つに至ったのだ。」

「フム……、それで？」

「そのためにはまずアマゾン女兵を撃破し、屈服させねばならない。それには男子軍より女子軍を向ける方が成功するというのだ。アマゾン女兵があんなに勇敢なのは、種族保存の本能から異性を見て性の興奮を感じるからだという。彼女等はことさらに強い男を獲ようと猛進する。反対にギリシアの男兵は相手を女と意識して戦意が鈍る。そこにアマゾン女兵の神秘的な強さの秘密がある。故にギリシアが逆に女兵をもって戦えば、アマゾン女兵は去勢されて弱体化し、必ず敗北するはずだというのだ。」

「うーん、恐るべき名案だ。しかしそれだけであのアマゾン女兵を破れるかな。生れた時から弓を引きよいように右の乳房をきり落とし、その後も戦術訓練ばかりしている彼女等にギリシアの女達が対等に戦えるか？」

「それも自信はある。そのためにアンチオペは二月も前から、ギリシアの若い勇敢な女達を集めてアマゾン女兵を倒す訓練をしている。そしてそのギリシア女軍の隊長こそ君の

妹デスデモナだ。」

「げえっ、デスデモナまでが……」

「アッハッハハ、驚くことはない。君の妹だけあって最も有能な女隊長さ。それに今一つアンチオペにしてはじめて握れるアマゾンの弱点がある。」

「何だね？ それは。」

「アマゾンの女王の下には常に二人の副王がいる。現在は一人はペシテクレイアで、今一人はペリベアだ。そして二人のアンチオペに對する感情が違ふ。ペリベアはアンチオペの礼讃者だが、ペシテクレイアはアンチオペを敵視している。わたしが元老院にアマゾンと一応交渉をさせたのはそのためだ。アンチオペの引き渡しを伝えた時に、おそらくペリベアはアンチオペが生きて帰って再び女王になることを願い、ペシテクレイアはアンチオペの首を要求して、自分がアマゾンの女王となろうとするだろう。そこで二人の副王の意見がくいちがい、攻撃の足並が乱れることは必定だ。我々はその隙をつく。」

「面白い。さすがはテセウス。今度ばかりはわしも兜を脱いだ。」

「いや、戦は時の運だ。やってみなければ分らない。それで君の助力もほしい。そうやっ

て我々は敵の陣形を崩すから、君はその退路を断って貰いたいのだ。」

「心得た。今度はそのペシテクレイアというのを生け捕ってくれよう。」

(三)

テセウスの計画は的中した。

元老院の申し出に對して、ペリベアは休戦を望んだのにかかわらず、ペシテクレイアはアンチオペの首を見せねば攻撃をやめぬことを主張した。再三の使者の往復後、ペシテクレイアは遂に自分の率いる右翼兵のみを率いて独断攻撃してきた。

ペリベアもこうなってはやむをえず、ことにアンチオペの心がアマゾンに帰ることではなくて、アマゾンにギリシアに帰せしめようとするにあるのを知っては、心ならずも戦わざるを得なかった。しかし当然アマゾンの左右軍は統一行動がとれず、一足おくれたペリベアの軍は迂回策をとって海浜のハンクス方面に向い、二手に分れてしまったのである。

けれども勝ち誇るペシテクレイアは、ペリベアの行動など意にも介さず、おのれの手兵のみをもって真直ぐアテネ府めがけて攻め上げますプニイスを守っていたアテネの守備兵を強襲してこれを潰滅させ、その勢でアテネ

市内へ乱入したのである。

まさかと甘い考えでいたギリシア市民は、上を下への大さわぎとなり、満足に抵抗する者もない有様であったが、今しも元老院を占領すべく命ぜられたアマゾン女兵の先遣隊二百程が、ミウゼアームの丘の下まで来た時である。

突如！ その丘上から殺到してきた一団のギリシアの騎兵隊が猛然と肉薄してくるのが見えたのである。その勢があまり急であったので、アマゾン側は遠矢を射る余裕がなかったが、

「小勢のギリシア兵、何程の事かあらん。」

と侮って正面からぶつかっていった。ところが結果は意外であった。たちまち馬から落ち、バタバタと地上に倒れたのは、ギリシア兵ならぬアマゾン女兵であったのである。近寄って刀で斬り合い、組み合った時にギリシア軍が男兵ならぬ女達であるのを知った時のアマゾン女兵の驚愕は一通りでなかった。事の意外に彼女等が、気を吞まれ、拍子抜けしてためらっているうちに、訓練されたギリシア女兵は容赦なく、彼等を突き倒し、斬りおとした。組み打ちになっても、同性同士とてアマゾン女兵が性的興奮をとまなわずもどか

しがつて力を出しきらぬうちに、相手に組み伏せられ、首を取られてしまう。

アマゾンも白人種ではあるが、髪は黒く、身体はむしろ小柄であって、敏捷ではあったが、体格はむしろギリシア女性の方がはるかにまさっていた。かのデスデモナの如きは長剣を掉って、まず二、三人のアマゾン女兵を馬下に斬って落すと、敵の先遣隊長目がけて躍りかかり、剣を投げすてて、ムンズとねち伏せると、今度は短剣を抜いて一瞬にその頸の根を叩き斬り、生首を高く空中に放り上げた。この不幸な隊長は副女王ペンテクレイアの妹で、その首はやがてギリシア女兵の槍先に貫かれ、高々と掲げられた。

それでもうアマゾン女兵はすっかり畏縮してしまった。しかし逃げようとした時には、ギリシア女兵の後から続いたギリシアの正規軍が襲いかかり、抵抗力をなくしたアマゾン女兵を片端から惨殺した。かくてあわれ先遣隊の二百は敗走ではなくて組織してしまつたのである。

始めてといつてもよいほど久しぶりに、ギリシア軍の勝鬨が高らかにひびいた。それを聞いて驚いたペンテクレイアは直ちに本軍を率いて急進してきた。しかし賢明な指揮者で

あるデスデモナは、勝に乗ってこれを迎え撃つことをせず、ひとまず部下をもとのミウゼアームの丘の蔭まで引き上げさせた。それはアマゾン女兵の遠矢を避けたのである。

それとは知らず。ペレテクレイアは首のない妹の死体を見出して号泣し、憤激の極、「憎いギリシア兵を皆殺しにせよ。」

と前後を忘れて突進し、まんまとデスデモナの計にひっかかった。彼女もギリシアに女兵があることを、この時は気附かなかったのである。デスデモナは弓を使わせないようにアマゾン女兵を充分にひきつけてから、再び丘の蔭から突出して肉弾戦を試みた。

今度はアマゾン側も、二千に近い大軍であるから、ギリシア女軍も決死の覚悟であったが、しかし相手が女であると知った時のアマゾン女兵の狼狽ぶりは、全く前と同様で、これほどの大軍が信じられない程もろく崩れ立ってしまった。

しかもデスデモナはまず長槍隊を先頭に立たせて、敵の馬を狙わせた。弓と同様アマゾン女人は馬を操ることが巧みであったからであって、地上に落してしまえばその力は半減する。たちまちアマゾン女軍の馬は将棋倒しとなり、乗手はその下敷きとなった上、続く

馬も倒れた馬につまずいて足を折り、隊形も乱れてギリシア女軍のために思うがままに蹂躪されていった。その上、今一つデスデモナは、アンチオペから授かった奥の手を用意していたのである。

それは斬刺の場合、アマゾン女兵の顔をねらうことであつた。美貌こそ彼女等の生命であり、それを誇示するための異性との戦でもあつたと云えよう。たとえ戦死して敵に首をとられても、その死首が男兵の心を動かすほど美しいものであれば、彼女等は満足であり、それが故に死を恐れなかったのである。

従つてその誇りを傷つけることは、女兵達の戦斗力を失わしめることであつた。ギリシア女軍の剣尖が自分達の顔を狙っていると知つた時、アマゾン女兵の多くは顔を掩うてうずくまり、「このまま殺して——」哀訴するばかりであつた。

これでは戦に勝つはずはない。アマゾン女軍は乱れに乱れて敗走した。さしものペシテクレイアもこの有様に肝をつぶし、妹の仇であるはずのデスデモナに挑まれてもろくな刀合せもせず、むしろみずから真先に戦場を離脱してしまつたのである。しかも彼女は同僚のペリベアに合流するでもなく、おのれの部

下の敗兵のみをまとめてサッサとアマゾンの本国へ引き上げてしまつたのである。そのためペリベアはペシテクレイアの敗戦を知らぬままにハニクスを通過して南からアテネへ迫つて来たが、これを迎え撃つたのが外ならぬテセウスとアンチオペだつたのである。

(四)

烈しい戦が始まつた。しかし英雄テセウスの戴いて自信に満ちたギリシア兵とアマゾンの女王であるアンチオペに率いられたギリシア女軍の合撃にあつて、さしものアマゾン女兵も散を乱して倒れ、左翼軍もまた苦戦に陥つたのである。そしておそらく他の指揮者であつたら敗走したであろうが、そこはアマゾンの名誉を重んずる女将ペリベア、崩れようとする部下を叱咤激励して支え、懸命に反撃の機をつかもうとする。その健気な姿に崩れかかったアマゾン女兵も足を踏みとめて、死物狂いに戦い始めたので、ギリシア側の損失も漸く多く、勝敗は予断を許さなくなつてきた。

と見てアンチオペはテセウスに向い、「ペリベアさえ倒せば、この戦は勝です。彼女は妾におまかせ下さい」と言うなり

「危いことはよせ、アンチオペ！」

案ずるテセウスの制止をふりすてて、白馬に一鞭、ペリベア目がけて真しぐらに馳せ寄つたのである。

ペリベアはすでに馬を斃されて徒歩直ちで戦つていたが、その頭上に天来の声が落ちてきた。

「ペリベア、戦はもうアマゾンの負です。無益な殺生はおやめなさい！」

「アッ、貴女はアンチオペ様！」

「アマゾンはギリシアと一つになってこそ幸福がある。この上多くのアマゾン女人を殺して何の益があるのです？」

「いいえ、女王様こそテセウスとの恋に目がくらんで、アマゾンの名誉を忘れられた——その罪は許せませぬ。」

「そなたまでが何ということ——問答無益いずれの言うことが正しいか、剣の勝負で決ましようぞ。」

「いうにやおよぶ、お覚悟！」

ペリベアも部下の手前、今は引けない。相手が馬上なので、討死したギリシア女兵の槍をとるやサツと下から突き上げた。同じく槍をもってカラリとそれを刎ねあげるアンチオペ。「美しい虎と豹の戦」ともいふべきア

マゾンの女王と副女王の一騎討に当然衆兵の目もあつまる。

戦は烈しかったが、しかし勝負がつくのは早かった。もともとどんな武器をとってもペリベアはアンチオペの敵ではない。まして女神のように慕っていた人を目の前にして、その腕も斗争心も鈍ったのは当然である。ペリベアの槍はねとばされ、アンチオペはさかさず馬上から敵の姿へ跳びついた。円熟し切った豊満な二つの女体がからみあって、しばらく地上をゴロゴロと転ったが、やがて上になつて相手を組み伏せたのはやはりアンチオペであった。

彼女は腰に吊していたギリシア型の短剣を抜き放って、ペリベアの白い咽喉にピタリとおしつけ

「どう、戦は妾の勝ね、サアいさぎよく降伏なさい」

「……」

ペリベアの方は憧がれの女性に組みしかれた快感に、しばらくは放心したようにマジマジと美しい主人の面を見上げている。

アンチオペも愛するペリベアを殺す気は毛頭なく

「そなたさえ、妾の言うことを聞いておくれ

なら、そなたの部下達に反対するものはないはず、約束通り、勝った妾に従いますね。」

「……、アンチオペ様、たしかに妾の負ですが……、そのような恥さらしを妾はしたくありません。殺して下さい。女王の手にかかるなら本望です。」

「そなたが死んでどうなるというのです。そなたにはアマゾンの将来がどうなるか考えられないのですか？」

あまりのじれったさに、組みしているアンチオペの方が身もだえした時である。

「アッ——」

と帛を裂くような悲鳴をあげたのはその彼女で、一旦手足を硬直させたと思うと、美しい眉をひきつらせ、大きく目を開いた面がたちまち苦痛にゆがんで、見る見るうちに蒼白に変じていった。

それはまさにおどろくべき運命の転変——

見よ、何所から飛び来たったのか一本の投げ槍がアンチオペの背の真中に深々と突き刺さったのだ。気丈な彼女は体をのけ反らせたまま、しばらくは耐えていたが、やがて両の豊かな乳房をブルブルとふるわせたと思うと、

「ペリベア——」

一声血を吐くように叫んだまま、どっと横

ざまに倒れてしまったのである。

同時に、その倒れた姿に飛鳥のようになのかかった一つの影が

「女王様、お首頂戴！」

右手に振りあげた短剣を光らせた。それはモルパデアと呼ぶ若いアマゾン女兵で、おそらくは絶対者として慕うペリベアの危急に逆上したのであろうが、思いもよらぬ場面の展開に敵も味方も茫然としている間に。

あわれ無情の剣一閃、美の女王アンチオペの首は、胴体から斬り落されていたのである。その背からひき抜いた投槍の先に、まだ両の眼を見開いたままの血のしたたる生首を貫いて高く掲げたモルパデアは

「敵も味方もとくと御覽せよ。反逆者アンチオペの首はこの通りアマゾンが討ちとりましたぞ」

と物につかれたように叫ぶ。

すでに死を覚悟して目を瞑っていたペリベアの方は、自分をくみしいていたアンチオペの思いもよらぬ異変に、しばしは呆然としていたが、そのモルパデアの声に我に返って眺めると、なんと女神以上に崇拜していた女王が、無惨！ 首を失った死体と化しているではないか。

「おのれ、そなたは何ということを！」

夢中ではね起きたペリベアは、何時拾ったか、右手に握りしめた短刀で、今度はモルパデアの脇腹めがけて力一杯刺し通した。

「ウアッ！」

不意を打たれた彼女が、よけも交しもできず、槍を放り出してもがきくるしむのを、地上におし倒したペリベアは

「卑怯者！ 女王様の仇！」

ほんとは生命の恩人であるはずの部下の女兵の、胸といわず、腹といわず、狂気のように突き刺したので、あわれモルパデアは瞬時のうちに絶命してしまった。

「ああ、アンチオペ様！」

地上に投げ出された女王の死首に抱きついて、よよと泣き伏す副女王のペリベア。

あまりにも意外な結末は、両軍の兵士に戦う気をなくしてしまったし、急を聞いてそれへ駆けつけたテセウスも、変り果てた恋人の姿に呆然と立ちつくすばかり。その足許へ身を投げ出して

「妾がわるうございました。アンチオペ様のお考えが正しかったのです。アマゾンにギリシアに降伏致します。どうぞこのわたしをどのようなお仕置きにもなさってください。」

とペリベアはかきくどくのである。

「浅はかな妾の考えが、かけがえのないアンチオペ様を殺してしまったのです。妾こそ死んでよい女だったのに……」

「ペリベア、すべては運命、これでよいのだ。一殺多生、アンチオペの死が、アマゾンに救うのだったら、彼女はそれで満足している。あなたがアンチオペに詫げる気があるなら、代りに強く生きて、アマゾンの将来のためにつくせ。」

さすが英傑テセウス、そう言い切って、アンチオペの首屍をとり収め、アマゾンの降伏を容れてアテネへ引き上げた。

しかしアンチオペの死を最も悲しんだのはかのアキレスで、彼はペンテクレイアの追撃を命ぜられていたにもかかわらず、途中からひき返してテセウスの許に來り、乞うてアンチオペの首級をもらい受けた。彼にとってはこの美女の生首は、如何なる彫刻のそれにも優ったと見え、おのれの部屋に飾ったまま、旬日におよんでも一步も外に出ず、親しい友人がその女々しさをなじったところ、怒ってこれをなぐり殺したのは有名な話である。

(五)

こういうギリシアの人々のアンチオペを失

った慨きを見るにつけても居たたまれないのはペリベアで、彼女はおのれの罪をあがなうためには、同僚のペンテクレイアを倒してその配下にあるアマゾン女兵をもギリシアに帰服せしめようと決心した。折しもかのデスメナも兄アキレスがその使命を怠っているのを憂慮していたのでペリベアに呼応し、兄に代ってペンテクレイア追討の任を引きうけたのである。かくて両女はそれぞれの女軍をひきいてアマゾン国へ出陣した。

一方ペンテクレイアはもとよりギリシアに降参する気はない。アンチオペはすでになくペリベアもギリシアに去って、誰一人はばかるものもなく、自ら女王になって勝手気ままに振舞っていたのだから当然である。従って憎いペリベアとデスメナの二人が追討軍を率いてくるのを知るや、今度こそ復讐のときと、勇躍部下を率いて出撃し、女軍同士の烈しい戦が展開された。

しかしこの時もアンチオペがギリシア女兵に与えたアマゾンに対する自身は大いに効を奏し、数においても劣るアマゾン女兵は各所で敗れて、次第に退却し、遂にペンテクレイアはその首都に籠城せざるを得なかった。

ところが本城はなかなか堅固な上に、攻城

戦には女兵はあまり適しない。従って時日の経つにかかわらず、城は落ちそうにもなく、かえって寄手には糧食の心配が出てきた。そこでもともとアマゾン女兵同士の殺し合いを憂えていたペリベアは、この上は乾坤一擲、ペンテクレイアとの大将同士の一騎討で結をつけようと望んだのである。もしペリベアが勝てばもとよりアマゾン女兵全員がギリシアに帰服するし、ペンテクレイアが勝った場合は、ギリシア側もアマゾンの併吞をあきらめて囲みを解こうというのである。ペンテクレイアも腕に自信があるだけに、この申し出を一も二もなく承知した。

その晴れの一騎討を控えた前夜、デスデモナがペリベアの許を訪れた。

「ペリベア、貴女のとられた態度は立派だし、その気持もよく分ります。しかし冷静に見て、貴女はペンテクレイアに勝てるのですか？ その自信がおりなのですか？」

「……………」

ペリベアはしばらくは口を開けなかった。

今までの実績からみて、武勇の点ではアンチオペですら一目置いていたペンテクレイアであり、ペリベアの非勢はあまりにも明らかであったからである。

「たしかに彼女は妾よりも年も若いし、背丈も高く、臂力もすぐれています。端見には勝目はないでしょう。しかし妾もアンチオペ様の非願を継ぐ以上、決して負けはしません。策はあります」

その声は低いが、力はこもっていた。デスデモナは深くうなずいて

「よく言われました。アマゾンの女王にふさわしいお答えです。ですが……、どうでしょう、この一騎討、妾に代らせてくれませんか？」

「デスデモナ様が……!!」

「勝負は時の運です。しかし公算から言えば貴女が彼女と五分五分に戦えるなら、妾なら六分、四分の勝目があります。妾はアンチオペのために、この一騎討は絶対に勝ちたい」「いいえ、いけません。貴女様はギリシアにとっても、妾達にとっても大事なお身体、万が一のことがあったら、それこそアンチオペ様に対しても申しわけありません」

「妾がペンテクレイアに負けるように見えませんか、ペリベア？」

「……………」しかし、もし相手がデスデモナ様と分ったら、あの女は一騎討を逃げるか、卑怯な手段をとりかねません」

「ですから、その場まで貴女の名を借りて実際には妾が戦うのです」

「……………」

「そんな卑怯なこととお思いでしょう。しかし、今は個人の名誉にかかわっている時ではありません。何としてもあの頑冥なペンテクレイアを倒して、アマゾン女人のために、正しい将来を開いてやるべきです。それがアンチオペ様の霊を慰める唯一の道ですし、もし貴女が討たれたら、アマゾン族は永久に救われますまい」

「デスデモナ様、それほどまでにアンチオペや妾達のことを……」

ギリシア女性の深い友情に打たれて、ペリベアの目に感激の涙が光った。

(六)

かくて翌朝、両女軍監視のうちに前代未聞の女戦士同士の一騎討が行なわれたのだが、「おのれ、卑怯なギリシア人、ペリベアがかなわぬと見て、ぬけぬけと代りの者を出し居ったな。このような不信は天人共に認めぬところ、戦わずともわれらの勝。約束通り、早々に囲みを解いて引き上げや」

計られたと知って怒気天をつき、黒髪を立て、柳眉を吊り上げて怒号するペンテクレ

イア。無理もないことだが、あくまでも術策をうちにいだけデスデモナはせせら笑って、「これは天下すい一の女戦士と誇るそなたにも似合わぬ言葉。相手が誰であろうと戦いつてこそまことの栄光。それにそなたの妹の首を刎ねたこのデスデモナをよもや見忘れはしまい。それとも妹討たれたこわさに、仇に後ろを見せやる気か？」

「言わしておけば、この牝豚、勝手なことを!!、妹の仇、八つ裂きにしてくれるわノ」

痛い所をつかれて半ば逆上したアマゾンの女王は、すべてを忘れて槍をとり直して猛然とつかかる。しかし命を賭けた勝負を前にして心の平静を失うことはすでに禁物である。

まんまと敵を誘ったデスデモナは心得て、同じ槍をとってあしらいながら後に下る。

けれども二人のそうしたやりとりは遠くはなれた見物の女兵達には分らない。一方がペリベアならぬ白人の女であることに不審を抱いたものはあったであろうが、それ以上に美女同士の壮烈な一騎討に固唾をのんで見守っている。

ペンテクレイアも凄惨な程の美貌であるが、それ以上にキリリと締った小麦色の均斉のと

れた四肢が素晴らしい。槍をふるうたびにそれが若鮐のようにピチピチと躍動するのである。一方のデスデモナは雪白の肌を持ったギリシア美人。ペンテクレイアもアマゾン女兵の中では背丈に恵まれた方だが、デスデモナは更に長身。従ってスラリとして見えるが、しかし年つもって二十五才。成熟し切った肉体の豊満さは、年下のペンテクレイアを圧して見える。その上デスデモナはアマゾン女兵特にペンテクレイアの戦法を充分に研究していた。ペンテクレイアの方はもとよりデスデモナの力量を深く知るよしもない。ここに勝敗の数は歴然とあらわれてくる。

前述したように、ペンテクレイアの利器は敏捷さと馬上戦のほずである。従ってそれを計算に入れたデスデモナは、わざと短くて重い槍を用いた。それは馬上戦では不利に見えるが、ペリベア達をハラハラさせたが、彼女はそれで相手を突く気はなく、すきを見て、その柄で横なぐりに敵の馬の平頸を叩きのめしたのである。そこはさすが英雄アキレスの妹。

その強力に、あわれ頸の骨をへし折られた馬は一たまりもなく横倒しとなり、馬上のペンテクレイアはもんどり打って地上に投げ出される。それでも素早く跳ね起きようとした

ところを、さらにもう一なぐり、今度はペンテクレイアの頭目がけて馬上から一撃を加えたのである。

「アッ」

兜を被っているのに、致命傷にはならないが、強力に兜ごとなぐられて、クラクラとした女王が地上に倒れる。そのひまにパツと馬を飛び降りたデスデモナは、兜を解き、頭を振って意識を呼びもどし懸命に起きようとする相手に、今度こそは烈しく槍を挿して突っかったから、ペンテクレイアは立ち直ることが出来ない。わずかに倒れた馬をとりでのようにして、それに身をもたせ、デスデモナの槍先を左の楯で防いだが、それがやっとで攻勢に転ずることが出来なかった。そればかりか、彼女の楯は力にまざるデスデモナの槍先を受けかねて、肩や腕や下肢に突き傷を受け、その非勢はいよいよ明らかになってきた。女王の危機に、見物するアマゾン女兵も次第に動揺してきたが、流星に名誉を重んじてか、助けに走り寄るものはない。

頼む馬を倒され、身体を自由を奪われて、ペンテクレイアにも、このままではギリ貧に負かされてしまうのは分ってきた。

(ええい、妹の仇、それも憎いギリシア女に

負けるなど——、何としても勝たねば)

彼女に残されたただ一つの手は捨身の反撃しかない。それには乾坤一擲の投槍、あのアンチオペを倒した投槍しかない。最後の氣力をふりしぼってペンテクレイアはその機会をうかがった。少しぐらい皮肉を斬られる危険を通過しても、とびすさって槍を投げようというのだ。しかし、悲しいかな、この最後の手段までもデスデモナに読まれていた。賢いデスデモナは当然それを予期し、しかもその機こそ、この若い女豹にとどめを刺す時と待っていたのである。余裕のある彼女にはその機をみてとるのは難かしいことではなかった。

今しも一跳躍して距離を取ろうとする敵女王の動きの一瞬前に、デスデモナは今度は我から、おのれの槍を、相手の胸目がけて投げつけたのである。剣道においても敵の竹刀の動く瞬間こそ、こちらの乗ずる時である。それと同じ理で、ペンテクレイアは槍を投げすて、右手は今しも槍を投げようとしてがら空きになったその胸元に、その槍先をまともに受けたからたまらない。

「ギャッ！」

絶叫もろとも、力一杯の重く短い槍先に鎧のつぎめを破られて、右乳の下あたりを深々

と貫かれ、崩れ折れるように前に仆れた。手を離れた長槍は途中で力を失って、空しくあらぬ方に落ち、デスデモナの身体にもふれない。それでも氣丈なアマゾンの女王は一旦身体を起して、おのれのあばらを貫いた投槍をひきぬこうとしたが、遂に耐えかねて今度は仰向けに倒れ、ガクンと長い咽喉をのけぞらせ、四肢をのばしてしまった。

「わーっ」

期せずして両軍から上る歓喜とも絶望とも分たぬ歓声が天地をゆるがす。

誰の目にも勝敗は明らかであったが、しかしデスデモナは、おのれの馬の鞍に提げてあった長剣をとって、用心深く倒れたペンテクレイアに近づくと、片方の足で相手の胸をふんまえ、両手で持った長剣の切尖を仰向いて露わになっている柔かな咽喉笛におしあて、相手の苦痛にゆがんでいる美しい顔を見守りながら、

「アーメン」

と敵を憐れむ祈りとともに、プツリと突きおろす止めの一刀。

「うーん」

それまでデスデモナの足の下で、なお喘いでいた女王の胸の隆起が一きわ大きく揺れた

が、それがあわれペンテクレイアの最期であった。

相手が全く息絶えたのを見届けて、デスデモナは静かに刀をひき抜き、勝利のしるしにその血したたる剣尖を自陣に向って高々と振って見せる。

「わーっ」

ギリシア軍に喜びの勝鬨が起って、ペリベアを先頭に女兵達がかけつけてくる。

その間に、地上にひざまづいたデスデモナは、今度は右手に腰の短剣をひきぬき、左手にペンテクレイアの黒髪をとって掻き首にかかす。

「おお、デスデモナ様！」

今斬り落したアマゾンの女王の首を左手にスックと立っている、その女神像のように美しく、凜々しい姿に、ペリベアはしばし見とれたが、

「サア、ペンテクレイアの首」

さし出されたまだなまあたたい生首をうけとると、さすがに顔をそむけた。

「一時は憎んだ人ですが、こう首になってみると可哀想……」

しばらく変り果てた面を見ていたが、

「いずれにせよ、これでアマゾンも救われま

した。すべてはデスデモナ様のおかげ。さああとはわたしが致します故、お引き上げ下さい」

デスデモナをひき上げさせて、ペリベアは甲斐々々しく女兵を指図し、首のないペンテクレイアのむくろの両足を縄でしばり、それをおのれの馬のしっぽに結びつけさせる。そして槍の先にペンテクレイアの首を刺し貫くと、ペリベアはそれを右手に馬に打ちのつて敵城の真下までのりつけ、城内の女兵達にペンテクレイアの生首を見せつけつつ、ぐるぐ

ると輪をえがいて馬をのり回す。そのしっぽの先には両足を結びつけられたペンテクレイアのなきがらがあって地上を引きずられる。残酷のようだが、当時の戦場のならわしで討たれた側で遺恨を持つものがあつたら出てこいというしぐさなのである。それだけに勝った方の者にも危険があるから、ペリベアは自分から買って出たのである。だがたのみとするペンテクレイアのこの無惨な姿を見せつけられては、さしものアマゾン女兵の中から

も誰も討って出るものはなかった。

彼等はすべて降参し、ペリベアの指揮下に入り、ギリシアへの帰属を許された。かくて女人国アマゾンの名は史上から消え去ったが、その種族の血は女王アンチオペの名とともにギリシア人の間に残っていったのである。

(第七話終り)

「最新版」 女体緊縛フォト五十選

B組五十集 大手札判印画紙(9×13) 焼付

各組一枚一組(送料共)

一組一枚	一〇〇〇円
五組五枚	四〇〇〇円
十組十枚	七五〇〇円
二十組二十枚	一四〇〇〇円
三十組三十枚	二〇〇〇〇円
四十組四十枚	二五〇〇〇円
五十組五十枚	三〇〇〇〇円

B 5	足の裏擦り責め (竹野)
B 6	おへソいじめ大写真 (関谷)
B 7	剃いだバタフライ (関谷)
B 8	貴方に捧げた裸身 (大塚)
B 9	乳房責め絶叫苦悶 (大塚)
B 10	無防備双手吊り (絹川)
B 11	豊満臀部エビ縛り (水本)
B 12	糸纏わぬ股間縛 (水本)
B 13	全裸亀甲股間縛り (関谷)
B 14	足踏付け二つ折り (大塚)
B 15	尻突出しムチ打ち (関谷)
B 16	手錠にもだえる (竹野)

B 17	尻突出エビ責め (水本)
B 18	椅子開股鼻責触手 (梨花)
B 19	息もつがせぬ猿轡 (竹野)
B 20	投げ出した全裸 (関谷)
B 21	美しき尻部の露出 (絹川)
B 22	猿ぐつわ悦虐境 (竹野)
B 23	後手柱縛り脚線美 (竹野)
B 24	強制鼻挟水香ませ (梨花)
B 25	苦悶にねじる裸身 (関谷)
B 26	責めに気を失って (関谷)
B 27	さアどうでもして (関谷)
B 28	豊麗乳房膨隆縛り (竹野)
B 29	投げだされた女体 (竹野)
B 30	裸身をくびる麻縄 (梨花)
B 31	強烈縛りに悦ぶ (梨花)
B 32	全裸逆エビ片脚拳 (東浦)
B 33	踏みつけマゾ境地 (東浦)

B 34	すべてをさらけて (関谷)
B 35	ムチ打ち失神寸前 (関谷)
B 36	クリップ鼻挟み (絹川)
B 37	台上的マゾポーズ (大塚)
B 38	吊られゆく美体 (絹川)
B 39	拷問に無惨な美貌 (梨花)
B 40	マゾ女性の表情美 (東浦)
B 41	喰い込む股間縄 (絹川)
B 42	炎責めに悶える (梨花)
B 43	犠牲台の人身御供 (大塚)
B 44	美肌無茶苦茶縛り (絹川)
B 45	裸身に立つ蠟燭 (大塚)
B 46	手枷足枷大写真 (四方)
B 47	鎖に悶える足首美 (柳初)
B 48	蛇責めに柔肌栗然 (梨花)
B 49	鼻の玩弄恍惚境 (大塚)
B 50	女囚菱縄さらし (絹川)

刺青女性緊縛フォト

モデル 山原 清子
塚本 鉄三・撮影

趣味と文獻性に富んだ素晴らしい玉取姫の刺青。これこそ二代目彫芳の傑作といわれる真正正銘の生き肌に彫った入墨の女性山原清子嬢の見事な写真である。

入墨の高手小手

大手札印画紙焼付
三枚一組 三〇〇円
略号 (いち)

縄に悶える入墨

大手札印画紙焼付
三枚一組 三〇〇円
略号 (いへ)

足吊り三態

大手札印画紙焼付
三枚一組 三〇〇円
略号 (いと)

剥れた腰巻

大手札印画紙焼付
三枚一組 三〇〇円
略号 (いは)

女一匹御意見無用

大手札印画紙焼付
三枚一組 三〇〇円
略号 (いお)

玉取姫が凄む

全裸緊縛立像

大手札印画紙焼付
三枚一組 三〇〇円
略号 (いる)

入墨ヌード

大手札印画紙焼付
三枚一組 三〇〇円
略号 (いよ)

後手吊りの構図

大手札印画紙焼付
三枚一組 三〇〇円
略号 (いほ)

黒細帯の裸身

大手札印画紙焼付
三枚一組 三〇〇円
略号 (いわ)

黒禪を誇る

大手札印画紙焼付
三枚一組 三〇〇円
略号 (いか)

入墨自慢

大手札印画紙焼付
三枚一組 三〇〇円
略号 (いり)

臨月腹妊婦フォト

田中弘氏特別提供
モデル 田中美佐子

当年二十二才の若々しい初産婦である田中美佐子夫人のはちきれそうな文字通り出産寸前の臨月腹のフォトが、田中弘氏の御厚意により分譲することができました。出産十日前のこれは貴重な記録です。資料としても極めて興味のあつたもので妊婦ファンにとっては絶対に見逃すことのできない珍しい文獻写真といえましょう。

臨月妊婦緊縛

大手札印画紙焼付
三枚一組 四〇〇円
略号 (にち)

診察を受ける妊婦

大手札印画紙焼付
四枚一組 五〇〇円
略号 (にし)

臨月腹開陳 (座位)

大手札印画紙焼付
四枚一組 五〇〇円
略号 (にり)

臨月腹開陳 (立位)

大手札印画紙焼付
三枚一組 四〇〇円
略号 (にす)

柱縛りの妊婦

臨月のヌード

大手札印画紙焼付
三枚一組 四〇〇円
略号 (にわ)

妊婦の裸身立像

大手札印画紙焼付
二枚一組 三〇〇円
略号 (にた)

縛られた妊婦

大手札印画紙焼付
二枚一組 三〇〇円
略号 (にる)

臨月の裸身像 立位

大手札印画紙焼付
三枚一組 四〇〇円
略号 (にお)

臨月の裸身像 座位

大手札印画紙焼付
三枚一組 四〇〇円
略号 (にぬ)

突き出た臨月腹

大手札印画紙焼付
三枚一組 四〇〇円
略号 (にい)



グラフィヤ写真と

口絵絵画の問題に関して

奇クの将来を思う

夜乃探郎

奇ク三月号の「奇クサロン」の巻頭に「桐一葉の淋しさ」として編集子は「今月号は一つの試みとしてグラフィヤ写真も口絵もとりやめて本文ばかりとしてみた」と述べているが一つの試みというよりは、これは法と社会の無理解な制約の下に、涙をのんでそうしたのだ。——こう私は考えるのだ。それであるから、この祭、読者は不満とか批判をまず胸の中におさめて、より奇クの発展に資する建設的な意見が望ましく、希望するものだ。

私は趣味として過去十数年にわたって、この種「風俗文献誌」の盛衰史を研究、また風俗文献の発禁史も考察してきたので、如何に奇クの発行が困難であり、且つまた、よくぞ通刊第二〇〇号を数えるに至ったものぞと、拍手を送るものだ。私の知る範囲では、恐らくこのような長期継続発刊は、日本の風俗文献史上まことに空前絶後の記録になるものと

信ずる。この上は、奇クの灯を永遠に、と只々祈るばかりである。

さて、本題に入る。編集子の言葉によると「従来のゆき方のグラフィヤ写真というものが一番忌避され易い」といつているが、まずこの点について考えてみよう。

一番手っ取り早い解決策は、別冊又は増刊号（例えば「写真と絵画」文献特集号など）を口絵、グラフィヤを主としたもので、奇クの定期月刊とは別に発刊するもので、これによって不満を解消する方法だが——これは以下述べる理由で、私はあまり賛成できないのである。

一、経済上の理由。誰か「奇クよ貴族的たれ、ただし値段は貴族的でないように」という投書が掲載されてあるのを拝見したが、私も他人事でない思いがした。やはり、読者の増加と固定したファンをつかむためには、経

済上の問題も重要なポイントとして考えるべきであろう。（営業面、読者の蔵書欲という点も考慮に入れるとしても、あくまでも本誌一冊で毎月満足というのが理想であろう）

一、奇ク本誌が正当的な編集。なんといっても、本誌がサッパリで別冊号が盛んになり過ぎることが、結果的にマイナスである。これは各種の理由があるが、いまは述べない。ただ親があつて子がある、とだけ付け加えるに止める。

では、奇ク本誌によって、口絵、グラフィヤとの関連した問題をどう考えるべきか。ズバリ列記しよう。

A、口絵、グラフィヤをそれはそれなりに製本して、別冊フロクとして付ける。ただし、その際に袋に入れて密封し、奇クを購入した者のみが見られるようにする。このようにすれば、ひやかし（野次馬）の眼にふれることを、いくらかでも妨げられる。（これについては、すでに三月号の「まにあのメモ」で三隅氏が述べていられるが、賛成なのでダブルけれど特に記した。）

B、市販された奇クには、特別贈呈券を挟み、本社にその券を送ることによって、Aのフロクが送られる。直接購読者には当然、フロクを付けて送る。

C、本当の読者であり、マニヤでなければ奇クの第一頁から最後まで目をとおすという

ことは少ない。よってグラビヤ、口絵は本誌の真中あたりに掲載する。

D、口絵、グラビヤで忌避されるポイントは、おそらくどの程度までの肉体の露出かに（私の考えでは）あると考えられるので、特にこの頁は上質の紙を使用し、たとえ部分的露出であっても、口絵、グラビヤの鮮明さによって、それを補うことが出来得ると思う。また、色刷、天然色写真によって、より芸術的に（色彩の変化、配合によって）表現され制約の範囲内に於て、より素晴らしい作品になり得る可能性があると思う。特に和服、朱の

襦袢など、日本古来の衣裳を最大限に活用するときはきたのではないか。――

ここで一つ観点を変えてみよう。それではグラビヤ、口絵の掲載されない奇ク三月号はどうであったかということだ。過去の号を私はあまり知らないのですが、大きなことは云えないが、私の考えるところでは、奇クにとっては、創刊以来おそく、このような号は滅多にないのではなからうか。

よかれ、あしかれ、記念すべき号であることに間違いないと思う。そして先ず私の知る範囲では、近來にない、まことに充実した内

△愛読者の皆様へ▽

○電話にてのお問合せや照会並に直接の御訪問は固くお断り致します。ご連絡はすべて書面にて住所氏名明記の上お願い致します。必要のある方には、編集部から電話連絡或は面会の日時場所などお知らせ致します。面識のない方の直接のご訪問は御容赦願います。

○編集部又は編集者に対して、ご依頼或はご相談などがございましたら、事前に通信にて、その旨お申下されば、時間の許すかぎり、つとめてお逢いするよう致しておりますから、ご遠慮なくお便りを下さい。

○分譲品のお問合せも、必ず通信にてお寄せ下さるようお願い致します。

○本誌では、投稿者やモデル嬢の住所氏名の照会には一切応じておりませんし、手紙の転送、文通斡旋なども原則として致しておりません故、はっきりお断りしておきます。読者間の交歓は、すべて読者通信欄にて行って頂くようお願い致します。

○読者通信は用紙は問いませんが、必ずタテ書きにお願いします。尚切手を貼らずに投函される方も時々ありますが、入手に手間どり遅延のもととなり、場合によっては「受取拒絶」することがありますから、ご留意願います。

容をもった編集であった。昭和四十年三月号こそ、その誌面全体に流れる編集の熱っぽさと、そのバラエティさは、まことに見事なものであるといっている。一言でいえば、なにくそ！という不死鳥の如き、がんばりがひしひしと読みとれるのだ。画竜点睛を欠くという意味で、やはり口絵、グラビヤのない号は、淋しいことは変らないとしても、それを前提として、それらの欠けた部分を立派に埋めた三月号を発刊されたことに、私は編集者の手腕を高く評価したい。

特に、サロン、随筆、メモ、研究、評価ATCの多種多様な執筆陣は、文献誌としてまた、それをより望むマニヤにとって、極めてうれしいことである。マニヤ誌は、このようなら話、手前みその記事を豊富にするのとに、その特徴があると思う。また、本誌と読者の親密さを増し、生きた血の通った風俗誌ともなるのだ。

ともあれ、制約下に於て、あたうる限り、力一杯に期待以上の奇クを出したことを、三月号に、私はその内容によって知るのだ。

最後に口絵、グラビヤが現実的に制約されむつかしいとき、ただ不満を述べるだけではなく、如何にすべきかを編集者と誌友協力の下に、よりよき方法を発見、冒険をなし、それらを背景として、それだからこそ、より、「本文の充実が必要である」と述べて、この拙い筆をとめたい。

代理部分護品一覽

○妊婦女体資料の部○

臨月 腹又ード	大手札二枚一組 略号「りく」	三〇〇円
安原さゆり	大手札二枚一組 略号「りく」	三〇〇円
臨月 腹アツブ	大手札二枚一組 略号「りと」	三〇〇円
安原さゆり	大手札二枚一組 略号「りと」	三〇〇円
臨月 妊婦の全身	大手札二枚一組 略号「りせ」	三〇〇円
安原さゆり	大手札二枚一組 略号「りせ」	三〇〇円
臨月 腹の側面	大手札三枚一組 略号「りそ」	四〇〇円
安原さゆり	大手札三枚一組 略号「りそ」	四〇〇円
臨月 腹の背面	大手札二枚一組 略号「りも」	三〇〇円
安原さゆり	大手札二枚一組 略号「りも」	三〇〇円
臨月 垂れ腹	大手札三枚一組 略号「りみ」	四〇〇円
安原さゆり	大手札三枚一組 略号「りみ」	四〇〇円
妊婦 又ード	大手札三枚一組 略号「りま」	三〇〇円
安原さゆり	大手札三枚一組 略号「りま」	三〇〇円
妊婦 しぼり	大手札三枚一組 略号「りやむ」	三〇〇円
安原さゆり	大手札三枚一組 略号「りやむ」	三〇〇円
臨月 妊婦三態	大手札三枚一組 略号「りよむ」	三〇〇円
安原さゆり	大手札三枚一組 略号「りよむ」	三〇〇円
産み月のお腹	大手札三枚一組 略号「りよま」	三〇〇円
安原さゆり	大手札三枚一組 略号「りよま」	三〇〇円
動物的な腹部	大手札三枚一組 略号「りよま」	三〇〇円
安原さゆり	大手札三枚一組 略号「りよま」	三〇〇円

○女体緊縛資料の部○

安原さゆり	略号「よみ」	四〇〇円
妊婦の股間縛り	大手札三枚一組 略号「には」	四〇〇円
児玉 昌子	大手札三枚一組 略号「には」	四〇〇円
妊娠八カ月の緊縛	大手札三枚一組 略号「にあ」	四〇〇円
児玉 昌子	大手札三枚一組 略号「にあ」	四〇〇円
妊娠五カ月の緊縛	大手札三枚一組 略号「にこ」	三〇〇円
児玉 昌子	大手札三枚一組 略号「にこ」	三〇〇円
妊娠前期の緊縛	大手札三枚一組 略号「まさ」	三〇〇円
児玉 昌子	大手札三枚一組 略号「まさ」	三〇〇円
妊娠初期の緊縛	大手札三枚一組 略号「ぬろ」	三〇〇円
児玉 昌子	大手札三枚一組 略号「ぬろ」	三〇〇円
妊婦の股間縛り	大手札三枚一組 略号「にふ」	四〇〇円
児玉 昌子	大手札三枚一組 略号「にふ」	四〇〇円
妊婦の股間縛り	大手札三枚一組 略号「にと」	三〇〇円
児玉 昌子	大手札三枚一組 略号「にと」	三〇〇円
分娩後縛り	大手札三枚一組 略号「につ」	三〇〇円
児玉 昌子	大手札三枚一組 略号「につ」	三〇〇円
分娩後股間縛り	大手札三枚一組 略号「にて」	三〇〇円
児玉 昌子	大手札三枚一組 略号「にて」	三〇〇円
全裸緊縛姿態	大手札四枚一組 略号「ゆり」	四〇〇円
遠藤百合子	大手札四枚一組 略号「ゆり」	四〇〇円
鼻をいたぶる	大手札三枚一組 略号「ゆは」	三〇〇円
遠藤百合子	大手札三枚一組 略号「ゆは」	三〇〇円

鼻の穴責め	大手札三枚一組 略号「なく」	三〇〇円
大塚 啓子	大手札三枚一組 略号「なく」	三〇〇円
鼻 ぶり	大手札三枚一組 略号「ない」	三〇〇円
大塚 啓子	大手札三枚一組 略号「ない」	三〇〇円
鼻責めの陶酔	大手札三枚一組 略号「なは」	三〇〇円
大塚 啓子	大手札三枚一組 略号「なは」	三〇〇円
苦悶の裸身	大手札四枚一組 略号「くせ」	四〇〇円
大塚 啓子	大手札四枚一組 略号「くせ」	四〇〇円
裸身の晒し	大手札三枚一組 略号「わあ」	三〇〇円
大塚 啓子	大手札三枚一組 略号「わあ」	三〇〇円
全裸股間縛り	大手札四枚一組 略号「せら」	四〇〇円
大塚 啓子	大手札四枚一組 略号「せら」	四〇〇円
強烈エビ責め	大手札三枚一組 略号「えり」	三〇〇円
大塚 啓子	大手札三枚一組 略号「えり」	三〇〇円
蒲団に悶ゆ	大手札三枚一組 略号「なき」	三〇〇円
大塚 啓子	大手札三枚一組 略号「なき」	三〇〇円
悦慮の果て	大手札三枚一組 略号「なみ」	三〇〇円
大塚 啓子	大手札三枚一組 略号「なみ」	三〇〇円
椅子エビ責め	大手札三枚一組 略号「おき」	三〇〇円
大塚 啓子	大手札三枚一組 略号「おき」	三〇〇円
六尺縛り	大手札三枚一組 略号「ろは」	三〇〇円
大塚 啓子	大手札三枚一組 略号「ろは」	三〇〇円
弓吊り責め	大手札二枚一組 略号「つき」	二五〇円
大塚 啓子	大手札二枚一組 略号「つき」	二五〇円

手足宙吊り	大手札三枚一組 略号「つた」	三〇〇円
梨花悠紀子	大手札三枚一組 略号「つた」	三〇〇円
オムツの股間縛り	大手札四枚一組 略号「むく」	四〇〇円
東浦ひかる	大手札四枚一組 略号「むく」	四〇〇円
強烈責、被虐の果	大手札五枚一組 略号「りお」	五〇〇円
梨花悠紀子	大手札五枚一組 略号「りお」	五〇〇円
乳房いじめ	大手札二枚一組 略号「とお」	二五〇円
大塚 啓子	大手札二枚一組 略号「とお」	二五〇円
激痛ノ逆エビ責め	大手札四枚一組 略号「きえ」	四〇〇円
大塚 啓子	大手札四枚一組 略号「きえ」	四〇〇円
美貌の裸身に縄目	大手札三枚一組 略号「きん」	三〇〇円
大塚 啓子	大手札三枚一組 略号「きん」	三〇〇円
腰元吊り責め	大手札二枚一組 略号「こり」	二五〇円
大塚 啓子	大手札二枚一組 略号「こり」	二五〇円
腰元間諜の拷問	大手札四枚一組 略号「こく」	四〇〇円
大塚 啓子	大手札四枚一組 略号「こく」	四〇〇円
強烈エビ縛り	大手札三枚一組 略号「もい」	三〇〇円
大塚 啓子	大手札三枚一組 略号「もい」	三〇〇円
乳房責の苦悶	大手札二枚一組 略号「もろ」	二〇〇円
大塚 啓子	大手札二枚一組 略号「もろ」	二〇〇円
全裸ムチ打ち	大手札四枚一組 略号「もた」	四〇〇円
大塚 啓子	大手札四枚一組 略号「もた」	四〇〇円
強打に泣く裸身	大手札四枚一組 略号「むち」	四〇〇円
大塚 啓子	大手札四枚一組 略号「むち」	四〇〇円

踊り子緊縛 大手札三枚一組 略号「三〇〇円」 絹川文代	股間縛法悦境 大手札三枚一組 略号「三〇〇円」 絹川文代	吊り打ち 大手札三枚一組 略号「三〇〇円」 関谷富佐子	足挙げ椅子責め 大手札五枚一組 略号「五〇〇円」 東浦ひかる	二つ折りエビ責め 大手札五枚一組 略号「五〇〇円」 東浦ひかる	後手吊り足挙縛り 大手札五枚一組 略号「五〇〇円」 東浦ひかる	夫人の表情 大手札三枚一組 略号「三〇〇円」 関谷富佐子	バンド責め 大手札五枚一組 略号「五〇〇円」 東浦ひかる	バンド開股 大手札三枚一組 略号「三〇〇円」 東浦ひかる	ゴム衣緊縛 大手札三枚一組 略号「三〇〇円」 水本茂美	強烈エビ責め 大手札三枚一組 略号「三〇〇円」 水本茂美	狙われた和装の娘 大手札十二枚一組 略号「一〇〇〇円」 愛川悦子
六尺 輝開股 大手札三枚一組 略号「三〇〇円」 細川アヤ子	変形六尺 輝 大手札三枚一組 略号「三〇〇円」 細川アヤ子	相撲輝を締め込む 大手札四枚一組 略号「四〇〇円」 遠藤百合子	黒 輝の女 (背面) 大手札三枚一組 略号「三〇〇円」 遠藤百合子	黒 輝の女 (正面) 大手札三枚一組 略号「三〇〇円」 遠藤百合子	白 晒六尺 輝 (背面) 大手札四枚一組 略号「四〇〇円」 遠藤百合子	白 晒六尺 輝 (正面) 大手札四枚一組 略号「四〇〇円」 遠藤百合子	○フエチ資料の部 ○	緊縛女体撮影風景 大手札四枚一組 略号「四〇〇円」 大塚啓子	足挙開股責 大手札三枚一組 略号「三〇〇円」 梨花悠紀子	猪 吊り 大手札三枚一組 略号「三〇〇円」 梨花悠紀子	責め衣 大手札三枚一組 略号「三〇〇円」 大塚啓子
バンド見せ 大手札三枚一組 略号「三〇〇円」 東浦ひかる	バンド足挙げ 大手札三枚一組 略号「三〇〇円」 東浦ひかる	バンド晒し 大手札三枚一組 略号「三〇〇円」 東浦ひかる	股を開いた黒フンドシ 大手札三枚一組 略号「三〇〇円」 東浦ひかる	相撲輝着用 大手札十一枚一組 略号「一〇〇〇円」 大塚啓子	月経帯縛り 大手札三枚一組 略号「三〇〇円」 遠藤百合子	バンドを脱ぐ女 大手札三枚一組 略号「三〇〇円」 遠藤百合子	梨花悠紀子 大手札四枚一組 略号「四〇〇円」 大塚啓子	ゴムフエチ 大手札四枚一組 略号「四〇〇円」 大塚啓子	レインコートの拘束 大手札四枚一組 略号「四〇〇円」 関谷富佐子	六尺 輝の女性像 大手札四枚一組 略号「四〇〇円」 関谷富佐子	六尺フンドシ 大手札五枚一組 略号「四〇〇円」 東浦ひかる
サカエバンド 大手札三枚一組 略号「三〇〇円」 東浦ひかる	パピアバンド 大手札三枚一組 略号「三〇〇円」 東浦ひかる	パリスSSバンド 大手札三枚一組 略号「三〇〇円」 東浦ひかる	サカエ軽便型バンド 大手札三枚一組 略号「三〇〇円」 東浦ひかる	携帯用白バンド 大手札三枚一組 略号「三〇〇円」 東浦ひかる	パリスバンド縛り 大手札三枚一組 略号「三〇〇円」 東浦ひかる	パリスバンド前開き 大手札三枚一組 略号「三〇〇円」 東浦ひかる	ゴムと女体アップ 大手札四枚一組 略号「四〇〇円」 東浦ひかる	ゴム包みの束縛 大手札四枚一組 略号「四〇〇円」 東浦ひかる	ゴムぐるみ人形 大手札四枚一組 略号「四〇〇円」 東浦ひかる	黒フンドシ 大手札四枚一組 略号「四〇〇円」 大塚啓子	白フンドシ 大手札四枚一組 略号「四〇〇円」 大塚啓子

女体切腹資料 分譲品

血紅使用、腸露出

女体切腹シリーズ

大手札十二枚一組 一〇〇〇円
大塚 啓子 略号(せい12)

血紅切腹絶命ポーズ

大手札四枚一組 四〇〇円
梨花悠紀子 略号(せん)

血紅切腹祭壇の女体切腹

大手札三枚一組 三〇〇円
大塚 啓子 略号(せぬ)

禪裸女血紅切腹

大写真連続迫力フォト

大手札五枚一組 五〇〇円
大塚 啓子 略号(おお)

血紅使用苦悶表情悦楽

大手札五枚一組 五〇〇円
大塚 啓子 略号(くえ)

肉体美裸身切腹写真

大手札五枚一組 五〇〇円
長野 良子 略号(なせ)

女体切腹態

大手札二枚一組 三〇〇円
細川アヤ子 略号(ねは)

女体自刃態

大手札三枚一組 三〇〇円
細川アヤ子 略号(ねに)

血紅使用血塗れ下腹

大手札五枚一組 五〇〇円
大塚 啓子 略号(わい)

殿中の自決

大手札三枚一組 三〇〇円
大塚 啓子 略号(わこ)

切腹美態から絶命へ

大手札五枚一組 五〇〇円
大塚 啓子 略号(わは)

豊満に挑戦

大手札五枚一組 四〇〇円
東浦ひかる 略号(えん)

介添切腹

大手札四枚一組 四〇〇円
甘木 春子 略号(あか)

腹を切り裂く

大手札三枚一組 三〇〇円
大塚 啓子 略号(やい)

下腹に刺す刃

大手札三枚一組 三〇〇円
大塚 啓子 略号(やお)

柔肌を切り裂く

大手札三枚一組 三〇〇円
大塚 啓子 略号(やえ)

浣腸関連フォト

只今浣腸実施中

大手札三枚一組 三〇〇円
東浦ひかる 略号(かみ)

強制空気浣腸

大手札三枚一組 三〇〇円
東浦ひかる 略号(かく)

百CCの浣腸

大手札三枚一組 三〇〇円
東浦ひかる 略号(かな)

浣腸責の極

大手札三枚一組 三〇〇円
東浦ひかる 略号(かむ)

浣腸シリーズ

大手札十二枚一組 一〇〇〇円
梨花悠紀子 略号(れち)

強制浣腸三態

大手札三枚一組 三〇〇円
絹川 文代 略号(きか)

イルリガートル

大手札十二枚一組 一〇〇〇円
梨花悠紀子 略号(いるり)

太い浣腸器

大手札三枚一組 三〇〇円
東浦ひかる 略号(かふ)

浣腸をする女

大手札三枚一組 三〇〇円
遠藤百合子 略号(ゆか)

浣腸器と女

大手札三枚一組 三〇〇円
絹川 文代 略号(ほの)

エネマ・シリーズ

大手札四枚一組 四〇〇円
大塚 啓子 略号(るい)

イルリの嘴管挿入

大手札五枚一組 五〇〇円
大塚 啓子 略号(るは)

浣腸プレイ

大手札三枚一組 三〇〇円
大塚 啓子 略号(ほは)

進ばしる液

大手札三枚一組 三〇〇円
大塚 啓子 略号(ほい)

浣腸後排便

大手札五枚一組 五〇〇円
大塚 啓子 略号(へき)

便意苦悶像

大手札五枚一組 五〇〇円
大塚 啓子 略号(へか)

M資料分譲品一覽

○新人S女性出現○

遅ましき股に挟まる

大手札四枚一組 一〇〇〇円
略号(あと)

素足の脂がべっとり

大手札五枚一組 一二〇〇円
略号(あて)

縛った男をムチで料理

大手札十枚一組 二〇〇〇円
略号(あさ)

女王様の人間便器になる

大手札十枚一組 二〇〇〇円
略号(あす)

蠟涙の雨を全身に浴びる

大手札四枚一組 一〇〇〇円
略号(あせ)

尻の下につぶされた男

大手札二枚一組 六〇〇円
略号(あた)

エビ責めに弄ぶ女

大手札六枚一組 一四〇〇円
略号(あそ)

神酒を与える女神

大手札六枚一組 一四〇〇円
略号(あち)

咽喉輪を股責極楽

大手札四枚一組 一〇〇〇円
略号(あつ)

素足の足舐と嗅香

大手札五枚一組 一二〇〇円
略号(あこ)

顔面に女の尻が乗る

大手札七枚一組 一五〇〇円
略号(あう)

人間犬の芸仕込み

大手札十枚一組 二〇〇〇円
略号(あえ)

女の尻に顔がつぶれる

大手札三枚一組 八〇〇円
略号(あく)

足指に挟んだ菓子

大手札二枚一組 六〇〇円
略号(あの)

男を縛って弄ぶ女

大手札十枚一組 二〇〇〇円
略号(あに)

尻責めと股責め

大手札十枚一組 二〇〇〇円
略号(あぬ)

大男の訓練風景

大手札十枚一組 二〇〇〇円
略号(みら)

男を刺し殺す美女

大手札十枚一組 二〇〇〇円
略号(みむ)

男を尻の下に敷く

大手札十枚一組 二〇〇〇円
略号(みう)

女の足下にうごめく顔

大手札六枚一組 一四〇〇円
略号(みれ)

汚物を戴く男

大手札六枚一組 一四〇〇円
略号(みわ)

男を馬にする美女

大手札五枚一組 一二〇〇円
略号(みか)

人間椅子の御褒美

大手札五枚一組 一二〇〇円
略号(みお)

飼犬に餌を与える

大手札四枚一組 一〇〇〇円
略号(みた)

浣腸器で男を弄ぶ女

大手札三枚一組 八〇〇円
略号(みつ)

股で絞められる首

大手札三枚一組 八〇〇円
略号(みね)

芳香を嗅がす尻

大手札二枚一組 六〇〇円
略号(みな)

人間馬の調教プレイ

大手札三枚一組 五〇〇円
略号(まの)

足舐めの奉仕と強制

大手札三枚一組 五〇〇円
略号(まわ)

股責めにあう男の顔

大手札三枚一組 五〇〇円
略号(また)

女に縛られて弄られる

大手札三枚一組 五〇〇円
略号(まひ)

踏みにじられる顔面

大手札三枚一組 五〇〇円
略号(まな)

肩車に奉仕する青年

大手札三枚一組 五〇〇円
略号(まは)

男を縛って玩具にする

大手札三枚一組 五〇〇円
略号(まて)

首を太股で絞めあげる

大手札三枚一組 五〇〇円
略号(まや)

〔代理部新版分譲品一覽〕

腸露出無念腹切腹

大手札十枚一組 略号 (八〇〇円)
大塚啓子 略号 (せ10)

全裸の切腹悦楽

大手札四枚一組 略号 (四〇〇円)
大塚啓子 略号 (ひた)

全裸の切腹悦楽

大手札四枚一組 略号 (四〇〇円)
大塚啓子 略号 (ひと)

マニヤの切腹

大手札三枚一組 略号 (三〇〇円)
甘木春子 略号 (まに)

女子斗争場面写真

大手札三枚一組 略号 (三〇〇円)
大塚、玉田 略号 (のわ)

二女格闘場面写真

大手札三枚一組 略号 (三〇〇円)
大塚、玉田 略号 (のか)

全裸正面切腹姿態

大手札三枚一組 略号 (三〇〇円)
大塚啓子 略号 (のみ)

切腹に悶える裸身

大手札三枚一組 略号 (三〇〇円)
大塚啓子 略号 (のそ)

浣腸と便意の苦悶

大手札三枚一組 略号 (三〇〇円)
遠藤百合子 略号 (のけ)

強烈エビ責め

大手札三枚一組 略号 (三〇〇円)

玉田美佐子 略号 (ねむ)

後手首の高縛り

大手札三枚一組 略号 (三〇〇円)
玉田美佐子 略号 (ねへ)

椅子またぎの責め

大手札三枚一組 略号 (三〇〇円)
玉田美佐子 略号 (ねと)

血紅切腹決定版

大手札十枚一組 略号 (一〇〇〇円)
大塚啓子 略号 (れは)

血紅切腹凄惨姿態

大手札十枚一組 略号 (一〇〇〇円)
大塚啓子 略号 (れみ)

黒いフンドンを誇る

大手札三枚一組 略号 (三〇〇円)
遠藤百合子 略号 (くわ)

高圧空気浣腸

大手札三枚一組 略号 (三〇〇円)
大塚啓子 略号 (むい)

浣腸場面大写真

大手札三枚一組 略号 (三〇〇円)
大塚啓子 略号 (むは)

施される浣腸

大手札三枚一組 略号 (三〇〇円)
大塚啓子 略号 (むろ)

全裸脚拳姿態

大手札三枚一組 略号 (三〇〇円)
長野良子 略号 (てい)

全裸アグラ縛り

大手札三枚一組 略号 (三〇〇円)
長野良子 略号 (てへ)

全裸屈伸縛り

大手札三枚一組 略号 (三〇〇円)
長野良子 略号 (てほ)

六尺褌の変形姿態

大手札三枚一組 略号 (三〇〇円)
長野良子 略号 (てに)

蹲踞と拍手

大手札二枚一組 略号 (二〇〇円)
長野良子 略号 (てり)

鬼面と接吻する

大手札二枚一組 略号 (二〇〇円)
長野良子 略号 (てち)

強烈エビ責め

大手札三枚一組 略号 (三〇〇円)
松本アサ子 略号 (まと)

裸身に羞らう

大手札三枚一組 略号 (三〇〇円)
松本アサ子 略号 (まつ)

女賊捕縛

大手札三枚一組 略号 (三〇〇円)
大塚啓子 略号 (へい)

女賊処刑

大手札三枚一組 略号 (三〇〇円)
大塚啓子 略号 (へは)

全裸緊縛姿態開陳

大手札四枚一組 略号 (四〇〇円)
遠藤百合子 略号 (ゆり)

鼻をいたぶる

大手札三枚一組 略号 (三〇〇円)
遠藤百合子 略号 (ゆは)

浣腸をする女

大手札三枚一組 略号 (三〇〇円)
遠藤百合子 略号 (ゆか)

バンドを脱ぐ女

大手札三枚一組 略号 (三〇〇円)
遠藤百合子 略号 (ゆお)

絞首刑

大手札二枚一組 略号 (三〇〇円)
新宮夫人 略号 (るく)

引回しと晒

大手札二枚一組 略号 (三〇〇円)
新宮夫人 略号 (るに)

礫 (はりつけ)

大手札三枚一組 略号 (三〇〇円)
新宮夫人 略号 (はみ)

晒 (さらし)

大手札三枚一組 略号 (三〇〇円)
新宮夫人 略号 (さら)

絞首刑

大手札三枚一組 略号 (三〇〇円)
新宮夫人 略号 (こけ)

晒台の生首

大手札三枚一組 略号 (三〇〇円)
新宮夫人 略号 (のく)

斬首の瞬間

大手札三枚一組 略号 (三〇〇円)
新宮夫人 略号 (のき)

斬首処刑場面

大手札三枚一組 略号 (三〇〇円)
新宮夫人 略号 (くし)

月経帯のまま縛り 大手札三枚一組 略号 (ゆす) 三〇〇円	遠藤百合子 略号 (ゆす) 三〇〇円	豊満を切り裂く刃 大手札三枚一組 略号 (ほふ) 三〇〇円	長野良子 略号 (ほふ) 三〇〇円	鎌腹を切られる女 大手札二枚一組 略号 (らく) 三〇〇円	愛川悦子、田中芳代 略号 (らく) 三〇〇円	咽喉笛を刺される女 大手札二枚一組 略号 (らみ) 三〇〇円	愛川悦子、田中芳代 略号 (らみ) 三〇〇円	血紅使用 斬られる女 大手札七枚一組 略号 (らふ) 七〇〇円	絹川文代 略号 (らふ) 七〇〇円	雲斎の相撲フンドシ姿 大手札三枚一組 略号 (ろみ) 三〇〇円	東浦ひかる 略号 (ろみ) 三〇〇円	凄んだ女賊スタイル 大手札三枚一組 略号 (へに) 三〇〇円	大塚啓子 略号 (へに) 三〇〇円	バンド、ゴム見せ 大手札五枚一組 略号 (へみ) 五〇〇円	東浦ひかる 略号 (へみ) 五〇〇円	浣腸を施される女 大手札三枚一組 略号 (ちら) 三〇〇円	大塚啓子 略号 (ちら) 三〇〇円	煙草責めの裸身 大手札三枚一組 略号 (たく) 三〇〇円	大塚啓子 略号 (たく) 三〇〇円	淫らな長髪の乱れ 大手札四枚一組 略号 (たふ) 四〇〇円	大塚啓子 略号 (たふ) 四〇〇円	ふり乱す長髪の悶え 大手札三枚一組 略号 (ろめ) 三〇〇円	長野良子 略号 (ろめ) 三〇〇円	縄目に悶える夫人 大手札三枚一組 略号 (ほく) 三〇〇円	関谷富佐子 略号 (ほく) 三〇〇円	髪を引き回される夫人 大手札三枚一組 略号 (ほむ) 三〇〇円	関谷富佐子 略号 (ほむ) 三〇〇円	自ら施す浣腸 大手札三枚一組 略号 (ちぬ) 三〇〇円	大塚啓子 略号 (ちぬ) 三〇〇円	浣腸器を弄ぶ女 大手札三枚一組 略号 (ちり) 三〇〇円	大塚啓子 略号 (ちり) 三〇〇円	写真の中に悶える 大手札四枚一組 略号 (けよ) 四〇〇円	大塚啓子 略号 (けよ) 四〇〇円	写真に埋れた裸女 大手札四枚一組 略号 (けお) 四〇〇円	大塚啓子 略号 (けお) 四〇〇円	フンドシ姿の魅力 大手札三枚一組 略号 (ふの) 三〇〇円	細川アヤ子 略号 (ふの) 三〇〇円	フンドシ姿の羞らい 大手札三枚一組 略号 (ふへ) 三〇〇円	栗本ミチ 略号 (ふへ) 三〇〇円	フンドシの前後左右 大手札四枚一組 略号 (ふな) 四〇〇円	大塚啓子 略号 (ふな) 四〇〇円	栗本ミチ 略号 (ふな) 四〇〇円	フンドシの変わった姿 大手札三枚一組 略号 (ふに) 三〇〇円	栗本ミチ 略号 (ふに) 三〇〇円	前開き、ゴムオシメカバー 大手札十二枚一組 略号 (しま) 一〇〇〇円	大塚啓子 略号 (しま) 一〇〇〇円	前開き布製防水オシメカバー 大手札十二枚一組 略号 (しな) 一〇〇〇円	大塚啓子 略号 (しな) 一〇〇〇円	全裸の切腹悦楽 (1) 大手札四枚一組 略号 (ひと) 四〇〇円	大塚啓子 略号 (ひと) 四〇〇円	全裸切腹悦楽 (2) 大手札四枚一組 略号 (うは) 三〇〇円	大塚啓子 略号 (うは) 三〇〇円	乳房しほり 大手札三枚一組 略号 (うい) 五〇〇円	大塚啓子 略号 (うい) 五〇〇円	鼻責めと緊縛 大手札五枚一組 略号 (もく) 三〇〇円	大塚啓子 略号 (もく) 三〇〇円	木馬責三態 大手札三枚一組 略号 (いす) 三〇〇円	大塚啓子 略号 (いす) 三〇〇円	椅子責めの果て 大手札三枚一組 略号 (るな) 五〇〇円	大塚啓子 略号 (るな) 五〇〇円	哀婉 血紅切腹 大手札五枚一組 略号 (はす) 三〇〇円	大塚啓子 略号 (はす) 三〇〇円	双胸の強調縛り 大手札三枚一組 略号 (そつ) 三〇〇円	長野良子 略号 (そつ) 三〇〇円	動感海老責地獄 大手札三枚一組 略号 (とう) 三〇〇円	大塚啓子 略号 (とう) 三〇〇円	色禪の開股縛り 大手札三枚一組 略号 (いふ) 三〇〇円	長野良子 略号 (いふ) 三〇〇円	鼻責めのアップ 大手札三枚一組 略号 (はす) 三〇〇円	大塚啓子 略号 (はす) 三〇〇円	膨満 正面縛り 大手札三枚一組 略号 (へな) 三〇〇円	長野良子 略号 (へな) 三〇〇円	血紅切腹絶命態 大手札三枚一組 略号 (ちの) 三〇〇円	絹川文代 略号 (ちの) 三〇〇円	血紅美女の切腹 大手札三枚一組 略号 (ちた) 三〇〇円	絹川文代 略号 (ちた) 三〇〇円	オムツ着用フオート 大手札七枚一組 略号 (むね) 七〇〇円	大塚啓子 略号 (むね) 七〇〇円	バンド着用開股ポーズ 大手札三枚一組 略号 (つん) 三〇〇円	東浦ひかる 略号 (つん) 三〇〇円	マニヤ全裸緊縛フオート 大手札三枚一組 略号 (いな) 三〇〇円	栗本ミチ 略号 (いな) 三〇〇円
-------------------------------------	-----------------------	-------------------------------------	----------------------	-------------------------------------	---------------------------	--------------------------------------	---------------------------	---------------------------------------	----------------------	---------------------------------------	-----------------------	--------------------------------------	----------------------	-------------------------------------	-----------------------	-------------------------------------	----------------------	------------------------------------	----------------------	-------------------------------------	----------------------	--------------------------------------	----------------------	-------------------------------------	-----------------------	---------------------------------------	-----------------------	-----------------------------------	----------------------	------------------------------------	----------------------	-------------------------------------	----------------------	-------------------------------------	----------------------	-------------------------------------	-----------------------	--------------------------------------	----------------------	--------------------------------------	----------------------	----------------------	---------------------------------------	----------------------	---	-----------------------	--	-----------------------	--	----------------------	---------------------------------------	----------------------	----------------------------------	----------------------	-----------------------------------	----------------------	----------------------------------	----------------------	------------------------------------	----------------------	------------------------------------	----------------------	------------------------------------	----------------------	------------------------------------	----------------------	------------------------------------	----------------------	------------------------------------	----------------------	------------------------------------	----------------------	------------------------------------	----------------------	------------------------------------	----------------------	--------------------------------------	----------------------	---------------------------------------	-----------------------	--	----------------------



○ 昨年の三月号に拙文を載せて戴いた志摩ですが、原稿発送直後、外国出張のやむなきに至り、今まで一年程御無沙汰致しました。先日帰国してさっそく奇クを求めましたが、以前に比して内容が圧迫されている事に少なからず失望しました。又私は特に浣腸に興味を持っていますが、本年2月号には読者通信欄に誰もマニヤがいないのは残念でした。多分大勢の浣腸マニヤがいると思うのですが、しかし外国滞在中の仕事の整理が

つきまじたら、外国で得た面白い体験を発表したいと思えます。私より大きな外国女性に浣腸しマニヤにさせてしまった事、外国の浣腸器や彼女に試みた各種のカテテル等についてですが、どの程度まで描写が許されるかと思うと、もう少し圧迫のなくなる時期を待った方が良いでしょう。彼女が偶々隣の部屋であった事、酔って私の部屋に来て一夜を共に過してしまった事が、そもそもの発端なのです。当地で買ったエネマシリンジで酔いざめの薬といって彼女にグリセリンの浣腸をしたところ、翌朝「昨日はどうも有難う、今日は気分が良いわ」と話しかけてきてから、牛乳やジュースで浣腸するようになってしまったのです。やがて各種のカテテルを彼女が自分で入手してくるに及んで、サンフランシスコの滞在一カ月はまことに楽しい日々でした。東京にもそんな素晴らしい女性はいないものかと思えます。おられればお便り下さい。(東京八志摩英樹)

○ 目黒半平様、初めてお便りさせて頂きます。貴方が仰言った様に本誌にとうとう女性の刺青した写

真が出ました。実に待つ事久しの感で思いは全く同じです。それも又実に見事な美しい刺青で、それを彫っている女性が一段と若く美しいのが、一層刺青の華麗さを引き立てています。貴方の文によりますと名人の刺青師彫芳の作だそうで、師匠の或る女性に彫られた一匹竜の素晴らしい雑誌で見た私には、この若い女性の背中の作は実に成程と感銘した次第です。映画で「女女物語」のこのまで女性の背中に蛇の極彩色を彫っている師匠、又週刊文春に載っていた師匠とその作品、その他二人の女性に一人は牡丹、一人は般若を彫りつつある師匠。どの作品を拝見しても実にせん細な針のあとを写真を通じてですが、唯々感嘆の外ありません。私、昔からそれも少年時代から刺青に興味を持ち、それも若い女性程魅力を感じている者ですが、この度の山原清子嬢のまだ未完成ですが、こんな美しい刺青はかつて見た事はありません。然し彫芳師匠とお心易い目黒さんには、別に目新しいものではないと思えます。これ程女性の刺青に対して特別な興奮を覚え、その魅力に心奪われる私は、小さい物を彫っている女性は今ま

で見た事はありませんが、少なくとも腕一ぱい以上の物は未だ曾て見た事がありません。僅かに雑誌の写真を見て満足しているに過ぎない者です。本誌もこれから、どしどし山原清子嬢の刺青姿を載せて頂く共に外にも彼女に似た女性が居られたら、モデルにして頂きたいと念願致しますが、目黒さんといえども御便りがかわせられ且つ山原さんのような女性を御紹介して頂けたら、この上もない喜びです。又機会あればたとえ遠く東京でもいいます。彫芳師匠を御紹介して頂き御話を聞きたいものと思えます。高木彬光先生の小説にもありますが、彫っている女性の姿を余すところなく書かれて居りますが、一度も見た事もなくそんな機会が若しあれば、一生私の最大の思い出の一つになる事でしょう。(神戸市八田村信一)

○ 貴誌益々御発展の事喜びにたえません。あらゆる階層に愛読され高尚な風俗雑誌として今後芸術的開拓をされん事をお願い致します。と申しましては実は私、極く最近奇クを拝見したばかりで、知った様な事も申せませんが誰しも持っている倒錯的な感情を巧みに

取り入れた内容について魅せられました。今後愛読致したく思っています。今後は、私の希望と致しましては、もっと女性対男性の心理的な描写を扱ったものを豊富に載せて頂きたく存じます。女性には本来総べてに於て美なるものでなければならぬと考えます。しかし、現実には美なる筈の女性の醜なる面、それを私は身に受けとめて否定してゆきたい。美と醜、その完全な融和への願い、それは対象とする女性を絶対的な価値に置換えようとする現実への抵抗でしょう。それは智的で美しく、清純な感じの女性が必要条件ですが、最後にどんなにか真面目にお付き合い願える方、お便り下さい。御希望なら文通のみでも結構です。(京都八山田重男V34才)

○ 毎度、貴社の写真には、深く敬意を抱いて居ります。いつも、ただ写真を買っているだけでは能がありませんので、小生の長い間抱いているアイデアを提供致します。これは、絶対大当りすると思えます。これは、是非取上げて下さい。一、山原清子嬢の「弁天小僧」十枚一組にして下さい。この場合、日本髪、洋髪どちらも可と思いま

す。ただし、足袋は、絶対はかせない方がよいと思います。何故なら、それによって、脚が短かく見えるからです。美しい着物の胸を開き、ぱっとまわったその奥に六尺禪の白さが、くっきりと浮び出る――。考えただけで、ゾクゾクしてきませんか。次に、二、山原清子嬢「現代弁天娘」と題して黒のタイト・スカートを、黒のセーター、ハイ・ヒール、ガードル(靴下つり)フルファッション黒靴下(シームレスは脚が太く見えるので絶対いけません)を着用。山原嬢は秘書、不意に社長に押倒されくんずほぐれつ、あられもない姿態、ついに、社長をつきとばして机の上に、ハイヒールのまま上りタイト・スカートを、ねぎの皮をむくようにやっとまくり上げ、どっかと、大あぐらをかくと、奥に白の六尺禪が、まばゆいばかり黒の靴下とのコントラストが大変よく(マゾファンならずとも涎をながすでしょう)やがて、社長を馬にして、タイトスカートを捲り上げ、馬にどっかと跨って社長を征服してしまふ。十枚一組。以上如何でしょう。(長野県上田市八白川鉄司V)

○

しばらく、御無沙汰して居ります。皆様御元気ですか。久方振りにて最近の感想や呼び掛けの言葉を述べさせて戴きます。昨年来刺青モデルによる種々なグラビア写真並びにその「いよ」「くな」等の実写を入手とくと鑑賞出来た事は感謝にたえません。とにかく此の様子がたい女性を発見出来た事は近頃此の方面にとっての収穫であり又奇巧誌の大ヒットだと賞讃の他は有りません。同時に刺青の裸身をあます処なく写し得た係員諸兄の御努力を高く評価する次第です。なお私個人の望む処を云えば画面の中にバックの線が邪魔になつたり、又は軟調気味の為本体の刺青の線が浮んで来ない等、二、三、気がかりな点も有りますが、此の様な資料を得て喜んで居ります。なお今後も益々珍奇な資料を提供下さる様切にお願い致します。次に去る二月号にて岐阜県の服部氏と高岡の中村氏の記事を拜見して両氏へ申し上げます。本誌も毎号メトミ関係の記事により同好の諸兄も増加して居る事と思えますので友の会の結成は早晚決定づけられる問題かと思ひますが其の前に之等の事項を中心に同好座談会の開催を希望して居ります。

○ 場所は大阪中心にても結構ですが之には勿論奇巧編集部御尽力を願うと同時に私も及ばず乍ら発起人の労を致す考えて御座居ります。それにつけてもメトミと云う語句の発案者であり、古くから此の研究に没頭され戦前は実際に婦人相撲部屋を設けて女子相撲の奨励に務め、本誌にも度々其の興味溢れる記事を投稿されて居った土俵四股平氏の事を忘れる訳にはゆきません。其の後同氏は相かわらず御健在ですが、唯今は他の方面に於いて其の道創始者として多くの指導教室を持ち多忙な日々を過されて居る由にて、今後は恐らくメトミに関連した記事の投稿を期待出来ないと思ひますので其の意志を多として吾々同好者により益々研究と愛好の道を進めて行き度いと存じますが、各地の諸兄からも大いに其の意の有る処を此の通信欄をかりて発表して互の呼びかけとしようでは有りませんか。同好の友の御文通御交際を心から期待し乍ら、今回は之で失礼致します。(神戸市長田区八増田トシロI V)

○ 悪書追放の声が高まりつつある昨今、貴誌が世間でいう悪書のカ

テゴリーに入るかどうかはさておき、同好の志が最も期待を寄せるであろうと思われるグラビヤが切腹とか浣腸とか、マゾヒスティックなもので、あくまでオーソドックスな女体緊縛でないのは非常に残念です。貴誌の全盛時代と思われる頃は高校から浪人時代で、その後現在まで十年にわたる学生生活が終って、貴誌を見るチャンスが与えられた現在には往年の隆盛さがみられないのが残念で、十年のギャップが悔まれます。そのため十年のギャップを埋めるべく市内の古本屋を漁って古本を求めて居りますが、非常に高く中々手が出ませんし、探し出すことさえ困難なことが多いものです。私が貴誌を初めて見たのは高校一年の時点で、何気なく手にした本が私のかくされていた潜在意識を呼びさましてくれました。当時、他にも二、三の雑誌もありましたが、貴誌の魔力には及びませんでした。モデルにしても伊吹真佐子、萩千恵子、高瀬忍、川辺砂登子等々の諸嬢の魅力に拮抗できるのは、僅かに藤たけたともいえる絹川文代嬢と、弾力の感ぜられる大塚啓子嬢、豊かな肉付きの愛川悦子嬢だけでした。（もっともモデルの好み

は各自の主観や見解によるところが多いと思いますが、少くとも一般的には）とにかく、私としては十年のギャップが悔まれてなりません。（名古屋人英田忍）

私は去年の夏、夜店で偶然御誌を見つけてから愛読するようになった。女性の身で求めるのは、大変恥しいのですが、それでも読みたいという気持には抗しきれずに、老人が店番している書店を探しだしては買っております。只読んで空想にふけるというのが楽しくて、とても通信にお便りをしたり、読者の皆さまとおあいしたりというようことは、考えただけでも身ぶるいするようでした。それが十数冊も御誌を読んでいる中に、女性の読者の方々も通信に出しておられるのを見て、勇気がでてきました。私も一度出してみようかしら、と思いたち、生れてはじめての読者通信というものを書いてみました。私は今年二十三才になります。定時制の高校を出てから、或る小さな印刷工場に事務員として働いております。事務員といいますが、女性は一りで、走り使いの外、時には用紙をそろえたり数を数えたり、解

四馬孝画

時代風女体切腹画

大判印刷紙焼付

五枚一組 一〇〇〇円

略号（ゆい）

一、座敷牢の美女

無実の罪によって座敷牢に押し込められた美女が、男の見ている前で牢内に白布を敷きつめ双肌ぬぎになるや、短刀で下腹を切りさばき左の乳下に止めの一刺し。

二、介錯される美女

上半身の豊かな肉づきもあらわに庭に端坐して、左脇腹から臍下にかけて、脇差できりりと切れれば介錯の刃が一闪、麗わしの細首にさつと散る血しぶき。

三、駕籠の中の姫君

駕籠で送られる美女が氣にそまぬ縁談をいとい、腰巻一つの裸身となつて覚悟の切腹。守刀で臍下を十分に切つた上、更に鳩尾へかけて凄絶な十文字切腹。

四、果てる男装の美女

小姓姿に身を変えた男装の美女が、豊かな乳房もむきだしに前をくつろげて、その下腹に突き刺す小刀の切先。深夜の御殿にくりひろげられた倒錯美の絵巻。

五、裸身の切腹

も早や逃れぬと覚悟した美しい腰元は死んで操を守りぬこうと、輝くように白い肌をすべてさらけだし、守刀の短刀で下腹を一文字に切つた上、咽喉笛にひと突き。

版の手伝いをしたりすることもあります。給料も余りよくないので、夜学へ通わしてもらった恩義もありますし、それに慣れていますので、職場を変わる気持はありません。私はお友達がありませんので、どなたか私を親切に教えて下さる年長のお友達ができたらと願っております。雑誌は読むのが好きですが、自分では何故か、どこがひかれるのか、はっきりわかりません。そのうちだんだんわかっ

てくると思うのですが、もっともっと、いろんなことが知りたいという気持でいっぱいです。どなたかお便りがいただければ、こんなうれしいことはないと思います。どうか、よろしく願ひいたします。（大阪市八山村幸子）

奇ク愛読者、鼻マニヤの皆様、最近鼻責めの写真、絵が少い様に思われます。鼻責め愛好者の方のお便り、どしどし載せて下さい。

そしてどしどしお便り下さい。福島島の渡辺様、是非お会いしたいと思つて居ります。鼻責めに強い興味を抱き、貴男と同じ傾向に愛しさを感じる者です。私はMの方でSではありませんが、お便り下さい。この投書が出た翌月の第一土曜日の午後二時、新橋駅の広場側改札口にて新聞紙を両手に持っています。(例えば三月号に投書が出れば三月号の発売が一月二十五日なので二月の第一土曜日になります) よろしくお願い致します。(茅ヶ崎市八北尾光三)

○ 奇ク愛読者の皆様御機嫌よろしく何によりと存じます。貴誌益々御繁栄のこと編集の皆様方の御健闘感謝いたして居ります。私は本誌を愛読してから数年になります。その内容の豊富さとグラビヤ写真のすばらしさに感激して居ります。申し遅れましたが、私の性格はSMフェチと申しますが、その求めるものが大変ひろく本誌を愛読する様になりましたから浣腸器、(いろいろな種類のもの)オムツ、オムツカバーから女性の下着類などを集収して居ります。とくにオムツカバー、月経帯などには大変興味をいだき数多く集め

ることに成功しました。その外ズロース、パンティーなど中には汚れたままのものを手に入れそれには、使つて居た女性のネームまで書いてあるのも御座居ます。しかし、オムツカバーだけは、使い古したものを手に入れる事は容易ではありませんので何時も新しい品を手に入れることになりましたが、それも特殊な型のもは手に入らず赤ちゃん用のを大きくしたものが多い様です。私は、日常茶飯事、オムツやオムツカバー、ズロース、スリッパなどを肌に着けて生活して居ります。この様にしないと何にか物足りなく心が落着かないのです。月経帯は普通は黒木綿にゴムを大きく縫い付けた製品のものを着用して居ります。これは脱脂綿を使わずじかに肌にさわるためぬめめとしてとても気持ちのよいものです。その外下着にスリーマー、スリッパ、長ズロースを着ますが、外面はどうしても女性の服装になりきれません。オムツもプレーをする時以外は四五枚のオムツを当ててオムツカバーでぴっちり止める様にします。私の手元には今これ等の品が多く御座居ますので実費でおゆすりしたいとも考えて居りますが、いかななもの

分譲品御注文の栞

○代理部の分譲品及び雑誌は、すべて前金にて御注文願います。直接の販売並に代金引換、後払い等は取扱っておりません。
○御注文品はご注文書到着と同時に発送申し上げますが、品切れの時は二、三日の猶予をお願い致します。
○ご送金は、現金書留(現金書留の封筒は一枚三円にて郵便局で売っています)小為替、定額小為替(小額のときは御便利です)振替(振替用紙は郵便局にあります)振替当社の振替口座番号は大阪五〇〇四二番です。切手代用(四円、十円、二十円、三十円、四十円などの小額切手で、絶対に紙にはりつけないで下さい)等を御利用願います。
○御注文品は、雑誌では何年何月号、或いは略号の附してあるものは略号。フォトの類はすべて略号にてお申込下さい。品名を記されまますと間違いが起り易く、且つ発送に手間どりますから、必ず略号にて願います。
○送料は日本国内に限り、すべて当方にて負担いたします。但し速達或は書留にての発送を御希望される向きは実費御負担願います。外国便は飛行便若しくは船便の実費送料を御加算願います。

○御注文の宛先は、大阪阿倍野局私書箱第十四号、天星社です。局よりの通知で郵便物の宛書きは私書箱番号に統一するよう依頼されましたのでお願い致します。
○分譲品の新しいものは、毎月の新刊誌上で『新版案内』として発表しておりますから、その目録にて御注文願います。又古くなりましたものは漸次打ちりにします。
○尚、御注文の際、もし品切れのときの代品として第二希望品がございましたら幸いです。
○御注文品の送り先は必ず楷書ではつきりとお書き願います。肩書き(何々方、何々社内など)がございまして、それもお忘れなくお書き添え下さい。
○発送者の名前を個人名で御希望の方は、その旨お申添え下さい。
○御注文者の御氏名は絶対に他へ洩らすようなことは致しません。故に御安心下さい。封筒注文票は用済後は焼却いたします。
○局留にて郵便物をお受取りになられた方は、御注文の際、お受取りに行かれる郵便局名(正式の名前)とお名前を御連絡下さい。郵便局は特定郵便局でも集配局でもどちらでも結構です。別に局か到着している日頃を見はからず、局の窓口へ出向かれて受取人の名前を言ってお受取り下さい。

初めておたよりいたします。私
はある地方都市の化粧品店に勤め
る女店員です。私の住む町では、
駅前にある書店にだけ、貴誌が毎
月まいります。それ以外の三軒ば
かりある書店には置いてありませ
ん。勿論古本なんか見たくてもあ
りません。私が貴誌を知ったのは
私がこの街へきてすぐです。去年
の五月ごろだったと思います。私
は国にいる頃から、心の中がかす
かに、こんなことを空想しており
ました。でも貴誌を見るまでは、

K K誌の健在と今後の発展を心から祈っている愛読者の一人です。同好者のシンボルとして編集者諸子に感謝をささげると共に御健斗を念ずる次第です。さて貴誌には初めてのお便りですが、私は横須賀に住むM的性格の男性です。思春期の頃から女性に虐められたりからかわれたりしている写真や映画を見ると知らない中に熱中してしまうのですが、K K誌を

女体のフンドシ姿の中でも、特に黒褌を好まれる方も多い。そして殊に縛りなどを併用しない純然たる黒褌着用のポーズを好まれる方々のために作成したものです。特に刺青と双丘にぐっと喰い込む

十枚一組 一〇〇〇円

秘かによむようになってから同じ仲間がいる事を知りほっとした感じ。附近の同好の方(横浜や鎌倉)やサド的性格の女性の方がおられましたら私とお友達になつて頂けませんか。楽しく文通やプレイなど致したいと思います。

(横須賀△K生▽)

御誌一月号読者通信欄に於ける女斗彦氏の投稿は誠に結構でした。全く吾意を得たりと申す思いにて二度三度と読返した程です。是非共同氏の言われる如き刺青姐御の立廻りシーインのフォトを作製して分譲して下さい。相手方姐御の刺青は、ソウソウ実物を彫ったモデルさんは有ると思われませんので、描き刺青で結構と思います。近頃の東映々面博徒や監獄博徒に於ける特に鶴田浩二や大木実の刺青は殆んど実物に近い出来ばえを示して居ます。其れを其の道の専門的人が手がけたなら写真では実物同様の感じでしょう。はだか一貫帯をきりりと締め、背中一杯両腕から腰股かけたりからモンモンの大刺青の姐御が「ドス」を振り廻しての大立廻り、思うだに胸がワクワクして来ます。此の種ファンは随分沢山の

数字に成ると思われます。どうぞ是非此のフォトを実現させて下さい。此のモデルさんを、縛りに応用されれば面白いと思います。又二月号の「女の刺青」と題しての目黒半平氏の稿は大変嬉しく拝読致しました。いずれ後程親しく沢山御話を承り度いと思ひます。又御願ひも申上げ度いと思ひます。さて御誌は目黒氏の言われる様に何も彼も出尽していいよ最後の取って置きとも言う可き女性の刺青が遂に登場しました。小生等マニアは待ちのぞんで居た所です。虫のよい注文ですが、次号より是非二、三頁を刺青女性欄として新設して下さい。吾々マニアに喜びを御分かち下さい。御願ひします。「妖艶の極致刺青女性列伝」とでも題して毎号一、二題宛でも写真入りで其略歴や刺青に就いての感想彫師等を出来る限り詳しく掲載して下さい。又本文中でも刺青女性をあつかった作品を御掲載下さい。刺青女性愛好者は大変多い事と思われます。御誌は又大多数のファン層を獲得される事と信じます。では今日はこれにて先は御注文旁々勝手な御願ひまで。

(京都△女斗菊▽)

略号(ひほ)
白晒の六尺帯を締め込んだ上にさらしの腹巻をした、いなせな入墨姐御、脇差一本を腹巻に差し込んで凄んだポーズ。これは特に姐御マニアのお求めにより、その提供のアイデアにて、脇差の振付けをいたしました。

刺青姐御腹巻短刀

大手札印画紙焼付
十枚一組 略号(ひり) 一〇〇円

これは前の組と共に、特殊な姐御スタイル好みのマニヤの方々のために、作成したもので、特写すれば一組何万円もかかります。故にここに分譲品として格安に作成したものです。白帯、腹巻、短刀、刺青、といった一連の好みを抱か

れる方は、是非お求め下さい。

海老責姿態

大手札印画紙焼付
三枚一組 略号(ほか) 三〇〇円

縄の緊縛に対しては、相当の耐久力を持つてゐる山原清子に対して試みた海老責のテスト。

股間縛

大手札印画紙焼付
三枚一組 略号(ほか) 三〇〇円

全裸の刺青女性体に対して加えられた嚴重な高小手縛り。更に別れた股間縛りになって、流石に情我慢強い刺青娘も、その痛さに思わず悲鳴を挙げるに至ったという股間縛りのフォト。

読者通信の諸兄姉、お元気ですか。小生大阪府は居住する愛読者です。最近は何かと入手困難の折から、本誌の出版にも困難が多いと思ひますが、吾々読者もあまり無理を云わず息の長い、ペースで本誌の存続を望みましょう。竹野ひろ子さん、御苦勞の多い過去を早く解消して明るく頑張ってください。良きパートナーがあなたの呼びかけに応じて、呉れることを、そして、明るい未来をお迎え下さるよう祈つてます。それから、ずっと、以前に本誌のモデルになら

○

今回発表のM新モデルの出現と刺青を見せての責め、思わず引つけられてなまづばを呑み込み、はっとする出来ばえです。私は今日までずい分Mフォト購入して居

ますが刺青が有るか無いかで、こ
うも差が有るものかと驚きまし
た。実に凄さが一ぱい出て居て、
我々Mを充分たんのうさせて呉れ
ました。私は今までずい分刺青見
せた映画劇など見て来てますが、
実際に分譲品の様に手に取って見
る事は出来ず頭の中にえがいて居
た空想を其のまま実現して下され
て、こんな喜びは有りません。私
は女性が彫った本当の刺青を見ま
した。これを言う私の年令がわ
かるので書きたく有ませんが、刺
青見せたフォートが出る以上思い
切って書く事にしました。私が子
供の頃神戸博覧会に出品になって
居た明治毒婦雷お新の刺青が出品
されて見ましたが実に見事なもの
で、背中一面に雷神が稲妻の光の
中で雲を呼んでる図がらで背中か
ら腰太股から内股のきわまで正面
は胸から二の腕へかけて左右上り
竜下り竜上刺って有って実に見事
なものでした。今後どしどし刺青
Mフォート新しい分譲品を出して
下さる事を切に願いますと同時に
私の意見を一寸のべて今後のフ
ォートに実現さしていただきたい
のです。先ず最初に（あそ）です
が着物を着て足をあげての責め。

着物の裾を三枚共五六寸腰の方へ
下げて太股の刺青を見せてたら、
もっと凄い作品が出来たとおしん
でいます。それから（あに）並に
（あう）のフォート正面向にお新
同様な胸から腕に刺青が有ればよ
り以上に凄いだらうと思います。
私の希望するは今までに一度とし
て男の頭髪を驚づかみにして引す
えたり引起したりしたのが有ませ
んが一度目先の変わったあつと言
う様な物凄責めを、たとえば後手
しぱり上げた男の肩口へまたがり
湯文字一枚で内股を充分見せ左右
の手で頭髪とあごを持ち左右に男
の首をねじて居る所とか後ろ手に
しぱり上げた男を座らせ頭を下
させ其の背を右足で踏つけ前かが
みになり一本の棒を男のあご下
にあて両はしをつかみ上むきさせ様
とぐつと引き起さうとして居る
所。又は後手にしぱって座らせた
男を横向にし男の正面から右足あ
げて肩を踏みつけしぱった両手の
間へ棒を差込み後ろ向に倒す様に
棒責めして居る所。次は正面向で
しぱった男を座らせ背の上に馬乗
りになり内股をはつきり見せ男の
頭へ棒を立てじつと見降してる
所。又は男を座らせ其の肩口を踏
みつけ、あおむかせひたいの上に

棒を立てて苦しむ様子をじつと見
降す所等のフォート分譲品をぜひ
発表して下さい。様ただし出演者は
山原清子氏、必ず刺青を見せて下
さる様希望します。（神戸市八柳
井生）

○

二月号の読者通信に私が投稿し
てからも夫婦のSMプレイの同好
の友が、ぞくぞく増えて行きつつ
あり、私達は同感の至りです。三
月号に掲載されている友を入れま
すと現在十二名の同好の友がおら
れます。これは私が奇クよりひろ
い出した人達ですが、私の知らな
い人も多くおられることではし
う。同好者が撮影された作品も一
回に一・二枚程度しか奇クサロ
ンに出ていませんが、まだまだ多く
送付されていることでしょう。こ
のような作品だけを別に編集して
出版できれば、参考になり同好者
も喜ばれることでしょう。前回も
編集部依頼してあるとおり、友
が集って交換会か研究会を開いて
もっと発展できるようになれば、
なお嬉しく思っています。同好の
友がどしどし御投稿出来るよう
な写真が取れるようにしたいもの
です。又編集部へお願いします。こ
のような愛好者の投稿があれば、

女相撲と女斗美

モデル・木村洋子、大塚啓子

女相撲組打ち

大手札八枚一組 略号（すか） 八〇〇円

相撲マワシ着用

女相撲投げ業 大手札八枚一組 略号（すね） 八〇〇円

相撲マワシ着用

裸女の争斗 大手札五枚一組 略号（めん） 五〇〇円

白晒六尺着用

裸女の寝業 大手札五枚一組 略号（めき） 五〇〇円

白晒六尺着用

裸女相搏つ 大手札八枚一組 略号（えく） 八〇〇円

白晒六尺着用

女相撲四十八手 大手札六枚一組 略号（すは） 八〇〇円

女相撲四十八手

女斗立業の応酬 大手札六枚一組 略号（すむ） 八〇〇円

女斗立業の応酬

立業の攻撃場面 大手札六枚一組 略号（すち） 八〇〇円

立業の攻撃場面

寝業の女レス 大手札六枚一組 略号（すた） 八〇〇円

寝業の女レス

女斗連続場面 大手札九枚一組 略号（すく） 一〇〇〇円

女斗連続場面

できるだけ多く掲載して頂きますようお願いします。そして以前にも述べたとおり座談会が開けるよう御協力下さいますようお願いいたします。同好の皆様もどしどし投稿して下さい。そして誌上で交歓し合いまししょう。皆様の発展と御健勝を祈ります。(大阪八真上淳)

初めてこの室に投稿致します。いつも拝見させていただいているのですが、勇気がなくて……。さて、私は刺青に興味をもっていますが、女性のばかりなので残念です。でも、図柄は参考にしています。私も、職業が職業でしたら、ぜひ刺青をやりたいと思うのですが、堅い職業柄それが実行できず

におります。せめて絵具等にて、画いてほしいのですが、今迄にそのような人に巡り合えずに、本当に残念です。もし、諸兄の中で、私に刺青の絵を、全身に画いて下さる人がいられたらぜひお知らせ下さい。そのためには、私も諸兄の御希望(金銭的以外で

したら——)を、御満足させることが、できると思います。できれば近くの方が良いですが、図柄など参考にお送り下さるのでしたら、遠方の方でも結構です。尚、本誌、風奇、写真等保管に困っておりますので、御入用の方には、お譲りします。詳細はいずれも、お便りで連絡します。それから、十八才から二十五才までの独身男性で、ルームメートになってくれる人がいれば、お便り下さい。(宝塚八曾根生)

小金井市の石原道夫様。願えば返信下さい。貴方の希う女性ではなくとも、共通の場がある方に親しさを思い、投稿せずにはいらなかった私です。私の鼻フェチズムが貴方とどう意を通じ合えるか未知でもあります。私が男性でも意見又は私の集めた資料等の交換でも楽しい事と存じます。申し遅れましたが私は今二十七才、独身、鼻形はよい方と思います。石原様の通信はご自分の印象を抜

きで投稿されているので、よく判らないのですが、鼻フェチズムに対する執着はどなたにも負けない位です。ただ鼻孔を傷つけるのがお好きな向きの方がいますが私は嫌いです。美しいものはいままで美しくおきたいと思っています。石原様の投稿内容はすべて私の思いに同じですが、ですから余計に文通だけでもしたいと思ったのです。出来たらお便り下さい。(原町市八田部達夫)

した。又これは夢ですが、国映か新東宝で女性ばかりの殺陣の映画を作ってくれませんか。ちよっぴりエロチックで又残酷ムードも充分に、解説やら実技や殺陣のつけ方、三匹の侍調の切られる音など、カラーで大いに華やかに製作してくれませんか。アイデア位は提供します。日本拷問刑罰史以上のヒット作にはなりませんかな。(中屋敷真)

奇ク三月号、発売が少々おくれ

廃刊かと心配いたしました。但し小生等女斗美ファンには今月号は失望させられました。わずかに通信欄の女斗彦氏の一文のみといった淋しさ。妖異女斗美八景も休み、いろいろと最近の情勢から止むを得ないと思えますが、来月号を大いに期待しましょう。一月のOSミュージック、小生奇クサロに昨年書いた様なヌードの殺陣、謡曲「田村」にのって、新国劇調のあった日刊紙上にも好評との批評がありました。但し迫真性はなく、ヌードの上へ薄物一枚の男装ですから、刀がふれるともし傷ついたら大変ですからね。したがって、歌舞伎調の立ち廻りで

寒さ厳しき折柄貴社益々御隆盛の事、御慶び申し上げます。つた

ない乱筆にて失礼致しますことを頭書にお詫び申しておきます。私貴誌を愛読する様になりました、もう何年になりますか、はつきり思い出せませんが、たしか花村恵美子さんと云われる方が、度々に浣腸という名のつく文(又は告白)を書いておられました。私はその頁に心をときめかしながら、心の慰めとしておりました。その頃の私は浣腸という文字にさえ妖しい胸のときめきを感じていました。それから女性(男性でも)の浣腸に関する投稿文を熱心に読むようになりました。柴崎れい子さんや中でも羽村京子さんのような素晴らしい女性の出現には、いつ

木村洋子

完全逆さ吊りフォト

分譲

大中判印画紙焼付三枚一組 一〇〇〇円 略号(さつり)

四馬孝画 今月の新作

倒錯美緊縛画集

大中判印画紙焼付
五枚一組 一〇〇〇円
略号(えと)

(美女のいけにえ)

一、女体解剖台

黒くて冷たいレザー張りの台の上に逆エビ縛り首縄姿で載せられているのは、齡二十才の美女。身体の前面をむきだしにして、台の上にころがされたのに対して、これから加えられようとする嗜虐のかずかずを暗示する恐ろしい道具が彼女を冷たく見下している。

二、嫉妬の鬼

絶世の美貌の妻を持った平凡な男は、あらぬ嫉妬に悩まされるものだが、自分は醜い容貌でありしかも、妻はホステスのナンバーワンであってみれば、嫉妬の鬼となるのも又当然であろう。これは若くして美しい妻を持つ夫が、その閨房に於て浮気の相手を白状させるシーンである。

三、鼻料理プレー

顔は女性の生命であるが、鼻は又、その大切な顔の中心に位して女性変貌の中心をなすもので、男

心をそそのかす中心でもある。美しい女性の鼻をいたぶるのは、これ又Sマニヤの醍醐味である。大事な鼻をツンと突き出して、身動きもできないように手足を拘束された美女が、今やその鼻、鼻孔を男の手によって、思うままに料理されようとしているのだ。

四、涙を舐める男

ぱっちりとした瞳いたつぷらな瞳。房々とした丈な黒髪は、色白の肌によくマッチしている。乳房や腰部には、むくりと肉がのっていながら、全体にほっそりとした身体つき。その華奢な裸身をくびるように掛けた麻縄、そして身体を真二つにするばかりに締めつけた革紐の首縄、股間縛。今や皮ムチの鞭打にあつて、苦渋に流した大粒の涙を、男はペロペロと如何にもうまそうに舐め続けるのだ。

五、山小屋の一夜

リュックを担いで楽しい山登りの一日が終つて、山小屋で一夜の宿泊を求めた乙女。山のけがれを知らぬ清純な空気と同じく、彼女も又、山の美しさに憧れた十九になる清純な処女であつた。しかし山小屋の一夜は、彼女にとって怖しい悪夢の一夜であつた。その受難のいまわしい悪夢のページが、ここに展開されている。

も感謝の念さえもって読ませて頂いたものです。以上で大体、私がいかに以前から貴誌を愛好しておつたか、おわかりになつて頂けると思います。本日初めて勇気を奮い起して拙い告白記を書きました。後日これが貴誌の端くれに発表されますかどうか、私にはわかりませんが、(何故かといつて字もまずく第一文章というものになつておりません)幸いにして取り上げて頂けますなら、アテ字やよいけない所、特にセックス面での書きすぎの箇所は適当に修正して発表していただけますならば、全国の愛読者の方々に紀州にこういう男もあるかということがわかつて頂けると思います。(和歌山県八紀村良)

貴社益々御盛栄のことと存じます。小生以前に二・三回貴誌を送つていただいたことのある者ですが、その後書店で買つていました。しかし最近になつて書店に姿を見せず、如何されたかと存じます。昨今も相変わらず出版活動を続けていられるや否やお尋ねいたします。もし出版されているならばお知らせ下さい。亦小生はM8S2位の性質ですのでM的な読物等

あればお知らせ下さい。尚望めないう事でしょうが、小生の様なM的な男性を御紹介願えたらと思ひます。出来ねば、それに類したクラブとかグループの近況等お知らせ願えれば幸甚です。(茨城八坂口本造)

奇クの皆さん今日は。今年もどうか奇クの発展の年であるよう祈ります。とにかく編集部の方々が頑張つて下さい。グラビヤ写真でよく抗議のもとになるアツプ写真も、もっと小さく写しては出来ないものでしょうか。なんといつても私達では微力すぎて中々編集の方達の手助けになるものではありませんが、不服をいわずに、出来るだけ多くの人が奇クを無条件で買うことにしようではありませんか。それから、一つ御願いがあります。長い目で見て下さい。一月や二月の出来ばえで、とやかく云わないことです。それから読者の会合できるチャンスを作つて下さい。一堂に奇クの読者が会するなんて素晴らしいことではありませんか。読者の会合の夢を抱いていらっしゃる方もきっと沢山あると思ひます。私のこの小さな夢をかなえて下さるようお願いいたします。(福島

市八根本生▽)

○

毎月貴誌の発売を待ちかねております。お恥しいながら、少女の時、急に初潮に見舞われ遊びに行っていた親戚の家で、叔母の手で幼い従妹が使っていたおしめカバ―で仕末してもらって以来、そのときあてがわれたひんやりした赤チャン用のおしめカバ―の感触が忘れかねております。時々拙い文をお送りしておりますが、いろいろ絵やアイデアを持っております。豪華なホテルでの結婚式を無事終えて、居並ぶ人のスピーチ、友人や家族から見送られ新幹線で新婚旅行に旅立つ二人に、目立たぬ地味なつきそいの女性がついてゆき、やがて旅先の別室で花嫁になる若い令嬢のため（病弱な彼女のため）ひそかに浣腸をし無事排泄が終るまでおしめカバ―をさせておくとか。少女を誘拐するためひそかに大人用おしめカバ―を買い入れ、それをあてがって飛行機で運ぶとか、寄宿舎で不良な同僚のリンチにあい、浣腸を施された上、おしめカバ―をされるとか。しかしなんととっても大人である令嬢がまるで赤チャンのような姿勢にされ無理矢理ゴムのおしめカ

バ―をあてがわれるといったことを何とか表現したいと思えます。今後貴誌に望みたいのは、大人用の総ゴム製おしめカバ―のメーカーの紹介、販売の取次ぎです。「趣味の下着」という広告は見たことがありますが、「趣味のおしめカバ―」など、いかがでしょうか。同封の絵、機会がありましたら、御参考に。（東京都八原由貴子▽）

○

仕事も終え下界に帰ってきました。2月号もおくればせながら拝見しましたが、やはりさびしさはかくせません。グラビヤ、挿絵、口絵の全廃もよいでしょう。但し生首と処刑場面だけは例外として（私はこういう人間です）多少の譲歩はしても存続のためには止むを得ないと思えます。その分だけ分譲品の方を充実させてください。私の望むものとしては、絞首台上に立つ絹川嬢そして「こう」のようなものでなく、トリックによって吊り下った姿です。三枚目は首にロープをまかれたまま息絶えて横たえられた場面など如何でしょう。大塚嬢のハリッヶ柱、火刑柱の女囚姿は、グラビヤにあらわれましたが、室内では失礼ながら

何の気もおきません。やはり屋外で、槍なり薪なりがほしいところです。梨花嬢は穴の上に首をさしのべている場面。ギロチンにつこんだ姿など。そしてこれらの処刑はすべて他のモデル嬢が刑吏として登場しているのです。四馬画伯はどうして生首、処刑ものを書いてくれないのか、これも不思議に思っているひとつです。本文の方を見ると「女斗美八景」でようやく生首が三つ。しかし最近隔月になっていますが、これも毎月にして下さい。続八景を望むところです。一方私の「新十三人の女死刑囚」は、完全に没のようです。本物のようにはいきませんでした。たしかに佐出氏の場面にはいろいろ反響がありました。元来私が今まで採用になった作品は読者通信をみても感度ゼロですから当然でしょう。それでも私にとっては万一の期待をこめて原稿用紙に書くだけで、楽しいのですから、これからも続々愚文珍文を投稿しつつけます。山の中でも更に短篇を三つばかり考え、現在清書中です。採用のアカツキはお笑いください。それから姉妹誌のUが廃刊になったようです。衣替えして再び姿をみせたものの本誌の運

命が気になります。最後までがんばってください。昨年七月号より順調に発行されていたのに、三月号は一週間もおくれ、しかも僚誌Uの廃刊があっただけに気をもみました。グラビヤ、口絵の廃止は私にとってはむしろ望ましいものですが、内容は合格点とは言えません。僅かに室井氏の「断頭台の少女」が気に入っただけ、次回は是非首の断たれた場面をお願いします。剣持様の奥様の生首も印刷がはっきりしなかったためか、興味をひくに至りませんでした。分譲写真の方へだされたらよいのではないのでしょうか。仕事が多すぎて投稿し、以後は完全に読むだけの方にまわります。ホラだけふいた「新・十三人の女死刑囚」が採用にならなかったのは出来が悪いのではなくSが強すぎて発禁のおそれがあったためだろうなほれています。嵐のなか続刊を祈りますが、もし万が一最悪の事態となつた時は、はっきり「最終号」としてください。U誌の如き最期は好みません。（黒田寿）

○

皆様お元気ですか。素晴らしいお正月を、お過ごしになったと存じま

す。正月と言えは正月映画。私どもの和歌山市内にも十数軒の映画館が御座居ますが、その中でも所謂、二流映画館と言われているエログロ専門のM劇場という映画館が御座居ます。このM劇場で一月三日から上映されました内の一本の映画に「日本拷問刑罰史」という白映プロダクションとかいた小プロダクション制作のS傾向のがありました。私もあまり期待せずに入場してみましたところ、これがかなり立派に出来ていました。我々奇クファンが見るにふさわしい内容で縛り生首、責めなんかも三角木馬、石抱き、生き埋めと多彩なものでした。まず簡単にその映画の構成を説明しますと、戦国時代から江戸時代の末までの間で、最初から順にその時代の最も重い罪にあたるものに少しストーリーを織込んで、記録映画的にナレーターが詳しく説明するといったものでした。さて、和歌山市内の奇ク女性ファンの皆様、貴女もたぶんこの映画を御覧になったことと存じます。いかがでしたか。私は最近まれに見る本格的S映画だと思いました。私が一番、印象を残したのは、江戸時代火つけの犯人として、あやまって捕え

られた娘が、役人にむごい拷問をかけられ、ついには無理に自白させられ、刑場で柱に腰巻一枚で縛られ、周囲にワラを積まれ、火あぶりの刑に処せられようとしながらも「私は無実です」と小さくつぶやき、果てには火だるまになってしまふところでした。しかし私はこの映画のように封建的で残酷きわまりないのはあまり好きではありません。私はあくまでムード派です。市内の奇ク女性ファンの方で私と逢ってみてSMについて語ろうという勇気のある方は御座居ませんか。もちろんプレイなどしようという気はもうとう御座居ません。でも、もし貴女が承知して下さるのなら、貴女との御交際をねがえたらと思っておりますが。一月二十三日と二十七日の五日間和歌山城内美術館の前にて、午後四時と四時半の三〇分間だけお待ちして居ます。左手に白いハンカチを巻いて、私が「真土さん」と尋ねたら「ハイ」と返事して下さい（和歌山ハソフト・ボーイ）

【今月の新版分譲品】

今月の新しい分譲品を発表します。各々好みの趣向、好みのモデルのものを求めて頂くため、毎月努めて新しいものを発表いたしますから、お気に召したものがございましたら、お求め下さい。

鼻責め万華鏡

大手札印画紙焼付
八枚一組 一〇〇〇円
モデル MS役 山原 清子 鈴木 晃子
略号 (はた)

山原清子のペットである新しいモデルの鈴木晃子は、彫の深い可愛い顔立ちの従順な娘である。この可愛い晃子の鼻を清子が「鼻責めマニヤ」のために存分にいじめ抜いたところをアップで三十六枚の連続撮影をした中から選び出した八枚の組写真である。晃子の背後に回った清子が晃子の鼻や鼻孔に対して、どのような責め方をするかお楽しみ下さい。

黒輝奔放姿態

大手札印画紙焼付
十枚一組 一〇〇〇円
モデル 刑部 典子
略号 (ろち)

特に黒輝がきりりと双丘に割り込んで白い肌と黒い布との鮮烈なコントラストに強い興味を抱かれる方が多いのですが、カモシカのようににすらりと伸びた若々しい刑部典子の肢体に黒ふんどしを締めて奔放なポーズを開陳しました。どのような裸身に輝が映えるか見てのお楽しみにして下さい。

白輝奔放姿態

大手札印画紙焼付
十枚一組 一〇〇〇円
モデル 刑部 典子
略号 (ろて)

清潔な晒の白ふんどしを野性的な若々しい女体にきりきりと締めたる姿は、フンドシ・マニヤならずとも、その魅力にひかれるのであるが、輝一本の瑞々しい女体をあらさまに晒して、布の喰い込んだ双丘を誇示し四股を踏み、輝着の全身をあますところなく、皆様の目前にお目にかけます。

碧玉裸身緊縛

大手札印画紙焼付
三枚一組 三〇〇円
モデル 刑部 典子
略号 (のん)

辻村隆のカメラ・ハントで始めて、その姿をあらわした刑部典子の裸身の高手小手縛りである。

見られますが、しかし、もうその傍では、よもぎやハコベなどが芽を出しています。春遠からじの感が深いのですが、私はこの早春が大好きです。今日は朝のあと片づけのすんだひとときをみて、このお便りを書いております。実は私は昨年の夏、二年半ばかり一緒に暮しました夫と協議離婚をしまして、その後一人で暮しておりますが、やっと当時のショックから立ち直り、心の平静をとり戻したような昨今でございます。只今、午後から夜にかけて知り合いのお好み焼屋のお手伝いに行っております。貴誌はお店に來られたお客さんから貰いうけて読み生れて初めて、このような世界もあったのかと驚きの目で見ると共に、二年半ばかりの夫との夫婦生活のことも今さらのように思いうかべるのでございます。はつきりいって、夫と私とは性格が根本的に違っていて、こういう破綻になる運命だったと思っております。それで、このような私でもよろしかったら一度モデルに使っていただくなり、適当な誌友の方を御紹介下さるわけにはまいりませんでしょうか。私は二十三才、子供はございません。肌の色は小麦色の方でややや

せ型長身です。SとかMとかは存じませんが、面会又は文通でお友達ができれば楽しいだろうと思えます。お好み焼の方も余り長く勤められそうにありませんので、キヤバレーかアルサロへでも行くかもしれません。今のところ、私の家は一寸不便のところですので余り夜おそくなるようなお勤めでは、どうかと思案しております。人達から着物がよく似合うといわれております。これから毎月雑誌を買うつもりでおりますから、どうか通信にのせて下さいませ。お願い致します。(大阪府富田林市 八河村隆子)

悪書追放の波で、自肅せざるをえないというのは、あまりにも片手落ちのような気がしてならない。映画の方はかなり露骨な、残酷な描写のものでも「成人向」のレッテルで堂々と上映されているではないか。たとえばレスボスを中心とした「**花**」縛りや責め場を描写した「**肉**」縛りや「**白日夢**」最近ではSM愛好者の好評をえた「日本拷問刑罰史」さらに強姦や性交を中心とした群小プロの作品などが映画館で大手をふつてい

お茶目のノンコが厳しい縄目に対してどのような反応を示したか、とくところら下さい。

入墨を踏みにじる

大手札印画紙焼付

八枚一組 八〇〇円

モデル 山原 清子

略号(いつ)

年少からSとMとに鍛えられてその何れにも極めて深い趣向と経験を持つている山原清子嬢が、自らその全裸身を投げだして、力のかぎりの強烈な麻縄しぼりを望み背中いちめんに彫った玉取姫を男の足で、めちやくちやに踏みにじられ、顔を足で踏みにじられて歓喜の声を挙げる場面をスナップした中の八枚です。

全裸麻縄強烈縛

大手札印画紙焼付

十枚一組 一〇〇〇円

モデル 山原 清子

略号(いね)

乳房が変型してしまいうまで力の限り麻縄で縛り上げて、刺青を彫っている痛さに比べたら平気だという清子嬢、縄のすり傷や縛り跡なんか一向気にしないという山原清子嬢を、それこそトゲトゲの麻縄でガンジガラメに縛り上げて背中一面の刺青をこれ見よがしに

さらけだす全裸身を、ごろごろところがして、あらゆる角度から狙い撮りした十葉の組写真。

裸女レスリング

大手札印画紙焼付

四十枚一組 三五〇〇円

モデル 山原清子、大塚啓子

略号(れす)

二人ともパンツ一枚の外は何にも身につけないという素裸で、あられもなく格闘を続けるところを早いシャッターで次々とシャッターを切っていくた動きのある女体レスリングの場面の中、迫真力があつて且つ鮮明なものばかり四十ポーズを選びだしました。若々しい二つの女体が組んずほぐれつ、美しく躍動してエロチシズムの中に女だけの醸し出す明るいサドとマゾが画面に満ちています。プロレスのファンであるという肉体派の二人が真剣に力のありたけを出し合つて、実演したレスリング・フォトです。Mの方もSの方も御一見をおすすめていたします。

〔後記〕

今月新しく分譲品に加えました分は以上の通りです。来月は又新人モデルの新しい趣向のものやオソドックスの縛り、それに女囚拷問刑罰集のフォトなども豊富に発表する予定をしておりますからどうぞ御期待下さい。

ード女性の縛り写真や挿し絵は青少年に悪影響を及ぼす。責め写真は好ましくない、という理窟は私にはうなづけない。女性の責めは羞恥を感じさせるものほど効果的なのであるから、やはりヌードが一番であろう。しかし誌上には女性の性器や恥毛の出ている責め写真は当然掲載できないから、それはカットなり、カムフラージュするのはやむをえない。ところで、「日本拷問刑罰史」だが、私も二回みた。確かに演技は批評されているとおりの未熟ではある。しかし若い女性が、全裸にされ、腰巻一枚で、いろいろな責めや拷問を受けているシーンはとても魅力的である。そのうゑ悲鳴やうめき声がリアルに感じ、とてもすばらしい刺激を与えられ、興奮させられた。そこで、あの映画と同じ責めや拷問、処刑場面を写真で再現して、奇ク誌上のグラビヤにとりあげてみてはどうだろうか。これなら固定した視覚であり、視、聴覚による映画よりもまだまだ自粛しているといえるのではなからうか。それからもう一つ物足らないのは、女装ものがないことだ。読者のなかには女装愛好者もかなりいると思う。私もその一人で、

女装したうゑ責められることに悦びを感じ、これまでにそのプレートをした経験もある。どちらかといえば、ちやうど崑山季之の「四」に描かれているマゾ青年そっくりです。もっとも年令的には違いますが、好みはぴったりというところ。是非誌上にも女装の責めを描写した読みものや写真をとりあげてほしいと願っている。二月号の「奇クサロン」に発表されていた長谷好志男氏の「夫婦のSMフォト」一葉は良い出来ばえです。しかし乳房にかかった紐は締めまり具合が強くないように、左の乳房は紐が上下をとおっているが、右乳房は乳首の上下にかかっているだけで、不自然な感じがします。また縛られた手首も見せてほしかった。カメラの位置をもつと左に寄せ、レンズを少し右に向ける。そして足指をくわえさせられた奥さんの顔だけをぐっと右に向けさせれば、手首の縛り具合も画面にはいい、もっとすばらしい良い作品になったと思う。いづれにしても、ご夫婦でSMプレーを十二分に楽しまれているのが、私にはうらやましい。(東京八尾崎敏男)

○

印画紙焼付 梨花悠紀子吊責写真 再分譲

連続吊り責めフォトの決定版、未発表の秘蔵写真

第一集 逆エビ吊り

第二集 逆胴吊り

略号(りつ1)

大手札印画紙焼付

六枚一組 五〇〇円

略号(りつ2)

大手札印画紙焼付

六枚一組 五〇〇円

春寒きびしき折柄、貴社益々御発展の御様子大慶に存じます。小生もKK誌愛読以来早や五年になります。益々内容充実の著しいのに、その努力に対して感謝しております。さて最近メンスバンドやオシメカバーの愛好家が非常に沢山居られることに気づきました。小生の実家では、十数年よりメンスバンドやオシメカバーの類を製造販売しております。マニヤの中には種々な御都合のため、入手困難な方も多いのではないかと思います。マニヤの希望を充す上からも、御社において当方の製品を発売されては如何でしょうか。御利用戴ければ幸いです。(大阪府八尾織田信)

△読者係より▽ 右のような通信を頂きました。もし御希望者が多いようでしたら、織田氏の方へお願いしてみようかと思いますが、

如何ですか。

○ 大西良子さんお元気ですか。貴女の読者通信は本当に素晴らしいと思います。毎月読者通信には目を通しますが、今までに一番身近かに、又一番実感が出て居る記事は貴女の手記です。今までは赤井氏が良く読者通信でお目にかかり楽しく読ませて戴きましたが最近通信にもお名前が出て居なく残念に思っています。貴女の出現は私達マニヤには大きな喜びです。私もメンスバンドから初まりオムツカバーに進んで参りましたが、今では七種十一枚あります。其の他ゴムブルマー一枚夜尿帯、男女用各一枚つつ痔バンド一個子宮バンド一個。メンスバンド七枚です。変った処では鉄製貞操帯二個。まあ良く集めたものです。其れでも貴女の言われた三ノ

っております。三十才位までの方で同好の方どなたか逢っていただけませんか。小生三月十一日午後一時三十分に岐阜国鉄駅の入口にて待っていますから、よろしくお願いいたします。黒の靴、白っぽいコートを着て手には新聞を持っています。体格は中肉中背です。また「弘さんですか」と声をかけて下されば幸いです。御愛用の責め小道具など御持参下さい。では逢える日をたのしみに（岐阜／弘）

編集者および愛読者の皆様、お元気ですか。本誌を愛読しております一男性です。小生は全女性の皆様のお便りを待っております。女性の方から小生をまるで飼犬のようにこきつかって頂き、食物は女王様の残り物で十分ですから、是非小生を働かして下さい。通勤でもかまいません。月々の小使いはいりません。女御主人様から月に一、二度お仕置して下さい。小生の心残りは全然ありません。それが小生の生命なのです。どうかこのみじな気の小さい人間を働かして下さい。必ず一生懸命女御主人様のお言いつけを固く守ります。ですから小生今働いて居ります店を一日も早くやめたいので

す。そして女御主人様のおそばで働きます。ではくれぐれもよろしく（京都市右京区／平見伏助）

三月号拝見いたしました。グラビアの制限が厳しくなれば結局分譲写真の充実をお願いする外ありません。これ迄も貴社の女斗美、女相撲、女禪等の写真を度々お送りいただきました。特にこの頃は此の種の写真が多種類分譲されるようになり感謝にたえません。ひとつ御願いがありますのは、ただ禪をしめて立っているといった感じのものが多くことです。寝姿の場合も最も大事な股間に細く喰い込んだところの角度のものがありません。もちろん制限が大きく苦心なさっているだろう事はよくわかりますが、分譲品なのですから、もう少し大胆なポーズでもいいのではないのでしょうか。週刊紙によく出ているナイトクラブのシヨ一の写真など、必ず細いツンパがくい込んだ股を大きく開いたところを正面からとったものがありますし、同じく週刊紙に時々出る女子プロレスの写真も、奔放なポーズが多いようです。オリンピックの女子体操の写真の様に、片足を大きく後へ上げたところを後か

玉取姫刺青女体

モデル 山原清子

華麗なる玉取姫の刺青を背中から臀部、太股に至るまで一面に施した山原清子さんの文藝的価値の極めて豊かな入墨フォトを、好事家、文藝蒐集家、珍奇コレクト・マニヤの方々に安価に提供いたします。時節柄誌上のグラビア掲載が憚られますので、何卒印刷紙焼付の鮮明なフォトを、お求め願います。

黒ふんどし入墨姿

大手札印刷紙焼付
三枚一組 三〇〇円
略号（くの）

黒フン媚態の魅力

大手札印刷紙焼付
五枚一組 五〇〇円
略号（くな）

黒禪背面模様

大手札印刷紙焼付
三枚一組 三〇〇円
略号（くこ）

黒フン手吊り責め

大手札印刷紙焼付
三枚一組 三〇〇円
略号（くり）

全裸入墨姿態

大手札印刷紙焼付
三枚一組 三〇〇円
略号（いれ）

晒六尺ふんどし

大手札印刷紙焼付
三枚一組 三〇〇円
略号（ろと）

白六尺一本の姿

大手札印刷紙焼付
三枚一組 三〇〇円
略号（ろに）

白禪後手高手小手

大手札印刷紙焼付
三枚一組 三〇〇円
略号（ろし）

日本髪全裸強烈縛

大手札印刷紙焼付
三枚一組 四〇〇円
略号（いら）

洋髪全裸強烈縛

大手札印刷紙焼付
三枚一組 四〇〇円
略号（いこ）

日本髪全裸股間縛

大手札印刷紙焼付
三枚一組 四〇〇円
略号（いさ）

可憐島田髻全裸縛

大手札印刷紙焼付
三枚一組 四〇〇円
略号（いみ）

らとか、足を前へ蹴上げたところを正面から、又逆立ちをする処の連続写真などもよいと思います。仰向けに倒れて両足を開き上に上げたポーズを真正面から、四つ這いになり臀部を持ち上げた処を後から、又相撲の四股を踏んで大きく足を挙げたところを横から等々なんか拵げた股間に喰い込む細い禪を中心とした写真を御願ひ出来ませんでしょうか。又禪は濃色で細身、薄物がよく、これ迄の写真より少し上で結んだほうがよいと思います。以上とりとめもなく勝手な事を書きましたが何卒お許し下さい。(東京八女斗愛好生)

○

貴誌益々御繁栄の由大慶至極に有じます。さて現在貴誌に連載中の「花と蛇」はまことにすばらしく感動いたしております。願わくば末永く作者団先生の御奮斗を祈ってやみません。おそらく「花と蛇」は近來稀にみる珠玉の作として後世まで愛読されるものと確信いたします。それだけに団先生に期待するところ大です。最近号からは、挿絵も四馬先生の筆にかかり、いよいよ盛り上ってききました。四馬先生の奔放な絵を切望いたします。それにまことにあつか

ましいお願いですが、小生のアイデアの一端をのべ「花と蛇」の団先生の筆の構想の一部にとりいれていただければ此の上ない幸いと思います。小生の着想の一部がとりあげられ「花と蛇」のどこかにおりこまれていたのを見ると、小生の切なる想いがかなえられ心も躍ることでしょう。どうかよろしくお願いいたします。一、とらわれている女達(桂子、静子、京子、美津子、小夜子)を一人ずつ又は二人一組にして街を歩かせる文章を書いて下さい。まず女達をトラックにのせ目的の地まではこぶ。トラックの上に大きなロッカーをのせ、この中に女を閉じこめる。ロッカーは鉄製でマジックミラーをとりつけてある。とじ込められた女のはずかしさとあきらめの悲しみを書いて下さい。とじ込められた女は鉄製ロッカーが特殊なマジックミラーになっていることを知らない。(ロッカーの中からは外がガラスになって見えるので街を歩いている人たちにあわれな姿を見られていると思い、はづかしさと悲しさにうちひしがれ死ぬ思いを味う)二、女をトラックから降ろし町を歩かせる。町を歩くとときの女の服装は腰にオシメと

オシメカバーをはかせ、この上にレインコートを着せ、コートの手のポケットに穴をあけ、両手をそのポケットに通しポケットの内側から両手を手錠で連結した後、レインコートのボタンをとめる。口にはカン口具を兼ねたゴムマスクをはめて声が出ないようにする。この姿であれば、町を歩いても誰からもあやしまれないですむ。又女があられたり逃げたりしないようにするため監視のズベ公をつけるか、又は静子と京子、桂子と美津子というふうに二人一組にしてつないで歩かせる。以上とりとめもなく書きましたが、何卒よろしくお願いします。ぜひ書いて下さい。心まちしています。(東京八加瀬示男)

○

神戸三宮駅前のそごう百貨店四階ベビー用品売場に布を全然使わない総生ゴム製の大人用おしめカバーを販売して居り、私はそのゴムカバーを毎月二枚から五枚を購入してはきつぶして居りました。お務めの朝も夜の床の中でも、暑い夏は汗でゴムがハリ付いてぬめぬめ／＼本当に楽しい毎日でした。一日に幾度もはき替える事もありました。黄色いゴムと白色と二種類

ありました。もう今までに二十枚以上も捨てました。ところが一カ月前から、そごう百貨店では販売を止めました。売場で理由を聞いて見ましたらメーカーの方で一方的に製造しなくなったと云う事です。マニヤにとって、何んという淋しい決定でしょう。化学せいのビニール製ではだらしなくてピチ／＼した感じが無く私は大嫌いです。どうか全国のゴムを愛される方々に私からお願い致します。ゴムマニヤのために此の世の中からゴム製品の一つが姿を消して行くのは淋しい事です。神戸市葺合区小野柄8-23そごう百貨店ベビー用品売場宛大人用ゴム製(生ゴム製に限りません)おしめカバーの再販売を続けて頂く様お願いのハガキを皆様で出して下さい。私も毎日ハガキでお願いして居ります。柔いヌメ／＼したゴムカバーの交換をマニヤの方々としてほしいと思います。ゴムカバーをもっともって一般に広く愛用される様にするためにもお呼び掛けを致しましょう。どうして私は此の様にゴムが好きなのかしら。ゴム質の内でもバンドの替ゴム(ウールゴムはゴワ／＼して嫌い)生ゴムのものの様な薄くて良質でよく伸びる柔か

分譲写真用

女性モデル募集

○本誌では代理部の分譲写真用の女性モデルの方を募っております。口絵には発表いたしません故御安心の上勇をふるって御遠慮なくお申込み下さい。

○尚写真撮影を望まれない方でも助手介添え又はプレイのみ出演御希望の方でも結構です。

○出演或は参加御希望の方は、編

集部宛御照会下されば、報酬その他詳細お返事いたします。応募なさいました方の秘密は厳守の上御迷惑はおかけいたしませんから御安心下さい。

○緊縛写真御希望者は勿論のことMフォトのサジスチンとして出演御希望の方も歓迎します。特に妊婦フォト撮影可能の方は、年令、遠近の如何に拘らずご一報ご連絡願います。

天皇社奇ク編集部

なゴムが特に好き。最近ちよつとしたヒントから薬屋さんで病気の時に使う氷を入れるゴムの袋（氷のう）を一ダースも買い求め此れをソックスの下に靴下のかわりにはく事をおぼえました。歩く度にヌメヌメと本当に良いものです。皆様も一度実験なさって「奇ク」に発表して頂けません。（神戸市八大西良子▽）

○岐阜市徹明町の青木恵子様。去る九日はお会い出来ず誠に残念に思っております。二十日頃名古屋へ出張する予定を繰り上げてもらって八日に出掛け、九日は国鉄岐阜駅正門入口にて九時より三十分

お待ち申し上げておりましたのにおいでにならず残念に存じます。雨はよく降っていましたがね。私は貴女の御希望に添えるようにと数々の器材とプレイのアイデアを考えておりましたので、お会いできることを期待しておりましたのです。貴女の御住居の徹明町は市内の中心部で、大変賑やかな所ですね。市内電車の交差点もあり、人の出も多く交通も激しいところでした。私も少し市内を見てきました。又貴女とプレイする場合、アパートでは失礼と思い、長良川畔の一流ホテルも予約してあったのです。公務の出張より貴女と会うことで胸一ぱいでしたのに誠に

残念でなりません。申しおくれましたが、私は大阪市の郊外に住居している三十五才の男性です。時々奇クに名前が出ていたこともあります。奇クの大ファンです。女性の縛り責めについては以前より趣味を持っており研究もしております。是非貴女と交際願えれば幸せに存じます。今回はお会いできませんでしたが文通したく存じますので是非お便り下さい。お待ちしております。（大阪八長田実▽）

○三月号で女性の褌、女斗美等たくさんに発表になり全く嬉しい悲鳴を上げて居ります。女性の褌ものは全部はしいのですが、予算の都合上そうも参りませんので少しづつ頂きますから宜敷しくお願い致します。特に今回は姐御スタイルのもの御発表になり全く感謝にたえません。今後も姐御ものをどしどしと御作成のほどお願い致します。女だてらに六尺褌一本の素裸となるのですから姐御スタイルでないとうしてもムードが出ません。それには短刀がないとピツタリしません。過日御送付頂きました大塚さんの「みむ」の如くメーキャップに依り凄味をみせ迫真の演技（表情）が必要です。そし

て筋肉の躍動する力の入った作品が望ましいと思います。度々申上げて恐縮なんです、姐御同志の立ち回り場面を是非御作成の程御願います。六尺褌に晒を腹に固く巻き込み白鞘の短刀を逆手に、「覚悟おし」と下唇をかみしめて鋭く斬り込みガチッと短刀がかみ合い馬乗り等凄艶な立ち回り場面を御願います。贅沢を申上げて恐縮です。一人だけの構えだけで充分なんです、又変った凄艶な場面があると思います。過日入れ墨お蝶の映画を見ました。片肌ぬぎになり短刀逆手につき差した写真が出ておりあまり恰好が良いので宣伝ポスターだけだろうと思いつつも見に行きました。案の定そんな場面はありませんでした。しかし刺青をした凄女としては最高の見世場でしょう。とにかく女性の褌姿位魅力のあるものはありません。真白い褌をキリキリと乳房の下まで固く巻き込み特に遅ましく盛り上った臀部に細く褌が喰い込んだ有様は何んとも申し上げようのない魅力です。此の度山原さんの六尺褌をするまでが発表されましたが相撲褌は今迄に出ましたが晒の六尺褌は初めてです。私は純綿の真白な晒に大変魅力を感じ

じています。楽しみにしているものです。何うか今後も女性の渾姿に相応したムードの有るしかも力の入った作品をどしどしと御発表の程期待してやみせん。(倉敷市△下田昇▽)

○ 先日は略号「美4」美しき縛しめの第四集をお送り下さって有難うございました。内容はいつもの事ながら、ただただ目を見はるばかりです。逆さ吊り、後手吊りなど、よくもこれだけの写真がとれたものだと思います。この写真集一冊の中で、この二種の吊り責めフォト数葉で十分求めた価値がありました。女性縛り愛好家の私としては十分に満足させて頂きました。今後更に次々と発刊下さるようお待ちいたします。(静岡市△丸本生▽)

○ 私が御誌のファンになってから三年になります。その間毎月愛読させて頂いてまいりました。私は三十才未婚の女性です。私は元来体が大きく非常に肥っていて五尺三寸、十八貫程あります。私は一

年程前から特にお腹が大きく突き出てまいり、妊娠しているのではないかと見られる程です。脂肪が多いのかまるまると張り切っています。最近御誌にも妊娠腹の事が書かれるようになっていますが、私もこの頃知らず知らずの中、自分の大きなお腹に興味を持つようになりお風呂へ入ったとき鏡にうつしてみたりしています。最近では自分で眺めているだけでは物足らず誰か他の人に自分の大きなお腹を見せたいというしよう動にかられ、外出のときなどわざとタイ

トスカートをはいてお腹の出っばりをはっきりさせるようにしております。どんなにか肥ってお腹の大きな女に興味のある男性の方がおられましたら御交際したいと思っています。私は色は白い方ですが決して美人といわれるような自信はございません。妊娠というか妊婦にあこがれて居ります。私は結婚したいとも思いません。でも今のところ相手もございません。どうか、こんな女に興味をおもちでしたらお便り下さいませ。御誌のモデルにでもなります。(宮城県

次号(五月号)は三月二十五日に発売いたします

△佐藤けい子▽

○ うれしくて、うれしくて、とてもうれしくて堪りません。二月号に多年待望の耳環嬢の出現されたことです。KK誌愛読歴十数年で二十九年七月号に吾妻新氏の耳輪の手術があっただけで耳環鼻環の投稿も七回の中六回迄掲載されましたが(鼻環の愛好者は相当数ありましたが耳環の方は何等の反響もありませんでした)今回はか

○ 染の孔を是非拝見させて頂きたいので差支えございませんでしたら元町の飯店の名をお聞かせ下さいますようお願い申し上げます。年に一回中国又は欧米人の耳染の孔を見に神戸まで行きます。ですから三ノ宮から元町南京町中山手の方の地理は少し知っています。(京都市△佐々木耳環生▽)

○ 福井市の渡辺昇様、二月号であなただけのお便り拝見いたしました。さっそく読者欄の方へ便りしました。たが三月号には没になったようです。今月はあなたにお便りが届くことを確信して心はずませております。私は二十六才の男性、その道に興味を持ちだして五年余になります。今までのいろいろ自虐で責めをたのしんでおりましたが一度は誰かとプレイをしてみたいと思っております。どうか大阪の方へお越し下さい。思いきり責めてあげましょう。残忍なのは好みませんが、いろいろ器具も揃えてあります。どこかあなたの知って

五十万円懸賞原稿募集

過月号で五十万円懸賞の原稿を募集しましたところ、いち早く数篇の応募原稿が送稿されてまいりましたが、残念ながら入選作品として掲載するに耐えるものは見当りませんでした。引続いて募集を継続いたします故、本誌の増刊にふさわしい佳作をお寄せ下さるようお願いいたします。

賞　　金

一	席	各	拾	万	円	一	名
二	席	各	五	万	円	二	名
三	席	各	参	万	円	五	名
四	席	各	壹	万	円	十	名
五	席	各	五	千	円	十	名

愛読者原稿募集

△体験、告白、手記△

どなたにも一つや二つの思い出とか、体験とかいったものが必ずあるものです。物言わざるは腹ふくるものたえどうか皆様の真実の叫びをどしどし文字にしてお寄せ下さい。採用篇には本誌三月分乃至一年分贈呈します。

△創作、小説、物語△

御自分の描く夢をまとめて

規　　定

- 一、本誌の読者に提供するに適當したS・Mを中心とした創作、小説などのフィクション。告白、体験、手記、或は論説、意見など形式は問いません。S・Mの他、フェチ切腹、浣腸その他特異な趣向のものも大いに歓迎いたします。
- 一、すべて未発表の自作に限ります。
- 一、枚数は原稿用紙五十枚以上のこと。
- 一、締切は別に定めませんが、入選作品は翌月号に発表の上、賞金を呈します。
- 一、応募原稿には「懸賞作品」と赤エンピツにて肩書きして下さい。

天星社編集部

下さい。採用篇には本誌五月分以上贈呈します。

△(映画、雑誌)通信△

映画や既刊雑誌の中で、特に興味をお持ちになった事項を通信下さるようお待ちします。掲載の分には本誌三月分贈呈いたします。

△レポートマニヤ通信△

新聞記事等で関心をお持ちの事項或はマニヤ各傾向の本誌に対する通信をお寄せ下さい。本誌二月分贈呈します。

◎尚、以上の五項目の採用原

稿には御希望により編集部作成の各種フォトを贈呈いたします。

△読者通信△

編集者、執筆者、投稿者への通信、呼びかけ、前号の批評、本誌に対する希望や御意見、感想、思い出話、或いは読者相互の交歓文通、応答などをお寄せ下さい。

△奇クサロン△

奇クサロン向きの短文、マニヤ通信、写真絵画などを募ります。文章は原稿用紙三枚まで。採用篇には薄謝進呈します。

☆本誌御購読の榮☆

一月分(1冊)三〇〇円△送共△
三月分(3冊)九〇〇円△送共△
半年分(6冊)一八〇〇円△送共△

本誌は毎月二十五日に全国各地の有名書店にて一斉に発売いたしますが、入手困難の方は直接代金御送付の上、御予約下されば、毎月二十日前後、印刷完成と同時に厳重包装して確実に発送申し上げます。局留の方々は二十五日頃受領して下さい。

奇譚クラブ 定価三〇〇円

四月号 (第十九巻第四号)
(通刊第二〇二号)

昭和四十年三月二十日 印刷
昭和四十年四月一日 発行

編集印刷兼発行人 箕田 京二
大阪阿倍野局私書函第十四号

発行所 天 星 社

(振替口座大阪五〇〇四二番)
(昭和三年四月三日第三種郵便物認可)
(国鉄大局特別扱承認雑誌第一二二二号)

☆代理部分譲品について☆

○代理部分譲品は本誌に広告してある分は全部在庫しておりますから、略号明記の上お申込み下さい。尚、分譲品の詳細は、目錄を御請求の上ごらん願います。
○既刊雑誌の旧号は別項の通り在庫していませんから、売切れぬ中御注文願います。
○口絵写真の複写転載は固く禁じます。